大人のピアノ

depositphotos
depositphotos
depositphotos
depositphotos

ゆっきー

大人のピアノ いち きっかけ

「いよいよ来週発表会ですね」

　夜の九時。篠崎紘一はこれから向かう「大人のピアノ教室」の同じ金曜日クラスの受講生、平林おさむと一緒の電車に乗っていた。

「ああ」

　レッスンの予習のために車内で楽譜を広げていた篠崎はちらっと平林の方を向いて頷いた。

　普段は勤務先の渋谷から東急線で家族の住む武蔵小杉にまっすぐに帰る。勤務先は会社の早期退職制度を使ってリタイヤした後すぐに再就職した小さな広告代理店だ。

　大学を出てすぐにこの業界に入った。肩書きはコピーライター。今勤めているところよりもさらに小さなところだ。何せデザイナー上がりの社長の他にはアシスタント兼、総務兼、もしかしたら愛人兼の胸のデカイ、しかし端正な小顔の感じの良い、よく気のつく女性社員が一人いるだけだった。

　社長は根本的にいい加減だったが、同時に根本的に真面目でもあった。要するにどっちにも中途半端だったのだが、そのどちらにも嘘はなくていい感じの自然体だった。
　その社長のパーソナリティーがそのまま、あの千駄ヶ谷の小さな広告代理店となっていた。代理店的ないい加減さと制作会社の律儀さが同居していて、それなりに重宝がられていた。居心地は良かったが、６０歳までこの会社にいる自分は想像できなくて、退職した。
　再就職した先が、生涯ただ一度のラッキーなまぐれで受かってしまった業界不動の二位のマンモス広告代理店であったため、直接的な仕事上の接点は失われたが、賀状の交換は欠かさなかった。今でもキチンと二人で社を回しているらしい。

　東急線を自由が丘で途中下車して同じ東急の支線に乗り換えて三つ目の小さな駅が、月に一度通う大人のピアノ教室だ。

　ある不動産会社のテレビCM制作で「ピアノの音が聴こえる街」というコンセプトでお世話になったのだ。その街に引っ越してきたという設定の人気タレントが一流企業のお父さんと一緒に近所のピアノ教室に見学に行き、その場でピアノを習い始めることを決めるという設定の３０秒もののカットだった。綺麗な先生に習うことになったのは娘だけでなく、付き添いだったお父さんも、あまりの先生の綺麗さと品の良さ、それでいて天衣無縫な飾り気のない雰囲気に飲まれて申し込みを決めてしまい娘に苦笑される。そんなコミカルなCMはかなりの好感度を持って迎えられ、続編が何本も作られて篠崎は上々の営業成績をあげて入社以来始めての社長賞までもらった。

　いいことの後にはすぐに最悪なことが起きた。別の仕事の段取りのミスから何十来の会社のお得意様である一部上場のクライアントに数十億単位の損害を与えてしまい、引き際を間違ってこじれにこじれた関係はどうやら篠崎が遠く地方に飛ばされることでやっと決着が付きそうになった。

　ほんの半年前からの付き合いの途中入社の年下の上司は、二度と戻ってこれない島流しと退職金三割増の早期退職制度のどちらを選んでもいいと冷たく言った。一瞬迷った末、篠崎は早期退職制度を選択した。
「家族に相談しなくていいのか」とさすがに驚いた上司にその必要はない旨を伝えた。

　妻との関係は冷え切っていたし、大学三年生の一人娘と最後に口をきいたのは確か高校の卒業式の時だったような気がする。

　それよりも、篠崎には東京にこだわりたい理由があった。
　あの綺麗な先生のもとで生まれて初めての楽器を始めるのだ。

退職した翌日に篠崎はあのCMのお父さんのようなよこしまな動機も含みつつ、斉藤なつみ「大人のピアノ教室」に入門した。

つづく

大人のピアノ そのに レッスン仲間

「篠崎さん、モーツァルトのトルコ行進曲弾くんですよね」

　平林がつり革越しに篠崎の楽譜を覗き込んでそう言った。楽譜にはレッスンの時隣に座ったなつみ先生が毎回手を伸ばして書き込んでくれる、鉛筆書きの指示が踊っている。指示と言ってももちろん弾き方のニュアンスみたいな音楽性の指示ではなくて、「テンポ注意」とか「遅れないで」とかである。はてまた一年前の入門時には楽譜すら読めなかった篠崎むけに、四分休符の長さを説明するためにりんごを四等分したイラスト、というかなつみ先生の小学生の落書きみたいなのも書き込まれていて、覗き込まれると少し恥ずかしい。

「ああ、そうだよ」

　十歳ばかり年下のコピー機の営業マンの平林に向かって、篠崎はさりげなく楽譜を閉じてそう言った。篠崎と同じ営業職でも広告代理店の営業とは違って、オフィス街での新規開拓の飛び込み営業と、既存顧客のコピー機のメンテナンスでトナーを入れ替えたりで一日が終わる平林とではずいぶんキャラも違っていた。

　今では前髪がかなり上方に後退しつつあるのを気にしてる独身の平林だが、ピアノを習うのは初めてだったものの学生時代はサックスをやっていた。独身寮でサックスの練習はできず、楽器ケースはワンルームの押入れの中ですっかり埃をかぶっていた。課長代理になって外回りの残業が減った分時間を持て余した平林は、埃のかぶったサックスケースを取り出して埃を掌でなぞって払ったあと久々に蓋を開けてみた。十年ぶりに手にした金属の冷たい感触にニンマリして久々にマウスピースに口を当てて調子に乗った平林は、思わずその場でDドリアンの上行スケールを高らかに吹いてしまった。地味ながらもジャズサックス吹だった平林は学生時代の血が騒ぎ、そのまま大音量で泣きの入ったダニーボーイの出だしを吹き始め…

　その瞬間に寮長がノックなしに部屋のドアを開けた。
「平林！気でも狂ったか」サックスをかき消す怒鳴り声。

「すみません！」音楽嫌いの寮長の怒声に平林は二秒でサックスをケースにしまった。以来封印された蓋は一度も開かれていない。

　せっかく久しぶりに湧きたとうとした気持ちを鎮めながら、平林はインターネットのブラウザを開き、家電量販店の１４，８０００円の格安の電子ピアノを買い物カゴに入れた。半ば衝動買いでもあったが、まだサックス吹の頃から「もしもピアノが弾けたなら♪」と西田敏行を思い浮かべつつサックスであのメロディを吹いていたこともあるのだった。歌の続きのように、当時平林には「思いのすべてを歌にして♪君に伝えることだろう」と思いつめていた女の子がいたのだった。今でも最年長長老として独身寮に不本意ながら起居しているのも、実はその女性が今でも時々頭にちらつくせいであったかもしれない。

　篠崎のような斉藤なつみ先生目あてというダイレクトな動機とは違うが、「大人のピアノ」というものにある種特別な思い入れがあったのである。「大人のピアノ」とは多分、中年に差し掛かる、あるいは中年真っ只中のおじさんたちの、そうした満たされなかった屈折した、しかし切ないピュアな思いが引き寄せられる特別な場所、サンクチュアリ、聖所と言っても差し支えないのかもしれない。

　ピアノの配送日時を指定すると平林は今度はGoogleに行き、「大人のピアノ」と打ち込んで、無理なく通えそうで口コミ評判のいい教室を探した。

　篠崎とは違ってきっかけは楽器志向、音楽志向だったわけだが、勤務先と独身寮を結んだ京浜急行線の路線からかなりはずれた「斉藤なつみ 大人のピアノ」に入門した決め手はやはり、先生の魅力だったのだ。

「この年になってね、弾けるようになるか、もしかしたら弾けるようにならないで終わるかもしれない楽器

を始めるってさ、並大抵のことじゃないわけよね。それってさ、手の届かない女の人を思い続けるのとおんなじなわけね。指が動かない、思いだけあってそれが表現できないもどかしさって、まさに西田敏行なわけ。そんでね、俺たちが偉いのはさ、それでも思い続けてることなんだよ。そんで家に帰りゃかみさんや子供に笑われたりさ、失笑ならまだいいよ、うちなんかさ、高校生の長男と中学生の妹で毎回爆笑すんですよ、これがまたさ。そうそう、いま皆さんが爆笑したような感じで毎回私が練習すると二人でわざわざ二階の自分たちのそれぞれの個室から示し合わせたように降りてきてさあ…。そーなのよ。メロディが途切れるたびにくくくくって笑いこらえて、時々二人で顔合わせてはたまらずに爆笑するわけ。なんかさあ、見ててあの二人って普段はそれほど仲良いわけでもなさそうなんだよね、まあ二人とも思春期のさ、兄妹とはいえ異性なわけだしね。でもさ、オレのピアノを笑う時は何か楽しそうに笑うんだよねぇ。小学校の時に三人で一緒に風呂で騒いだ時みたいにね。
　あれ、なんの話か分かんなくなっちゃったけどさ、要するに弾けることを信じて、手の届かないものを追い求めるって、女性に対する真摯な思いみたいなのが心の根っこにない奴には無理だと思うわけですよ」

　篠崎も平林も、入門者同士の飲み会での別の初心者のこんなセリフに大爆笑しつつも深々と頷いたものである。

　そして爆笑したあと飲み会に参加していた二十人弱の中年おっさんは全員泣いたのだった。

　上座に座って大人しくレモンサワーに口をつけたりつけなかったりしていたなつみ先生が、頬を紅潮させてやおら立ち上がり、一同のオヤジ風の下卑た爆笑をさえぎって、穢れなきその御手が痛くなるのではないかと思うほど拍手したのだった。

「みなさん頑張ってください。わたしもみなさんのために頑張ります」

　十秒ほど世界から音が消えた。そして嗚咽の混じった「カンパーイ」の声が安居酒屋のボックス席に響き渡った。

つづく

大人のピアノ そのさん 異変！？

　二人は教室のある駅で下車して道を急いだ。レッスンの時間は一人三十分。斉藤なつみ先生は、昼は普通の教室を運営していて、週二回火曜と金曜に「大人のピアノ」教室を開いている。サラリーマンがほとんどなので、時間は夕方６：００からの予約制だ。レッスン中の見学は自由なので、自分の予約時間より早く来たり、終わったあと残っていたりする生徒が結構いる。自分の刺激のために他の生徒の進捗状況を観たりするのだ。今日も９：３０からが篠崎でその次が１０：００から最終の平林が一緒の電車になったりする。

　夜半から雨の天気予報通り小雨がぱらつき始めた駅からの小道を、折り畳み傘を広げながら二人は歩き始めた。

「でもさ、あれだよね、平林さんは学生時代音楽やってたからいいよね」

　歩きながら篠崎がしみじみそう言った。到着までの間持たせのために振った話題というよりは、その声にはどこか切実なものがあった。

「そうですか？そんなこと全然ないですよ。だって僕サックスだから指の使い方の感覚なんてまったくピアノの運指には関係ないですし。譜面だって右手と左手一度に読み取るなんて芸当とても出来たもんじゃないですよ。サックスは自分のメロディ、ピアノの右手だけですから何とかなるけどピアノは泡食っちゃってとても楽譜なんか読めてません」

　篠崎の言葉の意図を確かめるようにゆっくりと平林が言う。

「そうなの？それは驚きだ。そういうもんなんだあ」

　雨が少し強く降ってきたこともあったのか、篠崎はそのまま歩いた。平林も並んで歩いたがおもむろに聞いてみた。

「どうしてですか?鉄人広告営業マンの篠崎さん、来週の発表会に向けて何か悩み事でも出てきましたか」

　笑いながら平林は話を継いだ。二人はタイプこそ違えど例のおっさん嗚咽泣きの飲み会の時席が隣だったこともあり、その後もケータイメールで何かと連絡を取り合ったりしていた。多分「大人のピアノ」で出会っていなかったら挨拶する機会さえなかった二人かもしれなかったが、二人はあの時互いのまなじりに浮かんだ微かな涙を覚えていた。社会人になって本当に数える程しかない、本当に心の防波堤ゼロの状態の一体感の余韻は、あの日ぐっと近くなった二人の距離をそのままキープしていた。

「俺さ、基本的に音楽の才能ねえなあって、この一年つくずく思ったのよ。まあ当時はピアノ云々よりも、会社やめたりそのことで家庭でさらにトラブったりしてさ、別の世界に逃げ込みたいっていうか、はっきり言ってなつみ先生とお近づきになることが目的だったから、ピアノなんてオマケだったわけだけどね」

「それが一年たってモーツァルトのトルコ行進曲じゃないですか、スゴイですよ。まったく鍵盤触ったこともなかったってことなんだから」

　お世辞ではなく平林はこの一年時々篠崎のレッスンを見学した時そう感じていた。この人はやっぱり、飲み会で先生の大拍手を引き起こすきっかけを作ってくれた神田さんが言ったように、「届かないかもしれなくても女性を思い続けるひたむきさ」みたいなのを確かに心の内側深くに持っていると思った。

「まあね～。まあ、それは俺も素直に嬉しい。ってか、自分で信じらんないし、ここだけの話自分でもカンドーしちゃったりしてる。家で練習終わったあとなんか、もうキモイナルちゃん状態外に出さないように気をつけてビールで一人乾杯。そのビールが美味いのなんのってさ」

　右手に持った傘をバンザイするように上にあげて白い歯をのぞかせて笑う篠崎は、ほんとにいい顔をして

いた。

「そういう時、やっぱり奥さんと娘さんは…」

「あ、だめだめ。最初はオレもドヤ顔みたいなのあったけど、関係こじれちゃっててね。無視され続けてるよ」

「やっぱ天下の電報堂相談なしに辞めちゃったってのが効いてますかね…」

「そ、ね。あるかもな。会社に務めてた頃は全然知らなかったけど、奥さん連中で『ご主人どこお勤めです？』から始まる付き合いみたいのあったらしくてね。そんなの何十年も全然知らなかった。会社で失敗したあなたのせいであたしの人生公私ともども狂わされたってさんざんヒステリックになってたな。それならなんつっか、俺が会社で辛かった時もうちょっと優しくして欲しかったよなあ、とかね」

「そんなもんすかね」

「そ、そ。娘は自分じゃそういう価値観軽蔑してるんだけど、女同士でうんうん、お母さんかわいそう、みたいなね」

「家庭持ったら持ったで大変だよなあ。やたら結婚焦るのも考えものかもな」

　平林が薄くなりかかった自分の額をピタピタと戯けて叩きながらいうと、篠崎が平林の肩に手を回して「そうそう」と芝居がかった深刻な顔でうなずいた。

「いったん家庭持ったらどんな家庭にだって、人には言えない苦しみや恥部みたいなものができるもんさ。もしかしたらあの斉藤家みたいにお父さん外務省の役人でお母さん京都の老舗呉服屋のお嬢さんみたいな家でも深刻なドロドロがあったりとかな」

「まさか。一般論としてそういうのはあるかも知れないですけど、あのなつみ先生の天真爛漫さ、性格の良さでそれは想像しにくいなあ」

　冷やかされるのを覚悟で平林はあえて本音を言った。

「まあね、それはオレもそう思った。」

　案に反して篠崎は素で同意した。

「でもね、あれでなつみ先生が実は酸いも甘いも何かの苦労も知っててだったら、オレまじになるかもしれない」

「まじって、なんですか?」

「いや、女房子供捨ててもいい。まじで惚れる」

　篠崎が本気の顔をしてるのを確かめると平林は腹の底から爆笑した。

「あのさ、篠崎さん。相手の気持ちだってあるわけだし。それにとてつもない過去みたいなものなんてそうそう他人が背負えるものじゃないですって」

「ウルセー。独身者のお前に何がわかるってんだ」

「はいはい。分かりましたよ、さ、そんな馬鹿話している間に付きましたよ」

　二人はいつものように、これぞピアノ教師の令嬢の邸宅といった大きな門構えの洋館のインターフォンを

鳴らした。古い洋館なのでインターフォンが少し古ぼけているのだが、かえってそういったところも成金じゃないホンモノ的な感じがした。

　ところがその日に限って、何度インターフォンを鳴らしても内側からは何の反応もなかったのだった。

つづく

大人のピアノ そのよん 先生のラブシーン？

「変ですね、どうしたんだろ。こんなことこれまで一度もなかったですよね」

　首を捻る平林は爪先立ちになって軽くジャンプして門中に明かりが灯っているか見ようとした。

「おい、やめとけって。不審者がいますってことで警備会社がすっとんでくるぞ」

　平林より十センチ程上背のある篠崎が首を上から押さえるようにして静止した。篠崎の右手の指先を眺めると確かにセコムのステッカーが貼ってあるセンサー感知可動式最新型の防犯カメラが平林を捉えていた。

「げ、すいません」平林が反射的に誤った。しかしあわててて頭を下げたのが篠崎じゃなくて防犯カメラだったのがご愛嬌だ。

篠崎も噴き出しながら
「まあ、このくらいじゃ大丈夫だろ。幸いオレたちは会社帰りのスーツ姿だし、そこまでセコムも暇してないだろ」と言って防犯カメラに軽く敬礼してみた。

「さってと、どうすっかな。平林さん俺の前のレッスンの人だれだっけ」

「ちょっと待ってください」

　身体をよじるようにして平林がスーツのズボンから携帯を取り出した。ずぼらな篠崎は次回の自分のレッスン時間だけを頭にいれて置くだけだったが、平林は毎回壁に張り出されたスケジュール一覧表を携帯のカメラで撮って保存していたのを思い出したのだった。

「えっと、神田さんですね」

「おっと、嗚咽宴会部長の神田さんか。神田さんのレッスンって無事終わったんだろうか。」

「ちょっと電話してみますね」

「お、頼む」

　メモリから番号を呼び出して平林が神田に電話をする。とことんまめな男だ。多分かけるかけない関わりなしに「大人のピアノ」生徒全員の携帯番号が「大人のピアノグループ」にでも登録されているのだろう。

　しかし平林は首を横に振った。

「ダメですね。留守電も契約してないみたいで、そのままなり続けてます。メールしてみましょうかね」

「うん、そうだな。オレちょっとこのお屋敷ぐるっと回って一周してくるよ。もしかしたら勝手口とかあるかもしれないし。呼び鈴があればそこでも鳴らしてみて反応があれば平林さんの携帯に電話する。」

「あ、分かりました。じゃあ僕は念の為にここにいますね。もしかしたらインターフォン越しにひょっこり『すみませんでした、手が離せなくって』とかなつみ先生の反応があるかもしれないし。」

「あ、うん。そうだな。じゃあちょっくら行ってくる。いくらこのお屋敷でも５分もあれば一周して帰って来れると思うよ」

「そうですね。じゃ、行ってらっしゃい」

「ああ」

　そう言って篠崎は時計と反対周りの方向に邸宅の外側の道を歩き出した。

　ところが平林が５分待てど１０分待てど、篠崎は反対側から現れなかった。不安を感じた平林が１５分後に篠崎の携帯に電話すると、長い長いコールの後やっと篠崎の「はい。もしもし」とまるであたりをうかがうような押し殺した声が聞こえた。

「もしもし、篠崎さん、どうしたんですか」平林も事情がわからないままついついあたりをはばかるような小声になってしゃべった。

「おう…ちょっとタイヘンなことになった。というか大変なものを見てしまった」

「篠崎さん、どうしたんですか」

「平林さんゆっくり、いや急いで屋敷の反対側に来てくれる？でも静かに気配殺して」

　気配を消してといわれても忍者でもない平林にはどうしたらよいか具体的にわからなかったが、とりあえず「分かりました」と小声で伝えて携帯を切り、小走りにさっきの篠崎と同じ時計と反対周りに屋敷の裏側を目指した。

　暗闇の中にうっすらと白いコートを着た篠崎が浮かんで見えた。まだ秋の終わりでそれ程寒くはない季節だったが、篠崎は張り込みの刑事のようにコートの襟を立てて、屋敷と反対側の公園の方を電柱の影に身を隠すようにして注視していた。

「篠崎さん…」

　その気配に胸騒ぎを覚えた平林は緊張した声で篠崎の名前を呼んだ。

「おう…」篠崎の表情は複雑な、しかし明らかにどこか呆然としたものだった。

「いったいどうしたっていうんですか」平林は内心の動揺を隠すように詰問するような口調で篠崎に向かって言った。

「あれを見てみろ」

　平林が篠崎の肩越しに公園の暗がりに目をこらすと、男女が肩を寄せて抱き合っていた。男は明らかに堅気者ではなくそっちの筋の者に違いなかった。

「あれがどうしたっていうんで…」

　平林は問いかけた言葉を途中で飲み込んだ。

　白いワンピースにベージュのシュシュのポニーテール。

　暗がりを通して横顔が平林のまなこにくっきり刻まれた。

「なつみ先生…ですよね」

「ああ」

　篠崎は沈鬱に言葉を返したが、その声はもう平林には聞こえていなかった。

つづく

大人のピアノ そのご 助っ人（？）登場

「どういうことっすか、これ…」

　しばらく呆然と無言だった平林が、やっと我を取り戻したように前を向いたまま篠崎に語りかけた。

「うん。とりあえず玄関口の方に戻ろう。事情がわからないところでここにオレ達がいることがわかったらもっややこしいことになるだろう…」

　そう言って篠崎は平林の肩を叩いて促したが、振り返った平林の顔は無表情に硬直していた。

「事情が分からないって、事情も何もないじゃないですか。僕たちのレッスンすっぽかしてヤクザ者と乳くりあってるだけじゃないですか」

　篠崎は『乳くりあってる』という平林の言葉に吹き出しそうになったがそれを必死にこらえた。言葉遣いは少し妙だが、独身者の平林がなつみ先生に憧れ以上の恋心のようなものを抱いていたとしても不思議ではなかったし、この様子では実際のところその通りだったのだろう。少なくとも篠崎自身もショックを受けたが、そのショック以上に平林が傷ついていることは想像に固くなかった。

「うん、確かそうだ。男と女が何をしようが当たり前だけどそんなものは人の自由だ。相手がヤクザであってもその原則は変わらないとオレは思う。男女のことはつまりそれがどんなものであっても誰も非難なんてできやしないと思う。しかしレッスン時間にレッスンほっぽり出してああいうのは良くないよな。平林さん裏切られたって気持ちだろうし、オレもあんたとまったく同じ気持ちだよ」

　硬直していた平林の顔がその言葉で涙で歪み、感情の発露に自分自身戸惑った平林はポケットのハンカチを探った。

　バックパックに入れてあったのか、ズボンのポケットにはハンカチは見当たらないようだった。篠崎が大きくたたんだしっかりした折り目のハンカチをポケットから出して平林に渡すと、平林は一瞬受け取るのを躊躇したあと「すみません」と言ってハンカチを受け取り、そのまま顔に当て、両手で量の目頭をじっと押さえつけた。

　まるで止血の応急措置のようなその仕草に篠崎は平林の傷つき方の大きさを再認識したが、涙の止血行為は虚しく、ハンカチを返してよこそうとする平林の意思を裏切って涙はさらに傷口から溢れ出た。

「いいよ、しばらく平林さんがもっててよ。それより、とりあえず…な…」

　平林は素直に頷くと、篠崎に手を引かれるようにして歩き出した。

　ちょうど表玄関のところまで二人がトボトボ歩いて帰ってきた時に、平林の携帯が鳴った。

「あれ、まずい。どうしよう」

　平林は困惑した顔を篠崎に向けた。

「どうした」

「さっき篠崎さんが裏に回っている間に神田さんにメール打った返信です」

「何だって書いてある」

「『まだ近くにいるからすぐそっち向かう』とのことです」

「何だって！ヤバイよそれは」

「すぐ断ります」

「いや待て」

「どうしてですか。さっきは取り乱して申し訳なかったですけど、このことは僕と篠崎さんの胸の内にしまっておきましょう。そうでなくてもあの人嗚咽宴会大成功から生徒全員への影響力絶大だし、自分も何かと仕切り屋したがってて面倒になること目に見えてるじゃないですか」

「いや、まあ、まったくもってその通りだ」

「だったら」

　さっきから大通りの方を眺めたままで受け答えする篠崎にイラつきながら平林が言うと、篠崎がこちらに向きなおった。

「もう遅い」

「え？」

　篠崎が見ていた大通りから一台のミニクーパーがこちらに近づいた。

　もったいつけるようにクラクションを三回も鳴らした後、中からおもむろに出てきたのは、もちろん神田さんその人だった。

大人のピアノ そのろく 大人のピアノの仲間たち

「どうも要領を得ないんだよねえ…」

　夜のファミレスの駐車場に車を入れると三人は取りあえず話し始めた。

　歯科医の神田は比較的時間が自由になるので食事は済ませているが、篠崎と平林は会社から直行なので、夕食もここで済ませることにした。篠崎はチキンのグリルソテーセットで、平林は天丼セットを注文した。

「ですから、僕がはやとちりして神田さんにメールしちゃいましたけど、夕方なつみ先生からメール入ってるの見逃してて、『急に入院中のお友達の具合が悪くなったから千葉まで行かなくちゃいけなくなった。ついては今日のレッスンはお休み』って事だったんですよ」

　天丼と盛り蕎麦とセイロご飯を律儀に三角食べしながら、平林は落ち着かない様子で神田にそう言った。

「じゃあ、篠崎さんところにも入ってたわけだ」

　神田は今度は篠崎の方に疑惑の目を向ける。

「ええ。まあ」

　チキンをあらかじめ五つほどにナイフでバラした篠崎は、箸を使って白ご飯を口に運びながら生返事をした。

「千葉って、お友達はなんで千葉なんですか？」

　ホットコーヒーをすすりながら、神田はフチなしメガネの端を少し掛け直すような仕草をして今度はメガネの奥の視線を平林に注いだ。

「それは僕だって分かりませんよ。なつみ先生はずっとあの屋敷だから小さい頃の転校して行った友達かもしれないし、音大時代の人かもしれない。そんなの僕にわかるわけないでしょ」

「それはまあ、そうですけどね…」

　なおも神田は何か言いたそうであった。仕切り屋の自分がすべての事態を把握していないかもしれないというのが嫌だったのだろう。

「まあ、そういう訳でご自宅に戻る途中を捕まえちゃって、神田さんにはご迷惑おかけしました」

　早々とチキンソテーセットを平らげた篠崎は紙ナプキンで口を拭うと灰皿を探しかけたが、禁煙席であることを思い出して、運ばれたばかりの食後のホットコーヒーにミルクをいれてかき回しながらそう言った。

「いやまあ、僕はいいけどね。家帰ってもすることないし」

　ようやく追求の手を緩めた神田は、うんうんと自分で小さくうなずき笑いをした。

「神田さんは来週の発表会にご家族来るんですか」

　話の流れが変わったことにホッとした平林が、話の流れを確定させるように神田のことに水を向けた。

「いやあ、それがねえ…。意外なことに女房も子供二人も来てくれることになりましてね。お父さんの一生のお願いだから発表会の会場で三人で爆笑するのだけはやめてくれって言ったんですけどね」

　破顔一笑とはこのことだろう。神田の表情からはさっきまでの猜疑心に満ちた渋面が跡形もなく消え、得意半分テレ半分のひとなつっこい表情が表に出た。

「それはよかったですねぇ」

「どうも」すかさず相づちうった篠崎に神田はちょこんと頭を下げて微笑んた。

「篠崎さんところは…」

　お約束通り自分に話が振られて、バツが悪そうに篠崎はちらっと平林を見た。

「いや、お恥かしい。女房にも子供にも「大人のピアノ」の件は完全にシカト食らってまして…」

「おや、そりゃまたなんで」

「う〜ん。なんででしょうねぇ」

　いつもは平林を引っ張る形の篠崎が助け舟を求めるように平林に目を向けた。

「ほら、神田さんのところはお子さんもまだ高校生と中学生でしょ。ギリギリ家族イベントにも参加してくれる年齢ですよ。篠崎さんところはもう娘さんも来年は大学四年だし、パパがピアノ発表会なんて照れ臭いんでしょ」

「じゃあ、奥さんは？」

　せっかくの平林の絶妙のフォローは幸せの歯科医神田先生の一言で振り出しに戻った。

「いえ、女房はクラシックもカラオケも、およそ音楽全般好きじゃないんです」

　苦笑しながら篠崎が言うと「なるほど」と神田先生もやっと納得してくれたようだった。

「平林さんは誰か呼ぶの？」ホッとした篠崎は今度は平林に話を振った。

「僕は大学時代の友人が来てくれます。なつみ先生が何人連れてきてもいいっておっしゃってくれてましたので、お言葉に甘えて六人」

「ほぉぉ…それは楽しみですね。飲み会の時におっしゃってたJAZZ研のメンバーの方ですか」

「はい。僕はサックスを大学から始めたんですけど、中にはクラシックピアノを小さい頃からやってたなんてのもいて、一人に声かけたらあっという間に集まっちゃったんです」

「それは羨ましいなあ。ひょっとして誰も来てくれないのはオレだけだったりして…」

「篠崎さんご家族が冷たいんだったら、昔の恋人とか、告白できなかった幼馴染とか呼んじゃうっていうのもありなんじゃないですか?」平林がいたずらっぽく笑った。

「え？いやあ、そんなの考えたこともなかったなあ」

「いえ、意外とあるらしいですよ。そういうの」神田が身を乗り出した。

「…といいますと」篠崎が相づちを打つ。平林も興味深々だ。

「いえね、後でお見せしますけどこの『斉藤なつみ「大人のピアノ」発表会』って、パンフレットもチケットもプログラムも作りますでしょう。まあチケットは無料だし、パンフレットも表だけカラーで裏はモノク

口ですがパソコンで作ったものじゃなくて一応印刷物です。以前はパソコンで作ってたらしいんですけど、「斉藤なつみ大人のピアノ教室」の出身者で小さな印刷会社の社長さんがいるんですが、その方のご好意で無料で作っていただいてるんです」

「ああ、そういうわけだったんですか。広告マンとしては費用がどこから出てるのかな、なんて考えたことありましたから」

　篠崎が頷くと斎藤も「なるほど、しかし太っ腹ですね」と感心した。

「それがですね。この社長さん、三谷幸喜さんっていうんですけど、ええ、あの映画監督と同姓同名で。三谷さんが提案して作った初回は皆さんから費用集めたらしいんですよ。会場費とかと一緒に」

「そうでしょうねえ。しれがまたなんで無料に？広告出稿してもらうというのも、この媒体じゃ無理だろうし…」

「西田敏行なんですよ」神田先生はにんまりと笑った。嗚咽宴会部長の顔だった。

「三谷さん、ずっと独身だったんですけどね、刷り上がったパンフレットに『エリーゼのために 演奏者:三谷幸喜』っていう活字を見て、思い切って中学時代の初恋の人に連絡とったらしいですよ」

「勇気ありますね」平林が真剣な顔で聞き入った。

「そうなんですよ。それでね、西田敏行よろしく「思いのすべてを歌にして君に伝える」ってことしたわけです。それがご縁で…」

「まさか…」平林は身を乗り出した。

「そう。それが今の三谷社長夫人ってわけですよ。私も存じ上げないのですが、パンフレット作成の打ち合わせで三谷さんご本人に聞きました。当然コンサートには奥様もいらっしゃいます。二歳の坊ちゃん連れて。その幸せを与えてくた『斉藤なつみ「大人のピアノ」発表会』の印刷物はご祝儀で毎年無料ってわけ」

「うおぉぉぉ！いい話だなあ」

「平林さんもバンドのメンバーなんかじゃなくてそういうのにしたら良かったのに」

　篠崎がチャチャを入れると、平林は少し赤くなった。

「あ、もしかしてそのJAZZの仲間の中に好きだった人がいるとか？」神田がたたみかける。

「いえ実はそうなんです。その人に声をかけたつもりが、余計なのがあと五人もくっついてきちゃって…」

　神田と篠崎は目が合うと爆笑した。平林照れ臭そうに笑った。三人ともいい笑顔だった。

「あ、そう～それが大部隊の真相かあ。こっちなんか応援隊ゼロだから羨ましいもんだとか思ったけどおじゃま虫か」

「いえいえ、そんなことないですよ。結婚する時にはあの時のご縁でって同じメンバーに招待状出せるじゃないですか」

「いえ、そんな結婚だなんて」

「その人独身？」神田と篠崎が同時に聞いて三人はまた笑った。

「ええ、まあ」

「おおぉぅ。じゃあ可能性ありますよ。篠崎さんも銀座のクラブのママでもさそったらいいじゃないですか」

　神田がそういうと、篠崎はイエイエという感じで自分の顔の前で手を振った。

「でもせっかくだから誰かお世話になった人とか誘ったらいいのに」

　平林の言葉に篠崎はただ微笑んで頷いたが、お世話になった人という言葉で、あの千駄ヶ谷のいいかげん&まじめ社長と胸の大きい唯一の女性社員の懐かしい顔が浮かんだ。お世話になった人、自分の原点を作ってくれたのはあの人たちかもしれないな、篠崎はふとそんな風に思った。いいかげんでまじめ。そう言えばまだ仲の良かった頃妻に「オレのどこに惚れたんだ」と酔って聞いた時、妻は真顔で「あなたのいいかげんでまじめなところよ」と言ったことを思い出した。

　篠崎が感慨にふけっている間、平林と神田は仕切り屋神田先生が準備しているパンフレットの最終原稿を前に二人して盛り上がっていた。

■斉藤なつみ「大人のピアノ教室」第７回発表会 ■

主催者ごあいさつ　斉藤なつみ
来賓スピーチ　　洗足音楽大学ピアノ科教授　岸谷貴史

～第一部　ピアノの歓びに触れて(初心者のチャレンジ)

～第二部　ピアノで歌おう(中級者の表現)

～第三部　ピアノは友達(教室OBの演奏)

講評　洗足音楽大学ピアノ科教授　岸谷行人
斉藤なつみ先生からの明日へのエール
生徒代表感謝の言葉

つづく

大人のピアノ そのなな 発表会のレパートリー談義しかし…

「えー、ちょっとそりゃ困るな。僕はそんな芸当できませんよ。ねえ、篠崎さん」

　本気で困った声に呼ばれて篠崎は回想から我に帰った。

「あ、ごめん。何が」慌てて二人の顔を交互に見る。

「だからこのパンフレットの最後に『生徒代表感謝の言葉』っていうのがあるじゃないですか」

「うん。あるね。当然神田さんがやるわけでしょ」

「いやそれが僕もそう思ってたんですけど、違うんですって」

「一番印象に残った演奏をした人がやるんですよ」神田がニヤニヤして言う。

「え？じゃあ原稿なしのアドリブってわけか」

「そうですよ。僕はそういうのは苦手です。まあ、最も印象深かった演奏という条件だから、僕なんか大丈夫だとは思ってますけどね。万が一考えたら緊張して演奏にも身が入らないかもしれないですよ」

「あれ、ずいぶん弱気だね。営業のくせに」

「いや営業と言っても僕のは人前のプレゼンとかじゃないから篠崎さんのとは違うわけです。結婚式の友人代表スピーチっていうのも一回やらされたけど、気になっちゃってご馳走が全然喉とおりませんでしたよ」

「う～む。まあ、苦手な人は苦手かもなあ。これって毎年そういうしきたりなんですか」

「そういうこと」

　篠崎も平林も発表会は今年が始めてで、パンフレットでいうところの『第一部　ピアノの歓びに触れて(初心者のチャレンジ)』っていうところで早々と出番は終わる。

　篠崎はモーツアルトの「トルコ行進曲」で平林はバッハの「主よ人の望みよ喜びよ」だ。どちらもテレビコマーシャルやドラマの主題歌などで誰もが一度は聞いたことがある名曲である。「トルコ行進曲」は指遣いは速いものの、音型つまり音のパターンは意外と繰り返しが多く、派手な割には頑張れば初心者でも格好良く弾ける。「主よ人の望みよ喜びよ」はスローだし指遣いは「トルコ行進曲」より簡単だけど、その分和音の響きを丁寧に意識しないと全体がのびたお蕎麦みたいな状態になってしまう。ペダルを踏みっぱなしにして初心者がよくこの茹ですぎた蕎麦をやってしまうのだが、このペダルをきちんと踏むには、耳で和音の響きの移る瞬間をある程度キャッチできている必要があり、これが意外に難しい。なので、楽器は違えども大学時代に経験のある平林向きだと言える。

　この辺りは、生徒の希望を最優先になつみ先生がじっくり生徒の個性、強みを見極めた上で話し合いの末決定する。ここらあたりが「大人のピアノ」の先生の本当の実力の出るところで、いわゆるピアノがお上手な音大出身者というだけでは務まらないところだ。まだ三十前のなつみ先生は若いながらも、このじっくりおじさんたちの人間性を含めて、そう…その人の中の西田敏行の正体を想像しながらコミュニケーションを取る能力が抜群だった。

　第二部ピアノで歌おう(中級者の表現)トップの神田は変り種でSMAPの「世界に一つだけの花」羽田健太

郎編曲バージョンだ。羽田健太郎バージョンでポピュラー曲を課題曲や発表曲にする生徒も多い。三谷幸喜社長は第三部ピアノは友達(教室OBの演奏)で森進一の「冬のリビエラ」。教室では北島三郎や美空ひばりもオーケー。この分野だと、多分なつみ先生は生徒に言われて始めて知った曲というのがほとんどかもしれないが、CDを買ってきてはじっくり聞き込んで勉強するそうだ。

　二十代前半まで国際コンクール上位入賞の常連だったそうだが、なぜか最近はステージには立たないそうだ。クラシック界の謎の一つということで、その本当の理由をめぐってミステリアスな噂が飛び交っている。何でも本人の頑なな希望ということだが、コンサートピアニスト待望論は日本人クラシックピアニストの地位向上というシリアスな面でばかりではなく、ルックスの良さに期待する音楽業界、音楽ジャーナリズム界にも根強いのだった。

　来賓スピーチに名前の上がる洗足音楽大学ピアノ科教授岸谷貴史というのがピアニスト斎藤なつみの師匠であり、師匠は斎藤なつみの半引退生活の真相を知っていると言われるが口が硬くて本人を飛び越して情報は出てこない。ただ、師匠としてもこの一番弟子の復活を切望しているのは間違いない、というのが業界の定説であった。

「じゃあ、指名されちゃったらしょうがないってことだね」

　篠崎が平林の肩をポンと叩いた。

「その指名ってもちろんなつみ先生がするんですよね」顔をあげた平林が神田に尋ねる。

「もちろん」

「じゃあしょうがないっかあ」

　話が一息ついて、篠崎が冷めたコーヒーを飲み干すと、なんと篠崎は目の玉をむきだしていきなりむせたのだった。

「うわあ、大丈夫ですか？篠崎さん、ハンカチハンカチ」

　平林がさっきの涙を吹いた篠崎のハンカチをすかさず差し出す。

「あれ、どうしたんですか。顔色が青いですよ。コーヒーにあたったかな」

　反対側に座っている神田が篠崎の顔を覗き込んだ。

　その時平林も篠崎が青ざめてむせた理由をファミレスのドアロに発見して、同じように顔を青くした。

　怪訝そうな顔で二人を見比べた神田が体を反転してドアの方を見ると…

　千葉に容態が急変した友人を見舞いに行ってるはずのなつみ先生が、入店順番待ちの名前を書いていると

ころだった。

　もちろん、その横には…

　あのヤクザ者が一緒だった。

つづく

大人のピアノ そのはち ラブシーンの真相

「おやおや、これは不思議なこともあるものですね」

　はなから篠崎と平林が示し合わせて何か隠し事をしていることは承知だったので、神田はことさら驚いたりはしなかったが、その代わりに半ば呆れ顔で非難がましく二人の顔を眺めた。

　平林は下を向いてがっくりとうなだれている。

「いや、まあ、なんといいますか。月並みな言い方になりますが、これにはいろいろと訳がありまして…」

　篠崎もあまりのタイミングの悪さにこういうのがやっとだった。

「ふむ…。まあ、私は別にあなた方を詰問する立場じゃないですし、どうやら斎藤先生のプライバシーに関わる問題のようですから特にどうこうしようというつもりもないんですが…」

「はい」

　神田の表情はそうはいいながらも、呼びつけられたにもかかわらず自分一人蚊帳の外状態というのが面白くなかったらしく、苦虫を噛み潰した顔をしている。

　重苦しい雰囲気を破ったのはなんと意外なことになつみ先生だった。

　平林と篠崎が顔を下にして、なんとかなつみ先生の視界に自分たちが入らないようにしていたのだが、あっさりなつみ先生がそれを見つけ、向こうから大きな声で呼びかけたのだった。

「あーーー篠崎さん、平林さん。こんなところにいらしたんですか！ちょっと家開けてまして本当にごめんなさい！急なことちょっとだけ家出まして、すぐに戻れると思ったんですが、長引いてしまって」

　といいながら、こちらにスタスタ歩いてきたのだった。もちろん、やくざ者も一緒にである。やくざ者はまるでなつみ先生の子分のように後ろからついてくる。さっきは背中からしか見えなかったがよく見ると服装はヤーさん風で上背もあるのだが、顔はジャニーズ系の好青年であった。そして近づいてくるにつれ分かったのは、そのジャニーズ系の地肌が隠れるほどに顔にアザがあることだった。

　男が近くまでくるとそのアザは先天的なものではなくて、後天的な、たぶんさっきケンカで殴られたといったところのあざだと分かった。
　さらに驚くべきことには、「こちらよろしいですか」と言いながら、なつみ先生が神田さんの隣に男と一緒に座ったのである。
　男はバツの悪そうな顔をして小さく会釈した。その会釈はヤクザ者のそれではなく、きっちりと幼少からしつけを受けてきたものの醸し出す気品のようなものすらただよっていたのだった。

「先生、いったい全体何が起きたんでしょうか。こちらはどなたさんで…」

　神田が青年の顔を覗き込みながらそういうと、それに答えたのは男の方だった。

「申し遅れました。私、斎藤武志と申します。姉がいつもお世話になっております。この度は皆様のレッスン時間を台無しにするようなことになってしまい、まことに申し訳ございませんでした」

「は？」

平林と篠崎は目を丸くして男を見つめ、やがて同時にゆっくりと首をかしげた。

つづく

大人のピアノ そのきゅう 先生の弟武志

「うーん」

　神田、篠崎、平林三人の唸り声である。恐縮して何も注文しない斎藤武志に代わって神田が注文したレモンスカッシュは、量が減らないまま氷だけが溶けて、コースターはぐっしょり濡れている。その間武志はゆっくりと事の顛末を話した。話をするのに今の自分の境遇なども語る必要があったため、小一時間ばかりずっと話をしていたのである。

　三人は長い話に退屈するどころか、すっかり聞き入ってしまっていた。

「じゃあ、平林さんがでっち上げた『千葉の友達』ってのはあながち間違いじゃなかったわけだ。友達じゃないけど」と神田が少しいじわるく平林を見た。

　平林はバツの悪そうにすっと目をそらしたが、武志は気がつかぬ風で「そうです。千葉の船橋のクラブで住み込みで働いてました」と答えた。

「しかしなつみ先生の弟さんがクラブの、それも今聞いた話じゃあの蜷川会系列の店のマネージャーさんとは驚いたね」

　なつみ先生が面目なさそうにうつむいたのを見て、平林が「いいすぎでしょ」という目で神田を見る。

「おっと、これは失礼」

　平林の視線に気がついた神田は武志となつみ先生両方に頭を下げた。

「いえ、いいんです。家出して金も尽きた時世話になったクラブがどうもそっち系のしかも三大広域暴力団の店だと三ヶ月くらいで気がつきましたから。それでもズルズルそこにいたのは結局自分の責任です」

　なんだかんだ言って家庭の良きパパであり社会的な良識もある神田歯科医院の院長先生は、渋い顔をしている。

「まあ、変な仕事じゃなくてホールのマネージャーと言っても、専属ラウンジピアニストなわけでしょ」

　雰囲気にいたたまれず篠崎が助け舟を出す。

「はい。組の偉いさんが僕の弾くピアノがお気に入りで、かわいがってもらってました」

「さすがはなつみ先生の弟さんだね。ヤクザも心酔するピアノ弾きか」

「神田さん」今度は篠崎が口に出して神田を制した。神田は今度は何も言わずに不機嫌な顔で黙ってしまった。

「ずっと一緒に小さい頃からピアノを習ってまして、全国のコンクールの成績なんかも常に弟の武志の方が上位だったんですよ。年齢が上がって私もだんだんと音楽のなんたるかがわかり始めるころには、私なんかと弟では才能がまるで違うっていうことに気がつきました」

　なつみ先生が場を取りなすように言った。

「まるで違うってことは、つまり弟さんの方が断然上手だということなんですか」二人の顔を見比べながら平林がどちらへともなく質問した。

「はい」弟が何か言い出そうとする前になつみ先生がはっきり断定した。

「それは私だけではなくて、私たちの共通の師匠もそう認識してます」

「…師匠というとこのパンフレットにある洗足音楽大学ピアノ科教授の岸谷行人さんですか」

　さっきまで平林と盛り上がっていたパンフレットを再びカバンから取り出した神田は、尋問するように武志に問いかけた。

「はい。姉と一緒にずっとお世話になってました」

「ということは、お姉さんより才能あるってことだから、ピアノを普通に続けていればあなたも国際コンクールにどんどん入賞するピアニストになってたわけだ」

「はい、もしかしたら…」努めて淡々と話をしていた武志はこの時初めてかすかに苦渋の滲んだ顔をした。

「それが家出の原因でもあるんです。」なつみ先生が唇をきゅっとしめて小さく頷いたあと話し始めた。

　なつみ先生の話を要約すると、自分の才能にも自覚を持ち始めた当時有名進学校快晴高校二年の武志は、進路相談の時に普通の大学進学を希望せず、音楽大学を志望したらしい。当時すでに洗足音楽大学の学生であった姉のなつみ先生はそれとなくこっそり相談を受けていたが、両親、とくに外務官僚の父親は武志は当然しかるべき大学にすすむと考えており、できれは自分と同じ道を歩んで欲しいと期待していた。
　武志もすんなり自分の希望が叶えられるとは思っていなくて、両親にそのことを告げたのは国立大学の願書が締め切られた翌日だった。

　武志にしてみれば、正直に希望を言えば反対されるのが分かり切っていたので、勝手に高校とは話を進めており、親の署名や判子がいる書類は勝手に作って提出していたのである。
　息子が願書を出していないことに驚いた父親は、事の成り行きを問いただす中で明るみに出たこうしたやり方にカンカンになり、今度は意趣返しとばかり、武志の気がつかないところで秘密裏に、合格通知の届いた超一流音楽大学に片っ端から入学辞退の手続きをしてまわった。

　父親もおとなしくなり、自分の将来の希望を尊重し折れてくれたとばかり思っていた武志は、アルバイトで稼いだ金で入学金を払うて続きをしようとして初めて父親の復讐に気がついたのであった。

　カッとなった武志が家出をしたのはそんないきさつだった。

つづく

大人のピアノ そのじゅう 作戦会議

「武志君、でいいかな。だいたい事情はわかったよ。」

　話が一段落して、篠崎がつぶやいた。

「神田さんには申し訳なかったんですが、もう明らかになっちゃいましたけど、入院してたなつみ先生の千葉のお友達の容態が急変ってのは作りばなしでした」

　篠崎が頭を下げたので、平林も慌てて一緒に頭を下げる。

「あの…。あたしの千葉の友人の…ってなんでしょうか」なつみ先生が不思議そうに大きな目で二人に尋ねた。

「いえね、今日のレッスンなんですが途中の電車で平林さんと一緒になりまして、先生の御宅のインターフォンは二人で鳴らしたんです。でも全然反応がなかったので、もしかしたらお勝手口とかにもチャイムとかついてないかなってことで、お屋敷の裏手に回ったわけです」篠崎が平林に同意を求める。平林はコクっと頷いた。

「すると、なんていいますかお屋敷の裏手の小さな公園のベンチに、肩を睦まじく寄せ合っている男女を発見してしまいまして…」

　ここまでの話で武志の方はすべて事情がわかったようで、恥ずかしそうに苦笑して下を向いた。

「まあ、男の人と女の人が…」スーパー天然のなつみ先生はまだ気がつかない。

「時々女性は男性の顔に手をやって顔を愛おしそうに撫でたり、肩をさすったりと、なんていいましょうか、そのぅ…」

　篠崎は明らかに冗談モードに入って行った。平林は笑を堪えて下を向いた。神田はここで事情がわかったと見え、ふんふんと頷いた。同時に平林がなつみ先生の名誉のために自分に嘘をついたのだということがわかり、機嫌も直ったようだった。

　一人かわいいなつみ先生だけがまだ気がつかなかった。

「白いワンピースにベージュのシュシュのポニーテール。そう、ちょうどいまなつみ先生が着てらっしゃるようなお召し物のお美しい女性(篠崎は<にょしょう>と発音したので武志が吹き出した)が、顔はジャニーズ風だけどいでたちはヤーさん風の男となんと！激しい口ずけを…」

「篠崎さん、そこまででいいっすよ」武志が笑をこらえて言った。「姉貴、俺たちのこと言ってんだよ、分かる？」

「え！」

「だから最後のキスは冗談なんだけど、篠崎さんと平林さんは姉貴が俺の顔の傷を触ったり、殴られて乱れた洋服の袖さすったりしてたことを言ってるわけ」

「え？」なつみ先生はここでようやく気がついたようだった。

「キスなんかしてません！」ムキになって篠崎の方を向いた。

「だからさ、そこだけ冗談で、どっかの男とレッスンほっぽり出してイチャついてる斎藤先生を見ちゃったものだから、それかばってくれたってこと」

　武志が呆れ顔で解説したあと立ち上がって、「どうもご迷惑おかけしました」と篠崎、平林、神田の三人に深々と頭を下げた。

「いや、いいですよ、私は」神田はすっかり上機嫌だった。

「ほら、姉貴も一緒に頭を下げてくれよ」

「あ、はい。あの…どうもすみませんでした」

　篠崎と平林は顔を見合わせて笑った。

「なかなかよくできた弟さん…というべきか…」平林がいうと「かわいいお姉さん…というべきか」と篠崎が継いだ。

「どうもこの度は大変ご迷惑おかけしました」

　やっとすべての事態が飲み込めたなつみ先生が改めて頭を下げて、一同は笑って飲み物のお代わりをした。

「さてじゃあ、乗りかかった船ということもあるし、この後どうするのかっていうところの話をしましょうか」おもむろに神田がつぶやいた。

「いえでも、これは斉藤家の恥と言いますか、斉藤家のゴタゴタですので、これ以上皆様にご迷惑をおかけするわけにはまいりません」

　やっと調子を取り戻したなつみ先生が、きっぱりとそう言った。横で武志も頷いている。

「いえ、ここまで話を聞いて、はいさよなら。っていうのもかえって気になって後味が良くないですよ」神田が同意を求めるように篠崎と平林の顔を見た。二人とも思うなずいた。

「お役に立てることがあるかないかは別として、この後どうするおつもりなのかだけでも我々に聞かせていただけませんか」

　三人の総意としての神田の言葉に斎藤姉弟はしばし目で会話をしたが、やがて二人とも正面を向き直って揃って同意の頭を下げた。

つづく

大人のピアノ そのじゅういち 暴力沙汰の顛末

「さてと、じゃあ…。話はだいたい分かったんですが、今度は私たちの方から武志さんのお店のことなど質問してもいいですか」

　平林と篠崎へのわだかまりはすっかり消え、神田は武志の人柄の良さもそれなりに受け入れたようだ。しかし神田は広域指定暴力団の息のかかった店で世話になっていたというところが、どうも気になっているようだった。

「はい」神妙な面持ちで武志が頷いた。

「そもそものきっかけはどういったものだったんですか、そこで雇われることになった」表情を抑えた顔で神田が尋ねる。これは篠崎も平林も突っ込んで聞いてみたいところであった。

「きっかけというほどのことはなかったんです。お金がなくなってきて船橋の工事現場で肉体労働やってたんですが、ある日親方連中に飲みに誘われたんです」

「あらら、まだ未成年なのに」神田が渋面を作る。

「ええ、年ごまかして雇ってもらってましたから、未成年ということを理由に断ることができずについて行くことになってしまいました」

「そういうところから悪の道にはまっちゃうもんなんだよなあ」正論に違いないので武志は黙ってうつむいた。

「まあまあ、神田さん。それは確かにそうなんでしょうが、今は武志君の話を先に聞きましょうよ」武志の様子をみかねた篠崎がフォローした。

「そうですね。でも客として行ったのにどうして雇われることになったんですか。求人募集の張り紙でも貼ってあったとか？」

「いえ、その日店でちょっとした喧嘩があったんです」

「なるほど。どんな喧嘩？」平林が相づちをうつ。

「酔ったお客がカラオケの代わりに、無理やりピアニストにピアノで伴奏させたんですが、店の上客だったらしくて、わがまま聞いてあげてたみたいなんですね」

「ああ、時々あるね、そういうの。周りはしらけちゃうだけなんだよな、あれ」篠崎は見知らぬピアニストに気の毒そうな顔をした。

「ええ。まあピアニストも我慢してやってられるうちは良かったんですが、お客さんが、カラオケマシンみたいに曲ごとにキーを上げろとか今度は下げろとか、キーが合ってないから歌えないとか怒り出しまして…」

「サイアクですね…」平林の一言に篠崎もうんうんとうなずいた。

「そのうち喧嘩になって、客がグランドピアノに水割り掛けたりもうメチャクチャでした」

「だってヤクザの店だろ。そんなことしてただで済まないでしょ」「そうだよね」「違うの？」神田の言葉に篠崎も平林も同意した。

「ええ、ところがその上客というのが組長が五分の盃を交わしたよその組の組長で、いわゆる兄弟分という

のらしかったんです」

「うげ、それはまた。そんで？」三人は話の展開に半ば飽きれながらも先を促した。

「同じボックスに僕がその後世話になることになった若頭の方が座ってたんです。あ、ヤクザの世界の若頭って若くないんですよ。その方も五十歳くらいでしたけど、その方はあとで聞くと組の叔父貴にあたるその人の傍若無人ぶりにはらわたが煮えくりかえってたらしいんですが、立場上強いことは言えない」

「うむ」

「そうこうしているうちに、ラウンジピアニストがその人に小突かれたり、ど突かれたり、大声で怒鳴られたり、殴られたりが始まったんです」

「ありゃまあ」

「足を引っ掛けられて転ばされて、僕たちが座ってたところにピアニストが倒れこんできたんですね」

「うん」

「もう、見てられなかったので、『僕がピアノ弾きます』とその人に言ったんです」

「うん。そういうことね」

「はい。それで、なんとかその人の意に沿うような伴奏ができまして、店は無事にハネたんです。僕は当然最後までいました。そして最後上機嫌でその叔父貴が帰ったあとに『今日は大変お世話になりました』ということで、若頭の方、南方平蔵さんとおっしゃるんですが、その方が別に席を設けたいということになったんです」

「なるほど～そういう展開か」

「はい」

　三人は誰ともなく相づちを挟みながら武志の入店までの顛末を聞いていた。なつみ先生は別に驚く風でもなく、このあたりは先刻承知のことのようだった。

つづく

大人のピアノ そのじゅうに ピアノを弾くヤクザ

「それでその南方平蔵さんというヤクザの大物に気に入られちゃったわけか」

　神田はしょうがない展開だなあと思いつつも、武志が興味本位でそういった世界に近づいて行ったわけでないことを確認して、また少し武志の人物を認めたようだった。そもそも欠点をあげつらうのが目的ではなくて、敬愛する生徒たちのマドンナの弟さんとして、できれば仲間づきあいしたいという気持ちであったわけなので、神田はさらに質問を続けた。

「どんな人？そのヤクザの若頭ってのは」

「それが…実はいい人だったとか月並みなことは言いたくないんですが…」武志は少し苦笑しながら言い淀んだ。

「まあ、よくある話だよね。下っ端のチンピラと違って上の方の人には案外人間的魅力に富んだ人がいるって、いやあくまでマンガとか映画の印象だけどさ」腕組みをしながら平林が言った。

「ええ、まあしかし反社会的勢力であることは間違いないんで、僕自身はそういうところでは気を許したりはしないつもりです」

「う～ん。そうするとさ、そこが分かんないんだよね、やっぱり。あなたはかなりしっかりした青年だし、さすがはなつみ先生の弟さんだけあって分別もある。そのあなたが…」

「音楽のセンスがすごいんです。南方さん」神田をまっすぐ見つめながら武志がはっきりした口調で言った。

「ん？その若頭もピアノでも弾くの？」まさかという顔をしながら篠崎が武志に問いかけた。

「はい。店がハネて清掃や経理の仕事終わって従業員もだれもいなくなったあと、よく店のピアノを二人で弾きました」

「えーそりゃ意外だなあ。映画や小説でもそんなシーンはめずらしいよね。若頭は『大人のピアノ』でもやってたのかな」平林が半分冗談でいうと、神田も「我々とお仲間か？」と面白がって笑った。

「若頭は四歳からピアノを習ってたそうです。」

「いー？そりゃまた英才教育だね、ヤクザなのに」思わず篠崎がチャチャを入れると武志が苦笑した。

「でも、みんな四歳の時からヤクザな訳じゃないですから」

　武志の静かな正論に一同は首をそろえて縦に振った。その通りだ。その通りだし武志の淡々とした飾らない話ぶりに篠崎は感心した。

「すごい才能だと思いました」

「あなたのような人から見ても、というか聴いてもですか」神田もまた腕組みをしながら武志の目を見た。

「はい」

「じゃあ、なんで…」ヤクザなんかやってるんだという言葉を三人が同じように心の中で呟いた。

「南方さんは左右の小指がないんです」

「あ！」

「両方とも二十歳の時にない状態になったそうです」

「うーむ」

「詳しい話は聞きませんでしたが、グレて家出してそんなことになったそうです。それでプロの道は断念せざるを得なかった。それ以来ずっと、普通の意味では普通のピアノは弾けませんが、叶わないとわかっていてもずっとうちに秘めた思いを大事にし続けられる人なんです。南方さんのピアノはそんな触れれば切れるほどの切ないピュアなピアノだったんです。最近では白内障を患ってて視力もほとんどないんですが音感は昔のままで、小指のない演奏はそれは凄まじいです」

「凄まじい…」

「南方さんに指が揃ってたら…、いえ小指がなくても僕はあんなすごい演奏はできません」

「……」

　三人は黙ってしまった。グレて家を飛び出した二人のピアノ弾き。おそらく南方と武志の双方が、お互いの中にあり得たかもしれない自分を観たのだろう。それはこうして話を聞いただけでも想像できる。深夜誰もいなくなったクラブのピアノの前で二人してお互いのピアノを弾く中で、その気持ちは極めて純度の高い状態で通じ合ったに違いない。
　それが、翌年音大を受験し直してラウンジピアニストにケリをつけるということを遅らせることになった原因なのだろう。
　無理解な父親と比して、南方の中に武志は理解ある庇護者の理想形を求めたのかもしれなかった。

「どんな曲弾くの？南方さん」神田が穏やかな表情で尋ねた。

「ベートーヴェンやリストなんかとてもすごい演奏をします。でも一番好きなのは…」

「『もしもピアノが弾けたなら』すごい演奏だったわ」なつみ先生が初めて口を開いた。

つづく

大人のピアノ そのじゅうさん 武志、大物ヤクザを殴り倒す

「え？なつみ先生南方平蔵に会った事あるんですか」三人がほとんど同時に言った。

「はい。とにかく武志が心配で、お世話になっているという職場だけでも見ておきたいと思って」

「なるほ…」三人はうなずいたようなため息のような声を出した。

　ヤクザとなつみ先生…。まるで手術台の上のミシンみたいな取り合わせだが、こうして話を聞いていくと、こういう接点が出てきてしまう。人の世は何が起きるか分からないものである。

「来てくれるなら、夜店が終わった時間に来てくれと僕が言ったんです」

　武志となつみ先生の目があってお互いその日を思い出したのか軽くうなづきあった。

「はじめはもちろん連れて帰るつもりでした。でも…」

「でも、そうはならなかった…」良識の砦、神田先生もだんだん諦めムードである。

「もうしばらく、ここで勉強したいって僕が南方さんの前で姉貴にお願いしたんです」

「勉強…って、南方さんのピアノかい？」篠崎は三人の中で最も武志に同情的というか、シンパシーを感じていた。

「ええ。ピアノもそうなんですが、僕はうすうすはそれまで感じていたんですけど、ピアノはただ指が回ればいいっていうだけじゃない、何かが必要だと南方さんのピアノを聴いていてハッキリとそう思ったんです。」

「いわゆる人生経験みたいなものね」平林も武志に共感し始めていた。

「はい。そう言ってしまえば簡単なんですが、将来音大に入って音楽の勉強をするにせよ、僕はここで多分これを逃したら一生手に入らない経験を積めると思ったんです。逆にいうとこれを逃すと、もうこういう経験は一生ないかもしれない…」

「まあね。話はわかるよ。でも、そういう人生経験って年齢を重ねるうちに自然と出てくるというものでもあるんじゃないかね。君はまだ若いから何かこう生き急ぐような気持ちにとらわれるのも分からないでもないが。ねえ、なつみ先生」神田がなつみ先生に同意を求めた。

「そうですね…」しばらく沈黙したあと、なつみ先生は意外なことを口にした。

「実は私もその頃コンサートピアニストのキャリアを積む中で、実は武志と同じ悩みに苦しんでいたんです。小さい頃から課題曲をこなして、プロになってからも演奏会の曲目をこなし、コンクールのためのテクニックを磨き、たまに賞賛され、たまに落ち込み…そんな繰り返しの続きにこの先何があるんだろう。じつはずっと何も無いんじゃないか。私はピアニストとしては合格点であっても、芸術家として何かが足りないのではないだろうかと思い悩むようになっていました。そしてだからと言ってどうしたらよいかも分からず、軽い鬱状態でもあったんです」

　初めて聞くなつみ先生の暗部かもしれなかった。コンサート活動ををセミリタイアしてピアノ教室をやっているのもどうやらこの辺りに理由がありそうである。

「まさかなつみ先生まで南方平蔵さんに弟子入りしようと考えた、とかいう話じゃないでしょうね」神田が

今度は心配そうな顔をした。

「いえ、さすがにそれはなかったですけど、何としても弟を連れて帰ろうという意気込みは段々後退して行き、やがて武志の意思を尊重しようという気持ちになりました」

　一同はまたしばし沈黙した。

「まあ、困ったもんですな、芸術家という人種は」言葉は皮肉っぽかったが、神田は笑っていた。

「さてと、大変な話を聞かせてもらっちゃったわけだけど、今後どうするの？明日あたり戻る？」篠崎が場を仕切り直した。

「いえ、喧嘩した相手がまずかったんで、すんなり帰るわけにはいきません」

「ああ、そうだった。どんな喧嘩だったかとかは聞いてなかったね。クラブの従業員同士で殴り合いでもしたの？」心配そうに平林が聞いた。

「いえ」短く答えたあと、武志がふぅっと大きくため息をついた。

「実は大変な人殴っちゃったんです」

「誰？」「かな」「それは…」三人は恐る恐る聞いてみた。

「それが、働くきっかけになった、組長と五分の盃を交わした叔父貴を殴り倒してしまいました」

「えええええええっ！やばいんじゃないのそれ！」

　篠崎が叫び、平林はコーヒーカップを落とし、神田は眼鏡を外したあとゆっくりとおしぼりで顔を拭いた。

「はい。指を詰めたくらいじゃ済まないと思います。片腕切り落とされるか、悪くすると東京湾に沈みます」

「……」

つづく

大人のピアノ そのじゅうよん 武志をかくまう

　東横線の最終電車に篠崎は武志と乗っていた。金曜の終電なので酔客で混んでいる。渋谷の始発ではなく自由が丘からの乗り換えなので立ってつり革を握っている。

　話の成り行きから、今日は武志を武蔵小杉の篠崎の家に一晩泊めることになった。武志の話では今頃自分の親のメンツをかけて千葉から怖い兄ちゃん達が各方面に飛んでるだろう、という事だった。幸い武志の実家はまだそれらしき人間は見かけなかったが、時間の問題だろう。それに家出して数年という手前もあり、いまさら急に、しかもこんなテンパった状態で実家を頼るのは現実的でなかった。

　独身の平林がアパートでも借りているのなら話は早いのだが、寮生活なので武志を連れて行く訳にはいかない。都内のビジネスホテルはおそらく真っ先に襲撃されることは目に見えている。幸せの良識の歯科医神田先生はいったんは、家族に聞いてみてもいいと言ったが、それならば自分が、と篠崎が手をあげたのだった。ベロンベロンに酔っ払った取引先や会社の上司を真夜中自宅に連れ込んでそれから朝まで飲み明かしたことなどザラだし、まあ、なんというか、こういう場合は神田家のようなちゃんとし家庭ではなく、自分のところのような機能不全家族の方がむしろなにかといいだろう、というのが篠崎の理屈だった。

　それに篠崎は、なんだかこのまま武志と別れるのが寂しいような気がしていたのだった。若いっていいな、言葉にすればそんな陳腐なセリフになってしまうが、篠崎は忘れていた無茶やってきた若い頃の遠い思い出を武志の中に投影していた。もちろん武志の様にピアノは弾けない。しかし、武志が南部平蔵との数奇な出会いの中から必死に何かを掴み取ろうともがいているのはよく分かったし、無責任を承知でいえば自分もそれを何かしら応援したい気持ちにもなっていた。

　もっと武志と話したかった。「そこまで甘えられない」と頑なに遠慮する武志に、反対に篠崎方がもっと君と話がしたいから、と頼み込むような感じになった。

　武志の年齢からおよそ二十数年、知らず識らずのうちにすり減り、長いものに巻かれ、むしろあらゆる長いものに迎合することに自虐的な快楽を感じることを覚えてやってきた自分。そんな自分の中にゆるく封印してきた「それは違うだろ、篠崎よ」という部分がむずむずと動き始めていた。武志と話すことで、それが何なのかを確かめたかった。今更武志のように生きたいというわけではない。そうではないけれど、いいかげん&まじめの割合のバランスが崩れ、円グラフのいい加減の割合が一ミリずつ増えてきて今日のどうしようもない自分がここにいること、この自分を思い切り壊してみたいような気がしていたのだった。

　話をしたいことが幾つも頭に浮かんで、そのたびに篠崎は横に並んで立っている武志の方を向いて口を開きかけてはやめた。どこで誰が聞いているかわからない。落ち着いた雰囲気を保っている武志の胆力には舌を巻くが、かなりやばい状況の逃亡生活である。もし武蔵小杉の自宅にいる時に武志が捕まるようなことがあれば当然かくまった自分にも何かしらの制裁があると覚悟しておいた方が良いだろうし、最悪妻と娘にも害が及ぶかもしれない。とりあえず身の安全を確保できる自宅に帰ってしっかり鍵をかけるまでは、うかつなことを車内でしゃべったりするのは慎むべきであった。

　武蔵小杉でいつものように下車した。とりあえずここまでは何もなかった。まさか姉のピアノ教室の生徒の自宅というラインはそう簡単には割れないだろうとは思いつつも、徒歩で十分ほど歩く間も二人は無言だった。しかし無言で雨上がりのアスファルトをじゃりっと踏みながら二人して歩く中、武志の方でもここまでしてくれる篠崎に対する情愛のようなものが湧き始めていた。

　二人は目が合うと時々ニヤッと悪ガキのように笑った。

「ただいまあ」

　ようやく自宅に戻ってきた。妻の冴子は出てきたりはしない。電報堂を辞めてからは最近はお客の気配があっても挨拶にも出てこない。初秋の玄関の冷気は廊下を伝ってこの家の隅々にまで行き渡っていた。家庭の温もりどころか、篠崎は外から家に入ったとたん気温がさらに二度ほど下がったような気がした。

「お客さん？」

　娘が篠崎とは目を合わさずに、廊下の先から玄関を覗き込んだ。父親のことは無視だが、娘の朝子は客に対して最低限の挨拶はする。これは口に出して礼をいうタイミングと方法が見つからないので何も言ってないのだが、篠崎は娘に心底感謝している。

「こんばんわ」

　赤の大柄のチェックの寝巻きにガウンをはおり、シャワーを使ってまだ生乾きの髪を後ろでギュッと束ねた朝子が、廊下を羅足のまま渡ってきて武志に挨拶をした。「いったいどんなお客だろう」高級クラブのマネージャーのいでたちに芸能人のようなルックスの武志を見て朝子は少し興味を持ったようだった。そういえば朝子と同じくらいの年齢だ。朝子の方が二歳くらい上だろうか。

「夜分にすみません」

「いえ、どういたしまして」

　それだけいうと朝子は奥に引っ込んだ。久しぶりに娘の声を聞いた気がする。

「まあ、入ってよ。あすは土曜だしさ、といっても君にはしばらく土日もないだろうけど、とりあえず飲み直そうぜ」

　篠崎は、何だか妙にうきうきした気分で十二畳ほどあるリビングに武志を招き入れた。

「はい」

　武志は廊下を曲がって奥に消えた朝子の方を見ながら、篠崎の後について行った。

つづく

大人のピアノ そのじゅうご 武志と朝子

「おお、ピアノだ」

　リビングの奥はソファが置いてある。篠崎が水割りの用意をしている間、武志はさっそくピアノを発見して、近寄った。
　朝子が小学校に入学した時に買ったものだった。朝子はピアノが好きだったと篠崎は思っている。バイエルやハノンの基礎練習を嫌がらない、と近所の三十代のピアノ教師が褒めていたそうだ。実際うまかったらしい。いまのなつみ先生よりもう少し上の女性教師は、もっと熱心に習いたいのなら自分の師匠筋からしかるべき先生を紹介したい、とまで言っていたそうだ。

　もっとも篠崎は朝子がピアノをやっていることに特別な関心はなく、年間数回あった発表会というのも一度も行ったことがない。仕事で忙しかったといえば嘘ではないが、当時は子育て全般に関心がなかったと言った方が良いかもしれない。

　そういえば、何となく自分の意思で選んだつもりになっていた今度の発表会の『トルコ行進曲』だが、これは幼い朝子がお気に入りだった曲で、よくあのピアノで練習していたものだった。
　父親に聴かせるつもりで篠崎がリビングで水割りなど飲んでいると、よくピアノを練習しにきたものだった。うかつだったのは、自分がいる時によく自分の前で朝子がピアノを弾いていたのは、自分に褒めてもらいたかからだったのではないか、と最近気がついたことである。

　自分がトルコ行進曲を練習して、少しでも先へ進むことができると妻や朝子の賞賛の顔が見たくてピアノを弾くのをやめて振り返った。
　褒めて欲しいと心から思った。たぶん、いや、間違いなく朝子もそう思っていたはずである。しかし、篠崎は聴いてやった、褒めてやった覚えはただの一度もなかった。褒めれば良かったな、と心の底から思うとともに、そうしなかったことへの後悔が自分がピアノを弾くたびに湧き上がる。自分が褒めて欲しいと思うたびに、自分のどうしようもない身勝手さを感じた。

　もう遅かったけど…。

　弾けた時にピアノを中断し、今でも時々後ろを振り返る。たいていは、さっきまでいたはずの朝子の姿が見えなくなっていた。おそらく、幼い頃のことを思い出して、朝子はもう一度傷ついていたのではないだろうか。昔幼い朝子を大人の残酷な無関心で傷つけ、反対に今は大人の朝子を子供染みた自分の身勝手な思いで傷つける、多分それが自分という人間なんだ。

　篠崎は少し泣けてきた。

「お嬢さんがピアノ弾かれてたんですね」武志がまだ譜面台の横に捨てずにとってあった朝子の使ったうすく黄ばんだ楽譜や、コンサートの時の写真を見て言った。

「ああ、今にして思えばもう少し子供がピアノやっていることに関心をそそげば良かったな、と思うよ」今頭の中に反芻していたことを篠崎は武志に話してみた。

「いえ、きっとお嬢さん、朝子さんはどっかで篠崎さんの気持ちを感じてるはずですよ」

「いや、それは残念ながらまったくないよ。オレ、今じゃ悪かったとホントに思ってるけど何にもしてやらなかったもん。発表会でビデオ回すこともしなかったし、練習を褒めてやったこともない。結局中学の時やめたんだけどさ、今思うとそこそこ頑張ってたのに、まわりの無理解に白けていったというところじゃないのかな」

　懺悔のニュアンスの漂う篠崎の言葉に武志は、少し気の毒そうな顔をしながら笑った。

「篠崎さん、感性の方程式ってご存知ですか」

「いや知らない。なにそれ」

　武志と自分の分の水割りダブルを作って、片手を上げて乾杯の仕草をすると、篠崎はソファに深々と体を預けた。

「『知識=覚えた量ー忘れた量』ですね」武志がピアノから離れてソファの方に歩いてくる。

「うん。そうだね。最近その忘れた量がどんどん覚えた量を食いつぶしてるのがオレの悩みだ」

「感性はちょっとだけ違ってて、『感性=覚えた量+忘れた量』だそうです」ソファに座りながら武志は笑った。

「ほう。忘れちゃってるけど、それがプラスされて全部で感性になってるってわけか」

「ええ、小さい頃の忘れた思い出も含めて今の自分のものの感じ方を作ってるっていうわけです」頂きます、と言って武志が水割りに口をつける。

「ふーん。面白い考え方だね。でもそうするとあれだなあ、ますますなんか娘に悪かったような気がするよ」

「朝子さんに…。どうしてですか？」

「どうしてってこんな父親が目に見えない感性部分まで影響与えてしまったのかと思うと罪悪感もひとしおだね」冗談めかしながらも篠崎は自嘲気味に言った。

「そんなことないと思います。いいお嬢さんじゃないですか」

　おそらく年下のはずの武志のこのものの言い方は少し変かな、と篠崎が思った瞬間篠崎は気がついた。武志はさっき廊下で挨拶しただけの朝子に少し関心を持ったのかもしれなかった。

つづく

大人のピアノ そのじゅうろく 組織からの連絡

「あ、すみません。ちょっと待ってください」

　水割りのグラスをコースターに置いて、武志はケータイのバイブを止めて画面に見入った。メールなのでそんなに長く文章を読んでいるわけではないはずだが、武志は十分以上もそのままじっとケータイを握りしめていた。

「ふう…」

　やっと顔をあげると今度はリビングの天井を見上げてまたしばらくそうしていた。

「どうしたんだい」篠崎が心配そうに尋ねた。

「あ、すいません。店の仲良かった先輩からメールでした。状況を知らせてくれたんです」

「そうか…」

　武志の話を要約すると、こういうことだった。

　武志に殴り飛ばされ失神から気がついた叔父貴は当然のことながら怒り狂った。いつも店にくる時にはボディガードなどは連れずに一人できていたので、直ちに武志が取り押さえられることはなかったのだが、知らせを聞いてさっそく店には二十人ほどの幹部が招集された。

　このままでは武志が見つけられて半殺しか、もしかすると本当になぶり殺されることは時間の問題であった。絶体絶命のピンチに、南部平蔵が動いてくれたらしい。

「南部さんは、『うちの店で起きたうちの身内の事件』だということで、怒り狂ってる叔父貴の組の若い衆をなだめて、蜷川会のけじめとして僕を捕まえてしかるべき責任を取らせる、ということでとりあえず話を納めてくれたらしいです」沈痛な面持ちで武志が言った。

「すると、いますぐ急に見つけ出されて殺されるとかいうことではなくなった、ということなのかい」早くホッとしたくて篠崎が早口で武志に確認した。

「はい。ただ仕切るところが叔父貴の組じゃなくて船橋の蜷川会に変わっただけですので、身柄を確保されたあとどういうことになるのか…実はあんまりかわらない結末のような気もします」武志はあきらめたように淡々と言った。

　二人はしばらく無言で水割りを傾けた。時折篠崎が自分と武志のグラスに氷とウイスキーを足した。武志はその度にきちっと頭を下げて「すみません、ありがとうございます」と言った。

「そういや、状況は聞いたけど、動機の部分って聞いてなかったよね。なんでまたそんな、殺されるかもしれないことやっちまったんだい？」

「最初ラウンジピアニストがやらされたことと同じことを叔父貴が南部さんにやらせたんですよ。ピアノでカラオケマシンのようなことを面白がって南部さんにさせて、『小指の音が抜けた歯みたいに欠けてて気持ち悪くて歌えねえ』だの難癖つけたんです。それがやむことなくずっと続いたんで、しまいにテーブルの上で空になっていたビールの大瓶で思いっきり顔面を殴りつけたというわけです」

　武志ははじめてみせる、目の座った暴力性を感じさせる凄みのある表情をした。ピアノが上手くてたまたまそうした状況に出くわしたというだけならば、あるいは南部氏も武志をここまでかわいがらなかったのか

もしれない。武志には、自分が譲れないところに関しては、それがどんな結果をもたらそうが一歩も引かないといった強烈な部分がありそうだった。それは例えば強情というような、自分のエゴから出てくるものではなく、例えばこの場合のように後先考えずにということはあるにせよ、今回のように自分の大切なもののために殉ずるという行為にもなるように篠崎には思えた。

「そっか、そういうことなら少なくとも船橋蜷川会は武志君の味方かな」

「心情的にはそうだと思います。今メールくれた先輩も『お前がやらなかったら俺がやってたところだ』と書いてます。多分みんなそういう感じでしょう」武志はそれでも浮かない顔だった。

「それでも状況は変わらないかな」

「ええ、船橋蜷川会が僕の身柄確保を仕切ることになって、南部さんの立場はかなり苦しいものになったと思います。叔父貴の組が探し出せなかったという場合には、それは向こうの失態となるだけなんですが、この流れだと、僕が仮に逃亡に成功したとすると、南部さんの立場がなくなります」

「あ！そうなるか」篠崎は小さく叫んだ。当事者とはいえ、二十歳すぎの若者がよくこんなに冷静に自分の置かれている状況を把握できるものだと篠崎は舌を巻いた。

「僕、とりあえずこの水割りいただいたら船橋に戻ります」

「今からか」

「ええ。メールには指示めいたことは何も書いてませんでしたが、こうなった以上一刻も早く僕が自分でけじめをつけるべきでしょう」

「そのまま殺されるかもしれないのにかい」

「はい」武志はきっぱりなんの迷いもなく即答する。

「はいって、君は世話にはなってるかもしれないが、蜷川会の構成員でもないわけだし、このまま逃げてしまえばいいじゃないか。オレだって逃亡についてもできる限りの手助けはするつもりだったんだよ」篠崎が目を赤くして必死に説得した。

「今日初めて会ったばかりの僕にありがたい話です。僕も短い間でしたが何だか篠崎さんのことがとても好きになりました。もっとここでおしゃべりもしていたいです。でも篠崎さんのご好意に甘えるわけにはいきません」

「どうしてもか」

「南部さんにはご迷惑をかけられません」武志は迷いなく答えた。立派なものだと篠崎は感動すらした。

「しかし、せめてもう一回なつみさんに会ってから行ったらどうだい。考えたくないけどそれが別れになるかもしれないんだし」武志を行かせまいと篠崎は必死だった。

「いえ、そうしたい気もありますが…」

「お父さんとだってまだ仲直りしてないし。このまま君が二度と帰らない人になってしまったら、お父さん、君と行き違いがあったことに一生涯苦しむことになるよ。同じ親としてそれは忍びないことだ。君のお父さんの味方をするわけじゃないが、そのあたり少しでも話をする時間はないのかい」

　武志はゆっくり首を振った。

「篠崎さん、僕のためにこんなに真剣になってくれてありがとうございます。でもいかなくちゃいけませ

ん」

　武志はソファを立った。

　その時篠崎の脳裏に、さっきリビングに入ってくる時に娘の朝子が廊下の先に消えて行くのを目で追っていた武志の姿が思い浮かんだ。

「おーい、朝子。こんな深夜に悪りい。お父さんの一生のお願いだ。今晩は下でお父さんの晩酌に付き合ってくれ」

　今にもリビングでを出て行こうとする武志を目で制しながら、篠崎は深夜零時をまわった家中に響き渡る大声で二階の娘を呼んだ。

「いるわよ、ここに」

　振り返るとドアのところにもたれた愛くるしい顔をした朝子が立っていた。

「へ？何でお前また、用意がいいな」篠崎はポカンとした顔で言った。

「ごめんなさい、全部立ち聞きしちゃったの」

　朝子は小さく舌を出してチョコンと頭を下げた。

つづく

大人のピアノ そのじゅうなな ホステス役の朝子

「おいおい、立ち聞きかよ。お父さんはお前をそんなはしたない娘に育てたつもりはないぞ〜」

　おどけた様子で篠崎は朝子に言った。朝子は篠崎には軽く一瞥をくれただけで、リビングに入ってきて武志の座っていたソファの隣に座った。

「あらためましてこんばんわ。篠崎朝子です」

　朝子は座ったまま、今にもドアに向かって去って行きそうな武志に挨拶をした。武志は立ったまま挨拶を返すのも戸惑いがあったらしく、いったん朝子の横に座り直し、「斎藤武志です」と挨拶した。これは朝子の作戦勝ちだったかもしれない。取り敢えず武志はもう一度さっきのようにソファに座ることになった。

　朝子は髪を乾かして、普段着のトレーナーと短パンという格好になっていた。廊下でずっと立ち聞きしていて寒かったのか、いつの間にかパジャマを着替えていた。客の話を立ち聞きなどということはこれまで一度もなかった。たぶん、武志と同じように玄関で会った時に何か惹かれるものを感じて、トイレにでもおりてきた折にリビング越しに中の様子を見ようとしたのかもしれない。
　その時に「捕まる」だの「殴り倒す」だの「殺される」だのという話し声が聞こえてきたので、驚いて話の内容を確かめようとしたのだろう。その意味ではそんな物騒な言葉をリビングで話していた篠崎たちにも非はあったといえるのかもしれない。

「ピアノ、弾くんですね。それもかなり上手に」

　朝子はしかし、そういった物騒な話を問いただすことはしなかった。黙っている武志にさらに話しかけた。

「私も昔は弾いたんですよ。将来の夢はピアニストになることだったの」

「え！お前そうだったのか。お父さん全然知らなかったぞ」

　朝子はあきれ顔をして「そうでしょうね」と鼻で笑った。そういえば、朝子と会話が成立したのは高校の卒業式以来のことだった。もっともこんなのも父娘の会話と言ってよければであるが…。

「聴いてみたいわ」

　朝子が少し上目遣いに武志の顔を見た。もしかしたらもうコンタクトレンズを外しているのかもしれなかったが、焦点の少し曖昧になったような涙目のような瞳で甘い声を出す朝子は、我が娘ながらなかなか魅力的に映った。あれで膝に手でも置いたら篠崎が大好きな夜の倶楽部活動のお姉さんたちのようだな、とあらぬことを想像して篠崎はブルブルと頭を振った。

　これまでのクールでクレバーな武志の印象からは、こうした朝子の態度も笑って軽くいなされると思い込んでいた篠崎は、意外にも武志が緊張気味に「どんな曲が好きなんですか」と答えたのに驚いた。

　いつの間にか大人っぽさを増した我が娘は、取り敢えず、とにかくも武志を引き止めるという役割を見事に果たしたのだった。

つづく

大人のピアノ そのじゅうはち 朝子の思いと武志

　初めはテキトーに話に加わったものの、篠崎はすぐに二人の話に置いてけぼり状態になっていた。

　二人とも実に生き生きといろんな曲や作曲家の話に興じていた。武志がそうした話を出来るのは当然として、驚きだったのは朝子が武志と対等…にというと何か変な言い方だが、楽しんで会話をしてることだった。そしてどうやら話の流れだけ追っていると、武志が一方的に朝子に話を聞かせているのではなくて、朝子の方から話をすることに対して武志が深く頷いたり、朝子の言葉を確認したりすることも多いようだった。

「あれなんだな、お前ずいぶん音楽に詳しいんだね」

　篠崎は思ったままを口にしたのだが、たちまち朝子のしらっとした視線にたじろいだ。

「いや、朝子さんの視点は面白いです。今まで気がつかなかったことをいろいろ考えさせられます」朝子の代わりに武志が真面目な顔をして篠崎に応えた。

「さっき言ったこと本当だったんだから」朝子は少し怒ったような顔を篠崎に向けた。

「…というなんだったっけ？」

「ああ、もうやんなっちゃうな。ピアニストになりたかったっていうことよ」

「あー。そっか。ごめんな気がついてやれなくて」

　篠崎は何と言って良いやら分からず、とりあえず謝ってみた。かと言ってその当時何をどんんな風にしてやればよかったのかは皆目見当がつかなかったのでそんな月並みなことしか言えない自分がもどかしかった。

「ま、いいけどさ。中学の時やめちゃった後もずっとピアノが好きで、お父さんのいない時にはずいぶん練習してたんだ」

「何でまた俺のいない時になの？」久しぶりの会話だ。篠崎は話が途切れないように懸命に相槌をうった。

「だって、真剣に弾いてるときオナラしたり、急にリモコンでテレビのスイッチ入れたりするんだもん」朝子は少し悲しそうな顔をした。

「あああ、ごめん。悪かった、気がつかなかったよ」

「小さい頃はね…じつはあたしお父さんのこと結構好きだったから、お父さんに聴かせたいという思いでこのリビングで練習してたんだよ」

「…そっか。それも気がつかなかったんだな、お父さん…。ひどいお父さんだよな…」篠崎はショックだった。

　しばらく沈黙が支配したあと、朝子が明るい声で言った。

「ねえ、せっかくの機会だから明日ピアノが弾ける時間になったらミニコンサートしようよ。お父さんも来週発表会とか言ってたから予行演習したらいいじゃん」

魅力的な提案だったが、いかんせん状況はそれを許しそうもなかった。ここまでよく武志を引き止めた朝子だったが、かえってこの積極的な提案が、武志に今の状況を思い起こさせた。

「あ、ごめん。せっかくなんだけどやっぱりそれは無理そうです。いま朝の四時五十分。ずいぶん話し込んじゃったけど、あと三十分したら始発が動き始めるから僕はお暇しなければならないです」リビングの柱時計を確認して武志が沈痛な面持ちで言った。

再び沈黙が訪れた。今度の沈黙は深く長かった。このまま三十分が過ぎれば、今度こそ武志は朝子の引き止めなど意に介さずこの部屋を出ていくだろう。

今度も沈黙を破ったのは朝子だった。しかし今度は明るい声でではなく、泣き声だった。

「ごめんなさい。どんな状況に置かれてるか考えてもみないようなこと言って。でもあたしにはどうしたらいいか分からなかった。無理にはしゃいでみたりしてあなたの気をそらそうと頑張ってみたけど、頭の中にはヤクザに捕まっちゃって小指落とされて腕も切られちゃって、結局どこかに連れていかれちゃうみたいな怖いシーンが浮かんできて、それでとうとうパニックになっちゃって、ミニコンサートだなんてノーテンキなこと言っちゃった。ばかみたいです。ごめんなさい」

そこまでいうと朝子はソファの背もたれに顔をうずめて泣き崩れた。嗚咽がしんとしたリビングに寒々と響いた。

「朝子さん、ごめんなさい。僕も勝手に押しかけて来て、結局自分の都合ばかり言ってます。優しいお父さんの気持ちもご提案もきちんと受け止めずに、ただ『帰る』の一点張りだったかもしれません」

武志はそういって朝子の丸くなった背中を最初はためらいがちにそっと撫でた。

しばらくすると嗚咽も止んできて、朝子はこちらを向いた。目が真っ赤だった。最初一瞬まさかこれも引き止め工作か？と思った篠崎はまたもや自己嫌悪に襲われていた。朝子はもしかすると、武志に一目惚れのような状態なのかもしれないなと篠崎は思った。

「待ってくださいね。お二人のおかげでだいぶ僕も冷静になれました。南方さんに一本直接メールを打ちます」

そう言って武志は真剣な面持ちで親指を動かした。時々手を止め、時々考え込み、時々窓際まで行ってまだ暗い庭をじっと見つめたりした。悠に三十分はかかっただろう。武志が予定していた始発電車が動きだし始めた頃、大きな深呼吸と共に武志が「送りました」と言った。

篠崎も朝子もいったいどんなメールを書いたのか心配そうな顔をして、武志を顔を覗き込んだ。でも内容は聞かなかった。

武志は何か一点に賭けたようだった。その賭けが成功したかどうかはおそらくこの後の南方からの返信でハッキリするのだろう。

三人はテーブルの上の空になったウイスキーの瓶の横に置かれた武志のケータイのバイブレーションが振動するのを祈るような気持ちでじっと待った。

つづく

大人のピアノ そのじゅうきゅう 余命一週間！？

　ケータイが振動した。

　篠崎と朝子がびくっとした顔で武志を見る。

　ためらいがちに武志がケータイがのバイブレーションを止めた。

　またしばしの沈黙だ。篠崎と朝子はただ武志がメールを読み終わるまで待つ他なかった。

「OKです」武志がふぅっと息を吐き出した。

「OKって、どうなったの、もしかして許してもらえることになったの？」朝子が切なそうな顔をしてケータイと武志を見る。

　武志は朝子には笑って小さく首を振り何も答えずに、篠崎に向かって軽く頭を下げた。

「ご心配をおかけしました。今すぐには出頭しなくても大丈夫になりました」右手に握りしめたケータイをまたテーブルの上に戻しながら武志が頷いた。

「どんな話にしたんだい？」なおも心配そうに篠崎が尋ねる。

「探していただかなくても、自分から必ずそちらに行きます。南方さんの顔を潰すようなこと、つまり逃亡したり絶対にしない。ついては最低限のところにケジメを付けたいので少しだけ時間をください、と伝えました。」武志は落ち着いた、すこし晴れやかな顔で言った。

「そっか、それは良かった。…でどれくらい時間が残されてるの？」篠崎は娘の顔をちらっと見ながら聞いた。朝子も今はそれが一番気になるところのはずだ。

「こちらからはいつ迄、とは言わなかったんですが、南方さんから一週間という期限が切られました」

「一週間…か」

「はい。叔父貴の手前多分それでもかなり無理してくれたと思います」

「うーん、そうかもな。ただ逃亡生活というある意味捕まらなりさえしなければ無限の時間があった状態から、こう言っては何だけど最悪余命あと一週間という状態になってしまったわけだ」

　悲痛な顔をして篠崎がいうと、朝子が啜り泣きを始めた。

「でも、その代わりに一週間は自由の身です。南方さんがそう言ったからには叔父貴の所の若い連中も不満があっても我慢してくれます」

　ここまで説明をして、今度は武志は朝子話しかけた。

「朝子さん、ミニコンサートできるよ。お父さんにもここで君の前で弾いてもらおう。君も小さい頃の夢、お父さんの前でオナラもせずテレビのリモコンもなしでしっかり聴いてもらおうよ」

　武志がそう言って朝子の肩に手をかけると、朝子はたまらずに武志の胸に顔をうずめてオイオイと声をあ

げて泣き出した。

「ごめんなさい。あたしの我儘で今度はこんなことになっちゃった。もしかしたら逃げ切ることもできたかもしれないのに、あと一週間になっちゃった」途切れ途切れに朝子がやっと声を絞り出した。

「いや、そんなこと気にしないで。冷静に考えたら彼等から逃れるなんて誰もできないんだよ。彼らはある意味警察よりもすごい捜査能力を持ってる。だから逃亡してたとしたら、一週間もしないうちに捕まって有無を言わさずそのままこの世におさらばだったと思う。だからそれに気づかせてくれた朝子さんにはむしろ感謝してるよ」

　武志がそう言っても朝子は泣き続けていた。

「あのさ、もし朝子さんさえよかったらなんだけど、ミニコンサートは一週間後にしよう」

　泣きじゃくる朝子に武志が遠慮がちに声をかけた。

「それで…？」

「あと一週間のうちにもし良かったらその…君と一緒にピアノを弾きたい。」

「うん…」

「それと…」

「…それと？」

「うんいや、それは…」

　武志は少し照れたように笑った。

「あのさ…」篠崎が申し訳なさそうに口を挟んだ。

「あ、お父さん、すみません」

　武志が篠崎を呼ぶ呼び方が、篠崎さんからお父さんに変わっていたのに誰も気がつかなかった。篠崎にも朝子にも武志にもそれが自然だったからだ。

「うん、いいんだ。基本大賛成だ。武志君がいうように一週間あればいろんなけじめがつけられる。だから朝子のことは嬉しいけれど、それだけに一週間を使うということではなく過ごして欲しいんだ。もちろんそれまではここにいてもらって構わない。ただ一つだけ条件がある」

「はい。なんでもおっしゃる通りにします」

「仲違いをしたお父さんと仲直りをしろ、って命令はできないけど、きちんと顔見て話ししてくれ。なつみ先生も一緒に。これが一週間かくまう条件だ」篠崎が真面目な、そしてめずらしく厳しい表情で言った。

「…分かりました。でもどうやって…」武志が苦渋に満ちた顔をした。

「いい考えがあるわ」朝子がやっと笑顔を取り戻して言った。

「聞かせてくれ」武志が朝子を見つめる。

「一週間後にこの家のミニコンサートであたしと武志さんがピアノ弾くんじゃなくて、お父さんの出る『大人のピアノ発表会』で弾くの。そこに武志さんのお父さんとお母さんもご招待したらいいわ。あたしも武志さんも二十歳すぎて、大人のピアノってことでもいつわりはないわ」

「あ、それは大ホームランのアイディアだよ、朝子」

　篠崎が朝子の手をとって握手をした。手を触れたのは小学校の卒業式以来だったかな、と、どうでもいことが篠崎の頭に浮かんだ。

「なるほど、それは…。うん…なるほど…」武志もゆっくり確かめるようにうなずいた。

「よし、じゃあとりあえずオレが昨日からの事情をかいつまんでなつみ先生に報告するよ。心配してるだろうから。その後姉弟で直接お父さん関係の作戦を話してくれ」篠崎の声も生き生きしてきた。

「分かりました。何から何までありがとうございます」武志が深々と頭を下げると、横の朝子も頭を下げたのには篠崎も苦笑した。

「じゃあ、オレちょっと電話してくるから」

　廊下の電話に向かって篠崎がリビングを出ていくと、武志と朝子は静かにお互いの顔を見つめあった。

つづく

大人のピアノ そのにじゅう 子と親、親と子

　明け方にもかかわらず、なつみ先生はすぐに電話に出た。「もしもし」と篠崎が言った瞬間に「武志の様子はどうですか」という言葉が帰ってきた。普段のなつみ先生にはこの不躾な態度は想像もできないが、篠崎はかえってそれが自然でなつみ先生らしいと思った。

「ご連絡遅くなり申し訳ありません。結論から言いますと現在武志君は無事で、少なくとも一週間は彼らにも拉致される危険性はないと言って良さそうです」

　篠崎の言葉になつみ先生は「ありがとうございます」と泣かんばかりの声で反応した。

「いえ、もちろん私がどうこう手を回したということではありません。武志君の冷静な判断で、南方さんと交渉をして自分から出頭するという条件で一週間の自由をもらったというわけなのです」

　篠崎は話の流れをかいつまんでなつみ先生に聞かせた。聞き終わったあとのなつみ先生はしばらく黙っていたがやがて「それが最悪の中では一番良かったように思います」と静かに言った。

「はい」

　一週間後出頭した後のことを考えると、まさに最悪よりは一つだけ良い、ということには変わりなかった。

「つきましては、大変おせっかいとは思ったんですが、武志君を一週間このまま家に置く条件として、武志君がお父さんとキチンと顔を見て話をするということを納得してもらいました」

「ああ、そこまで考えていただいたんですか。ありがとうございます」電話越しになつみ先生が啜り泣く声がした。

「今武志君と替わりますので、その段取りについて簡単に打ち合わせしてもらえますか」

　篠崎は「はい」というなつみ先生の言葉を待ってから武志を呼んだ。武志は頭を下げながらリビングのドアを抜け、朝子と一緒に電話口まで歩いてきた。

　篠崎は心配そうな顔で泣き出しそうな朝子の肩をそっと抱きながら話の様子を聞いていた。

　１５分ほども話をしていただろうか。

「分かった。篠崎さんに代わる？」話の大体のところは終わったようだった。

「いや、君から聞くからいい」篠崎が小声で武志に伝えると武志は小さく「はい」と唇を動かし、「じゃあまた連絡する」と言って電話を切った。

「父親には、まず状況を姉の方から話すということになりました。いきなりいろんなことを直に話しするよりも、まずはこの状況を冷静に受け止めてもらった後でないと、話し合いにすらならないかもしれない、そんな風に僕ら思ったものですから」

　武志の言葉に二人はうなずいた。

「武志君。もし一週間後の『大人のピアノ発表会』をシャバとの最後の思い出にしたい、ということであれば、そのこともみんなのコンセンサスが必要だ」

「はい。勝手な思いつきだと重々承知してます」武志は恐縮そうに頭を深々と下げた。

「いや、アイディア自体はいいと思うんだけど、参加者の方の同意が大前提になるのは当然だ。だからどうだろう、今日明日はお休みだし、都合がつけば昨日の神田さんと平林さんにここに来てもらうというのは」

「ご迷惑じゃないでしょうか」

「まあ、そうかもしれない」篠崎は笑った。

「しかし今日来てくれないということだったら、当然発表会に君が一曲弾くというのはもっとご迷惑かもしれないよ。」篠崎がそういうと朝子がまた泣きそうな顔になる。

「だからさ、きみもクールな武志君というのをいったん捨てて、お父さんとのこと、本当は怖くてたまらないはずの内心のこと、なつみ先生のことや朝子とのことやいろんなことを、神田さんと平林さんにぶつけてごらんよ。君がその上でわがままを聞いて欲しいというんだったら二人も考えてくれると思う。いいかい？」

　武志は少し顔を赤くしてうなずいた。

「はい。もしかしたら篠崎さんはお見通しかもしれないなと、いまはっきり思いましたが、僕は今怖くてしょうがありません。朝子さんとしゃべっているうちに、今度こそはっきりと逃げ出したいとさえ思いました。朝子さんとのことがあって欲が出たのかもしれません。あるいはそれは本当の僕なのかもしれないけど…。」少し声を震わせて武志が言った。

　篠崎は昨日からずっと感じていた武志の気丈さ、いや気丈さというよりもどこか自分の重大事を他人事のようにクールに処理しようとする武志のことが気になっていた。クールなのは大いに結構なことだ。しかしそれが何かを犠牲にし、何か武志の判断の軸を微妙にずれたものにしてないだろうか、そんな気がしていた。
　しかし今のこの武志ならお父さんともキチンと向き合えるかもしれない。お父さんとここで取っ組み合いになってもいい、と篠崎は思った。

「いや、いいんだよそれで」篠崎は武志の肩をポンと叩いて優しく笑った。

「それにね、君がどうやら本当に朝子のことが好きになったんだと分かってうれしいんだ」

　篠崎はいかにも年頃の若い娘を持った父親といった顔で朝子を見て満足そうにうなずいた。

つづく

大人のピアノ そのにじゅういち 逃亡生活不安なスタート

　午前六時三十分。

　とりあえずの一段落がついて、篠崎は神田、平林に連絡できる時間まで横になろうと二階のベッドに行った。ツインのベッドの横には妻の冴子がむこうを向いて寝ている。下に来客があり泊まったことについてまったく気がつかなかったのだろうか、結局一度も下に降りてこなかった。

　武志を一週間預かることは事後承諾になってしまうが、まあ、多少文句を言われるくらいでなんとかなるだろう。今回は朝子とつるんで進めているので冴子も不承不承でも納得せざるをえないはずだ。それ以上のことは篠崎は美幸に何も期待していなかった。

　朝子と武志はまだ少し話をしたいとのことだった。まさか二階に朝子の父と母が寝てるこの家で変な間違いもないだとろうと篠崎は二階に上がることにしたが、さて今日の夜から武志の寝るところをどうしようかな、などと考えているうちに寝入ってしまった。

　ピアノの音で目が覚めたのは十時前だった。下のリビングに降りるとさっそく二人が並んでピアノを弾いている。朝子は弾けるように笑いながら熱心に弾いていた。武志はその左隣に立って朝子の指や譜面台の譜面を見ていた。

「おはよう」

「おはようございます」リビングのドア口から声をかけた篠崎に武志が反応する。

「あ、お父さんおはよう」娘と何年振りかで朝の挨拶が成立した篠崎は、ひそかに小さく感動してしまった。

「あれ、母さんもう出掛けたのか」テーブルの上に食べ終わったあとの三人分の朝食のプレートがあったので篠崎は朝子に言った。

「うん。毎週土曜の陶芸教室ね。朝は武志さんと一緒に三人で食べたよ。かいつまんで事情は話しておいた。もちろんヤクザがどうのは言ってないけど。お父さんと大げんかして家を飛び出しちゃったってことで」朝子が明るい表情で言った。

「おお、そっか。そりゃお父さんから説明する手間が省けてよかったけど、よく納得したな…」

「そうね。何で男友達のところじゃなくてうちなんだって顔してたけど、お父さんのピアノの先生の弟ということで、お父さんのことも前からよく知ってるからってことにした」いたずらっぽい顔であさこが言った。

「なるほど。それでおっけーか」

「多分ね」舌を出す朝子を見ながら武志がが恐縮した顔で頭を下げた。

　午後からは神田と平林がやって来た。一週間という余裕ができたことと、一週間しか残された日がないということについて、二人は沈痛な表情で聞いていた。武志は篠崎のアドバイス通り、自分の煩悶や朝子と知り合っていろんな未練が感じられるようになったこと、そんな本音を二人に話した。その上で、自分のピア

ノを人に聴いてもらう最後の機会として、一週間後の「第七回斎藤なつみ　大人のピアノ発表会」に弾かせて欲しいというお願いをした。
　二人はあっさり承知して、なつみ先生にも確認したあと平林は他のメンバーに連絡、神田はパンフレット最終原稿の調整にかかることとなった。

「いろいろ考えて眠れない一週間になると思うけど、頑張って」二人はそう言って帰っていった。一週間しか残された時間がないという武志は二人にとって余命を宣告された入院患者のお見舞いのような感じだったのかもしれなかった。

　三時を回った頃なつみ先生から連絡があって、取り敢えず父親には話はしたので、自分が一人で篠崎宅に行って話をしたいとのこと。もちろん篠崎は了承し、三人はなつみ先生を待つことにした。

　たんたんと物事が表面的には穏やかに、事務的にと言ってもいいくらい順調に進んで行くことに対して、朝子は残された時間が刻一刻と減っていくことを逆に鮮明に感じた。

　朝子は三人でリビングで話をしたり、武志とピアノを弾いたりする中、時々どうしようもない不安感と恐怖心、一週間後に確実に失ってしまう武志の喪失感にさいなまれた。その度ごとにそっと廊下に出て深呼吸をした。この精神状態が深呼吸で最後まで収まるだろうか。朝子はパニックを起こしそうな気がして何度も何度も深呼吸を繰り返した。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうに なつみ先生かけつける

　予定より一時間ほど遅れてやってきたなつみ先生は、武志の状況を両親に言ったあとの斎藤家の様子を語った。

「…そういうわけなの。お父さんは『ヤクザとだって戦えるぞっ』って、いきなり警視庁の友達に電話しようとしたり、もう大変だったの。だから取り敢えずお父さんととお母さんには、この場所のことも秘密にしてあるの。なんとか抜け出してきたわ」

「お父さんとしては、自分の非はまったく認めないけど、今回のことの大元の原因のところに自分と武志との諍いがあることは誰よりも感じてるわ。ただ、近況も知らない中にいきなりだったからしょうがないと言えなくもない…」なつみ先生はため息をついた。

「いや、まったくですよ。いきなり自分の息子が最悪あと一週間で手の届かないところに行ってしまうと思ったら、その警視庁のお友達に相談しようとするというのもわかる気がします」

　つとめて冷静な口調で篠崎が言った。武志も落ち着いていて、分からないでもないといった表情でうなだれた。武志は武志で、自分の引き起こした事件のことの重大さ、責任の重さを痛感し始めていた。

　いっときの興奮状態と、その興奮状態からある意味で目を逸らすために、ことさらに自分の事を他人事のようにクールに外側から眺めようとしていた武志は、徐々にその無意識の心理的な防衛機制が効かなくなってきたことを感じていた。一週間後組員たちになぶりものにされ、恐怖と苦痛の極限の後に死が待っている。その死は、死を純粋に恐れていた幼いの頃に想像したような、みんなに看取られる感傷的なものでもなかったし、思春期に夢想したような英雄的なものでもなかった。おそらく生野菜のクズのように切り刻まれた自分は生ゴミを処分されるように始末されるのだろう。

「姉さんにもいろいろ迷惑をかけちゃって」

　武志がパニックに引き寄せられる自分をそこから引き離そうと、無意識のうちにまたクールなものいいをした時、なつみ先生の平手打ちが飛んだ。

「いい加減にしなさい！」

　篠崎は驚いてなつみ先生を見た。

「あんたはもう、散々人に迷惑をかけてるわ。、崎さんにも教室のみんなにも。篠崎さんのお嬢さんまで巻き込んで、恩人と慕う南方さんの好意に甘えて。もちろんお父さんにもお母さんにも。この後に及んでカッコつけるのはやめなさい！」

　篠崎、朝子、武志、なつみ、だれも口を聞かずしばらくリビングは重苦しい沈黙に襲われた。

　武志はがっくりと肩をうなだれてうつむいた。もともと聡明な武志のことである。自分の底の浅さ、未熟さ、自分勝手さ、甘さに嫌というほど気がついたのだろう。武志以外の三人は武志が口を開くのをまった。しかし、昨日までのような歯切れの良い言葉はもちろん、武志の口からは何も言葉が出てこなかった。

　ふと気がつくと、武志の頬を涙が伝っていた。

　そんな中、間延びした玄関のチャイムがなったので朝子が玄関に向かった。少し空気が変わった瞬間を手

繰り寄せるように、篠崎が「まあ、お茶でも入れよう。それとも軽くビールでもいくかい？」と席を立った。武志もなつみ先生も無言で少し頷いただけだったので、篠崎は冷蔵庫からウーロン茶をなつみ先生と朝子用に、スーパードライ二本を自分と武志用に持ってきた。

「まあ、少し喉でも潤うしましょうよ」

　この固まった雰囲気をほぐそうと、篠崎がまず自分のビールのプルトップを上げた瞬間だった。玄関にチャイムを確認に行っていた朝子が、凍りついたような顔でリビングのドアを開けた。

「朝子、ちょっと休憩しよう。なんだったらお前もビールいくか？」

　朝子は篠崎の声が耳に入らなかったように、武志の方に蒼白な顔を向けた。

「南友会の石橋さんていう人が…」

「石橋…さん…が…」武志が絶句した。

「誰なんだい、石橋さんて」篠崎の声も微かに震えた。

「南方さんの組の幹部です」武志が観念したように言った。

「何だって、話が違うじゃないか！」

　篠崎は思わず立ち上がって玄関の方を向いた。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうさん 南友会幹部石橋

　篠崎は武志と一緒に玄関まで行った。

　石橋は上背のあるガッチリしたタイプの男だった。篠崎の家の玄関は靴を脱いで廊下に上がる時の段差が１５センチほどある。だからまだ靴を脱がずに玄関客に対応すると、普通は家の住人は客を見下ろすようになる。ところが石橋の場合、身長１７０センチを少し越えたくらいの篠崎が若干石橋から見下ろされるような感じになった。だから１８７～８センチはあるだろう。外の住人に家の主である自分が見下ろされる。市民の良識もマイホームの砦も通用しないかのようだった。威圧感は二重三重であった。

「突然お邪魔して恐縮です。斎藤が働いている職場の責任者の石橋と申します」

　石橋は蜷川会も南友会の名前も出さず、つとめて礼儀正しく篠崎に挨拶をした。見たところ粗暴な感じられないし、休日なのにきちんとスーツを着た石橋はスーツの着方にも崩れたところもなく、きちんとした企業の多少コワモテの重役と言っても通用しそうな雰囲気であった。しかし落ち着いた物腰の中にもいつでも相手次第で牙を一瞬で剥くことができるような、長年に渡って日常生活が暴力と背中合わせであった者だけが持つ凄みのようなものは隠せなかった。

「石橋さん…」小さく震える声で武志がつぶやいた。

「おう」

　武志に対して仲間うちが見せる笑顔を見せたが、表情は険しかった。

「石橋さん。どうして私の家にあなたがご用事の斎藤武志君がいるのかそれはひとまずおいて置いて、私が武志君から聞いた話ですと武志君があなたと面談するのはもう少しあと、一週間後だったとお聞きしていたのですが…」なんとか声も震えず、表面的には堂々と篠崎は対応した。

　鋭い眼光が篠崎を射抜いた。

　しかし意外にも、すぐに石橋は大きなガタイを二つに折って深々と篠崎に頭を下げた。横で見ていた武志もあわてて一緒に頭を下げた。

「その通りです。すでに武志からお聞き及びと思いますが、私どもの組織としては一週間後の今日、土曜日が正式な対応日となっております。今日はそういうわけで私一人、組織の人間ではなく石橋個人として篠崎様にご迷惑のお詫びに伺った次第でございます」

　篠崎は必死に頭を整理した。「…ということは、今すぐ武志君をどうこうしようというわけではない…と」

「はい。南方や榊原、榊原というのが武志がビール瓶で殴り倒した人間ですが、その辺りの今の様子などお伝えしたいと思いまして」

　軽くうなずいてしばらく考えていた篠崎は思いきって石橋に尋ねてみた。

「本当にそれだけですか？」

　石橋は反射的に「はい」と言いかけたように見えたがその言葉を飲み込み、人物を見定めるような静かな眼光でじっと篠崎と目を合わせた。

「いえ、実はそれだけではありません。武志が本当に一週間後に私どもの前に出頭するかどうか監視するためでもあります。…いえ、それが本来の目的です。ただしこれは南方の一切知らないところで私が独断でやっていることです。南方はあくまで武志を信じています。そしてもちろん私も武志を信じている。しかし、万が一にも一週間後にどんな事情があれども武志が南方の前に顔を出さなかったということになると、お察しいただけると思いますが蜷川会においてオヤジの立場は非常に厳しいものとなります」丁寧に言葉を選びながら石橋が誠意を持って篠崎に答えた。

「事情とお立場はお察しいたします」篠崎も石橋の心中をおもんばかる言葉で対応した。

「実は当初はこのように玄関からご挨拶するようなことをせず、ただ、密かに監視しようとしていたのです」監視という言葉を使うとき、石橋は少し心苦しそうな表情をした。

「それが普通だと思います。それがどうして…」篠崎はその本意を確かめようとした。

「武志がお姉さんを頼って自由が丘の先のピアノ教室を訪ねた後、あなたたちと知り合って…」

「ちょっと待ってください！」篠崎は思わず石橋の場合言葉をさえぎった。

「ピアノ教室まですでにあの時辿り着いていたんですか！？」

「はい。そこは私どもの組織力をすれば簡単なことです。連絡を受けて私自身が自由が丘に行きました。ファミレスのあなた方の会話も失礼ながら知っております。南方の指示があればいつでも身柄は拘束できました」

「ええっ！」声をあげたのは篠崎だったが、これには武志も驚いたようだった。

「はい。ですので万が一武志が南方にも私にも連絡を入れずにそのまま逃亡など考えた場合には、即刻身柄は拘束され、榊原のところに護送されることとなっていたのです」

　武志もさすがにこれは想定外のことであった。世間を知らない自分の甘さを改めて痛感するとともに、野菜くずのように切り刻まれる自分を再び想像して身が震えた。

「ううぅむ」

　逃亡の手助けもすることになるかもしれないなどと考えていた篠崎も見通しの甘さ、組織の怖さを思い知った。

「しかし、昨日からのお二人今日のご来客の方々まで観察しておりますと、あなた方は武志の逃亡に手を貸そうというのではないらしいということが察せられてきました。逃亡劇は何度となく経験してきましたので、一般の方にはお分かりにならないでしょうが、武志が南方へのメールと裏腹に、南方を出し抜くような逃亡を密かに計画しているわけではないことがはっきりと感じらました」

「なるほど。それで」

「それで、みなさんが必死になって考えているらしい最良の策、最悪から二番目の策について私も思うところをお話し、一緒に相談させていただこうと思った次第です」

「…そういうことだったのですか」

　ようやく事情が飲み込めて安堵した篠崎はどっと疲れてそのまま玄関口にへたっと座り込みたくなってしまった。武志もまた安堵の気持ちと感謝の目で石橋を見た。

「よく分かりました。ここではなんですから中にお上がりください」ようやく少しだけリラックスした表情で篠崎は石橋に言った。

「では、失礼いたします」

　靴を脱いで中に上がると石橋の大きさが際立った。篠崎はその威圧感の中に一週間後の事態の収拾の困難さを再認識するような気持ちだった。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうよん 武志のピアノ

　石橋は篠崎に続いてリビングに入った。武志が最後に入って後ろ手にドアを閉める。朝子は顔面が蒼白だった。武志は軽く手招きをして朝子を呼び寄せ、玄関での話をした。朝子は少しは安堵の浮かんだ顔をしたものの、生まれて初めて至近距離で、しかも自宅のリビングで見るヤクザに緊張が静まることはなかった。

「ほう、さっそくピアノですな」

　石橋が篠崎に勧められてソファに座りながら、午前中まだ話が緊迫してくる前に武志と朝子が弾いていたピアノを眺めた。

「こちらが武志君のお姉さんですか。お姉さんもプロのピアニストでいらっしゃる」

「ご挨拶が遅れました。武志の姉でございます。この度は武志がとんでもないことをしでかしまして、ご迷惑の段、お詫びのしようもございません」なつみ先生は石橋の目を見て気丈に挨拶した。

　なつみ先生の言葉に石橋は何も言葉を発せず、ただ、すべてはやってしまったこととして対応しなければならない、とでもいった静かな表情で頷いた。

「石橋さん、私もこうしてビールを飲んでます。もしよろしかったらビールでも飲みながら少しリラックスした雰囲気で話ができませんか。もちろんアルコールを口にしながら話す内容ではありませんが、なにしろ昨日からいろなことがありすぎて、私などビールでも飲まなければ身も心も持ちません」自嘲気味に篠崎がいうと、石橋は屈託のない顔で笑った。

「どうぞどうぞ、ここはあなたのお家ですから、どうぞ私などに何のご遠慮もなさらずに」石橋はかえって恐縮であるという表情をした。

「では私だけというのは気が引けますから、石橋さんもぜひおつきあいください」

「ではお言葉に甘えるといたしましょうか」

　朝子が武志のビールをさりげなく下げ、あらためて父親と石橋用のビールとグラスを持ってきた。

「では、乾杯というのも変ですが、お近づきのしるしに」

　二人は儀礼的に乾杯の真似事だけして、グラスを口にした。

「おい、武志。いつも南方のオヤジと俺が店で打ち合わせする時みたいに、なんかこう静かな曲でも弾いてくれないか」石橋が武志の方を見て言った。

　反射的に立ち上がると、武志はどうするべきか目で篠崎に確認した。篠崎は軽く頷いた。

「では、朝子さん、ピアノをお借りします」朝子は無条件に目で許諾する。

　そういえば、武志のピアノを聴くのは初めてだった。いったいどんなピアノなのだろう。南方のを唸らせ、特別な客人扱いで南方が手元においていた武志のピアノ。篠崎はピアノを習っているものの一人とし

て、とても興味が湧いてきた。おそらく、いや当然、ただ上手いだけのピアノではないはずだ。

　篠崎がビールのグラス置き、朝子の姿を探すと朝子はなつみ先生並んで奥のソファから少し離れた食事用のテーブルになつみ先生と並んで座っていた。

　二人もまた、篠崎と同じような目で武志の演奏が始まるのを待っていた。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうご 篠崎のピアノの思い出

　篠崎は音楽の才能に特に自分が恵まれていると感じたことは一度もなかった。そんなことは第一これまで意識したことがなかったことであり、大人のピアノ教室に通う前まではどちらかと言えば不要なものでもあった。

　遠い昔、まだ朝子が未就学児童だったころ、たった一度だけ朝子と妻と三人でクラシックコンサートに行ったことがあった。篠崎は名前すら知らなかったが、著名な日本人ピアニストらしかった。ロンドンを拠点にソロ活動をしているという、スラッとした長身の甘いマスクの男は、演奏が終わると自分では抱えきれないほどの花束を客席から受け取っていた。

　クラシックピアノ、ロンドン、長身、イケメン、お上品そうな女性からの賛辞と花束…

　どれも現実離れしたもののように感じられたし、実際のところどこをどう逆さに振っても今の自分やこれまで自分、これからの自分と関係なさそうに思えた。妻と朝子が今日の演奏をどう感じたのかは分からなかったし、どう尋ねたらいいかも分からなかった。満足はしているようなので余計なことは言わない方がいい、そんな風に感じたことを覚えている。途中退屈してしまって、予約した六本木の評判の中華料理屋の料理のことばかり考えていたなどとは座興でも言わない方がいいだろうな…と思って一人苦笑していた。

「ほんと凄かったわあ。〇〇様」

　ごった返すホールの出口のところで、四、五人の二十代前半の女性の集団がそんなことを言いながら興奮していた。

「でもさ、あの第二楽章の出だしのところ、ほんのちょっと指の引っかかりが緩くなかった？」

「え？どこどこ」

「だからぁ、３２分音符で上から三オクターブ一気に降りてくるあのテーマのところ」

「ああ、そういえばぁ」

「でしょ?」

「でもさあ…」

　やれやれ。…と言ってももちろん会話の内容などまるで分からなかった。

　そうではなくて、クラシックが好きな女性というのはどうしてこう、古いリバイバル映画に出てくるヒロインのような雰囲気を一人残らず醸し出しているのだろう…。篠崎は思った。
　例えば今は押しも押されぬ大女優が、まだ駆け出しの頃のうぶでけがれなき若き自分の主演映画を好んで観るとは思えない。恥ずかしいからだ。そしてこの恥ずかしさはファンの側にもある。

　今はもうすっかり時代遅れになった髪型や洋服やしゃべり方。

　ああ、自分はああいうのに熱狂していたんだな…。

　気恥ずかしさは、男優を見てはああなりたいと密かにファッションや口ぶりを真似たり、女優を見てはあんな女性を自分の女にしたいと心の底から思った若き日の自分の未熟さがそこに容赦なく見えるからだ。当時最先端だった映画は、まるでその当時の人間全員が集団催眠にかかった状態を外側から観るようなものである。

「へ〜。俺たちってああいうのがいいと思ってたんだなあ…やれやれ…」

　この「やれやれ」感を篠崎は目の前のクラシックな女性たちに感じるのだった。トラディショナルな服装や髪型に文句を付けたいわけじゃない。紺色の高級感漂う渋い光沢のワンピースは多分５０万とかしそうだし、肩までゆるやかにかかる、揺れるたびにキラッと輝く黒髪も美容院一回３万とかかかってそうな気がする。

　高嶺の花とかそういうのじゃない。ああいう女性もいいなと思う自分がいないわけじゃない。どういうシチュエーションか想像しにくいが、もし一晩ああいう女性を好きにしていいというのなら、やはりそれなりには心は浮き立つだろう。

　しかし、気恥ずかしいのである。この気恥ずかしさは、気後れなどとは全然違うのだ。かと言ってもちろんバカにしてるわけでもないのだ。

　十代の竹下景子にキスを迫れるか、二十代の吉永小百合とホテルに行って本当に最後までいけるのかという問題なのだ。
　もしかしたら実際クラシックな女性とホテルに行ったとしても、自分は全く役に立たないかもしれないな、などと篠崎は「３２分音符で上から三オクターブ一気に降りてくるあのテーマのところ」と言ってた女性が出口の先に見えなくなるのを目の端に捉えながら苦笑した。
　綺麗な女性だった。でも明日には顔は忘れてるだろう。これはつまり歌謡曲のメロディは覚えられてもクラシックのメロディはすぐ忘れるのと似てる。

　武志がピアノに向かって、しばらく自分の内面と対話するようにじっとしてる時、篠崎はそんなことをぼんやり思っていた。

　じっとしていた武志が上体を少しかがめた。

　右手が指揮者のタクトのようにそっと動き出した。

　右腕が自らの重みだけで、だいぶ以前から決まってたような必然的確かさを持って、吸い寄せられるようにゆっくりと鍵盤に降りていった。

　初めの音は、ただ無造作にも見える右手の人差し指が触れた、８８鍵ピアノの真ん中くらいの多分「ラ」の音であった。

　衝撃を受けた…。

　放課後の誰もいない中学校で、目の前の同級生の女の子の胸の膨らみを眩しく見つめながら、その膨らみを確かめるように自分の手のひらでそっとセーラー服の上から撫でたあの時の、あの官能的な電流が、およそ三十年ぶりに確かに篠崎の脊髄を突き抜けた。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうろく 大人の音

　篠崎は延髄あたりにぼぅっと溜まった肉体的な快楽の余韻と、まだ次から次へと迫ってくる鍵盤の官能のスコールに自分の身を任せていた。

　武志のピアノは二十歳そこそこの人間の指から生まれたものとはとても思えなかった。何と言ったらいいのだろう…。音楽の技巧を語る言葉を持たない篠崎はまず、「円熟」とか「豊穣」とか「艶やか」といった言葉を思い浮かべたが、そのどれもが若者に対する賛辞の言葉としては似つかわしくないようにも思えた。しかし、目の前の演奏を聴いていると、それらはもしかすると必ずしも若さと矛盾するものでもないかと思いなおした。若さを保ちつつ、いや若さゆえのその独特な円熟味、豊穣さ、艶やかさといったものがこの世には確かにあるんだと思った。

　この音を紡ぎ出す若者は、大げさにいえば生きていくことの急所のようなものを見たことがある、感じたことが確実にあるのだと思った。人は普通年齢を重ねることで、自然と樹木の年輪が増えるように円熟したり、豊穣さが自然と湧いたり、艶やかさが内側から出てくるのだと無条件に前提している。若さの特権という言葉があるように、加齢の特権もまた等しくあるのだと思っている。
　篠崎は人からどれだけいい加減な男だと笑われながらも、自分なりにはその急所のようなものを垣間見、打ちのめされ、咀嚼し、小さく喜びを噛みしめて丁寧に生きてきた自負がある。だから「本物」だけは分かるつもりだったし、そのことは誰にも言ったことがないが絶対の自信を持っている。

　若い武志のピアノは「本物」だった。その本物さは技巧を褒めそやす言葉では捉えることのできない種類のものだった。３２分音符の下降音がどうのといった言葉はむしろ滑稽に思えた。
　それにしても篠崎は不思議でならなかった。若い武志はいったいどうやっこの急所を捉えて咀嚼して自分のピアノに反映させることができたのだろうか。自分のような凡人がまったく想像もできない手順で人生を近道する秘密がこの世界には隠されているのだろうか。

　篠崎はこの世界の迷路の中で出口を見失ってしまう人間がほとんどだと経験上確信していた。自分もまたこうして自分の家の中に妻と子供と生活をし、仕事に出かけ、ピアノを覚え、人と喧嘩したり仲直りしたりする毎日を送れていることは奇跡だと思っていた。

　しかしそれが奇跡だと気がつくまでに実に少なくとも四十年はかかった。気がつけて良かったと心の底から思っている。無信仰の自分だが、神に感謝したいくらいだ。自分には神はいないので、密かに妻や娘や仕事仲間に神に感謝するようにこっそり感謝してる。妻も娘も仕事仲間も誰一人篠崎の気持ちを察するものはいないだろう。察せられないことがこの信仰の証であり、そんな恥ずかしことがバレないことが信仰の条件だ。

　武志のピアノは、その誰にも言ったことのないはずの篠崎の気持ちを鍵盤に載せ、優しくそっと一緒に感謝してくれるような音だった。僕は篠崎さんのその心の音を聴いたことがあるよ。武志のピアノは篠崎にそう語りかけていた。その音は自分だけしか知らないはずの音だった。しかしその秘密の音が、今目の前の若者の指から奏でられては自分の精神と肉体の髄に達して心地よく自分を支配していた。

　たぶん石橋もまた自分と同じようなことを感じていると篠崎は確信した。

　おそらく南方もそうなのだろう。

　さて、困った。

この天才をどうやってこの窮地から救ったら良いのだろうか…

篠崎がふと顔をあげると、同じような顔をしている石橋と目が合った。

二人はにっこり笑いあった。

そしていくつかのことに対して苦笑した…。

幸せな気持ちだった。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうなな 天才の苦悩

一曲終わった。

正味５分程だったのだろうが、篠崎には３０－４０分くらい感じられた。それ程ずっしりと耳というより心に残るものがあった。

曲が終わったあと、朝子が放心状態からさめて涙ながらに拍手をしている。なつみ先生も驚いている様子だった。おそらく数年前までの自分が知っていた頃の武志のピアノとは格段に違っていたのだろう。いわゆる職業柄、自分以外のピアニストの優れた演奏などというものは聞き飽きているなつみ先生はずだったが、先生は弟の演奏に驚嘆の念を持って感動していた。

曲の名は知らない。出だしはモーツアルトのピアノ協奏曲のような華やかながらも端正な輪郭を持った感じだったが、カデンツァはモーツァルトを逸脱してもっとベートーヴェン的で、ロマンティックであり情熱的だった。おそらくたった今即興的に、武志が頭の中で作って演奏したものだろう。

篠崎の知る数少ない作曲家のエピソードで印象的なのが、ベートーヴェンのものだった。もっとも篠崎が好きなのはいわゆるベートーヴェンらしいベートーヴェンの話ではない。ベートーヴェンらしいというと、例えばゲーテと宮殿の庭を歩いている時に貴族が前からやってきた話だ。元総理大臣のゲーテが道を譲ったのにベートーヴェンは最後まで譲らず、結局貴族に道を譲らせた話などだ。篠崎の好きなのは、口下手のベートーヴェンが自宅で妙齢なご婦人を前にして話が続かず、すっと立ち上がるとピアノの前に行って何時間も即興演奏をしたというものだった。当たり前だがCDなど残ってなどいないが、篠崎はこういう時のベートーヴェンの演奏を聴いてみたいと思ったものだった。

それはこんな理由である。

斎藤なつみ「大人のピアノ教室」のテーマソングみたいになっている西田敏行の「もしもピアノが弾けたなら」。これは、もしもピアノが弾けたなら思いのすべてを歌にして、君に伝えたい、だけど僕にはピアノもその腕もないというのがテーマだ。

篠崎がベートーヴェンの即興演奏のエピソードが身近に感じられて好きなのは、ベートーヴェンがちょうど西田敏行と反対側から同じことを思っていたんじゃないか、という勝手な想像からだった。

ベートーヴェンはもちろん、君に聴かせるピアノも腕もあった。でも伝える言葉がうまく出てこなかった。音にしたくても音にできない、ピアノが弾きたくても弾けない。それと同じように言葉にしたくてもできない、伝えたくても伝わらない。そんな悩みもあるんじゃないか。音楽であれほどまでに男女の愛の官能的な秘密の奥底に達しながらも、目の前の女性にそれを言葉では伝えられない。そのもどかしさを、他に伝えるすべのないベートーヴェンは音に託した。本当は気の利いた愛の言葉でもかけたかったのかもしれない。間違いなく貴族に道を譲ったゲーテにはそれができた。篠崎はベートーヴェンの即興演奏のエピソードをそんな風に自分なりに勝手に解釈していた。

篠崎がこのことを思い出したのは、この凄まじいまでの演奏をした武志もまた、音楽の才能ゆえの早すぎる円熟、豊穣、艶やかさを持て余しているのではないのか。自分が音楽を通じて感じてしまった人生の秘密に自分の人生が追いつかないことのアンバランスに苦しんでいたりすることはないのだろうか…。完璧なピアニストであったベートーヴェンが心を寄せる女性の前では言葉が出てこなかったように。

自分を認めてくれる人間は自分の周りにはおそらく沢山いただろう。しかしその武志が、ヤクザ者の南方のピアノにのめり込んだということの秘密はそのあたりにありはしないだろうか。

次の曲が始まった。

なつみ先生と朝子はじっと聴き入っている。

篠崎は思いきって、さっき想像した武志が南方に惹かれた理由を石橋に話してみることにした。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうはち ヤクザの心性

　篠崎は石橋に話をした。石橋は篠崎の話を黙って興味深そうに聞いていた。話の内容ばかりでなくその話し方の中に篠崎の人物を見ようというような視線であった。

「なるほど、興味深い話ですな。私などはあなたのようにきちんと言葉を使って考えをまとめる習慣も能力もないものですから、自分では深く考えてみようとはしませんでしたが、そういうことなのかもしれません」

　武志が新しく弾き始めたのはポピュラー曲だった。二人は演奏に耳を傾けながら話をした。

「人間みんな本来片足立ちで世間に足を下ろしてるようなアンバランスなものです。何処かが突出するとバランスが欠ける。バランスを崩せばよろけそうになって何かにつかまろうとする」

「武志君の場合それが南方さんだった」

　話をうまく合わせてくれた部分はあるかも知れないにせよ、篠崎はひとまず堅気じゃない人間と話が通じたことに安堵した。

「そういうところはあるのでしょう。あなたの話を伺ってそう思いました。考えてみれば武志とタイプは違うが南方のところに来る人間はみんな、片足立ちでふらついてそのまま一度倒れると自分は二度と起き上がれないんじゃないか、と思いつめた者ばかりかもしれないですね」

　まんざら篠崎に話を合わせているというばかりでなく、石橋は独りで頷きながら話し始めた。

「南方さんのところに、というとその…何と言いますか組に入門？入門というんでしょうか…」

「まあ、その言い方でもいいです。盃をもらうまでは事務所の下働き、少し上がって南方や私の自宅の警護と身の回りの世話などですから、ある面で伝統芸能の家元に身を預けるようなものかもしれません。そういう方々が聞いたら怒るかもしれませんが」そう言うと石橋おかしそうに笑った。

「もっとも当然求めているものは違いますな。組の若い連中はとにかく明快な答えが欲しいんですよ」

「…といいますと…」

「よくいうでしょう。この世界では親が白と言ったら黒いものでも白になる、と」

「聞きますね、それは」

「カタギの世界ですとこれは『長いものに巻かれろ』となります。しかしそれとは決定的に違うところがあります」

「違うところ？」

「ええ。うちの若い連中はね、南方が黒いものを白と言いますでしょ、それはまるで世紀の手品を見るような体験なんですよ。本当に黒いものが真っ白に見えるんです」

「手品…」

「そう、そこが違うところです。カタギの方が上司に例えばそう言われたらどうですか？色は手品のように変わったりしないでしょう」

「それはそうです」篠崎は広告代理店の営業マン生活を思い出して一人苦笑いをした。

「その時感じるのは、相手への嫌悪ですね」

「そうです」

「そしてもう一つ、そんな嫌悪すべき相手に従わざるを得ない自分に対する、輪をかけた嫌悪もあるはずでしょう」

「ええ、まあ」篠崎はぼんやりと自分が電報堂を辞めることになったいきさつを思い浮かべた。

「南方が『これは白だ』と言った場合、言われた方は本当にさっきまで黒だったものが白に見えてしまう。理屈じゃないんですな。それまで自分を捉えて放さなかった根源的不安や抑えきれない動物的な暴力衝動がまるで嘘のように消えて、その代わりに今自分は何をすべきかがはっきりと分かる明晰な純白の世界が広がるんです。そしてその大魔術を見ることができるのは選ばれた人間だけだ、という強烈な快感が自分の体に電流のように流れるんです。理屈をこねれば頭のいい人間に絶対にかなわず、単純に動物的な暴力に訴えて世間の爪弾きに成り果てた連中にとってこれは手品というより奇跡です」

「イエスキリストの奇跡を見ているようなものでしょうか」半分冗談で篠崎は尋ねる。

「そう言っていいでしょう」石橋は真顔で答えた。

「まあ、一種の催眠術かもしれませんが、南方を信じるものにとってその催眠術はずっと持続して解けることがないんですよ」

「ううん、ますます宗教のようだ」

「そうです。一種の宗教です。キリスト教が暴力を否定することが根本にあるのと違って、ヤクザ者の宗教は根底に暴力の肯定がある。それ以外は実に宗教的なものですよ。奇跡もあれば信仰もあるし、他者へのいたわりの心、戒律もある。その名の下に戦争をやらかす心理的メカニズムも同じです」

　石橋は今度は、宗教団体の人が聞いたら怒るだろうという言葉は加えなかった。

「武志君は…」

「さっき言ったように組の若い連中とは求めている答えは違います。ただ、南方のマジックが見えていて、そのマジックには心酔しているようにも見えます。もっとも南方が若い連中はにやって見せるマジックと、武志に対してやるマジックは別のものですがね。私もこうして言葉にするのは初めてなんですが…」

「それをお聞かせ願えませんか?」

「ええ、もちろんです」

　石橋は不慣れな言葉を手繰り寄せるように、じっとピアノを弾き続ける武志の後ろ姿を見ていた。

つづく

大人のピアノ そのにじゅうく 白と黒

　武志の弾く曲は三曲目に入っていた。今度は一転して典雅なバロック風の曲だった。バロックと言ってもバッハ的な荘厳さというよりは、少しヘンデル風の純朴で落ち着いたメロディックな対位法だ。これもおそらく武志の即興だろう。

「組の若い連中が、白と黒の必ずどちらかの世界を南方に与えてもらって満足するのとは違って…」

　武志の弾く曲を聴きながら石橋が言葉を探した。篠崎はどんな言葉が石橋の口から出てくるのかじっと待った。

「白でも黒でもない世界を武志は南方に探しているのかもしれません」

　まだ抽象的で篠崎にはよくわからなかった。石橋の次の言葉が出てくるのを待つべきだろうか…。

「そうですね、白でも黒でもなかったら灰色か、それともまったく違う赤とか黄色とか、そういうのじゃないな…」石橋自身言葉を探しながらしゃべっている。

「色のない世界かな、しいていえば」ここで石橋は武志の方を向いていた顔を篠崎に向けた。

「そういうものを超越した世界ですか？」石橋の邪魔をしてはいけないとタイミングを計っていた篠崎はここでやっと合いの手をいれた。

「ええ、ある意味不気味で恐ろしい世界かなとも思います。私を含めてヤクザ者の根本はやはり白か黒の二進法なんですよ。それが親の一言で反転したとしても。敵と味方、その二つしかない。味方は守るし敵は殺す。根本原理はそれだけです。」

　いきなり過激な言葉が飛び出してきて、しかもこの石橋がそういう言葉を使うと当たり前だがリアリティがありすぎて、篠崎は思わずゴクリと唾を飲み込んだ。

「あ、いや、これは場違いなたとえを言いまして申し訳ありません」

　リビングの空気の温度が少し下がったのを感じて石橋が苦笑しながら言った。曲を聴いていたなつみ先生と朝子も耳ざとく反応して、目を合わさないようにしながらもこちらをチラチラ見たのを察したのだろう。

「要するに白か黒かどちらでもない世界、それどころか色のない世界というようなものを認めるということは私を含めたある種の人間にとってはある意味恐怖なわけです」つとめて柔和な顔を作って石橋が言った。

「恐怖…ですか」

「ええ、なんといいますかね…私は戦争は直接は知らないですが、敵もまた人間だとか、自分と同じ悩みを持っているという考えは戦場では必要ないでしょう」

「ああ、やっと分かってきましたよ。はい、それなら分かります。戦場で敵を前にした時そういう感覚は、もしかすると必要ないどころか命取りになる時もあるかもしれませんね」

「ええ、ええ。そういうことを言いたかったのですが、つい不慣れな話をしているもので恐縮です」

　石橋はそういうと篠崎と、さっきからこちらの様子をこっそりうかがっていたなつみ先生と朝子に軽く頭を下げた。二人は様子を伺っていたのばれていたのに気がつき、顔を見合わせてやはり同じようにチョコンと頭を下げた。

「色がない世界というのは…だから…」

　ここでまた石橋が言葉を探した。一般人に過激な言葉を排除しながら説明しようと苦労している様子だった。

「アメリカと日本がけんかしているとしてどっちが正しいとか、いやいや中国の言っていることが正しいんだとか、これが白でも黒でもなく、赤が正しいっていうバトルかな」

「なるほど、その例でいう中国が目の前の敵でも味方でもない世界ですね」

「そうです。これも我々は嫌います。この場合中国が敵なのか味方なのかどっちなのかを親に決めてもらいたいわけですね」

「よく分かります」

「武志のピアノを聴いていると…」石橋はまたここで言葉を探し始めた。

「天皇制もヤクザ組織も大統領制も共産主義も、何もなくなった世界にいるような…」

「あ、また少しわかりかけてきました。それが色のない世界ですか」

「ええ、何と言いますか。戦場では非常に有害な危険で音楽だと思います。ですのでヤクザ者にとっても本来よくない音楽だと言えるでしょう」

　石橋は自分ではなんとか一定の説明はできたのかもしれないという顔をした。同時にこれ以上はうまく言えないという困った顔もしていた。

「皆さんそう感じているのでしょうか」おぼろげながら言いたいことは分かったような気がした篠崎は尋ねてみた。

「組の人間ですか?たぶんそういうことは感じてはいないでしょう。私とあとは南方のおやじだけです」

「南方さんも」

「はい。音楽の素養も何も皆無の私ですが、武志のピアノを聴いたときどこかで聴いたことのあるピアノだって思ったんです」

「もしかするとそれが…」

「ええ。一番白黒の二進法の頂点にいるはずの南方がたまに弾くピアノは、武志とそっくりな音だったんです」

「同じ音…」

「そうです。白も黒も親兄弟も敵味方も何もない世界、南方が弾くピアノはそういうピアノだったんです。武志のピアノを聴くようになって分かった。オヤジのピアノが、私がお側で４０年ばかり常に命をかけてお守りしようとしてきた南方が弾くピアノがそういうところを根本に抱えているピアノであり、南方本人もまたそういう人間なのだなってことがよく分かった。だから武志には感謝してますし、一方では……。まあ複雑な気持ちです」

つづく

大人のピアノ そのさんじゅう 善後策

　石橋がそこまで話し終わった時、バロック風の武志の演奏もちょうど終わった。石橋は形だけねぎらいの拍手を数回してから手招きをして武志を呼び寄せた。なつみ先生と朝子は驚嘆の目で真剣に拍手をしていた。武志が拍手をしている篠崎に一礼をしてこちらに来ると、石橋に促されるままその隣に座った。

「いいね。いつもの音だ。何かこう平常心じゃない音になっているかなと思ったが、いつもの武志のピアノだった。そういうところがオレは好きだよ」柔和な顔をして石橋が武志の肩を軽く叩いた。

「ありがとうございます」武志も演奏でかえって緊張がほぐれ、平常心を取り戻したように見えた。

「今石橋さんと武志君のピアノについて話をしていたところさ。なかなか興味深い話を聞かせていただいたよ」

　篠崎がいうと武志は話を想像するそぶりをして、すこしニヤッと笑った。

「いや、もちろん変な冷やかし半分の話じゃなくて、武志君の音がいったいどこから来て、どこに向かうのだろうみたいなね、哲学的で真面目な話さ」篠崎は笑いながら補足した。

「そうですか。僕も聞いてみたかったです」武志がいたずらっぽい目で言った。

「そうだな、篠崎さんにうまく乗せられて恐れ多くもこのど素人の俺が南方のオヤジのピアノについてまで語ってしまった。そこは聞かせられねえところさ」石橋が豪快に笑った。

「南方さんの…」武志はやはりそこに反応した。

「うん、石橋さんは武志君と南方さんのピアノが同じように聴こえるってさ」

「だから篠崎さん、その話は聞かせられねえ話ですってば」石橋が笑って篠崎の次の句を遮った。

「そうですか…。南方さんのピアノと僕のピアノが似てる…」

　武志はなおもその話が聞きたくてたまらず篠崎の顔を見たが、篠崎は石橋の顔と武志の顔を見比べて、やがて笑って黙ってビールを飲んだ。

「それより今後の話を詰めておかなければならない」

　峻厳な顔に戻って石橋が武志と篠崎の顔を見た。

「そうですね」

　篠崎の言葉に武志もうなだれた。

「これまでのところ、オレがいない間にどんな話をしてどんな風にしたいのか出てきたところをまず聞かせてもらおうか」石橋は武志に向かってそう言った。

　篠崎はそれを引き継ぐようにこっくり頷いて、奥のテーブルの椅子に並んで座っているなつみ先生を手招きした。先生が立ち上がってこちらに来ようとした時に、朝子は自分の顔を指差して「私は？」と篠崎に聞いてきた。篠崎は一瞬迷ったが頷いたので二人揃ってこちらにやって来た。

　朝子は自分が座る場所を一瞬どこにしようかと迷ったあと、ちょこんと武志の横に座った。それを横目で見ていた石橋はかすかに、唇に笑みを浮かべた。そのかすかな笑みに気がついた篠崎が石橋の目を見るとその途端石橋が篠崎に顔を向けたので二人の目があった。二人は静かに苦笑した。

　なつみ先生が、明日にでも武志の父親がこちらに来て武志と三年ぶりに話をすることなどを説明した。話が後でややこしくならないようにとの配慮から、なつみ先生はあえて、武志の父親が自分の友人の警視庁の人間に相談して武志の身の安全を計ろうとしていることなども伝えた。石橋はその部分は流石に渋い顔をして聞いていた。

「だいたいのところは分かった。とにかく明日の親父さんの話が終わってからもう一度話した方が良さそうだ。その警視庁の友人云々も、武志が一体どういう対応をするつもりなのかは今はあえて聞かないことにする」石橋は武志にそう言い渡した。

　武志はただ「はい」とだけ重苦しい声を出した。

　石橋は明日の父親との話がすんだその次の日、つまりまた明後日に再訪した旨を篠崎に了承してもらい、その日は篠崎家を夜の１１時過ぎに辞去した。といってもこの家の周りから石橋の配下の人間がこの家を監視していることに変わりはなかった。

　こうして残された一週間の一日目が終わろうとしていた。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅういち 冴子の帰宅

　石橋が帰ったあとを見計らったように、篠崎の妻の冴子が帰宅した。もろもろの事情をうまく伝えないと話がややこしくなることを恐れた篠崎が迎えに出ると、冴子はまるで玄関口から中に誰かいるのか確かめているそぶりだった。

　朝子が遅れてリビングからやってきて、「メールでだいたい説明したとおり。ヤクザ屋さんはもういない」と言ったので、篠崎は事情を察した。陶芸教室は普通なら夕飯前には終わって帰宅しているのに今日に限って十一時を回っているのは、朝子がとりあえず石橋が帰るまでは家に近づくなとメールしたからのようだった。

「なんかややこしい話になったのね」冴子は不機嫌そうな顔で言った。

「ごめん、お母さん」すかさず朝子が謝った。

「いや、あんたが謝ることもないと思うんだけどね…」

「まあ、事情はあとで話すからとりあえずリビングに入ってくれ。その武志君を引き合わせるから」

　通りいっぺんのあいさつを交わし、冴子はなつみ先生に挨拶と全員分のお茶をいれたあと、篠崎に目配せして二階の寝室に上がった。「あとで納得いく説明してよね」ということだろう。話をややこしくせず、流れに沿ってふるまってくれたことに篠崎は感謝した。

　とりあえず今日のところは昨日と同じくリビングで寝てもらうことにした。さすがに二日連続でソファはかわいそうなので、終電のなくなってしまったなつみ先生と一緒にお客様用の布団を二人分しいた。明日の父親対決のこともあるので姉弟一緒による話をしたいこともあるだろうとの配慮だった。

　朝子はリビングを後にして篠崎と一緒に二階に上がった。朝子はいわゆる一目惚れというやつで、武志の今後の一週間を自分のこととして考える立場になったわけだ。それについても朝子と話をしたいと思ったし、朝子も武志のことを篠崎と話をしたい風であった。

　まだあと一週間あるのでその機会もあるだろう。とりあえず今日のところは冴子に事情をきちんと話さないといけない。

「おやすみ」とだけ言って篠崎は朝子に軽く手をあげた。

「おやすみ」朝子が複雑な顔をして笑った。

　それぞれに眠れない土曜の夜だった。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうに 眠れぬ夜

　寝室に入り篠崎がツインのベッド越しにもろもろの事情について話をすると、冴子はどうも要領を得ないという感じであいかわらず不機嫌だった。まあ、当然かもしれない。日本全国の主婦で自分の家に逃亡犯を匿ったり、ヤクザが（逃亡者の味方に分類されるとはいえ）訪問してきたりというのを歓迎する人間はいないだろう。

　話の流れが変わったのは、やはり朝子が武志のことを好きになってしまったらしいというところからだった。ややこしい話を持ち込んだ張本人の武志ではあったが、冴子の武志の人物に対する印象は悪くはなかった。というよりむしろ冴子が好印象を持つ対応だったようだ。いわゆる母性本能をくすぐるタイプというのだろうか。そして我が娘が渦中の青年に恋をしてしまった。武志もどうやら娘に一目惚れだったらしい。この辺りの事情を把握するにつれ、冴子は徐々に朝子と武志の仲を応援したいという気持ちになったようである。

「危険なことはないの？」

　この言葉が冴子から出てきた時に篠崎は胸をなでおろした。冴子が頭ごなしにこの状況を否定して、例えばすぐに警察の介入などにうったえることなどはなくなり、条件しだいでは容認するという態度を表明したことに他ならなかったからだ。

「それは１００％とはいえばいかもしれない。しかし少なくとも武志を追いかける側が武志にビール瓶で殴られたヤクザの組織じゃなくて武志が世話になっている組織に変わった時点でかなり低下したし、じっさい昨日のように大幹部の石橋さんと面識もできた今は俺たちに対する危険性はゼロに近くなったと思う。」

「なるほどね…」冴子は篠崎の状況分析については納得したようだった。

　時計をみると午前二時を回っていた。

「おやすみなさい」と言って冴子が寝てしまうと、篠崎は日付は変わってしまったが長すぎた一日目がようやく終わったことに安堵した。

　冷蔵庫のビールをあと一本だけ空けて今日はもう寝るとしよう。廊下に出て朝子の部屋の前の締め切られたドアの前を通り過ぎる時、とりあえずはお母さんも部分的には納得してくれたよ、と言おうかと思ったが時間を考えて明日の朝にした。篠崎が階段を降りていくとしんと静まり返ったリビングはNHK大河ドラマで観た戦い前夜の野戦の幕舎のような感じがした。

　念のために玄関の鍵を確認したが、きちんとしまっている。まさか夜襲を受けるなんてことはありえないと思うが、この家を建ててから一番戸締りということを気にした晩だった。

　ビールをとって二階に上がろうとしてふと武志なつみ先生の並んだ布団を見ると、武志の布団がからだった。

「武志君？」

篠崎がなつみ先生起こさぬようになるべく小さな声で声を発したが、反応はなかった。

「トイレか？」

しかしトイレにもいなかった。

「まさか外に呼び出されたのか…」篠崎は動悸が高鳴るのを覚えた。

「いや、しかし玄関は鍵がかかっていたからそれはない」

状況を冷静に把握しようとして無意識のうちに篠崎は小声を発していた。

サンダルを玄関を出てみた。

路地の角を曲がった。

篠崎はそこで我が娘のキスシーンを発見してしまったのだった…。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうさん 武志の父親登場

　何となく寝付けないままに篠崎が起きたのは昼前だった。いろんなことがありすぎて疲れたというのが正直なところだった。寝ている間に武志の父親から篠崎宛に電話があったそうだが、電話を受けた朝子が篠崎を起こそうと二階に上がるのをなつみ先生が制したらしい。
　電話を代わったなつみ先生は、篠崎さんはまだお休みになってるから起こさない方が良いとのことを父親に伝えた。そういうわけで、午後一番にやってくることになった武志の父親とは謂わばぶっつけ本番で対面することになる。武志の宿泊を引き受けた手前行きがかり上ここまで来てしまったが、どういう挨拶をしたものか…と篠崎はしばし悩んだ。

　武志の父親は吉野堂のひよこのお菓子を持ってやって来た。

　最初に本来ならば妻もご挨拶に伺うところを、武志との対面で取り乱すといけないからという理由で家に置いてきたことの非礼をわびた。また、こうして見ず知らずの他人にこういう形で不肖の息子が迷惑をかけているとのお詫びが延々と続きそうだったので、篠崎は「それよりも、少しでも多くの時間を息子さんとお話に使ってください」とかわしておいた。

　篠崎の知る限りの印象で、他の省庁と比べて外務省には役人然としたタイプの人の割合が少ないように思っていたが、武志の父親はいかにも厳格なお役人という風貌だった。なつみ先生といい武志といい、芸術家の子どもたちとこの父親のイメージのつながりが、篠崎にはなめらかに想像できなかった。もしかすると今日は来なかった京都の老舗の呉服屋だったかの母方の血筋にそういうものが流れているのだろうか、と想像してみたりもした。

　対面した親子が話をするにの難渋している様子は誰の目にも明らかだった。初めは父親と武志の二人でソファに座って対面したのだが、時々ポツリポツリと父親が不機嫌をかみ殺したような短い言葉を発し、武志が必要最小限にそれに答えるという感じだった。

　まったく席を外しておくというのも自分の家でかえって不自然な感覚もあったので、篠崎は冴子と朝子と、二人の声が何となく聞こえるか聞こえないくらいの距離の食卓に座っていた。はじめはなつみ先生もそこにいかにもいづらそうに座っていたのだが、武志と父親との親子対話の様子にため息をついて二人のいるソファに席を移した。

　時に父親の大きな声が出掛かったが、その度になつみ先生が父親の視線を篠崎たちの方に誘導して、「他所様の御宅で失礼です」と目で制した。

　小一時間もそうしたなんとなく不毛にも見える甚だしくストレスフルな時間は続いた。

「外へ出て話をしよう」

　父親が自ら立ち上がって武志の腕を掴もうとしたが、武志は座ったまま応じなかった。外に行けば今ここで押さえている大声や、場合によってはビンタなどもあるのかもしれない。むろん武志もそんなことは恐れてはいなかったが、場所を変えたそうした話し合いが今ここでのそれよより良くなるとも思えなかった。

　どうするつもりなんだろう…。冴子と朝子が心配そうな顔で篠崎を見た。篠崎も困った顔をしていたが、タイミングをみて「お父さん、お話中すみません」とソファに近寄った。

「まったくお恥ずかしい話で恐縮です」父親は申し訳ないと言った顔で頭を下げた。

「あの、どうでしょう。まだ今日は早い時間ですし、このままこうして重苦しい雰囲気で武志君とお話しているのもあれですから、一息入れませんか」

「はあ」

「私はあくまでこうして今回は行きがかり上こうした立場になっていますが、もとより他所様の家庭の事情に口を挟むつもりありません」

「いえ、まったく恐縮の至りでございます」

「少し一息いれてお茶でも」

「はい」

「武志君は朝子と少し散歩にでも行っておいで」

　篠崎の心遣いに、武志が手を合わさんばかりに心の底から「感謝します」と表情で答えた。篠崎が朝子を見ると、朝子はもっとストレートに篠崎を向いて手を合わせて拝んでたので篠崎は思わず吹き出した。その横では冴子が苦笑している。

「すいません。仕切ってしまって…」

「あ、いえ」

　先手を打って篠崎がそう言っていかにも申し訳なさそうな顔を作って頭を下げたので、武志の父もその流れに従うより他なかった。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうよん 天才とは何か

　お茶とおみやげのひよこのお菓子が並び、お茶の用意をした冴子もそのままソファに座り、大人ばかり四人が相対した。

「いや、大変にお恥ずかしい醜態をさらしまして面目次第もございません」武志の父親はハンカチで額をぬぐった。

「いえ、そんな恐縮されなくてもいいですよ。なんといいますか武志君の私に見せる態度はそれは立派なものだと思いますし、私はお嬢さんのなつみ先生にはずっとお世話になっておりまして、さすがはあのなつみ先生の弟御さんだなと感じていた次第です」お世辞ではなく篠崎は心底そう思っていた。

「あ、こちらこそいつもなつみがお世話になっております」斉藤氏はなつみ先生を一瞥してから頭を下げた。

「まあ、それはさておき、お話の方はどうですか」

　どうも何も話が全く建設的な方向に進んでいないのは見ていて明らかだったのだが、篠崎はそのことを斉藤氏がどう考えているのか知りたくもあり、あえて尋ねてみた。

「どうもこうも、あいつは事態が飲み込めていないとしか思えません。一週間後に自分で命を落とす可能性もあるのにヤクザのところに出向いて行くと言う一点張りでテコでも動きませんな」

　さっきの膠着状態を思い出したせいで斎藤氏の顔はまた一気に渋い顔に戻った。

「まあ、おだやかな話ではありませんね」

「とんでもない話ですよ。馬鹿げてます。いくら世話になったかは知りませんが、武志は堅気の普通の人間です。不法行為を常とする生業の集団に対してその集団のやり方で仁義を通す必要などまったくないでしょう。相手を殴ったことに対しても、正々堂々と裁判でやりあったらいい。情状酌量はあったとしても、東京湾に沈めることが正当化されるなんて判決があるわけない。日本は法治国家なんだから、武志のやったことは粛々と法にのっとって処理されてしかるべきです」

　一部の破綻もない、そして社会常識に則った意見だった。しかし相手はこの社会常識が通用しない。

「私は極道のルールがどうかは知りませんし興味もありません。しかしどんなルールであれ、市民社会のルールに反するものは国家権力をもってそれを無効にすることが至当でしょう。その辺りの常識を簡単にさっき聞かせてやったのですが武志のヤツ…」

　いらだちを隠さない斎藤氏になつみ先生がため息をついた。

「お父さん、ぜんぶお父さんのいう通りなんだけどさ…。なんていうか、武志はその正しい意見そのものを疑問に感じてるのよ。それよりお世話になった南方さんのメンツを潰さないことが大事だと思ってる…」

「くだらん。青臭いにも程がある」

「そうよ、その通り。でも単純にお父さんや世間の常識に反発してヤクザの常識をかっこいいと思っているっていう単純なことじゃないの。まさかあの武志はそういうところでウロチョロしたりしないわ」

「じゃあ、なんだっていうんだ…」

「それは…」

　なつみ先生も面と向かって言われると言葉にはできないようだった。また重苦しい沈黙がリビングを支配した。

「あの時のことを思い出すよ」意外にも沈黙を破ったのは斎藤氏だった。

「なに？」

「岸谷先生とやりあった時のことだ」憮然とした表情で斎藤氏が言った。

「ああ…」なつみ先生は苦笑とも呆れ顔ともとれる表情で頷いた。

「なんですか、それ」岸谷…どこかで名前が出なかったけ…そう感じながら篠崎が二人に聞いた。

「洗足学園の…」

「ああ、なつみ先生と武志君の共通の師匠の！」そうか、神田さんと平林さんと三人で見た【斎藤なつみ「大人のピアノ発表会」】のパンフレットで見たんだっけ、篠崎は一昨日の喫茶店でのやりとりを思い出した。

「岸谷先生がうちにお見えになった時、父と激論になりまして…」

「そりゃまたどんな」

「くだらん。そもそも天才なんていう存在ほどいかがわしく胡散臭いものはない！」

　斎藤氏はまた少し激していた。篠崎はなんとなく斎藤がどんな人物なのかのイメージができてきた。

「天才論争ですか？」

「岸谷先生は武志を天才だと…」

「くだらん。天才がそのへんに転がっているわけはない。気楽に人の息子を天才だとかおだてておいてピアノの道に云々…。くだらん」

「その時のお話をさっき思い出されたというわけですか」篠崎が確認した。

「ええ。天才だとか芸術家とかいうのはまったくもってくだらん。こっちの話がまるで通じん」

「それで思い出したというわけですか…」

「そうです」斎藤氏はきっぱり言い切った。

「父にとっては芸術家も天才も天敵でして…」なつみ先生が口を挟んだ。さっきと同じ苦笑とも呆れ顔ともとれるあの表情だった。

「天才もダメ、芸術家もダメ。じゃあ、お父様がご子息とお話が通じないのはしょうがないですわ。だって息子さんは「天才芸術家」なんですから。」

　今まで黙っていた冴子があっけらかんと言った。

　しばし沈黙が訪れたあと、リビングは笑の渦に包まれた。なかなかやるなという目で篠崎が笑いながら冴子を見る。確信犯の冴子はつられて笑って見せる。なつみ先生はお腹を抱えて笑っていた。

　ただ一人斎藤氏は笑もせず、「何がおかしいのだ！」というむすっとした顔で三人でを順番に代わる代わる見ていた。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうご 裸の王様？

「私は率直に申し上げて、武志君は天才だと思いました」

　篠崎は真面目な声でそう言った。なつみ先生が笑うのをすっとやめ、興味深そうに篠崎を見つめた。

「ほう」

　斉藤氏は自分の反天才論に敵対する篠崎の表明に「それで？」といった挑戦的な視線を向けた。

「いえ、私はもちろん音楽などはよくわかりません。分かりませんが武志君は天才だと思います」

「はて、それはどういうことなのでしょう。逆に私は武志は天才だとは思いません。あなたと同じように音楽のことはさっぱりわかりませんが」

　篠崎にはそのつもりはなかったが、斉藤氏は意図的に対立軸をはっきりさせようとしたようにも見えた。二人で正面切って議論するつもりはなかったので、篠崎はなつみ先生の方を向いて首を傾げた。

「専門家の先生はどう思われますか」

　なつみ先生は、父親の方をちらっと見てから篠崎の顔をまっすぐに見た。

「天才だと思いました」

「おい、なつみ。はしたない。自分の身内を天才だとかいうもんじゃない。下品だぞ」斉藤氏が不愉快な顔をした。

「まあまあ、お父さん。すみません、なつみ先生に話を振ってしまいました私に免じて許してあげてください。なつみ先生は今『天才だと思いました』っておっしゃいましたよね」篠崎がなつみ先生の目を見返して尋ねた。

「はい」

「いえ、すいません。変なところにこだわって。ちなみにいつそう思ったのですか」

　斉藤氏はなんの意図を含んだ質問だ？という顔で篠崎を見ている。

「昨日、石橋さんがお見えになっている時に弾いた武志のピアノを聴いてはっきりそう思いました」

「なつみ先生、実は私もそうです。あ、私は武志君の演奏を聴くこと自体が初めてだったので当然そうなるのですが、昨日は石橋さんも改めてそう思ったのではないでしょうか」

「だれですか、その石橋なる人物は」斉藤氏が額にシワを刻みながら聞いてくる。

「武志君が世話になっている千葉の組織の幹部らしいです」

「ありていに言えばヤクザですか」斉藤氏は明らかに小馬鹿にした様子だった。

「まあ、ヤクザごときに何がわかるとおっしゃりたいのも分かりますが…」

　先回りして自分の心中を指摘された斉藤氏は少し不快な顔をした。

「まあ、そういうことです。音楽なんて所詮わからない連中でしょう」

　斉藤氏の身も蓋見ない断定的な言い方に座は少々白けてしまった。

「でも、何か感じるところはあるようですよ。その石橋さんの上席の南方さんという方も…」

「それが今回の仕切り訳のボスヤクザですか」篠崎のしゃべるのを遮って斉藤氏が嫌悪感露わに言った。

「そうです」

「くだらん、実にくだらん」

　冴子がお茶を入れ替えるためにすっと席を立った。

「ちなみに洗足学園の岸谷先生とはどんな論争になったのですか？」なつみ先生に篠崎が問いかけた。

「裸の王様」

　なつみ先生はそう言っておかしそうに、すこし睨むように、空気を悪くしている自分の父親を見て笑った。

「裸の王様？あのアンデルセンの…？」

「はい」

　ニヤッと歯を見せて笑うなつみ先生はとてもかわいらしかった。

「もし良かったら、その時のお話をお聞かせ願えませんか」

　篠崎は斉藤氏にではなく、なつみ先生にそう言った。

「はい。私もその場にいましたからよく覚えています」

　なつみ先生はそういってまたくくっと笑った。

「くだらん、実にくだらん」

　斉藤氏は横を向いてしまった。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうろく あの話の本当の意味

「裸の王様ですか…」

「あ、と言っても岸谷先生が父のことを裸の王様だ！と言って喧嘩になったとかではないんですよ」

　お茶を入れ替えていた冴子がプッっと吹き出した。斎藤氏がそれを見咎めてギヌロと睨んだので、お茶をいれ終わった冴子はそそくさとソファから離れて自分の定位置の食卓の椅子まで退散した。

「父は裸の王様という存在が世の中には必要だ、ということを力説したかったみたいです」

　なつみ先生は父親の方を見ながらそう言葉を継いだ。先生はまじめな顔をしてそう言った。確かに斎藤氏はややクセはあるように見受けられるものの、岸谷教授と議論のための議論や単に言い争いめいたことだけをするようにも見えなかった。篠崎は「裸の王様が世の中に必要だ」という斎藤氏の考え方について興味が湧いてきた。

「単に王様がなんというか、民衆の統治のために必要だ、というのじゃなくて『裸の王様』が必要なんだということなんですね」

　篠崎はなつみ先生に話しかけながらも斎藤氏を横目で見て言った。斎藤氏は篠崎が話に興味を持ったらしいと察知して、「うんうん」と頷いていた。

「その逆に、物語の中では王様の滑稽な嘘を暴いてみんなのヒーローになった子供は大変にけしからん！くだらん！ということみたいです」

　なつみ先生がわざと父親の口癖を真似して説明すると、「うんうん」と頷いていた斉藤氏は娘が自分をからかったことにすぐに気がついて「こいつめ！」とまたギヌロと睨んだ。

　さっきからのわかりやすい反応がなんとなく面白く、篠崎は斉藤氏にだんだん好印象を持ってきた。冴子をちらっとみると、クククッと笑っている。冴子もどうやら斉藤氏のそういうある意味子供っぽいところにむしろ好印象を抱いて少しからかってみたくなったのかもしれないなと篠崎は思った。

「しかしそりゃまた、ユニークな考え方ですよね。あのお話の眼目は『権威やお追蹤や世の中の常識にとらわれている権力者を民衆の真実が暴いた』でほぼ確定でしょ」

「まあ、そうですよね。あたしも子供の頃読んだ絵本でもそれ以外の印象を持ちませんでした」

「うん。オランダだったかデンマークだったか忘れましたけど多分本国でもそう読まれてますよねぇ」

「そうですよね。でも父はそうじゃなかったんです。あたしが母親から絵本を読んでもらっていた時に、普段子育てなんてまったく関心もなかった父が『その話の本当の意味はこうだぞ！』って毎回近づいて来たので、母親が笑いをこらえながらあたしを連れて別の部屋に避難してた思い出があります」

　ププっとまた冴子の笑い声が聞こえて、篠崎はその冴子のタイミングを図ったリアクションにつられて笑いそうになるのをこらえるのが大変だった。斎藤氏をこっそりみると、はたしてお約束のように（しかし当人は本気で）ギヌロっと冴子を睨んでいた。

「お父さんとしては大変に大切な話だったのですね」今度は斎藤氏を見て篠崎がいうと、斎藤氏は「うんうん」と満足そうに頷いて自分でも口を開きかけた。

「それでですね…」

　父親が演説を始めそうな気配を察したなつみ先生が父親を遮って話の続きをする。今度は斎藤氏は娘にギ

ヌロをした。

「簡単にいうと、世の中の常識を暴露して得意になるには愚の骨頂である、ということみたいです。常識というもの、権威というもの、そういうものはいわば必要悪的に世の中や人の心を安定させるために必要で、王様だって自分が裸だって分かっていて、いいかげんくだらないと思いながらも宮廷の儀式やら外交やらパーティーやらやってるんだと」

「おおぅ。面白い考え方です。いや、例えば若者が何でもかんでも見境なく反発するのは確かに度が過ぎると見てられませんね。そういうのはあります」

　篠崎の同意の言葉を聞いて、斎藤氏がニカっと笑った。

　なんだか単純で裏表のない人だなと篠崎は思うのと同時に、いろんな駆け引きがお仕事のメインのはずの外交官に向いてないんじゃないか、と余計な心配もしてしまった。

　と、同時に外交官としての斎藤氏がこの「裸の王様」の要諦とでもいうべきものを外交の真髄であると考えているとしたら、もしかするとそれは外交のプロ中のプロとしての筋金入りの見識なのかもしれないと思った。

　であるならば、本当の斎藤氏というのはいったい…

「だんだん話が見えてきました。それに分かってきたらずいぶん面白い話になりそうな気がします。それがいったい天才論や音楽論にどう結びつくのかな…」

　ここでまた斎藤氏が機嫌の直った表情で口を開きかかったが、「それはですね…」となつみ先生に遮られてしまった。

　斎藤氏は機嫌の良い顔を引っ込めて娘をギヌロと一瞥した。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうなな ゲーテとモーツァルト

「それはですね…岸谷先生曰く、天才とか芸術家とか呼ばれる人がやっていることが、その『王様は裸だ』と指摘した子どもと同じだから」

　なつみ先生がそう言うと、斉藤氏は深く頷いた。岸谷教授の意見ということだったが、そのことに関しては同意しているようだった。

「その通り」斉藤氏がついに口を挟んだ。なつみ先生が心配そうな顔で父親を見る。

「ここまで整理してくれてありがとう、なつみ。まぜっかえしたり誰かを批判したりはなしで、ちゃんと説明するからここからは私にしゃべらせなさい。武志のこととも深く関わるところだ」

　斉藤氏はもう一度自分で頷いた。

　篠崎はこの短時間でずいぶん斎藤氏の印象が変わった。最初はさばけた外務官僚ではなく、もっとお固いお役人さん。次に、武志君とも衝突するだろうなあ…というあまり物分りの良くない常識派の人間、しかし意外ににお茶目なところもあるらしい。

　そして今話をしようとしている斉藤氏はお固い頑固な印象は後ろに後退し、酸いも甘いも深く識った人生経験豊かな紳士といった印象だった。そのどれもが斉藤氏であり、もっと深く付き合えばその一見バラバラに見えるキャラクターも深いところで極めて興味深い形で統一されているような気がした。

「かのゲーテがモーツアルトの音楽についてこんなことを言ってますな。

『いかにも美しく、親しみやすく、誰でも真似したがるが、一人として成功しなかった。いつか誰かが成功するかも知れぬという様なことさえ考えらぬ。元来がそういう仕組みに出来上がっているからだ。はっきり言ってしまえば、人間どもをからかうために、悪魔が発明した音楽である』

こんな感じだったかな」

　斉藤氏はまるで書物を朗読するように浪々と淀みなく見事に通る声でゲーテの言葉を語った。

「ご存知ですか」斉藤氏がにこやかに笑って篠崎に尋ねた。

「いえ、初めて聞きました。もう一度お聞かせいただいてもよろしいでしょうか」

　斉藤氏は頷いてもう一度同じイントネーション、おなじ息継ぎで同じように一同のはらわたに染み通るような印象深い声でゲーテの言葉を朗読した。

　斉藤氏の声も印象的だったし、言葉の内容も何かとても重要なことを言っているように感じられたが、篠崎にはそれを自分から言葉にすることができなかった。

「モーツアルトを悪魔の音楽だと言っているのですね…」

「そう。親しみやすく心地が良い。しかしそれに身を任せるととんでもないことになる。子どもと同じように。そしてある日突然その本性を顕わし、『王様は裸だ』と聴いている者の耳に死刑宣告をする。ゲーテはそう言っているのでしょう。モーツアルトは危険だと」

　篠崎の耳に何か強烈に斉藤氏の言葉が響いてきたが、まだその正体はつかめなかった。何か今まで思いも

よらなかったバラバラの事柄が、斉藤氏の言葉を聞いているうちに急速に明らかになりそうな予感がした。

「正直難しくてよく分からないのですが、もっとお話をお聞かせくださいませんか」

「ええ。いいですよ。たしか岸谷さんとも最初はこんな話をしていて、最初はお互い多いに意気投合していたのでした」

「最初は…？」

「そうなんです」なつみ先生が困った顔で言った。

「最初は岸谷教授も、父の音楽論をすごく面白がって、ご本人のお言葉ですが『敬意を持って』お聞きくださっていたんですが、いつの間にやら大激論になってしまって…」

「あなたともそうならないと良いのですが…」斉藤氏が機嫌よくニヤニヤ笑いながら篠崎に言った。

「いえ私は岸谷教授や、音楽を知らないなんて嘘をおっしゃってたあなたのようには音楽を知りません。だから激論になり様がないので、そこはご安心ください」篠崎がそう言うと、斉藤氏は笑って自分の顔の前で手を大きく振った。

「音楽を語るのに音楽の知識なんてこれっぽっちもいりませんよ。そんなのは音楽に劣等感を持った半可通の音痴がこだわることです。コンサートが終わったあとしたり顔で今日の演奏はどうだったとか技術的なことをあれこれ得意顔で話をするバカどもがいるでしょう。恥ずかしくて聞いちゃいられません。篠崎さんにはそういう偽の音楽談義は必要ないでしょう。あなたはきっとそういうことが不必要なこともお分かりのはずだし。ただ「本物の、大人の音楽」っていうものが何かが分かればいいのです。」

　篠崎は、昨日武志のピアノを聴いて感動した時に「自分はこの武志のピアノの『本物さ』が分かる」と自分で確信した時のことを思い出した。そして、その時思い出したコンサートが終わったあといかにもピアノ経験者といった感じの女性が３２分音符の下降音がどうのと言ってたことをアホらしく思い出したことを今目の前の斉藤氏に見透かされたようで、少し戸惑い、少し気恥ずかしい思いをした。

「じゃあ、わかる範囲でお話のお相手をさせてください」

　篠崎がそう言うと、斉藤氏は愛嬌のある笑顔で何度も頷いた。

つづく

大人のピアノ そのさんじゅうはち 芸術はくだらないし天才は有害である

「モーツアルトの音楽が悪魔の音楽というのは、なんとなくゲーテ的ですよね」

「ほう、どうしてです？」斉藤氏は篠崎の言葉に反応した。

「うーんうまく言えないけど、ゲーテの悪魔って人間を根こそぎ不幸にする邪悪な存在ってわけでもない気がします」

「ああ、なるほど。『ファウスト』に出てくる悪魔なんかはそうですね。あくまでも人間の際限ない、わがままな欲望の手助けをする存在かな。悪魔が人間を一方的にダメにするのではなくて、人間の持っている"どうしようもなさ"みたいなものをもし形にするとしたらこうなるんだよ、って教えてくれる存在なのかもしれません」

「『ファウスト』はまさにそうですね。私はたまたま大学の時付き合ってた彼女が独文で、『ファウスト』のあらすじを教えてもらったんですが、ファウストって人間の真実を追求する高貴な人間なんかじゃまったくないですよね。」篠崎は学生時代を懐かしむような顔で言った。

「そうですよねぇ…。実際『ファウスト』を最後まで読んだことないような文学青年が雰囲気でそういうこと言いそうですけど、ファウストって自分の欲望のために殺人を犯して第二部では物欲や権力欲にまみれ切った専制君主となってさらに周りの人を不幸にして死んで行くわけでしょ。あれをメフィストフェレスがやったというのはおかしいですよ。自分でそういう道を突き進んで行ったわけで、メフィストはその背中を押しただけ、というのが普通に先入観なしに読んだ『ファウスト』でしょう」

「そうですね、メフィストフェレスは愛嬌のあるいいヤツじゃないかと思えるところもたくさん出てきたような覚えがあります。でも悪魔って本当はそういう存在だっていう気もしますね。自分の欲望で人間を不幸にするんじゃなくて、なんていうか人間の鏡みたいな」

　篠崎はしゃべっているうちに自分の考えが見えてくることを願って、言葉を自分の頭から一生懸命引っ張り出していた。

「もともと普通に、普通にというのはまっとうにという意味ですが、生きていくのに不必要なまでの過剰な欲望や人間の真実みたいなものを、疑わなくても済むように常識っていう知恵が生み出されてきたんだと思うんですよ、私は」

「なるほど。その辺りで『裸の王様』とつながるわけだ。せっかく人間の邪悪な不必要な欲望や、知らなくてもいい真実を封印してみんなが暗黙のルールを守っているのに『それは真実じゃない！』と得意になってやっちゃう」

「そうですよ。例えば『何で人を殺しちゃいけないの？』っていう問いもそうです。その問いにきちんと答えるのは実はすごく難しいことです。理屈をつけても説明しようとしても、その当のする側もだんだんとどうもしっくりこないことに気がついてしまう。」

「そういえば、芸術作品では殺人がたくさん描かれますよね」

「そう。無防備にそれを鑑賞すれば、その芸術作品が優れていればいるほど、第一級の天才が作り出したものであればあるほど、それは『何で人を殺しちゃいけないの？』という根源的な問いを私たちに投げかけるでしょう」

「なるほど。それで天才や芸術というものが危険だというわけですね」

「ええ。例えばモーツアルトのオペラを御覧なさい。女を際限なく不幸にしていく『ドンジョヴァンニ』のなんと魅力的なこと、恋人の貞操をお互いの恋人を騙すことで試そうとする『コシファントュッテ』の女の

裏切りのなんて甘美で美しいこと。革命にもつながる身分社会の下克上『フィガロの結婚』の伯爵のなんと無様なこと。すべて今世の中で信じられていることの本当の姿を暴くものばかりです。言わなくてもいいのに、『王様は裸だ』、真の男性の魅力にめざめよ、恋人や夫婦の貞操観念なんて絵空事だということにめざめよ、社会の上下関係なんてフィクションだということにめざめよ！と煽るわけです」

「なるほど…」

「そこで私はこう言いたいわけです」

「はい」

「芸術はくだらない。天才は有害である。と」

「ううむぅ」

　篠崎は斎藤氏の論法にやや強引なところを感じつつも、言っていることは納得できるところもあるな、と感じ始めていた。

つづく

「そうかもしれないけれど、今あるのとは違う世界を見せてくれるって、それだけじゃないと思う」

　なつみ先生がおもむろに話に入ってきた。

「といいますと…」

　篠崎はこうしてなつみ先生と、ピアノを教えてもらうだけでなく音楽談義ができることを心の底からありがたいことだと思った。先生の心のとても大切な部分に直接触れるようなドキドキ感が胸を満たした。

「たとえば今度篠崎さんが発表会でお弾きになる『トルコ行進曲』の第一楽章…」そう言ってなつみ先生はピアノの方に向かった。

　先生は鍵盤に手を触れるとそっと弾き始めた。

　大人のピアノ教室に通うようになってから、篠崎はずいぶんいろんなクラシック音楽をスマホで聴くようになったが、自分が発表会で弾く『トルコ行進曲』の第一楽章がこんな曲だとは今の今まで知らなかった。

　あちゃー盲点だったなあ…と思いながら、篠崎はなつみ先生の弾くピアノに不思議な感銘を受けていた。トルコ行進曲の行進曲の部分は文字通り異国情緒あふれる行進曲だが、その裏にこんな深い情緒的な曲がセットになっていたことを発見したのは驚きだった。

「トルコ行進曲の第三楽章の部分もこの第一楽章も、主題を巡ってイ短調とイ長調が交錯してるところは同じです。だからまったく関連がないわけじゃないんですけど、パッと並べられた時には同じ一つのピアノソナタ第１１番の曲だとは分からないかもしれません」

「先生のおっしゃりたいこととずれちゃう、というかせっかくの高尚なお話の腰を折っちゃうかも知れないんですが、斉藤なつみ大人のピアノ教室の不肖の弟子の我々が勝手にテーマソングにしている西田敏行の『もしもピアノ弾けたなら』も、もともとB面の無名曲だったんですよね」

　篠崎は横長のピアノ用の椅子のなつみ先生の横に「失礼」と言って座って『もしもピアノ弾けたなら』の最初の部分を弾いてみせた。先生のつけている香水が先生の体臭と混じり合って甘く篠崎の鼻腔に吸い込まれた。

「あ、すご〜い。篠崎さん、いつの間にかこっそり練習してましたね」

　なつみ先生がきれいに揃った白い歯をこぼして、小さくかわいらしく手を叩き、我がことのように喜んでくれた。先生が笑うと一緒に小さな八重歯もくすりと笑うようだった。こうやって本人はまったくは意識していないけど、この表情や仕草で次のレッスンまで一週間頑張れるんだよなあ…と篠崎は先生の胸の膨らみをさりげなくチラ見しながら思った。

「もともと西田敏行主演のテレビドラマ『池中玄太80キロ』第二シリーズの挿入歌として作られた曲で主題歌の『いい夢みろよ』のB面として発売されていたんですよ。でも、視聴者からの反響が大きくて、『もしもピアノが弾けたなら』が主題歌に変更されて、A面とB面の立場が入れ替わる形となったんです。モーツアルトのトルコ行進曲の第一楽章と第三楽章をA面とB面みたいに言っちゃ怒られそうですけど、そんなこと思いました」

「へえ、そうなんですか。そういうA面とB面の誕生秘話って面白いですよね」うんうんと頷きながらなつみ先生は言った。

　至近距離で見る先生の大きな瞳に篠崎は吸い込まれそうになる幸福感を味わった。

「他にもB面ヒットって沢山あるんですよ」

「どんなのですか？」

「たとえば…」篠崎は幸せをかみ殺しながら考えるふりをした。実はB面ヒットマニアの篠崎はいくらでもすぐに思い浮かぶ曲があったのである。

「今じゃA面、B面という言葉自体が完全に死語ですけどね。たとえば戦後すぐの『リンゴの唄』これのA面は『そよかぜ』。知ってます？先生」

「知らないです！『リンゴの唄』はこうですね」

　先生がクラシック風にアレンジして『リンゴの唄』を弾いてくれた。こういうところが先生のすごいところだなといろんな意味で篠崎は思った。

「他には…植木等の『スーダラ節』。A面は植木等、ハナ肇とクレイジー・キャッツの『こりゃシャクだった』」

「知らないです！『スーダラ節』はこうですね」

　まさかとは思ったが、なつみ先生は植木等の『スーダラ節』をピアノアレンジして即興でお弾きになられた。これにはソファを離れて食卓に避難していた冴子も目を見張って惜しみない尊敬のこもった拍手をした。なんとさばけた先生なんだろうか。篠崎は感動で涙が出そうになったが、先生は素で楽しそうに弾いていた。篠崎はなつみ先生が女神のように見えてしまった。

「他にはペギー葉山の『ドレミの歌』、青江三奈の『伊勢佐木町ブルース』、『翼をください』『学生街の喫茶店』『港のヨーコ、ヨコハマ・ヨコスカ』『ビューティフルサンデー』『浪花節だよ人生は』『矢切の渡し』『釜山高に帰れ』…」

　恐る恐る曲名を出していくと、驚くべきことになつみ先生はすべての曲を即興でアレンジして弾いてしまった。

「そして、『もしもピアノ弾けたなら』」篠崎は興奮を抑えるために深呼吸をしてそう言った。

　先生はにっこり頷いて少し大掛かりなアレンジで情感たっぷりに『もしもピアノ弾けたなら』を弾いてくれた。

　A面曲が次のオリジナルアルバムに収録されることが多いのに対し、B面曲は収録されるとは限らない。B面曲をオリジナルアルバムに収録しないことが慣例となっているアーティストも多い。そのような場合、アルバム未収録曲がある程度たまったら、B面曲のみを集めたアルバムが制作されることもある。そのようなアルバムは「B面集」「裏ベスト」などと呼ばれる。

　篠崎は世に華々しくは出ないはずだったこうしたB面曲に学生時代から偏愛の念を持っていた。

　斉藤氏は天才の芸術作品を「見なくてもよかった世界を突きつける悪魔の仕業」と言ったが、篠崎はそれ

とある意味とても似ているのだが反対に「あり得たかもしれない、見ることのなかった別の世界」を恩寵のように垣間見せてくれるものだと感じていた。

　生きて行くこともこのB面曲に似てると思っていた。

　A面とB面は何かの拍子でくるっと反転して入れ替わる。人生の成功や失敗もそうしたものだと思えたし、人を理解するということもそうだと思ってきた。きっかけがなければその人の「B面」を一生人は知らないかもしれない。でも、もしかしたらそのB面こそが、その人の本質的な部分なのかもしれないと篠崎は思うのだった。

　たとえばそのことを当の本人すら気がつかないでいたとしても…

つづく

＊『もしもピアノ弾けたなら』誕生のいきさつ、B面文化などについてはウィキペディアの文章を参考にしました（一部流用含む）。

大人のピアノ そのよんじゅう 武志がヤクザに惹かれる理由

　篠崎はなつみ先生とのやり取りでとりあえず整理できたところまで、説明を補足して加えながら斉藤氏に投げかけてみた。

　いわく「見なくてもよかった世界を突きつける悪魔の仕業」という面ばかりではなく、「あり得たかもしれない、見ることのなかった別の世界」を垣間見せてくれるものとしての芸術。その自分が知らなかったものの見方を芸術や天才が切り開いてくれるのだとしたら、自分は武志君のような天才芸術家という存在にはやはり最大限の敬意を払わざるを得ないと言ってみたのである。

　さあ、これから激論が始まってしまうのだと半ば観念しながらしゃべり終えた篠崎に、斉藤氏は意外にも「なるほど」と、あながち口先ばかりとも思えない表情で深く頷いたのであった。

「いや、岸谷さんには悪いけど、篠崎さんの考えの方がずっと芸術の本質をついてると思うな。やっぱり大学で音楽の教師などやっている人間は…」

「お父さん」なつみ先生が渋い顔をした。

「おっと、人の悪口は言わない約束だったな。こりゃすまん。じゃああの時の激論の顛末だけ私サイドから篠崎さんにお伝えしましょう。もちろん岸谷さんには岸谷さんの意見があるでしょうし、この場でそれを表明できないわけですから、今言ったようにこれから私はお話することはあくまでも私サイドの見解ということをお断りしておきます」

「承知しました」

　ややもって回った言い方ではあったが、篠崎はそこに斉藤氏の公平な態度というものを感じ取った。しかし、肯定的にとらえてもらったことにはホッとしたものの、今後どんな展開になるのか期待半分不安半分の篠崎であった。

「簡単にいうと、岸谷さんは芸術、天才という存在に常に危険性などないというご意見なのです。私は到底それには承服できない。芸術は、天才とは一級であればあるほど世界の根本を破壊してしまうような危険性がある。しかも傍観者でいることを許さないような、それを体験した人間の人生を破壊し尽くしてしまわざるを得ないような衝撃がある。それが岸谷さんには理解できないんだ。根本のところで…」

　篠崎には斎藤氏の言葉は、淡々とした言い方の中にもどことなく脱力感が漂っているように感じられた。

「篠崎さんのB面文化論、大変に面白いユニークなお考えだと感心いたしました。それをモーツアルトのピアノソナタ第１１番と結びつけたのもすばらしい」

「いえ、それは単にお嬢さんと話をしているうちに出てきたことでして…」

「ご謙遜を。いや、そうなのかもしれませんが篠崎さんには巧まざる戦略というのかな、無方法の方法とも言うべきものがあって、なんとなくフラフラと歩いているようで自分が目指していたゴールにたどり着いてしまうような才能がおありなんですよ。実は外交交渉でもっとも手ごわいのはその手のタイプの人なんですがね」

　楽しそうに斎藤氏がそう言った。なんだか思わぬ褒められ方をされてしまった篠崎は、ただ手を振って

「そんなことありません」と否定してみせたが、斎藤氏はなおも

「たとえばプーチンなんていうのはそういう意味では御しやすいタイプの人間なんですよ。どこのツボをつけば満足で、どこを押せば怒り出すのかも分かりやすい。ずいぶん以前の政治家となってしまいましたが、そこへいくとゴルバチョフなんてもう、外交の天才でしたね。ルールが全く通用しない。といってアルコール依存症のエリツィンのように支離滅裂というわけじゃなくて、気がついてみると篠崎さんのように自分が言いたかったことがすっと相手に伝わっていたりする。」

「私がゴルバチョフさんですか？ピンときませんが…」篠崎は恐縮を通り越してぽかんとした表情をしていた。

「そう。ゴルバチョフと対等にやりあえるのは篠崎さんか鈴木宗男さんしかいないかもわからん」

　ここで冴子が「あっははー」と手を叩いて大きな声で笑った。

「まあ話がそれましたが、岸谷さんは基本的に芸術というものは人間性を高め、教養を高め、ひいては文化文明の発展に寄与する高尚なものだとお考えなのです」

　口にこそ出さねど斎藤氏は「くだらん、実にくだらん」という顔つきをした。

「まあ立派な考え方で、それ自体はいいんじゃないかと思いますが…」

「くだらん、実にくだらん！」

　ついに斎藤氏は封印していた口癖を大きな声で解き放った。

「そうですか…」篠崎は恐る恐る相槌をうってみた。

「だいたい芸術の高尚さやら教養の素晴らしさやらを云々する人間に、芸術や教養のなんたるかが分かるわけがない」

「…そうですか」

「はい。それは断言できます。彼らはお墨付きのある「人間の真実」なるフィクションをせいぜい遠くから眺めることくらいしかできやしません。外科医が血を見ても大丈夫なように、エセ芸術通は殺人やら不倫、裏切りがあってもびくともしません」

「まあ、身も蓋もない言い方をすればそれこそお話の世界、フィクションですから」

「そうなのです。しかしそこに彼らの悪臭を放つ欺瞞があるのですよ。たとえば彼らは外科医の資格もないくせに勝手に安全地帯から技術作品を上から目線で「鑑賞」しようとします」

　斎藤氏は「鑑賞」という言葉に思いっきり侮蔑の感情を込めて滑稽なイントネーションにして言った。

「しかも、フィクションだとしながらも、一方ではそれを「人間の真実」であるとか声高に言うのです」

「まあ、矛盾してますね、そう言われれば」篠崎はうんうんと頷いた。

「そんなところに真実なんてあるわけないじゃないですか、あったとしてもその真実は「教養」とかいうくだらない色眼鏡を通して見えてくる訳がない」

「おっしゃることは分かりますが…」

「敵討ちでもなんでもいいですよ。映画の中で仇討ちに心底感動したら、実生活でもそれが必要になったら仇討、殺人をやらなきゃ嘘でしょ？」

「…まあ」

「ドンジョバンニの生き方に心底惚れたら女１０００人泣かさなきゃ」

「…まあ、そうかも…」

「でもやらない」

「我々はしょせん小市民ですからねぇ」

「そこです！」

　斎藤氏が大きな声を出してぱあーんと手を打ったので、なつみ先生も冴子も篠崎も驚いて改めて斎藤氏の顔を見た。

「小市民ですからね、岸谷さんも。そういう意味ではヤクザ者の方が正直だし、ヤクザ者の方がはるかに芸術のなんたるか、天才のなんたるかを知っていると言えるでしょう」

　！？ここでヤクザ者の話になるのか？最初から斎藤氏はこの展開を狙っていたのか？篠崎は斎藤氏の真意を表情に探った。

「私にはわかっています。武志が天才であるかどうかはひとまずおいとくとして、武志がやくざ者に惹かれ、その世界に忠義だてしようとしている本当の根深い理由はそこにあるんだ」

　篠崎は目を見張った。終始一貫わからず屋の父親を演じてきた斎藤氏は、もしかすると武志の君のもっとも深い、それこそ本人すら明確には気がついていないようなB面的な深層心理をとっくのとうにお見通しなのかもしれない！？

　それをすべてわかった上で、もしかすると息子の武志君の真の天才性を誰よりも早く、正確に見切った上で一級の芸術の持つ、一流の天才だけが持つ危険性、悲劇性から我が息子を遠ざけようとしたのではあるまいか。

「斎藤さん、あなたもしかして…」

「ここまでこういう話が篠崎さん、あなたとできるとは思っていませんでした」

「はい」

「もう演技はやめだ。みなさんおっしゃるように武志はおそらく天才でしょう。奥様の言葉でいえば身も蓋もない天才芸術家なのかもしれない。でも、だから危険なんです。本人も周りの人間も」

「はい」

「それこそこの非日常的な空間の中で『人間の真実』というものが試されるのですよ」

「我々も…」

「そう、武志は多くの人を巻き込んですでにこうして、外科医の白衣を着る暇も、教養という衣装を纏う余裕も与えずに、我々を舞台の上に引きずりだしてしまったのかもしれない。全員がいかにこの事件に対処するかで、本当の自分がどういう人間なのか否応無くそのことに直面することになるでしょう」

「…怖いですね」

「そう、芸術は、天才は恐ろしい。そんなものは日常生活にはなくていいんですよ…」

　ここまで立ち上がって熱弁をふるっていた斎藤氏は、ここまで話し終わるともう一度ストンとソファに座り直した。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅういち 「あたしが最後は何とかする」

「お父さんたち何しゃべってるんだろうね」

「そうだね、またうちの父親が篠崎さんにややこしい議論吹っかけたりしてないといいんだけどね」

　二人は篠崎邸から十分ほど駅と反対側に歩いた、住宅街のブロックの一角にある台湾料理屋のテラスでタピオカを飲んでいた。駅に向かう大通りから一本外れた道にあるこの店は、台湾らーめんやジュースなどを出すいわゆる台湾屋台だった。屋台と言っても日本の屋台のようにおじさんがリヤカーみたいな移動式店舗を引っ張るあの屋台ではなくて、一軒家の一角に客用のテーブルを並べたガレージ風のお店だった。朝子は大学のレポートをまとめる時など自宅の部屋で煮詰まった時によくここに来る。

「でもさ、篠崎さんてなんかいいよね」

　武志がタピオカのコップの底の粒つぶをぐるぐるストローで追いかけながら、素のまま朝子にそう言った。

「え」

　朝子はドギマギする。肩に少しかかった内側にゆるくウェーブさせた髪を無意識に撫でながら、テーブルの下に隠れた白い麻のロングスカートにくるまれた足をスカートの中でそっと組み直す。朝子が本人も気がついていない緊張した時のくせである。

「裏表なくて飄々としていて、それでいて時々ズバッと核心をつくようなことさりげなくいう」

　なんのことだろう…あたし武志さんの前では緊張してほとんど何もしてないと思うんだけど…。朝子が期待半分不安半分の顔をしてチラッと武志の表情を上目遣いにとらえる。武志はタピオカと一緒に注文した骨つきの鳥の唐揚げを、少し長めの台湾箸で口に運んでいる。

「なんかさあ、年齢不詳のおじさんキャラっていうのかな、いっぺんに好きになっちゃったよ」

　あれ、なんだお父さんのことか…。朝子は内心のガックリを隠しながらも、「篠崎さん」「好き」という自分には向けられていなかった単語になお心が騒ぐのを感じていた。「篠崎朝子さん好き」朝子の頭の中では勝手に言葉が化学反応を起こしていた。

「なんかさ、調子いいでしょ、うちのお父さん」

　気を取り直すように、朝子は底に沈んだタピオカをストローで上からつんつんと突き刺す仕草をした。

「篠崎さんとは会ってまだ数日なのになんだかそんな気がしない。何でも話せそうな気がする。飾らないキャラの安心感のせいでこんな状況でもこっちも落ち着けるよ。今回のことはほんと感謝している」

　武志の言葉はまた自分の父親に向けられた言葉であることを、今回は朝子は誤解はしなかった。でも「父じゃなくてあたしは違うの？」という気持ちでいっぱいになってしまった。

　そんな気持ちでまた無意識のうちに髪を手でとかし、薄手のストッキングにパンプスを履いた形の良い脚を組み替える朝子の姿は、テラスの他の男性客がちらっと盗み見るようなほど魅惑的であった。

　もちろんテラスの男性客の一人である武志もまた、実はこの朝子の魅力にさっきから取り憑かれていたのだった。それをストレートに言葉にしないのは、今こうして二人でいることが自分の引き起こした事件の渦中の一シーンにすぎないこと、もっとはっきりいえば一週間限定の束の間の小さな思い出にすぎないという意識のためだった。

　しかし逆にその意識が、「こんなことをしている場合じゃない、こんなことをしていること自体が自分が今迷惑をかけ、その迷惑にもかかわらず自分のために動いている方達に申し訳ないことなのだ」と思いつつ、突発的に気持ちが抑えられれず隠れて朝子と口づけをさせててしまったりする。今も目の前の朝子に対して、武志は場違いな性欲さえ本当のところ感じているのだった。

　スカートの裾から控えめにのぞく形の良いふくらはぎからは、ロングスカートの上から目でなぞるようにしてもバランスの取れた魅惑的な足の付け根の形が容易に想像できる。無造作に着た薄水色の洗いざらしたような生地のデニムのベストは前絞りにされて、その豊かな乳房の下で優雅なシルエットを作っている。胸もとに見えるタピオカを飲むたびに微妙に動く鎖骨は優しく膨らんだ朝子のなで肩をキュッと引き締め、首筋からうなじのダイナミックなラインを作っていた。その一連の統一美が時々朝子の見せる髪をかきあげる仕草によって、つま先から髪の毛の一本一本の先にまで若々しい生命力を与えていた。

「もちろん朝子さんにも感謝してる。それに…」

「それに？」

　朝子の少し上向きにめくれた唇の稜線が不安気に崩れ、自分に向かって次の言葉を促すために開かれるのを見た瞬間、武志は抑えきれなくなって思わずテーブルの上の朝子の手を握った。

「好きだ。どうしようもないくらい好きなんだ。もうこのまま時間が止まるか、そうじゃなかったら何もかも捨てて二人で逃げ出したいくらいだよ」

　武志はこの時もちろん冗談めかしてこの言葉を言った。

　いや、そのはずだった。責任感の人一倍高い武志は自分自身一週間後に南方の前に出頭し、そのまま最悪この世と永遠に縁を切ることになるかもしれないことの覚悟はできているつもりだった。

　しかしこの言葉を口にしてみると、その言葉は言霊となって武志と朝子に憑依した。武志が言葉をおしまいまで言い切るまでのほんの一瞬の間に、言霊は武志の言葉から冗談のニュアンスをすっかり脱色してしまっていた。

　武志は自分の言葉にそのつもりだったはずの冗談の要素が抜け落ちてしまったことに戸惑い、朝子は思いも掛けない武志の直截な愛の告白に気絶するほど心が震えた。これまで親の目を盗んで何度か武志と唇を重ねはしたが、その口づけの切なさの中には、お互いが好きだという愛の気持ちの高ぶりの他にこの一週間しか残された日がないという現実逃避の願望もあったように思う。
　不安の吐息を唇を重ねることで閉じ込め、濃厚な接吻で息ができなくなった苦しさを、その唇で繋がったお互いの体の中の酸素を求めるようにさらに激しくくちびるを吸いあった。武志は朝子の腰に無意識のうちに手を回し、朝子は自分の乳房を乱暴に武志の胸に押し付けた。それは両親が二階で就寝している家の中であったり、深夜の家の前の路地であったりしたけれど、もし状況が許されるならそのまま押し倒されたいような動物的な性欲を朝子は自分の子宮に感じた。
　武志と体を離し、別れたあとベッドに入っても体の火照りを抑えることができず、朝子は唇を硬く結んで武志の名前を脳裏で叫びながら、自分の指を下着のその下の自分の火照りの内奥に滑らさざるを得なかった。

　今武志の言葉を聞くと、一瞬またその動物的な体の疼きが体内の奥にじんと熱く感じられた。しかし不思議なことにその肉体的な愛欲の感覚は程なくすっと消え、それと入れ替わるように子供に頃だけ感じたような、そう、遠足やピアノの発表会の前の晩のような小躍りしたくなるような胸の高鳴りがやってきた。

「いいじゃない。駆け落ち」

　朝子は自分が今、変な例えだが少年のような、そう、マークトウェインの小説のトムソーヤのような顔をしているのではないかと思って可笑しくなった。

「ああ、何もかも捨てて地獄に堕ちちゃおうか」武志もおかしそうに笑った。

　二人は高い声で笑った。そんなことはできやしない。武志の性格から言って…。朝子はそう確信しながらも一週間後の死刑宣告を逃れるためならば、駆け落ち以上のことだってなんだってやりそうな自分を今はっきりと自覚した。

「あたしが最後は何とかする」

　朝子は硬い決意で心に誓った。どんな手を使ってでも武志さんのことを守る。武志がそれを望まなくても、自分の親の信用を失っても、最後に武志と別れることになっても…。

「絶対にそうする」

「え？今なんか言った？」

　最後まで自分の心の中だけで密かに固い決意でつぶやいたはずだったが、武志は笑の続きの中でそう朝子に尋ねた。

「ううん。何も」

「そっか」

　二人はまだしばらく可笑しそうに笑っていた。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうに 武志と朝子が失踪！？

「遅いわね、武志さんも朝子も」

　冴子はいつの間にかソファに場所を移し、斎藤氏とも仲良く雑談していた。

　最初この二人はゼッタイに反りが合わないなと思っていた篠崎でありなつみ先生であった。しかし斎藤氏が武志の天才を気がつかぬふりの演技をやめ、それとともにかなり地金を開けっぴろげにし始めたことで、冴子と急速に打ち解け始めたのだった。斎藤氏は冴子のパンチの効いた喋り方を気に入ったようで、話題は外交のオフレコばなしや朝子や武志のことなど多岐に渡った。

「そうですね」

　斎藤氏も腕時計で午後８時を確認すると、首を傾げた。なつみ先生も不安気にリビングの時計を見る。時計はやはり８時を回っている。二人が出て行ったのは３時過ぎだ。冴子が朝子のケータイに、斎藤氏が武志のケータイにつないでみたが、いずれも「電波の届かないところにあるか電源が入っていないため」つながらなかった。

「私ちょっと見てきますよ」

　篠崎がそう言って立ち上がると、冴子も一緒に立ち上がろうとした。

「いや、お前は二人が帰ってきた時いた方がいいから俺が一人で行ってくるさ」

　リビング入口のコート掛けの薄手のセミロングのジャンパーを引っ掛けながら篠崎が冴子に首を振ると冴子は「そうね」と短く答えた。

「じゃ」

「待ってください」

　行きかけた篠崎に追いつこうとなつみ先生がソファを立ち上がった。心配そうな顔で篠崎を見つめる。

「分かりました。じゃあ一緒に行きましょう」

「はい」

　二人は玄関を後ろにした。

「すみませんね、篠崎さん。金曜のレッスンあたしがすっぽかしてから、なんだかこんなところまで急にものごとが進んじゃって、本当に申し訳ありません」

　なつみ先生は、ずっとそのことを改めてきちんと篠崎に言いたかったようだった。実際、自分の父親との話も含めて、ピアノ教室の生徒として一年弱の付き合いはあるもののここまで親身に家庭内の問題に関わってくれるとは思ってもみなかった。

「いえ、いいんですよ。なんつっか、お父様もおっしゃってたようにこれが武志君の天才性っていうのかな、人を傍観者じゃなくて舞台の上の当事者にしてしまう力だと思いますよ、これはやっぱり」

　篠崎はとりあえず駅の方向に小走りに歩きながら、その横を歩くなつみ先生に語りかけた。

「はあ」

「お父様言ってたじゃないですか、ドンジョバンニの生き方に惚れたら女１０００人泣かさなきゃ嘘だって」苦笑しつつ篠崎は楽しそうに言った。

「はあ、なんかたとえ話がヘンなんですけど」

「いえ、よく分かりますよ。一昔前ウーマンリブだとかフェミニズムがはやったでしょ。あれが私は苦手でしてね。男女同権といいながら肝心のところで女の弱さ武器にする人も中にはいたじゃないですか。あれは欺瞞だ。本人が気がついてないからよけいタチがワルイ」

「はい」

「お父様の言ってたのはそれと同じですよ」

「はい」

　チラと横をみると、なつみ先生はうんうんと首を動かしながら歩幅の大きな篠崎について行くため必死に歩いている。篠崎は早く二人を見つけたいと思うはやる心を少しだけセーブしてなつみ先生の歩幅に合わせた。

「同じというと…」

「芸術作品を見てそこに描かれている非日常的な題材に感動する。殺人でも不倫でも戦争でもいいですが」

「はい」

「しかしそういうのに感動した人も実生活では市民の良識、弱者としての市民を隠れ蓑にします」

「そうですね」

「お父様はそれを欺瞞だという」

「はい」

「男女同権を声高に主張するならば、少なくとも女を武器にしちゃいけない。同じように当事者であることを突きつけられた時に市民の論理を当然のように持ち出す人間は"芸術に感動する資格がない"ってことをお父様はおっしゃりたいんだと思います」

「"芸術に感動する資格がない"っていうのはずいぶん厳しい言い方ですね」

「ええまあ、これは私が今勝手に思いついた言葉ですが、逆方面からいえば、芸術作品の中に人間の真実を観た！と言い切れるならば、それを真実だと感動してしまったのならば、その真実は映画館を出たらおしまい、劇場を出たらおしまいではなくて、できるできないの程度の差こそあれ、なんらかの日常生活とつながりを持たせざるを得ないでしょう。いや、それが超一級の芸術に感動してしまった人間の芸術に対する責任の取り方でしょう。お酒飲んで酔っ払うようにだらしなく芸術にカンドーしたとかですまない部分って大事だと思うんです、私」

「難しいけど、それはそうなのかも…」

「たとえば人命救助をテーマにした映画、そうだなハリウッドの『炎のメモリアル』に感動して映画館を出てきた映画青年、演劇青年、文学青年がいたとします」

「はい」

「目の前を暴走トラックが突き抜けようとした」

「こわい」

「ええ、こわいですとも。そこで自分の身の危険を顧みず、目の前のお婆さんや女子供を命張って助けることができるかどうかでしょ」

「なるほど」

「芸術作品に教養だなんだ、人間の真実がなんちゃらとかいうヤツに限って人命救助どころかお婆さんや突き飛ばして自分だけ助かろうとすんじゃないのかい？お父さんの言いたかったことはそれです」

「好意的に解釈していただきありがとうございます」

「今回のことも、市民の論理からいえば最初お父さんがおっしゃったように直ちに警察に連絡すべき事柄だったでしょう」

「はい」

「でも誰も強硬にそうはしなかった。お父様自身も我々がそういうエセ市民かどうか試すつもりだったのか、最初は反対のことを主張してましたが、たぶんはなっから警察沙汰にはしようとなんて思ってなかったと思います」

「はい。今は私もそう思いました」なつみ先生は心なしか嬉しそうだった。

「たぶん「人間の真実に向き合った時にあっさり警察に任せるという市民の論理は、本物ですか？テキトーに芸術を上から目線で「鑑賞」しながら、都合の良い時だけ弱者の論理を振り回す御都合主義なんじゃありませんか？」お父様はそういうことを言いたかったのでしょう」

「そうなんですね、たぶん…ずっと以前から。きっと、あたしが母親に『裸の王様』を読み聞かせてもらっていた頃から。それが武志に伝わったら…」

「これまでの父子の諍いなど消し飛びますよ。それどころか武志君は斎藤さんを尊敬すると思いますよ」

「だといいのですが」

「必ずそうなります」

「はい」

　二人は通りをキョロキョロ見渡しながら、ファミレスや喫茶店を見つければそのドアを開け、店員に頭を下げつつ中の客席を見渡し、また小走りで武志と朝子の姿を追った。二人は駅の向こう側に抜け、そしてもう一度篠崎邸のある側に戻ってきた。

「いない…」

　さすがに篠崎も不安になってきた。まさかとは思うが、あのまま二人して何処かに逃亡してしまったのだろうか…。口にこそ出さねど、なつみ先生も同じことを考えているようだった。たぶん篠崎について来たいと言った家を出る時から先生はその可能性で不安を隠せない表情をしていたのだろう。

「分かった！あそこだ」篠崎が声を上げた。

「どこですか」

「我々が今探したところとちょうど反対側です。最初にそこに行ってみれば良かった」

「どこですか」

「台湾屋台です」

「行きましょう」

「はい」

　二人はしゃべるのをやめ、駆け足で篠崎邸の方へ向かった。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうさん 警察沙汰

「なつみ先生、あそこです」

「はい」

　１００メートルほど先に店が見えた。時間にして十分弱。ノンストップで走るのは中年の篠崎にも普段運動していないなつみ先生にとってもしんどかった。

　二人は息を整えながら、とっぷりと暮れた住宅街の路地にある台湾屋台へのラスト１００メートルを並んで歩いた。程なく入り口と、屋台の店内が見え始めた。
　ところがいつも武蔵小杉駅の終電時間、つまり深夜０時を回るまで煌々とついているはずの店先の黄色い看板のネオンは明かりが落とされていた。

「ちょっと様子が変だな」

　篠崎は入口付近にあるその黄色い看板が、何かで叩き壊されたようになっているのを発見した。

「あ、そこ入らないで」

　店に入ろうとするとなんと事件現場保存のため黄色いテープが貼られており、大柄の若い制服の警官が鋭い目つきで篠崎を制した。

「何かあったんですか？」

　なつみ先生が恐る恐る後ろから警官に尋ねると、警官はやはり鋭い視線を向けたものの、少し表情を和らげて

「誘拐事件がおきました」と短く答えた。

「誘拐事件！誰が？」

　なつみ先生がなお事情を聞こうとすると、若い警官は店の奥の方をチラッと見た。どうやら事件は店内で起きたらしく、上役の刑事たちはそちらに行っているらしい。無駄口を叩いていると思われると面倒だと思ったのだろう。とりあえず中の奥の方にいるらしい刑事たちの姿が見えないことを確認して、制服警官はなつみ先生に小声で話をした。

「二十歳くらいの若いカップルです。１０名ほどの黒ずくめのヤクザ者に囲まれて拉致されました」

「いつのことです」篠崎が身を乗り出した。

「１０分ほど前です」

　警官はなつみ先生に応えた手前篠崎一人を無視するわけにもいかず、最小限の返答をした。そういえば、走ってここに向かっている途中で短い間だったがパトカーのサイレンが聞こえた。まさか自分たちの目的地にパトカーが向かっているとは思わなかったが、店の駐車場の奥にはサイレン音を消して赤いランプだけを回転させている覆面パトカー数台が見えた。

「男女のカップルって、まさか女の方はこの人ですか」

　篠崎はケータイに保存してあるかなり昔の朝子の写真を呼び出して警官に見せた。なつみ先生も同じくケータイを取り出して武志の写真を呼び出そうとしている。

「いえ、当然自分は通報を受けて事件後にここに到着しましたので被害者の顔は分かりません。お知り合いの方の可能性がありますか？」

　背の高い警官はやっと篠崎たちが野次馬ではないことを理解し、鋭い目を奥に引っ込めて少し膝を折って篠崎となつみ先生に語りかけた。

「もし男性がこの写真の人物だとしたら私の弟です」なつみ先生はケータイを警官に見せた。

「さっきの写真は私の娘です」篠崎が焦ったそうに店の中を覗き込みながら言った。

「失礼いたしました。そういう事情ならば中の刑事に繋ぎますので、こちらからお通りください」

　警官はそう言って、ピケの片側をはずして二人を手招きした。警官は二人に先行して少し急ぎ足で歩き、現場検証を指揮している鑑識官に敬礼をしてから刑事の名前を呼んだ。億劫そうな風情で奥から出てきた刑事に小声で耳打ちをしてちらっとこちらを見る。おそらく二人が被害者の知り合いである旨を伝えているのだろう。

　刑事が近くにきた。形ばかりの警察手帳の開示があったが、なぜか刑事は二人を被害者の身内としての同情の眼差しでは見ずに、むしろ犯罪者に向けるような厳しい視線を投げてよこした。

「被害者のお身内の方であると…」

「はい、おそらく」篠崎が答え、なつみ先生が横で頷いた。

「うーん」刑事はなおも厳しい視線で二人を舐め回すように見た。

「あの…」

　態度に不信感を持ったなつみ先生が抗議の眼差しを向けると、刑事はやっとすこしこわばった顔を崩した。

「いえね、どうも状況を整理しますと、ある１０名ほどの暴力団の集団が二人を拉致しようとしたのを、別のグループの暴力団、こちらは二人だったらしいのですがその二人が拉致を阻止しようとし、激しい乱闘の末多勢に無勢でカップルは拉致されてしまったということなんですよ。失敗した方の二人も逃亡しました」

　刑事は二人に再び厳しい視線を向けた。

「単刀直入にお伺いいたしますが、あなた方を含めて被害者は暴力団となんらかの関わりがあると考えてよろしいですか」

　夜の闇の中ではあったが、篠崎は自分の顔が蒼白になっているのをはっきり感じた。かなりまずい展開になってしまった。こういう事情だとわかっていればこうしてのこのこ中に入ってくることなどせずに、ケータイで蜷川会の石橋に連絡を取るべきであった。

　このまま事情聴取されてしまったら篠崎はまだしも、なつみ先生は尋問のプロにかかって要らぬ事までしゃべってしまいかねなかった。

「詳しくくお話をお聞かせ願いましょうか」

　刑事は二人を覆面パトカーの方へ誘った。

「ヤバイな」

　篠崎はひたいから冷や汗が落ちるのを感じた。このまま別々の覆面パトカーの後部座席に座らされたら、一人にされてしまったなつみ先生が全てをしゃべってしまうだろう。その前に手を打たなければならない…。

「あ！」

　なつみ先生が突然バランスを崩して前のめりに倒れそうになった。篠崎がなつみ先生の靴を闇に紛れてそっと踏んだのだった。

「大丈夫ですか」

　篠崎が助け起こそうとする。

「<さっきのケータイの武志君の写真じゃなく別の写真を刑事に見せて下さい。弟さんが被害者だと悟られないように>」

　篠崎はなつみ先生の耳元に厳しい声で短く囁いた。

　なつみ先生は何を言われたのか意味がわからなかったようだったが、とりあえず小さく頷いた。

「大丈夫ですか」刑事がこちらを向いた。

「ええ。大丈夫です。ちょっとめまいがしてよろけてしまって」

　篠崎が足をわざと踏んだのになつみ先生は気がついていたはずだが、なつみ先生ははっきりとそう刑事に答えた。篠崎は自分の企みがなつみ先生に伝わったことにひとまず胸を撫で下ろした。

「じゃあ、狭いのでお二人別々にお話をお聞きします」

　案の定刑事は二人をバラバラにして事情聴取しようとした。さっきの小声の打ち合わせがなければ、ここで背景の蜷川会がらみのゴタゴタがすべて表に出てしまうところだった。

　別れ際になつみ先生は篠崎の目をしっかりと見つめた。

「大丈夫だな」

　篠崎はとりあえず安堵して、新顔の刑事に促されるまま、さっきの刑事となつみ先生が乗り込んだ隣の覆面パトカーの後部座席に滑り込んだ。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうよん 事情聴取

　事情聴取は三十分ほどで終わった。

　篠崎はなつみ先生に伝えたように、自分でもさっきの黄色いテープのところにいた警官に見せた写真とは全く違う、会社の同じ部署の女の子の写真を見せた。すぐに覆面パトカーの後部座席篠崎の隣に店のスタッフが呼ばれ事実確認をしたが、当然店の者は「この人ではない」と首を振った。

　若い刑事は予想していた話の展開と違ったことに首を傾げたいような表情をし、車を出て隣のなつみ先生の乗った覆面パトの上席の刑事の指示を仰ぎに行った。車窓越しに様子を見る限りでは、向こうの刑事も「分からん」と言った表情で首を横に振っていたので、なつみ先生もうまいこと別の男の写真を見せて捜査を撹乱できたようであった。

「今日のところはお帰りいただいて結構です」

　車に帰ってきた若い刑事はなおも不審そうな顔を篠崎に向けたが、それが上司の指示だったのだろう。向こうでもなつみ先生が車から出てくるところだった。

「念のためにご連絡先を」と言われてしまったので、ここは嘘をついたりすると近所のことだし面倒なことになると判断した篠崎は住所を正確に伝えた。警察手帳にメモを取る刑事は住所の町名がこの事件現場とまったく同じであることに気がつき、またチラッと意味ありげな顔を篠崎に向けたが特に何も言わなかった。

「いや、お手間を取らせました。本日は結構です」

　年配の刑事がなつみ先生と一緒に車から出てきて篠崎語りかける。なつみ先生を見ると少し疲れた顔をしていたが、さっき別れる間際に寄越したようなしっかりとした目で篠崎見た。篠崎はほっとした。

　黄色いテープのところまで二人の刑事が送ってくれたが、帰り際に愛想笑いをしてこう言った。

「篠崎さんはこのすぐご近所にお住まいのようですから、またもしかしたら事件のことで御宅にお邪魔するかもしれません」

　近所の人間に朝子のことで聞き込みをやられたら、さっきの虚偽の事情聴取が一発でバレるな。篠崎はそう思ったが、その時は仕方が無い。今はとにかくまず蜷川会の石橋に連絡が取れる状態になったことだけでもよしとしなければならない。刑事もこんなに早く二人を解放したのも、すぐに自分たちで裏を取るつもりだったのだろう。

「お疲れ様でした」

　角を曲がって刑事たちが見えなくなると篠崎すぐになつみ先生に声をかけた。

「はい。うまく行きました。最初篠崎さんがあたしの靴をわざと踏んだ時には事情が全くわかりませんでしたが、すぐに飲み込めました。よかった。あたしはどっちかというとこういうことにトロイほうだと思いますので」

　なつみ先生は事情聴取が無事終わり、刑事の姿も視界から消えたことで安堵感からかそう言って、わずかに口元をほころばせた。

「いや、ほんとお疲れ様でした。しかしはっきりしたのは、どうも約束を破って武志君が殴った側の組織が

南方さんの組織を差し置いて二人を拉致したようですね」

　篠崎は沈痛な面持ちで言った。ついに武志のみならず娘の朝子を直接的に巻き込んでしまったことになる。

「武志のせいでこんなことになってしまいまして、何と言って良いやらお詫びのしようもございません」

　なつみ先生もまた篠崎以上に沈痛な顔で言った。

「いえ、それよりみんなで善後策を検討しましょう」

　ここまで話し終わると、ちょうど篠崎邸の玄関についた。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうご 石橋の動き

　玄関の鍵を開け、家に入ると冴子と斎藤氏が玄関まですっ飛んできた。

「お疲れ様です。何か起きましたか」

　斎藤氏は二人っきりで帰ってきたことで、事態の容易ならざるを知ったようだった。

「いなかったの？二人とも」

　冴子は顔色が変わっていた。当然四人で帰ってくるものだと信じて疑わなかったらしい。

　篠崎はなつみ先生とともに厳しい表情で頷いてとにかくリビングに入った。

「二人とも武志君が船橋の店で殴った方の組織に拉致された。朝子の行きつけの台湾屋台に行ったらやっぱり二人が来ていたらしい。そこで二つの組織の乱闘があった末に拉致されたらしい」

　冴子は真っ青になった。これまでこの事態をどこか現実離れしたこととしてきた自分たちの危機感のなさが、朝子の拉致という自体に繋がったのではないか。冴子は今までのような軽口をきいてきたような雰囲気は何処かに消え去り、一人の母親としての表情になっていた。

「申し訳ございません」

　斎藤氏もまた、今度こそ自分の息子が他人を現実に巻き込んで身体の危機にさらしてしまったことを重く受け止めているようだった。

「あなた、警察には何て言ったの」

「警察にはとりあえず人違いで無関係だということを伝えた」

「どうして、正直に言って保護してもらえば良かったじゃないの」

　なつみ先生が下を向いた。篠崎の意向で拉致された被害者とは無関係という証言をしてきたが、果たしてそれで本当に良かったのだろうか。

「しかし身柄を拘束されているわけだから警察だってどうしようもないだろ」

　篠崎そんななつみ先生に申し訳なく思いながらも冴子に言った。

「それに向こうの屋敷玄関で『そんな人間はいない』と言われれば、家宅捜索の令状を裁判所に発行してもらわない限りそこから先に進めません」斎藤氏が冷静に言った。

「じゃあ、どうするの」

　冴子は掴みかからんばかりの表情で篠崎に迫った。

「石橋さんに連絡をとってみる。これは明らかに南方さんの組織に対する信義の問題だから、向こうでも黙っていないはずだ」

「でも…」

「とにかく再度警察に事情を話すにせよ、まずそれをやるべきだろう」

「冴子さん、うちの息子のせいでこうなってしまったわけなのですが、まずは篠崎さんのおっしゃる通りそのラインで事情を確認しましょう。南方組も二人の人間が関わったわけだし、次の対応をしているはずです」

　斎藤氏も篠崎に同意した。

「でも…」

　冴子はなおも食い下がった。

「とりあえず石橋さんのケータイ聞いてるからそこに今すぐかけてみるよ」

　まさに篠崎が二つ折りのケータイ開けた瞬間に着信があった。

「石橋さんからだ」

　発信者通知番号をディスプレイを確認した篠崎が言った。冴子、斎藤氏、なつみ先生の視線が篠崎に集まる。

「もしもし」

　篠崎は三人に対して深く頷いてから、石橋氏と話し始めた。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうろく 駆け落ちの真相

「え、なんですって…。それじゃあ武志君と朝子が台湾屋台で駆け落ち、いや逃亡の計画を話し合っていたんですか？」

　断片的に話がみんなに聞こえるのはかえって良くないと思い、篠崎は務めて石橋のいうことに「はい」「はい」と相槌だけ打ってきたのだが、向こうの組織が拉致という直接行動に出た理由を聞くに及んでたまらず大きな声で聞き返してしまった。

　斎藤氏、なつみ先生、冴子が一斉に篠崎を驚きの表情で見る。

「はい」

　篠崎は、あとでじっくり話すからという意味で相打ちを打ちながらみんなに頭を下げた。

「はい、ええ…なるほど」

　石橋氏の声は篠崎のケータイを通じては全く聞こえてこない。「そんなばかな」「なぜ」「何かの間違いだろう」三人は小声であれこれ推測で話し始めた。

「はい。え？南方さんが…」

　三人は「南方」という名前が聞こえてすっと口を閉じた。

「分かりました。こちらは構いません。はい。よろしくお願いいたします」

　電話を切った篠崎は一同に頷いて、「ソファに行きましょう」と小さく言った。

「『二人で駆け落ちの相談』って聞こえましたが…」

　斎藤氏が電話を聞いていた三人代表してまず聞いてきた。

「はい。まず状況を整理しますと、南方組に主導権を渡しながらも向こうの組織も、万が一武志君が逃亡したりしないように、配下の者を武志の監視役として密かに配置していたらしいのです」

「それは、まあありそうなことです」

　斎藤氏がもっぱら聞き役で、なつみ先生と冴子は質問を斎藤氏に託して頷きながら篠崎の話を食い入るように聞いている。

「あるいはこの家にも仕掛けられているかもしれないと石橋さんが言っていましたが、組織は台湾屋台のアルバイトの店員を買収して、注文した料理を届ける時に二人が座っていたテーブルに小型の盗聴器を置いたそうです」

「うーむ。そこまで…」

「はい。一方南方組でもこれは石橋さんがこの家で言っていたように、独自に武志君を監視していました。こちらは盗聴器を使わずに、武志君が知らない顔の堅気っぽく見える組員が二人のテーブルの横にいたそうです」

「そうでしたか」

「はい、そこで南方組の二人も確かに武志君と朝子が『駆け落ちでもしようか』と話をしているのを聞いたそうです」

「ばかな。朝子さんを巻き込んで早まったことを…」

　斎藤氏は吐き捨てるように言い、なつみ先生は顔を覆った。冴子は大きくため息をついた。

「でも、少し安心してください」

　三人は反射的に沈みきった顔を一斉に篠崎に向けた。

「実際に『駆け落ちでもしようか』という会話はあったそうなんですが、二人とも笑いながらジュースを飲みながら楽しそうに喋っていたというのです。」

「じゃあ、冗談で？」

　冴子がなつみ先生と顔を見合わせながら小さな希望にすがるように篠崎に尋ねた。

「実際に横にいた南方組の二人はそうとっていたようです」

「じゃあ…」

「ええ。おそらく感度のあまり良くない盗聴器を通して離れた場所で音声だけ聞いていた向こうの連中は、駆け落ち、逃亡の密談だと勘違いして…」

「じゃあ、誤解だったんだ」

「少なくとも石橋さん、南方さんはそう捉えているようです」

　一同にやっと安堵の空気が流れた。

「そのあたりの話を明日、実際に石橋さんと南方さんが向こうの組織に出向いて話をつけてくるそうです」

「良かった」三人はやっと心の底から胸を撫で下ろした。

「それに当たってですね…」

　三人はここで終わりかと思ったところ、まだ肝心の篠崎の緊張の面持ちが溶けていないのに気がついて、再び唾を飲み込んで篠崎の言葉を待った。

「当初の話と違ってしまい、そちらさんには大変なご心配をかけたということで、南方さんが挨拶にきたいということなんです」

　一同は静まり返った。

「蜷川会幹部の南方という人がここに…？」冴子はなぜかキョロキョロ周りを見渡した。

「安心しろ。冴子となつみ先生はもし怖かったら同席しなくてもいいよ。挨拶したいというのは俺と斎藤さんにだそうだ」

　斎藤氏は深く頷いた。なつみ先生と冴子は少し落ち着いて小さく頷いた。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうなな 寝室のB面会話

　南方氏と石橋氏は明日話をつけに行き、武志と朝子を連れて夜早いうちには篠崎家に伺いたいということであった。

　金曜日の夜から始まったこの事件は明日で早くも四日目。７日のリミットのうち半分が過ぎることになる。

　明日月曜日は篠崎も会社だし、斎藤氏も霞が関に登庁しないといけない。なつみ先生も昨日は思いがけず泊まりになってしまい着替えなどもしたい。

　斎藤父娘は明日夜もう一度連絡して状況を確認の上、ここに来て南方氏一行を待つこととした。

　事件の渦中の者たちの不思議な連帯感が篠崎、斎藤氏、なつみ先生、冴子に生まれていた。

　玄関を出て小さな門のところまで二人を見送ると、まだ十時前であることを確認して篠崎は斎藤なつみ門下生の神田と平林に連絡を入れた。

　もう少し状況が落ち着いてからいっぺんに話をした方がいいかな、と思いつつも連絡をしたのだが、神田はも平林も「こっちから連絡しようかと思っていた」と開口一番に言ってくれた。経過報告の連絡を入れて良かったし、朝子のことをを心配してくれる二人には勇気付けられた。

　石橋氏の話では拉致当初のようには心配しなくても良さそうなのだが、それでもこんな形で娘と離れて一日を過ごすのはもちろん初めてだし、この数年今まであまり口も聞かずに過ごしてきたことが嘘のように、金曜の晩からたくさん話をした朝子が今ここにいないことは、時間が経つにつれてじんわりとこたえてきた。

　その重苦しい気分を神田と石橋はずいぶん軽くしてくれた。陶芸教室の仲間にこんな話をするわけにもいかない冴子は、斎藤がピアノ教室の仲間に慰められているのを横で聞きながら自分も勇気付けられているようだった。二人がそれぞれ「奥さんによろしく」と心から言ってくれたのを冴子に伝えると、冴子もその言葉を単なる電話を切る時の礼儀としてではなく目を閉じて感謝していた。

「明日は普通に会社に行くの？」

　二階の寝室のツインベッドにそれぞれ入り、疲れていたので早めに電気も暗くしたのだが、当然二人ともすぐには寝付けなかった。

「ああ。いきなり朝電話で会社に事情を話すというのも何だし、明日はとにかく夜までは南方氏の事態収集を見守るしかないからね。斎藤さんも言っていたように明日は戦中の小康状態みたいなものだから、なるべく普通に過ごしておいた方がいいだろう」

「斎藤さんも『今週いつでも急な休暇が取れるように明日は役所でいろんな段取りをつけておく』って言ってたわね」

「ああ。おれもそうしておかないと。一応小さな代理店とはいえ、宣伝部長だしなオレ」

「あら！？あなた宣伝部長だったの？いつの間に」

　薄明かりの中で冴子が冗談ではなく言った。

「いつからって、今の会社に転職してからずっとだよ。電報堂のご経験を存分にということで最初っから部長さ」篠崎は仄暗く灯りを絞った天井のシャンデリアを見ながら小さく苦笑した。

「あら、知らなかったわ」

「まあ、転職のゴタゴタというか、それもあるしそれを巡っての家庭内のゴタゴタもあって、お前とはそんな話もついに何もしないままだったしな」篠崎は今度は小さく声に出して笑った。

「そういえばそうね」

　冴子も同じように声に出して笑った。

　不思議なもので同じ天井のシャンデリアを見ながら同じように笑い声をあげると、仲の良い悪いという実態はともあれ、何十年か自分たちは夫婦をやってきたんだなという事実が感じられる。コツコツと小さく深夜の寝室の時を刻んでいるあの置き時計は、結婚祝いに前の職場の上司が贈ってくれたものだったっけ。
　リビングにまだ朝子の使っていた古い黄ばんだ楽譜があることにも驚いた。一つの屋根の下に暮らすというのはそういうことなんだろうなと篠崎は思った。

　ある日突然家族はバラバラになったりはしない。

　多分当人たちが気がつかないうちにボタンのかけ違いは一つ一つ増えて行く。その掛け違いに気がついた者がボタンを一旦外そうとしても、それに気がつかない者が新しく間違ったボタンを掛けてしまっている。

　それでもふとした拍子で、寝室の置き時計はあの夫婦仲の良かった頃、大手代理店で絶頂期だった頃とまったく同じ音で時を刻んでいることに気がつく。

　リビングのサイドボードの奥にしまわれていたソナチネアルバムの楽譜を広げれば、そこにはまだ幼児体型をした朝子の弾けるような笑い声がこぼれ落ちるのだ。

　だれもその存在を否定しないだろう。完全に否定するならばそんなものはとっくに処分している。家族の痕跡はこうしてふと「まだボタンを掛け直せるかもしれない」という淡い希望を抱かせてくれる。

　いつも鳴り続けているA面レコードの針を上げ、盤面をひっくり返してこうでなかったかもしれなかったB面の曲にレコード針を落としてみるきっかけは、こういうところにしかないのかもしれないな、と篠崎は思った。

「もう少し話ししよっか」

「うん」

　冴子は短く穏やかな声で言った。その声は篠崎の耳に懐かしくこだました。

つづく

大人のピアノ そのよんじゅうきゅう 我が友平林君

「しっかしまた大変なことになったものですね」

「ああ」

　ランチ時を避けて１：３０に待ち合わせをしたヒカリエの沖縄料理店。篠崎が相槌を打ったのは、営業で渋谷近辺に足を伸ばしていた平林だった。

　ヒカリエがオープンした当初はどの店も長蛇の列だった。行列を作る若者は決まってスマホを取り出しては、ソーシャルゲームをやったりネットの口コミ食べ物サイトなどを見て入店までの時間を潰していた。

　最近では店の混雑度合いにもバラツキが出始め、店のメニューによって夕食時は混み合うとか、ランチは美味しいわりに空いているとかしてきている。道玄坂の巨大オフィスビルに入居している篠崎の務める会社の社員もランチはここでとっている者も多く、篠崎は同じ部内の女の子にオススメの店を確かめてここで平林と待ち合わせた。女の子のいうとおり、この店はコアランチタイムを過ぎると少し落ち着くらしい。

「まあ、今話したとおりなんだけどさ、 まさかオレも自分の娘がヤクザに拉致されるなんていうことが起きるとは思ってもみなかったよね」

　２：００までオーダー可能のランチは「海ぶどう」「ゴーヤチャンプルー」「切り昆布のイリチー」「ラフテー」「ドュル天」などが小皿に盛ってあり、なかなかボリュームがあった。平林も自分と同じランチを注文するものとばかり思っていたのだが、メニューをかなりじっくりと時間をかけて見渡したあと平林はあっさり「ソーキそば大盛り」とメニューを閉じて単品で頼んだので篠崎は拍子抜けした。

　ランチを並べて追加注文でオリオンビールでも軽く飲もうと思っていた篠崎は、テーブルのほとんどが自分の頼んだランチセットで占められてしまい、ソーキそばの大盛りが平林の目の前にポツンとおいてある状態でビールを頼みにくくなってしまった。

「あ、平林さん、オレこんなに食べられないから箸のばして小皿つついてね」

　篠崎がそういうと「いえいえ」と最初はにこやかに遠慮していた平林だったが、そのうち自然と箸がのびてきた。平林の前に運ばれてきたソーキそばの大盛りはたしかに美味しそうに見えた。しかし上に乗った味付け豚肉は大盛りになっておらず、にもかかわず麺はこれでもかというほど大盛りになっていたので、平林もだんだん美味しくても単調な味のソーキそばを口に運ぶのがしんどくなってきたのかもしれなかった。

　篠崎はこれをチャンスとみてさりげなくオリオンビールを追加注文した。

　勤務時間中にビールを飲むという発想のまったくない平林だったが、今日は疲れた表情の篠崎に付き合った。この外回りでお客さんと対面しないといけないシーンはすでにここにくる前に終わっていたので、まあ今日はいいかといったところだ。聞けば篠崎もこの後社に戻って明日からの有給休暇の申請の段取りをして帰るだけだという。

「ただ、お話を聞いていて大きな間違いはなさそうにも思うんですが、やっぱり心配ですよね」

　平林は昼間にしては心なしかグラスの空くピッチの早い篠崎にそう声をかけた。

「うん。やっぱね、昨日一言でも朝子の元気…とはいわなくても声だけでも聞けたら良かったんだけど…」

「無事は無事なんですよね」

「ああ。石橋さんは武志君と朝子を電話口に出させて声を聞いてくれたそうだ」

「どんなだったか言ってましたか?」

「『異常な気配は全く感じられなかった』という答えだったよ」

「痛めつけられてるとかそういうことはなさそうだと」

「ああ。勘違いで拉致した上に武志やお嬢さん、朝子のことね、二人に指一本でも触れたら身内だろうがなんだろうが盃割った上で全面戦争だと伝えたらしい」

　盃割って全面戦争…。平林の脳裏に菅原文太が広島弁で日本刀を振り回しているシーンが浮かんで消えた。

「まさかそれはないですよね。この暴対法の世の中で」

「そう思いたいけど、わからないよ。オレには…」

　当然のことだったが篠崎にはいつものような飄々とした冗談めいたところがほとんどなかった。時々明るく笑おうとするのだが、その笑い顔はすぐに内心の不安にすぅと引き戻されていた。

「篠崎さん、ご自宅で奥さんいる前だとお酒とか飲みにくいでしょ。ここは泡盛でもいっちゃいましょ」

　昼間からアルコールなどということは辞書にないはずの平林だが、篠崎の返事を待たず、平林は沖縄風の割烹着をきたお姉さんに泡盛を頼んだ。
　平日昼から泡盛という客もいないわけではないのだろう。お姉さんは平林の椅子の角にかけてあった伝票をヒョイととりあげ泡盛の追加オーダーを無造作に書き込み、「グラスは？」と普通に聞いてきた。

「二つ」

　おそらく自分は飲まないのだろうが平林は当然のように答えた。篠崎はソーキそば大盛りを頼む平林や飲みもしないのにグラスを二つ要求する平林が何とも言えないほど好きになってしまった。

「実はこの後僕は神田さんと会うんです」

「あ、そうなの？木曜だったら午後休診なんだけど月曜はすでに予約いっぱいで歯医者休めないからってことだったんだよ」

　篠崎は何杯めかの泡盛を飲み干した。

「ええ。それでもすごく会いたがってたみたいで、そのあとこっちに電話かかってきたんです。５：３０に午後の診療終わるからそれから篠崎さんの様子がどうだったか聞かせてくれって」

　泡盛のせいもあって篠崎は思わず涙腺が緩んでしまった。

「ありがと、ほんとにありがと。大人のピアノバンザイだよね」

　篠崎は右腕の甲で目頭の涙を拭ったが、一回では拭いきれなかった涙がポタリとテーブルの上に落ちた。

「じゃあ、最後の泡盛あけちゃいましょう」

　平林は篠崎と自分のグラスに残りの小さいボトルの泡盛を注ぎ、乾杯をして自分から飲み干した。

「ご無事をお祈りしています」

「ありがとう」

　最後の泡盛を篠崎は飲み干した。泡盛は熱く食道を通過して篠崎のはらわたに染み渡った。

つづく

大人のピアノ そのごじゅう 藤井組

今回表現の中に一部暴力の描写があります。話の展開に必要な最小限のものではありますが、ご不快の念を抱かれる場合もありますので、その旨ご了承の上お読みくださいませ（ゆっきー）

「藤井の兄貴、お二人を返せないって、それはまたどういう理屈です」

　上背のある３０名ほどの屈強な男たちが藤井の左右に整然と立っている。和服を着た藤井と呼ばれた男は黒いフチの眼鏡の茶色がかったた遮光レンズ越しに石橋を凝視している。首筋が異様に太い。その筋肉の付き方はまるで陸上の室伏広治選手を思わせるものがあったが、その体躯が放つ匂いはオリンピア十種競技のフェアプレイの精神などではなく、ドーベルマンのような獰猛な獣のそれであった。

　南方の組が事務所を構える船橋市の市街からほど近い海神という古い街に、およそ１５００坪を占有する藤井組の「城」がある。

　海神は東京に本社を持つ有名企業の創業者の自宅や別宅などがあり、千葉県有数の高級住宅街としても知られている。千葉というと東京の人間はすぐにベッドタウンを思い浮かべるが、その歴史は古く、記紀の日本武尊の遠征記にまで遡る。日本武尊が船を使って東方に遠征したことの名残りが船橋、海神という地名に今も残っている。
　８０畳はあるかと思われる畳を敷きつめた和室の再奥に藤井は胡座をかいて座っている。その頭上の神棚にも日本武尊が祀ってあった。

「返せないとは言ってないだろう、石橋」

　黙している藤井のすぐ左ににいる藤井組ナンバーツーの三浦が、射抜くような視線を石橋に投げてよこす。武闘派で知られた藤井の懐刀だ。

　今でこそ南方が幹部を務める広域暴力団の外郭団体となっているが、この組の歴史は古い。旧大日本帝国陸軍習志野学校解体跡地に進駐した米軍絡みの闇物資の流通や、街娼、賭博の元締めを一手に引き受けて地力をつけてきた初代藤井組の組長がこの藤井の祖父である。

　一方船橋競馬場付近の新興の繁華街でその後勢力を拡大したのが南方の組織だった。合従連衡を巧みに繰り返し、その過程で蜷川会の盃を受けた南方は立場上は独立独歩の気風を崩さぬ藤井組を監督する立場にいる。しかしそうしたいきさつから藤井組の方では南方組を格下として軽んずる傾向があったのである。

「ではいったい、どうしろというので」

　石橋の横にいる南方が口を開いた。

「ふざけるな！」

　三浦が上座から畳の上を滑るように矢のような速さで駆け下り、正座している南方の顔面に下段回し蹴りを入れた。遠心力のついた丸太のような三浦の右脚が捉えたのは、とっさに南方の前に出た石橋の顔面だった。しんと静まり返った和室の端で石橋が顔を上げ、無造作に畳の上に吐き出した血糊には石橋の歯が数本含まれていた。

「三浦」藤井が静かに上座から声を掛ける。

「はい」三浦が藤井に一礼してもとの位置に戻った。

　石橋が三浦の回し蹴りを顔面で受けたのは身を呈した究極の判断だった。阿吽の呼吸で藤井の意を汲み、藤井の代理として南方を攻撃した三浦に対して反撃したり攻撃を防御したりするのは、即ち藤井に対してこの場で宣戦を布告したのと同じになるからだ。
　かと言って親である南方が三浦の回し蹴りを顔面で受けることは阻止しなくてはならない。そこで藤井の代理で攻撃をかけた三浦に対し石橋は代理であえて無防備の顔面を差し出した。口の中のものをわざと畳の上に吐き出したのは、こうした気概をその場の藤井組の者たちと藤井本人に対して見せるためであった。

　藤井が三浦を静かに呼び戻したことで、その真意は藤井に伝わったと判断して良かった。

「痛いか、石橋」

　藤井が声をかけた。石橋は無言で身じろぎもしなかった。

「痛いだろうなあ。俺も痛かったぜ。おたくの武志のビール瓶」

　藤井はそう言って額の右の絆創膏をビリビリと引き剥がした。

　まだ紫色に腫れている傷口からは、藤井が乱暴に絆創膏を剥がしたため再び血滲んだ。

　南方は静かに藤井を見ている。石橋は無言で南方の言葉を待った。

つづく

大人のピアノ そのごじゅういち 朝子解放される

「武志と一緒に拉致されたお嬢さんに会わせていただきましょう」

　南方は「会わせて欲しい」ではなく、当然の権利としてという表情で言った。静かな揺るぎない声だった。三浦がその口調に再び気色ばんだが、今度は藤井がそれを止めた。

「ああ、いいだろう。確かに武志は別として、武志と一緒にいたお嬢さんに関してはこちらもこれ以上ここにいていただく理由もない」

　顎をしゃくるようにして藤井が三浦の隣にいた年の若い黒服の男に合図した。男は頷いて南方たちから見て左側の次の間の襖を開け放った。

　武志と朝子が正座していた。二人とも極度に緊張した面持ちではあったが、何か危害を加えられた様子もなく、石橋の「何ともないのか」という声に小さく「はい」と応えた。

「昨日は食事も与えているし、風呂も自由だ。軟禁させてもらったが指一本触れちゃいない」

　藤井の言葉を確かめるように石橋が目で二人に尋ねたが、二人は藤井の言葉を肯定するように頷いた。

「藤井さん」南方が藤井に語りかけた。

「ああ」

「あんたたちの早とちりのおかげで関係のない方を巻き込んでしまった。これについてはきちんと筋を通してもらいたい」

「筋を通すとは」

「まずはこのお嬢さんにきちんと詫びをいれていただきたい」

「うむ」

　藤井はそれにはこだわりはないようだった。素人衆を巻き込んでの今回の強行に関しては、この世界の常識から言っても、本来藤井組のような歴史ある組織がやることではない。メンツの生き物のヤクザではあるが、ここで朝子に頭を下げるということは今回は止むを得ないところであった。

　藤井がさっきの襖を開けた若者の方に歩み寄り、いきなりその若者を蹴り倒して朝子の前にひざまずかせた。

「お嬢ちゃん、こちらの早とちりので申し訳なかったね。完全にこちらの勘違いだったようだ。こいつの顔は覚えてるかね」

　藤井は若者の頭をつかんで畳に擦り付けるようにして土下座させた。朝子は震えながら武志にしがみついた。

「こいつが昨日の実行犯だ。私も一緒にお嬢ちゃんにお詫びをする。悪かったね」

「申し訳ございませんでした」

　手をついたまま強面の若者が大音声で朝子に詫びをいれた。どうしたらよいのかかえって恐怖にかられた朝子は目の合った石橋に救いを求めた。

　石橋は朝子にツカツカと歩み寄り、中腰になって朝子に謝った藤井に対して「お嬢さんを自宅にお帰しして構いませんね」と言った。

「ああ」

　藤井は短くそう言って再び日本武尊の真下の上座に戻った。

　南方は石橋と目を合わせ、お互いに頷きあうと石橋はそのまま朝子を連れて大広間の襖を開けて外に出た。石橋はまず朝子を篠崎邸に送り届けるつもりだ。朝子は何度も武志を振り返ったが、そのたびに武志は「大丈夫」と口を動かした。

「さてと、じゃあお次だな。予定より早くなったが本題に入ろうじゃないか」

「ええ。しかしこの人数はいらんでしょう」

　南方はあごで男たちをしゃくって睨みつけた。

「うむ。まあいいだろう」

　藤井は三浦に合図して男たちを下がらせた。三浦はなお不満気な目を南方に鋭く向けたが、最後に黙礼をして部屋を退出した。

　大広間には、藤井、南方、武志の三人が残された。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうに ヤクザのけじめ

「武蔵小杉まで一時間弱で到着いたします」

　黒塗りのセンチュリーの後部座席に案内された朝子は、横に乗った石橋にそう告げられた。運転手はたしか台湾屋台で武志と朝子を守ろうとして果たせなかった青年だ。

　海神交差点から船橋インターに乗る時に、石橋が「一ノ橋ジャンクションを抜けて荏原で降りてすぐ武蔵小杉です」と教えてくれたのでこの車が確かに武蔵小杉方面に向かっていることが実感できた。大きな体といかつい顔つきにもかかわらず、そういう気遣いをしてくれる石橋は朝子にあまり怖さを感じさせなかった。

「武志さん、このあとどうなるんでしょうか」

　大きめの膝掛けを腰から下に包むようにして少し背を丸めた朝子は、さっき別れた武志のことが気になって仕方がなかった。「大丈夫だよ」なんども口はそう動いたが、あの状況で大丈夫なわけがないという気がした。

「南方がいますので、すぐにどうこうということはありません。予定より早くなってしまいましたがあれは想定内のシーンではあります」石橋は静かに言った。

「そうなんですか…」

「武志自身は堅気ですからね。最終的にやくざ者のケジメの付け方を強要されることはありません」

「やくざ者のケジメ？」

「ええ、まあお嬢さんにはどぎつい話ですが、素人さんが考えがちな指を詰めるとか片腕落とすとか、埋められるとかね」

　石橋はつとめて明るく笑いながら言った。朝子は武志がそうなるかもしれない、と武蔵小杉の篠崎邸で言っていたことが否定されて驚いた。

「そうなんですか？」

「ええ。武志がそんなこと言ってましたか」

「はい」

「そうですか」

　石橋は静かに薄く剃り残したあごひげをジャリっと撫でた。

「武志がそう言ったのはもちろんお嬢さんを脅かすためでも同情を引くためでもありません。実際武志はその覚悟でいるんでしょう」

「はい。そのようでした」

「うむ、あいつらしいです。しかし武志自身はそういうことはありませんからお嬢さんもそこは心配なさらなくて結構ですよ」

　石橋はそう言って柔和な顔で笑った。

「…あの、今武志"自身は"って言いましたよね」

「はい」

「じゃあ他に…」

「南方が最終的なケジメをつけることになるでしょう」

「え！？」

「ただ、藤井と南方は六四の盃で藤井が上とはいえ南方は蜷川会の直系です。しかも身内ないの喧嘩ですから、東京湾に沈むなんてことはあり得ません。直接手を下したわけでもなく監督不行き届きですから、せいぜいこじれて腕一本」

「腕が…」朝子は震えた。

「普通は指でおさまるでしょう」

「指…」

　石橋は朝子の震えには気がつかない様子で話をおしまいまで続けた。

「ところが、今回の件に限らず藤井と南方は前から反目し合ってます。こんなことお嬢さんにお話してもしょうがないのですが、歴史ある藤井組と大きな後ろ盾のある新興の南方組。水と油なんですよ」

「はい」

「まあ、ここでこれ以上詳しい話はしませんが、普段の鬱憤を晴らすようにして藤井が南方と武志にあれこれ言ってくるのは間違いないでしょう」

「…というと」朝子はおさまりかかった動悸が再び早鐘のようの鳴り出すのを感じた。

「例えば南方が懸念していたのは、武志が極道のケジメを取れないのならばいっそ正式に武志を組に入れた上でケジメをつけさせろ、とか…いかにも言いそうですね、あの藤井なら」

「武志さんが正式に…」

「ええ。そうなると当事者だしなんの力も持っていない、ただ南方のお気に入りというだけの武志のケジメの付け方は、利き腕一本というところが妥当でしょう」

　朝子が震え上がってむせるのを聞いて、石橋は初めてさっきから朝子が膝掛けの角をよじるように握りしめていたことに気がついた。

「あ、失礼しました。少し話しすぎたようです」

　石橋は頭を下げてそのまま黙った。

「そういうことってあるんでしょうか」

　少し落ち着いた朝子が石橋に訊いた。

「そういうこと、といいますと」

「武志さんが正式に…」

「武志の性格から言って南方の指落とさせるならば自分の腕、と…」

「そんな」

「多分藤井はそういう武志の性格も読んだ上で、ネチネチと締め上げてくるでしょう」

　石橋は険しい顔をした。

　朝子は膝掛けの角をきつく握りしめることで、かろうじて眩暈を押さえ込んだ。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうさん 刑事の影

「ありがとうございます。お疲れ様でした」

　篠崎は昼過ぎに思いがけなくも早く帰宅した朝子と送ってくれた石橋を玄関口に迎え、石橋と硬く握手をした。武志と南方の姿がないのが気になったが、とにかくも二人を家に入れた。

「本当にありがとうございました」

　冴子もソファに座ってもらった石橋に深々と頭を下げた。

　石橋は「こちらこそ、とんでもない事件にお嬢さんを巻き込んでしまい、申し訳ありませんでした」と手をついた。

「ともかく朝子は少し休みなさい。いろんなことはお前が一眠りして目が覚めたらゆっくり聞くとしよう」

　朝子は冴子に肩をだかれ、二回の自分の部屋に向かった。リビングを出る時に石橋の方を振り返って「武志さんのことよろしくお願いします」と言った。

　石橋はしっかりと「分かってます」と答えた。

「昨日は眠れなかったでしょう」

　石橋が篠崎に語りかけると篠崎は苦笑して、向こうのテーブルの上の泡盛の『島唄』というボトルを指した。

「寝酒にと友達にもらってきたんですがね、眠れないままほとんど飲んでしまいました。女房には『朝子が大変な思いでいるのにお酒なんかで紛らわせて』ってかなり怒られたんですが、面目次第もありません」

　結局昨日は平林が帰り際にあまりにも元気のない篠崎に、「奥さんとご相談の上」と苦笑しながらレジのお土産用泡盛を持たせたのだった。

「いやまあ、お気持ちはわかります」石橋も苦笑した。

「石橋さん、歯が…」苦笑した石橋の前歯が数本欠けていたのに篠崎は気がついた。

「ああ、久しぶりに喧嘩しました。といっても殴られただけで我慢してましたが」

「申し訳ありません」

「いえ、篠崎さんが謝らなくてもいいですよ。ある意味前歯が欠けるのも職業病みたいなものです。もっともこの前こんな風になったのがいつだったかは忘れましたが」

　石橋は苦笑いをした。篠崎はもう一度頭を下げた。

「ところで武志君は…」

「少しもめそうだったので、南方が今お嬢さんの帰宅と分けて対応しています」

　石橋はそう言って、車の中で朝子にさわりだけ聞かせた普段からの藤井組と南方組の因縁や責任の取り方

などについて今度は詳しく説明をした。

「難しいものですね」

　篠崎にはそれしか言葉が見つからなかったが、南方と石橋の苦労を察して頭が下がる思いだった。

　３０分ほど説明したあと、石橋はこの場から斎藤氏にも連絡したいと言った。

　篠崎は昨晩斎藤氏と電話で話し、当初の予定に合わせて夜斎藤氏がここに再び訪れ、武志と朝子を迎えようという段取りにしてあった。予定が変わったので、篠崎もその連絡をしないといけないと思っていたところだった。

　篠崎が斎藤のケータイに自分のケータイから電話をかけた。

「もしもし」

　よそ行きの声がしたので、斎藤はまだ仕事中のようだった。昨晩の話では今日の夕方から休暇がとれる段取りらしかった。篠崎は事情を簡単に説明した。斎藤氏はただ事務的に「はい」を繰り返した。篠崎はすぐに石橋に電話を替わった。

　しばらく話をしていた石橋はやがて通話を切り、ケータイを篠崎に返してよこした。

「斎藤さんが帰宅できるのが夕方ということでしたので、私はこの足で自由が丘の斎藤家におじゃますることとなりました」

「そうですか、ではなつみ先生も直接事情を聞けるわけですね」

「はい。斎藤さんもそのようにおっしゃってました。奥様も話を聞きたがっていると」

「それはそうでしょうね」

　篠崎は京都の旧家の出だという武志となつみ先生のお母さんを想像し、さぞかしまいっていることだろうとその心痛を察した。

「それではまたご連絡いたします」

「私からもご連絡させていただきます」

　篠崎はそう言って玄関口に石橋を見送った。

　篠崎の家の前に路駐してあったセンチュリーがゆっくりと東京方面に消えて行った。

　しかしその車を電柱の影から見送った二人組の男がいたことに石橋も運転手の若い衆も気がついていなかった。

　二人は一昨日篠崎となつみ先生の事情聴取を行った刑事だった。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうよん 武志の母

「どうぞ、お入りください」

　センチュリーを運転してきた若い衆が石橋の到着を告げると、インターフォン越しになつみ先生の声がして、ガチャリと門のロックが外れた。

　若い衆は後部座席を開いて石橋を降ろした。

「言ってらっしゃいませ」

　深々とお辞儀をした若い衆は再び運転席に戻り、路駐で警察に職質されぬようセンチュリーを大通りに回した。

「先日は失礼いたしました」

　玄関の内側からなつみ先生が沈痛な表情で石橋を招き入れた。父親から武志の帰宅が篠崎家の朝子よりも遅れる旨は聞いている。石橋も無言で頷いて二人は家の中に消えた。

　しんとした古い洋館の廊下を案内された石橋は、廊下の奥の広々とした応接間に通された。家全体の外観も古い格式ある風情を醸し出していたが、廊下正面に飾ってある号数の大きな印象派の絵画や、重量感のある部屋のドア、室内の重厚感のある調度品などそのどれもが長年に渡って斎藤家の個性を形作ってきた様子が感じられた。

「父はまだ役所から帰宅しておりませんが、もうあと一時間もしないで帰れると先ほど電話がありました」

「はい。お待ちいたします」

　なつみ先生が出してくれた熱いお茶の蓋をずらして、石橋がとりあえず喉を潤す。口に含んだ瞬間折れた前歯に激しい痛みが走ったが、事情を知らないなつみ先生の前で石橋はポーカーフェースを通した。

「今、母が参りますので少々お待ちください」なつみ先生はそう言って一旦席を立った。

　程なくして部屋のドアが開き、武志の母親が現れた。

「この度は武志が大変にご迷惑なことをいたしまして」

　小柄だが落ち着いた雰囲気の和服を着た武志の母親は、石橋に対してとりあえずは非難めいたそぶりは一切なく、柔和な顔をして口元に笑みを作って言った。

　石橋はその気品すら感じさせる武志の母親の物腰に深く感銘の念を抱きながら、立ち上がって深々とお辞儀をした。

「とんでございません。こちらこそ大切なご子息をお預かりしていながらこれまでご挨拶もせずに、お初にお目にかかるのがこうした仕儀となってしまい面目次第もございません」

　母親はそれに対して静かに石橋を見下ろしながら無言で軽く頷いた。それは石橋を非難するでもなく、へりくだった相槌を打つ様子でもなくただ、深い目で頷いただけであった。それはちょうど重大な報告を受けた殿様が家臣に対して「大儀であった」と頷く様に似ていた。家臣の方ではいったい自分の言葉を殿様がどう受け取ったのか気になって仕方が無い、あの深々とした目と、いかようにでも解釈できてしまう無言の頷き。

　普段から人間の格の上下に肌感覚で生きている石橋は、このときはっきりと自分がこの武志の御母堂の下であることを意識した。そして、石橋にとってその感覚は南方に対して感じるような心地よいものであった。

「お疲れのこととは存じますが、主人が帰宅するまでお話は少しお待ちください」

「はい」石橋は心持ち下を向きながら、頷いた。

「なつみ」母親がなつみ先生に声を掛ける。

「はい。お母様」

「石橋さんに氷をお持ちしなさい」

「え？」

　なつみ先生が石橋の顔を見る。かたや石橋はその意味を確かめるため、母親の顔を見上げた。

「石橋さん、武志のためにお怪我なさってますね」

「は？」

「いえ、いいんですのよ。あまり口をお開きにならないようになさってましたが、前歯のあたりがずいぶん腫れてらっしゃる」

　石橋はびっくりした。不自然でないように欠けた前歯を隠していたのだが、そのことを母親はとっくにお見通しだったのである。

「あ、気がつきませんで大変失礼いたしました」

　なつみ先生は立ち上がって急いでドアに向かった。

「待ちなさい、なつみ」

「はい」

「あなたがお出ししたこの熱いお茶を下げて、冷たいものをお持ちしなさい」

「ごめんなさい！あたし…」なつみ先生が少し赤い顔をして急いで石橋の前のお茶を下げた。

「すみませんですねぇ」

母親は昔からの斎藤家の客人をもてなすような表情でニッコリと石橋に笑いかけた。

石橋はただただ恐縮して黙って頭を下げるのみであった。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうご 南方と御母堂

　斎藤氏が霞が関から帰ってくるまでの小一時間、石橋は武志の母親に請われるまま主に南方について話をしていた。南方はもともと自ら多くを語らぬ人間ではあったが、それでも石橋は改めて話をすることによって、もう数十年の付き合いになる南方という人間の魅力を再確認していた。母親はまことに聞き上手であり、その聞き上手は話をしている石橋すら気がつかなかった南方という人間を浮き彫りにした。石橋にとってそれはえも言われぬ幸せな時間であった。

　しかしその母親の巧みな合いの手中に、石橋はあるかすかな傾向性を感じていた。それは母親のふとした間の取り方、相槌のニュアンス、控えめな問いかけの中に時折現れた。石橋はそうしたこと感じ取っていることの気配を注意深く消し、ごく自然を装って答えている間に、その傾向性の正体がどうやら南方の幼年時代、ピアノをやり始めたころの周りをぐるぐると巡っていることに気がついた。

『<御母堂はひょっとして南方の幼少時代に何か関わりがあったのか>』

　石橋はそのもやもやの正体を掴むべく、自分の方からも話をそこに誘導していった。そしてついに一言こう言った。

「南方はもともと関西の出身なのですよ」

　少しの間沈黙があった。

「関西はどちらですか」

　母親は京都訛りの語尾でさりげなく訊ねる。

「生まれは奈良ですぐに京都に移ったそうです」

「そうですか」

　母親の目の奥に何かが動いたように石橋は感じた。

「その地でひょんなことから京都の旧家に出入りするようになり、そこでピアノに触る機会があったと、そんなことを申しておりました」

　石橋はそう言った。しかしそれは嘘だった。京都で懇意にさせてもらった家がありそこでピアノを弾く機会を得たというのは本当だったが、南方は「旧家」とは言っていなかった。

「何という家かはおっしゃってましたか」

　この質問は明らかに話の合いの手としては踏み込みすぎていた。石橋は自分の作ったその「旧家」が母親の家であること確信した。

「いえ、そこまでは聞いておりません」

「そうですか…」

　結局この話はここでお流れとなり、話はまた別に移った。

　石橋は母親の話ぶりから、このことは夫の斎藤氏はまったく知らぬことだということを悟った。おそらく母親は武志やなつみ先生から間接的に聞いた「南方」なる名前に何かを感じたのだが、それを誰かに言うことはなかった。そこにどんな事情があるのかは分からないが、自分の方からは斎藤氏の帰宅の後もこの話題には触れぬようにしようと思った。

　今座っている応接間の入り口にはグランドピアノがおいてある。その奥には母親がピアノを弾いているかなり古い写真が飾ってあった。

『<もしかすると南方に最初にピアノを教えたのはこの御母堂ではあるまいか>』

　石橋はあまりに突飛な考えであると頭では否定しながらも、今はまたもとの上品な穏やかな目に戻っている母親の瞳の奥に、さっき感じた別の揺らめきを再び思い起こした。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうろく 斎藤の帰宅

「失礼します」

　氷と冷たいお茶を淹れたあと席を外していたなつみ先生が、ドアをノックして新しいお茶と氷を持ってきた。

「たったいまお父さん帰ってきたわ。着替えてすぐにこっち来るって」

「あら、やっと帰ってきたわ。お待たせして申し訳ございませんでした」

　母親は予定の一時間を半時ほど過ぎた時刻を示している柱時計の長針と短針に責を問うような視線を投げたあと、石橋にゆっくりと頭を下げた。
　石橋にはそれが夫の帰宅が遅れたことの詫びだけでなく、自分が聞きたかった南方の話に付き合ってくれた礼のように感じられた。

「石橋さん、すみません。お待たせしちゃって」

　そこに斎藤氏がドアを開けて入ってきた。ラフなポロシャツだったが、胸にタイトリストのロゴが刺繍してある。七分丈の淡いチェック柄のパンツもゴルフウェアを普段着用にしたもののようだった。

「この度は初めてのご挨拶が大変面倒な話になってしまい、大変恐縮しております」

　石橋は立ち上がって挨拶をした。

「いえ、こちらこそ世間を知らぬ息子が大変ご迷惑をおかけして申し訳なく思っております」

　斎藤氏は「ま、おかけください」と言って自分も座った。

「とりあえずは、今我々にできることは南方さんの結果を待つことだけでしょう。こうなってしまった以上はここであれこれ次のことを考えても始まらないと私は思います」

　座っていきなりの斎藤氏の歯切れの良い直截な物言いに石橋は頷いた。

　いろいろなことを話し合う必要ががありそうに見えて、この場合それは実はあまり重要ではない。賽は投げられた状態であり、手持ちの情報としては石橋が篠崎宅から斎藤氏に電話した以上のことは何もなかった。むしろ重要なのはこれからの難局に向かって、お互い腹を割って胸の内を見せ合うことであった。

　頷く石橋の目を見て、斎藤氏も石橋が同じ考えを持っていることを確認した。

「うん。なら一杯やりながら話をしましょう。ヤクザ渡世の話とか外務省渡世の話とか。案外ね、じつはヤクザの世界と外務省は似てるんじゃないかな、とか思うんですよ、私は。組織もそうだし実はやってることなんかも。あと問題のある人のタイプとかね」

　愉快そうに笑い声を上げた斎藤氏の目配せを受けた武志の母親は、酒と肴の用意のためお辞儀をしてすっと立ち上がった。

　部屋を出る時に武志の母親は、グランドピアノの奥の自分のピアノを弾いている写真にそっと一瞬目をやったように石橋には思えた。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうなな 石橋の見通し

「なるほど、藤井組の組長さんが武志の店にちょくちょく嫌がらせに出向くのはそういう背景があるんですか」

　斎藤氏は石橋に歴史ある藤井組と新興の南方組の確執の説明を聞いて納得がいったようだった。

「まあ、どこの組織にもある内部の派閥争いみたいなものでしょうか。いや、というよりも最近はやりの企業合併に似てますね」

　石橋は斎藤氏にウイスキーの水割りをすすめられていたが口にはしていなかった。「南方から連絡が入るまでは」という固辞に斎藤も無理強いはしなかった。

「企業合併ですか」

「ええ。資本力のある蜷川会が有力な地元の地場産業の雄を飲み込んだ。もちろん地場産業側でも本社のネットワークと信用力が欲しかった。よくある話ですね」

「なるほど。分かりやすいたとえですな」

「南方は藤井組の外様大名、社外取締役みたいなものです」

「ふむ。本社からのお目付役。これも親会社と子会社関係と同じだ。内部監査という機能の遂行が権力の上下関係を規定する」

「そうです。警察用語でいう『上納金』も一円単位でしっかり会計処理されています」

「一円単位ですか？」

「はい。もちろん日々のシノギに関してまで本部が口を出すことはありませんが。しかし例えば本部の幹部会で、藤井組の最近の資金の流れがおかしいから調査せよ、と決まれば会計帳簿を監査します」

「監査！まさに公認会計士がやるような会計業務だ。」

　斎藤氏は新鮮な驚きを禁じ得ないようだったが、石橋の次の一言にはただうなるより他なかった。

「蜷川会ではそういった業務には公認会計士資格を持った大卒の組員が任務に当たります」

「うわあ、いや…それは驚いた…」

「そうですね。五年ほど前義理ある先生からの紹介で断れず、NHKの報道番組の特集でその部分の取材を受けたんですが、対応したのが蜷川会の会計士でした。顔モザイク掛けて音声処理して３０秒ほど番組に使われてました」

「やはりそういう時は顔が出さずに…」

「ええ。彼らは職務柄公認会計士協会などの表の付き合いもありますからね。まあ協会で調べれば分かることではありますが、控えめにといわけです」石橋は面白そうに笑いながら言った。

「うーむ。そうすると当たり前ですが藤井組でも財務関係の帳簿がきっちり用意されていると…」

「それが本部登録する時の条件なんですよ。書面にもしてあります」

「財務関連の書類整備とその提出義務みたいなものですか」

「ええ。それを見れば、急激に不明な資金が膨張しているとかも分かるわけです。そこを糾せば蜷川会が厳禁にしている麻薬の流通に密かに関わっているとか、そういった事実もそこから明らかになるケースもあります」

「なるほどねぇ」

「逆に、この財務状況でこの人数の組員が養えるわけがないとかも判明します」

「そういう場合はどうするんですか」

「まずは組長のヒアリングですね。窮鼠猫を噛むじゃないですが上納金を収めるために若い衆にやばい仕事をやらせたりなどのパワーハラスメントが起きたりしてないかとか…」

「ええ！パワハラ管理まで！？」

「いえ、そこまで口を出すのはもうよっぽどの場合、解散が見え始めたような弱体化した組の場合だけです。そういう組の若い衆が一発逆転を企んで危ない橋を渡りそれが蜷川会本体に損害を与えないようにという危機管理です」

「口を出される方には拒絶反応があるでしょうね」

「それがまさに、藤井組の不満なんですよ」

「ああ、なるほど～」斎藤氏は膝を打って再び唸った。

「もちろん藤井組は本部から監査が入るような組織じゃありません。超優良団体なわけですが…」

「分かりますよ。傘下には入ったがまさかここまで管理されるとは思ってもみなかった」

「そういうことです。それで溜まった鬱憤を南方の店にきて晴らすというのが行動のパターンになってしまったわけなんですよ。ご子息の武志さんはそのなかに巻き込まれたというのが今回の騒動の全体的な構造です」

「非常によくわかります」

　斎藤氏は少し職業的な外交官の表情を浮かべて頷いた。

「ですのでチンピラ同士の喧嘩と違ってやられたからやり返す、みたいなことではないんですね。従ってもうお気づきだとは思いますが、武志君はその駆け引きの一つのカードになってしまっているわけです。お父様のご職業でいうところの外交上のカードです。ですので外から見ているほどには実は武志君の身柄は危険ではない、と私は判断しております。藤井の下の少々頭の足りない人間がどう考えているかは別として…」

　石橋は説明の核心部分に入っていた。外交官の斎藤氏に対して武志のおかれた立場を説明する石橋は、さながらもう一人の外交官のようだった。

「つまり、南方さんも藤井さんも外交上のカードを粗略に扱うほど素人ではない、ということですな」

　完全に外交官の顔を表に出した斎藤氏が確認するように石橋氏の目をまっすぐに見た。

「はい。それについては私石橋が責任を持ってそう断言いたします」

「うむ。分かりました」

　斎藤氏は厳しい顔を解き、封印していた父親の顔になってやっと安堵の念を浮かべた。

　説明にひと段落がつくと石橋は、なつみ先生が持ってきてくれた冷たい烏龍茶に母親が用意した水割り用のアイスを二つほど放り込んで一気に飲み干した。

「大変よくわかりました。ご説明ありがとうございます。私はいまのご説明で完全にあなたに下駄を預ける気になりましたが、家内となつみには私からうまく説明しましょう。いやあ、しかし驚いた。こりゃ関係者の口からじゃないと分からない世界ですねぇ」

　斎藤氏は石橋のツボを抑えた明瞭な説明に納得すると同時に、この石橋という人間の説明能力自体にも感嘆した。

「いろいろと大変です。外務省という組織にもいろんなご苦労がおありだと推察申し上げますが…」笑いながら石橋が言う。

「いや、外務省は一言でいうともっと幼稚ですな、それは…この後南方さんからのご連絡を待つまでに話の種として笑い話にするとして…すみません、ちょっと席を外させてください。家内となつみに今の話をわかりやすく説明してきます」

「了解いたしました」石橋は軽く礼をした。

　斎藤氏は小走りで部屋の外に出て行った。

「ご迷惑をおかけいたします」

　石橋はドアの向こうの斎藤氏、ご母堂、なつみ先生の三人に対して深く頭を下げた。

つづく

*「大人のピアノ」はフィクションです（u_u）

大人のピアノ そのごじゅうはち 母親の初恋ばなし

「じゃあ、石橋さんは心配ないとおっしゃるわけね」

　ほとんど同時に母娘は同じ言葉を発した。

　斎藤氏が石橋と話をしていた客間の廊下を挟んだはす向かいにある、それよりは少し小さな応接室では、母親となつみ先生は斎藤氏がドアを開けるのを心待ちにしていた。そこにやっと斎藤氏が現れ、話の次第を聞かせたのだった。

「ああ。とりあえずは南方さんからの吉報を待つということで良さそうだ」

「分かりました」母親は静かに頷いた。

「よかったぁ。じゃあ、あたしから篠崎さんご夫婦とと朝子さんにお電話してもいいですか」

　なつみ先生が斎藤氏に訊ねる。

「ああ、そうだな。こっちはまだ石橋さんと話があるからそうしてくれるか」

「はい」

「それとな、石橋さん親分から連絡があるまではって一切飲み物に口つけないんだよ」斎藤氏が母親に向かって言った。

「あら、それじゃあ『入船』のお鮨でもとりましょう」

「うん。そうしてくれ」

「分かりました」

「よろしく」

　斎藤氏はまた石橋のいる客間に戻っていった。

「朝子さんはショックでまだ部屋で休んでるということだったから、篠崎さんにさっきのお父様のお話お伝えしました」

「ホッとされてたかしら？」

「ええ。そのようでした。いい知らせがきたらまた連絡くださいとのことでした」

　なつみ先生の言葉に母親も頷いた。

「そう。良かったわ。こっちもお鮨の手配終わったわ」

「お疲れ様でした」

「あなたもね」

　二人は程なく配達された出前を応接間に運び、自分たちも鉄火丼の夕飯を食べた。

「そういえば久しぶりね、あなたとこうして二人でゆっくりこんな風にお夕飯すませるの」

　あがりの濃いお茶で口を潤しながら二人はのんびりと向かい合って話をした。

「そうよね。なんか不思議。いつも顔合わせているのに夕食の時間は全部レッスンで埋まってるからね」

「今回は生徒さんにもだいぶお世話になって」

「篠崎さん、神田さん、平林さん…ほんとに感謝してるわ。騒動が終わったら改めてお礼のご挨拶しないと」

「そうね…。私も今度の土曜日のあなたの『大人のピアノ発表会』できちんとご挨拶するわ」

「ええ、ありがとう。お母様」

「はい、皆様に改めてきちんと謝りましょう」

「はい」

　レッスンを一週間すべて臨時休講にしたなつみ先生は、そのあとしばらく母親と取りとめのない話をしていた。

「そういえば、あなた誰かいい人いないの？」

　母親が唐突になつみ先生に訊いた。

「え？珍しいわね。お母様がそんなこと聞くの」

「そうかしら、だって年頃のあなたにそういう話があっても不思議じゃないでしょ」

「今はおつきあいしてる人はいないわ」

「ふーん。じゃあ気になる人は？」

　なつみ先生は母親に適当に相槌を打ちながら、なぜかボンヤリとあの飄々とした篠崎の顔が浮かんできて自分でも驚いて狼狽した。

「あら！なつみ、今誰かの顔思い浮かべたでしょ」

「そ、そんなことないわ」

　慌てたなつみ先生は思わず噛んでしまった。

「あら、あやしい…。ま、いいわ」

「お母様こそなんか変よ。急にそんなこと聞いたりして。どうしたの？」

　なつみ先生が苦し紛れに防戦すると、母親の表情からそれまでの茶化すような笑い顔が消え、口からは意外な言葉が出てきた。

「初恋のね…人のこと思い出してた」

「え！？いつ？」

「さっきお父さんが帰ってくるまで石橋さんのお相手している間よ」

「ええっ！？どういうこと？」

「うん…」

　なつみ先生がは母親の目が遠くの風景に泳ぐのを感じた。そこには「若き日の初恋のロマンス」という浮いた話ではなく、何かもっと切実な痛みのようなものが感じられた。

「どんな…お話なの？」恐る恐るなつみ先生がは訊いてみた。

「うん…」

　母親はどこから話をしようかと、言葉を遠くに探していた。

つづく

大人のピアノ そのごじゅうきゅう 一緒にピアノを弾いた少年

「あたしのお父様、あなたのお祖父様のお顔憶えてる？」

　母親の視線は遠くを見たままだった。

「もちろん憶えてるわ。もちろん、会ったのは一回だけだけど」

「そうね。あなたが１１歳の時、あたしが生きている間に父に会ったのもその時が最後だったわ」

「二年後にもう一回同じパリ郊外のヌイイ•シュル•セーヌでお葬式だったね。結局日本には帰りたくなかったのかな」

「みんなそういうんだけどね。帰れなかったんじゃないかなあ、やっぱり」

「そうね、あたしもそう思う」

「うん。ありがとう…」

　なつみの祖父の話をする時にいつも二人の間を包む沈黙が、二人の間に静かに流れた。

「国語の教科書に載ってたお祖父様の文章の解説にも『ついに帰郷を選ばずに彼の地で没す』って書いてあったよ。子供ながらになんだかすごい人生なんだなって思った。お祖母様もお母様も日本に残してフランスに留学したまま帰ってこなかったんだもんね」

「そうね。将来を嘱望された二年の予定の国費留学生のはずが、最後はパリ郊外の日本語学校の教師だった」

「日本では"デカルトとパスカルの研究者、思想家"っていうことになってるよね」

「そうね。でも出版物は日本語でしか書いてなかったから、実際に暮らしていたフランスでは一日本語教師ということだったみたい」

「何でかな」

「うん」

「著作集にこんな言葉があったわね」

　母親が寂しそうな顔をして自分の父親の言葉を口にした。

僕は死に直面しても娘などに来てもらいたくない人間にならなければならない。娘がどこかに存在

している、というだけが僕のよろこびであり、慰めであるような人間にならなければならぬ。

「哲学者だからね。「娘」っていう言葉は一つの例だよ、やっぱり」

　もう何度も娘によって引用されたこの言葉が口から出るたび、なつみはそれを打ち消すように、その本当の意味を語っていると思われる箇所を母にかわって祖父の著作集に探した。
　祖父の残した著作は体系的な哲学書ではなく、祖父が好んで引用したアランが残したような箴言集であった。だから、考え抜かれた思考が言葉になるとき一見すると真逆のように見える時もあるし、別の言葉の光を照らしてみると、そこにまったく別の意味が浮かび上がったりする。

　母親がさっきの言葉を引用したあとになつみが引用するのは、例えばこんな言葉だった。

「でもこんなことも言ってるわ。

自分の勝手で作り出した孤独ほど無意味でみにくいものはない。本当の孤独は孤独からは生れない。僕は孤独を耐えがたく思う人間なのである。

もう何度もご本に探したからソラで言えちゃう。この孤独が本音で、「娘」云々はそういう孤独を耐えがたいと思ってる自分をムチで叩いて鼓舞するためだよ」

「ありがと。あたしが悲しそうな顔するたびあなたは必死になって著作集をひっくり返して言葉を探して、お祖父様の本当に言いたかったのはこういう意味だよ、ってお母さんを慰めてくれた」

　母親はなつみを感謝の目で静かに見た。

「そう。すごーく国語力ついたわよ。あたしが国語の成績が常にトップだったのはそのおかげね。だから、この全集作ってくれた出版社の編集者の人の次にお祖父様の言葉に詳しいのはお母様じゃなくて、この私」

　なつみが"えっへん"とばかりに胸を張る。

「そうね。もしかしたら私のお父様よりも」

「そうよ。あたしが引用した言葉が本当に言いたかったことだよ」

「うん。ありがとう」

　普段口に出さなくても二人の間に流れている共通の時間はこうしていつでも再開できる。それはなつみが成長して行く中で折に触れこうして二人の間で母親の父、なつみの祖父にあたる人物の残した著作集をひもときながら、家族を捨ててフランスに骨をうずめてしまった真意をあれこれ想像していたからだった。

「こんなことも言ってるよね。何で日本に帰ってこなかったか聞かれて…。

パリに行って、"自分のために"なるように学べることは"全部"日本で学ぶことができるのだ。

」

「あなたのお父様が一番好きな言葉ね」

「お父様に言わせると、お祖父様は本当の意味での『教養』の意味を知ってる唯一の日本人だってことらしいわね」

「みんな"自分のために"なるようなこと探して留学したり、本を読んだり、コンサートや劇場や美術館に行ったりする。あなたのお父様はそういうの全否定だもんね」

「そう。だから一般的な教養崇拝者の洗足学園の岸谷先生とは喧嘩になるわけね」

「そうね」

　二人は大きな声でたのしそうに笑った。

「あのね、なつみ」

「はい」

　なつみは母親の初恋ばなしが、この祖父の話を経由することが必要なほどに母にとって本質的なことであることを理解した。そして、同時にかすかな胸騒ぎを覚えた。

「昔ね…。子供の頃に京都の実家で一緒にピアノを習っていた男の子と、やっぱりそんな話をしたことがあるのよ」

　二人の間にあの静かな沈黙が流れた。

「お祖父様の本を広げながら…」

「うん…そう」

「それが…初恋の人ね」

「そうよ」

「うん」

　なつみは母親の目を見た。静かに笑っていた。なつみはさっき感じた胸騒ぎがすっと曳いていくのを感じた。

　いい思い出なんだな。でも、なんでさっきそれを思い出したんだろう…。

　なつみは母親の言葉を待った。

つづく

＊イタリックのなつみの祖父の哲学者の言葉は『森有正エッセー集成<1>〜<5>』ちくま文庫　より引用いたしました。なお作中のエピソードはすべて創作です。

大人のピアノ そのろくじゅう 嵯峨野への冒険？

「その男の子はピアノを弾いたのね」

「ええ。もともとその子の父親が私のお祖父様、あなたの曽祖父様のお客様だったのよ」

「曽祖父様って、あの…」

「ええ。政治家だったからいろんなお客様が京都には出入りしてたわ。その子のお父さんはなんと、博徒の元締め」

「え？博徒って、あの丁半の…」

「そうなの。慶応年間からの続いてるそうだから明治維新より前から実家とは付き合いがあったみたい」

「お母様の京都の家は確かにそういうお付き合いがあっても不思議はないな…という気はするけどね」

「うん」

「じゃあ、その少年も？」

「６人兄弟の末っ子だったけどね、まあゆくゆくはそういう世界の人になることが決まっていた」

　母親はおもむろに立ち上がると、斎藤氏がいる応接間におかれたピアノより小さなアップライト型のピアノの前に座りその蓋を開けた。

「あの子がくるのが楽しみだったわ。こうやって一緒にピアノを弾いてた」

　ブルクミュラーの「こどものつどい」。なつみが小さい頃母親と一緒に練習した曲だった。

「その子も同じ曲を？」

「そうね。だから私を通じてその少年とあなたは同じ曲で繋がっていたのかも知れないわね」

『繋がっていたかものしれない？』

　なつみは母親の言葉に何か含みのあるものを感じた。

「ある日ね…」

　ブルクミュラーを続けて何曲か弾いたのち、母親は何も置いていない譜面台をじっと見つめて話し始めた。

「ある日、その子がピアノの練習に飽きた私を保津峡に連れて行ってくれたの」

「保津峡…。嵯峨嵐山の」

「ええ。その日はお祖父様もお父様もいらっしゃらなくて、何となく解放的な気分だったのね。中学校に

入ったばかりで、制服を着ることを覚えて何だか自分たちも急に大人になったような感じがしてた」

「家からは電車よね…」

「そう。二十分くらいかしら。小学校の頃はその二十分の距離がとてつもなく大きかった。でも、ひょっとしたらもう私たちはそんな距離なんてひと跨ぎにできそうな気がしたのよ。どんな脈絡だったかは忘れてしまったけどトロッコ列車の話になったの」

「うん」

「その子が言ったわ。『行く？』って」

「頷いたのね」

「そう。今でも覚えてるわ。はっきり『行く』って頷いたの」

　なつみは今から数十年前、母親が保護者の誰もいない家で少年の冒険の誘いに頷いた様子を想像した。
　きっと、胸はときめきで溢れそうだったに違いなかった。顔は少しピンク色に上気して、目は遥か遠くを想像しながらも、しっかりと目の前の少年の瞳に焦点を結んでいる。

　母は今、まるで中学生のその時のように若やいで見えた。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅういち トロッコ列車に乗って

「保津峡デートかあ」

「なつみは行ったことあったっけ、保津川あたり」

「うん。高校の時に嵐山から亀岡までトロッコ列車に乗って往復しただけ」

「ああ、そんなことあったわね。初めての友達だけの旅行だっけ」

「そうそう。親戚が京都だからっていうことで京都のエキスパートだと思われちゃってね。そんなことないのに、一週間の旅行のガイドさんみたいなことしたっけな。楽しかったよ」

　なつみの顔に無邪気な笑顔が浮かんだ。

「じゃあ、列車の中から保津峡下りの船とか見えたでしょ」

「見えた見えた。通るたびに船の方からみんな声をあげて列車に手を振ってくれたなあ」

「その保津峡下りの船って下ったあと今はトラックでまた上流に戻すんだけどね、戦前は渡月橋の南側の中ノ島に架かる渡月小橋の南詰めあたりから人足の人が交代で担いで上流に運んだのよ。」

「ああ、聞いたことある。なんだっけ」

「舟曳き道」

「ああ、そうだ、それ」

「河原から山路に入って行くと今でも小径があるのよ」

「お母様、詳しいのね」

「そんなはずじゃなかったんだけどね、じつはその時その小径を上流の保津峡から下り方向に歩いたの」

「え？その初恋の少年と？」

「そう」

「そんなつもりじゃなかったって…」

「そうなのよ。あたしたちも高校生なつみと同じで嵐山からトロッコ列車に乗ったの。保津峡駅で途中下車してお散歩したんだけどね」

「うん。いいね、ロマンチックで。中学生二人は人家もない保津峡で下車して散策かあ」

「最初はね…。実はあたしが帰りの列車の時刻表を間違えてメモしたのが事件の始まり」

「事件…？」

　事件といいながら、母親は楽しそうに思い出話を楽しむ表情だった。

「今でも覚えてるんだけど嵯峨野８２号というのが最終の上りで１７：５１発だった」

「５１分まで覚えてるんだ」

「そう。そこから計算して家までギリギリ７時前には着けるなってね、歩きながら何度も逆算してたわけ」

「なるべく長くいたかったわけね」

「そうね。ところが嵯峨野８２号というのが日曜だけの臨時列車だったの」

「まさかその日は…」

「土曜日」

「それで歩くことにした…」

「新緑の季節でね。まだ１７：５１分は明るかったわ」

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうに いっくんの苗字？

「じゃあ保津峡の駅に帰ってきた時に、あれ！電車が終わってる！！ってことになったんだ」

　なつみは八重歯をのぞかせて楽しそうに笑った。母親もつられて苦笑した。

「そう。二人ともしばらく無言で改札口の上に貼ってあるすこし赤茶けた紙の時刻表を見上げてたわ。」

「嵯峨野８２号は運転されてなかった…」

「そう。お互い顔を見合わせたあと、すでにロープが張ってある改札越しにホームをみるとね、黄色い帽子をかぶった路線の保守点検のおじさんが、こうやってちりとりに片手にタバコの吸殻とかをきれいにしてたわ」

　実際に母親が箒でタバコの吸殻をちりとりにいれて見せたので、なつみは思わず吹き出してしまった。

「少年は…？」

　なつみの問いに今度は母親が笑い出した。

「あのね、じつは今のお掃除の仕草なんだけど、その時いっくんがやったことなのよ」

「いっくん？」

「そう、その少年ね」

「ああ、おちゃめな少年だね」

「たぶんあたしが真っ青になっていたと思うから、とっさに笑わせてくれようとしたんだと思うわ」

　なんとも言えない微笑を口元に浮かべて母親はそう言った。なつみはたしかにそのいっくんという少年は母親の大切な初恋の人なんだと思った。

「いっくん、本当の名前は何ていうの？」

　なつみはいっくんの、その不安にかられた母親を安心させようとひょうきんを装った顔を思い浮かべながら聞いた。

「伊佐夫くん」

「それでいっくんか」

「何、いっくんっていうの」

何気なく話の続きに口に出した言葉に母親は一瞬言葉に詰まった。なつみには、母親が苗字を何も考えずに言おうとして慌てて飲み込んだように見えた。

母親はなつみの言葉その部分だけがまるできこなかったかのように、二人がどうやって線路伝いに嵐山を目指したのかを語り始めた。

その一瞬の会話の真空地帯を除けば、暮れかかる小径の雑草を踏みならし、初夏の奥嵯峨を汗を吹きながら下流の市街地目指して進む二人の様子は、数十年前の話なのにまるで昨日の出来事のようだった。

「ところがね…」

話を続けていた母親がいったん言葉を区切ってなつみの反応を見た。

しかしさっきの苗字を聞いた時の微妙な空気がどこか気になっていて、この時何が「ところがね」だったのか、なつみには一瞬話が見えなかった。

「うん」なつみは当たり障りのない相槌で先を促した。

「△□の崖からあたしが落ちてしまったのよ」

"あなたのお母様に大事件発生です！"　といった表情で母親はなつみの顔を覗き込んだ。

「ええ！？」

なつみは反射的にそう言った。

しかし本当は母親が崖から落ちたことよりも、さっきの微妙な真空地帯のことが気になっていた。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうさん 波乱の帰宅

「崖から落ちたって、怪我は？大丈夫だったの？」

　母親の話の呼吸に自分をあわせてなつみは言った。

「うん。もうそろそろ渡月橋につく頃だったわ。歩いてきた山の上から橋が見えた。それでちょっと油断したのね。もう陽はとっぷり暮れてた。そんな山歩きなんてするとは思ってもみなかったから底がツルツルの短靴だった。土と天然の岩でならされたなんの変哲もないゆるい階段だったんだけど、ずるっとすべっちゃった」

「あの平地におりてくる最後の山小径か…分かる。昼だったら何でもないのにね」

「そうなの。何でもない階段で足を取られて、そのままいっくんに捕まったらよかったんだけど、変な風にバランス取ろうとして脇の崖にね…」

「何でそうしなかったの？」

「う…ん」

　照れたように母親の瞳が揺れた。口がすっと恥ずかしそうにすぼんで、すぐに歯並びの良い前歯がこぼれた。

「捕まろうとした時にさ、いっくんの広い背中にすごく男の子の匂いを感じちゃってね」

　笑いながらそういう母親をなつみは新鮮な気持ちで見つめた。

　母がこんな話をするのは初めてだった。父親との馴れ初めやデートの話は、たいていの子供がそうするように自分からせがんでしてもらったことがある。思春期に入った頃、自分という不安定な存在が両親の愛情の末にここにあるんだということを実感として確かめたくて、なつみも何度も話してもらった。母はもちろん楽しそうにそれを語ってくれた。でもたぶん、こんな少女のような表情ではなかったように思う。

「意識しちゃって背中にしがみつけなかったってわけ？」

　なつみはおかしかった。

　母親とはもちろん仲の良い母娘であったが、いつも尊敬できる一人の女性として適度な距離を保っていた。それは別によそよそしいものでも不自然な感じもなかったが、なつみは今夜始めて母親の中の少女だった思い出や、多分まだ少女を残している部分に触れた思いだった。

「そうなの。おかしいわね」

　母親もつられて笑った。

「いっくんは？すぐに助けてくれた？」

「もちろんよ。慌てて斜面を降りてきてくれた」

「怪我は？」

「膝と肘に擦り傷かな。あと自分では気がつかなかったけど顔に木の幹の皮がついてたみたいで、いっくんが指で払ってくれた。その時は大丈夫だったんだけど、転げ落ちる時に木の幹に頬を打ったみたいであとらか少し青く腫れてきた」

　母親は右手ですこし頬をさするような仕草をした。

「いっくん、驚いたね」

「『だいじょぶか』って心配を抑えた声で助け起こしてくれたわ」

「うん。それで」

「思わずわって泣きながら抱きついちゃったわ。そんなことなら落ちる前に抱きつけば良かったのに」

　母親の冗談になつみは声を出して笑った。母親も照れたように笑った。

「でもよかったね。大したことなくて」

「うん…それがね…」

「骨でも折れてたの？」

「ううん。違うの…。暗闇の中渡月橋を渡ったわ。もう時間は１０時をまわってた。満月に近い真っ白な月が碧暗い空に出てた。夏が始まっていた桂川の水嵩がずいぶん低かったのを覚えてる。中州が痩せた老人の肋骨みたいに月に照らされてた。」

　母親はまた遠くを見つめるようにすっと寂しげな表情をした。

　さっきまで手を伸ばせば触れられそうなところにあった少女の青春の思い出は、その瞬間すっともう取り返しのつかない確定した過去の出来事として母親の瞳の奥底に吸い込まれたようだった。

「家にたどり着いて、思ってた以上に話が大ごとになっていることにあたしたちはすぐ気がついたわ」

「…それは、そうよね」

「屋敷の門のところに母親やいっくんのご両親、近所の人ややじうまみたいな知らない人が固まっているのが見えたわ。あたしたちが門に近づいていくと、そのかたまりがふわっと崩れて父親が『慶子』って呼びながら走ってきたの」

「お祖父様、ほっとしたわね」

「…うん。それがね…途中で凍りついたように足が止まったの」

「え？どうして」

　なつみは訊いた。

「そしてゆっくりいっくんの前に歩いて行って、いっくんの目をじっと上から見下ろしたわ」

「どうして？」

　なつみは再び尋ねたが、今度も母親は直接それには応えなかった。

「そしていきなりいっくんを殴りつけた」

「え！？あのお祖父様が…」

「振り返ってもう一度あたしを見た時の、父の哀れむような悔しさを堪えたような視線で気がついたの」

「何に…？」

「腫れた頬、腕と膝の擦り傷、木にこすれて破れかかったブラウスの胸元」

「あ！」

「うん。ずっと夢中で帰ってきたから分からなかったけど、あたしはいっくんがむりやりそうしたような姿をしてたのよ」

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうよん いじめと報復

　なつみは母親の次の言葉を待った。

　母親は多分このことを父には話してはいないような気がした。結婚する前の恋の話というにはあまりにも時間がたっていたし中学校時代の話だ。そのことに父が嫉妬の感情を抱くなんてことも考えられなかったが、そういう理由ではなくて、この思い出は母の心の中で何か未解決のままそっと封印されていたもののようになつみには感じられた。

「父の誤解はね、そのあとすぐに解けたのよ。『明日病院に行こう』ってどんどん話を進めようとする父と祖父に、珍しく母親が強い調子で反対したわ。母と二人っきりで話をしたあとに、母の方から祖父と父に『何の問題もありません』と言ってくれてそこは収まったの」

「うん。よかった」

「ところがね…。家の門の前に集まっていたご近所の方や野次馬の人の誰かから、面白おかしく尾ひれがついてうわさが広まるのは母にもどうすることもできなかったわ」

「そっか」

「次の日学校にいくとね、黒板にイラストが書いてあったわ。セリフ付きで右から左に黒板いっぱいに創作漫画みたいにね」

　母親は辛そうな顔で言った。

「……」

「内容は…まあ言わなくても分かるでしょ。うぶな中学生が赤面するようなことよ」

「いっくんは…」

「あたしより少し遅れて同じクラスの教室に入ってきたわ。一瞬で状況を把握したいっくんは、私の方は一切見ずに、黙って黒板を消していった。慌ててじゃなくて、丁寧に間違ったものを当然のように始末するっていう感じで消していった」

「クラスの子はどうしてたの…？」

「一言も誰も何も言わなかったわ。無言で時間をかけて丁寧に黒板を消していくいっくんの後ろ姿が恐ろしかったんだと思う」

「うん」

　その場にはいなかったなつみも、博徒元締めの息子の伊佐夫が静かに不気味に黒板を消して行く様子を想像して身震いしそうになった。

「消し終わると、いっくんは無表情で今消した黒板を背にしてクラスのみんなを見たわ。そして、スタスタと散歩でもするように机の間を抜けて教室の後ろの方の男の子のところに行って止まった」

　その時の様子を思い出して、母親は両の手を自分の上半身の震えを包みこむように交差させた。

「『命令したやつは他におるやろ。とりあえず描いたんはお前やな』そう言ったのを覚えてるわ。」

「…」

「時間にして多分十秒もたってなかっと思う。その子は顔中を血だらけにしていっくんの足元に崩れ落ちた。あとで分かったんだけど、両腕と左右の十本の指が全部折れてたって」

「……。それでどうなったの」

「先生が授業のために入ってきて大事になったわ。その子はとにかく救急車で病院に運ばれた」

「いっくんは…」

「先生に連れていかれたわ。まるで映画の中で親分の身代わりで自首する人みたいに、自分から淡々と事務的に教室の外に出て行った」

「お母様は…」

「自習になった一時間目が終わって呼び出されたわ、職員室の奥の応接室に。びっくりしたのはそこにうちの両親といっくんのご両親が座ってたの。私が部屋に入ってすぐにいっくんも部屋に入ってきたわ。悪びれもせず、やっぱり淡々とした表情だったわ」

　あわい青春の思い出から始まった母親の話は意外な展開になってしまった。なつみは母親が話を続けやすいようにお寿司の桶をシンクに片付け、サイフォンにコーヒーをセットした。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうご 学校呼び出し

「もう、大変だったのよ。応接室での話は…」

「えっと、お母様といっくん、お母様といっくんのご両親と担任の先生…」

「それと、生活指導の先生と教頭先生もいて全部で９人ね」

「応接室も満員ね」

「そう。もともと９人も入るようには作られてないから、教頭先生が上座の一人掛けの椅子で、あたしたち三人といっくん側三人がソファに向かい合う形。担任の先生と生活指導の先生はパイプ椅子持ってきて不機嫌そうに座ってたわ」

　コーヒーを淹れながらなつみは小さく笑った。

「ありがと」と言って母親もソーサーを引き寄せた。

「いっくん大人しくしてたの？」

　さっきの話では、いっくんが教室を出て行く様子はふてぶてしさを通り越して、教師の怒りと狼狽を無視するかのような態度のように聞こえた。

「それが…」

「やっぱり」

　母親が話す前に相槌を打ったなつみのユーモアで、二人は「しょうがないなあ、いっくん」という表情で顔を合わせて笑った。なつみはまるでいっくんという少年に、実際どこかで会ったことがあるような気がした。

「『暴力だけはいかん』生活指導の先生がまず口火を切って担任の先生が『そうだぞ』というところから始まったの」

「うん」

「教頭先生が厳かに頷いて、それを承けた担任の先生がいっくんたち家族に向かって粛々と経緯の説明とお説教を始めようとした時に…」

「何か起きたのね」

　ねこ舌のなつみは、まだ熱いコーヒーにちょこんと口をつけていったんソーサーに戻した。

「『暴力がなんでいかんのですか』いっくんは静かにそう言ったの」

「あらら。いっくんのお父様は？博徒の元締めだからやっぱり暴力肯定なの？」

「あちらのお父様は『息子がまたややこしい話を始めやがった』っていう顔をなさって、お母様はまるで聞

こえなかったような顔をしてたわ」

「困ったいっくんだこと…」

　なつみは居並ぶ教師たちの困惑の顔を思い浮かべて笑いをこらえた。

「あたしは同じクラスだからよく知っていたんだけどさ…」

「うん」

「実は『暴力だけはいかん』とか教頭先生の前で言ってた担任の先生も生活指導の先生もなんだけどさ、普段はいっくんのその「暴力」を上手に利用してクラスをまとめたり、教頭先生や校長先生の目に触れない学校の秩序を保とうとしてたの」

「え！どういうこと…？」

「クラスでいじめがあったりするでしょ」

「うん、そっかお母様の時代もあったのよね」

「そう。今に始まったことじゃないわ。表に出ないところで生徒が不登校になったり転校せざるを得なかったり、自殺に発展しちゃうようないじめって今も昔も残念なことだけどどこにもその芽はあると思う」

「悲しいけどそうね」

「うん。そういう教師にはなかなかどうすることもできないいじめなんだけどね、あたしの学校では先生たちはいっくんにそういう実態を把握させたり、解決してもらったりしてたのよ。もっとはっきり言うといっくんの「暴力」をあてにして」

「あれれ、先生たちがいっくんの力を利用してたんだ」

「そうなの。だから本当は先生たちは強いこと言えないわけね。でも教頭先生まで出てくる騒ぎになっちゃったから、教頭先生の手前『暴力だけはいかんぞ』っていうところから話をせざるを得なかった」

「なんか、ずるいね。ずるい大人の見本みたい」

　なつみが愛らしい顔を少し歪めた。

「そうね。いっくんはそういう嫌らしさを応接室に入って一瞬で見抜いて、わざそういうこと言ったわけ」

「いっくんやるなあ、ずるい先生たちよりさらに一枚上手だ」

「そうね…いっくんとしては二人の教師を少しからかってやろうということで、それはそれで良かったんだけど、教頭先生というのがなかなかの人だったの」

「…というと？」

　ねこ舌にも適度な熱さにおさまってきたコーヒーに口をつけながら、なつみが興味深そうに言った。

「教頭先生は、生活指導の先生と担任の先生のバツの悪そうな様子を見て『何かあるな』ということを見抜いたのね」

「さらに上手がいたか」

「そう。『君はなかなか面白いこというな。その君の考えというのをぜひ聞いてみたい』教頭先生がいっくんにそう言ったわ。二人の教師の顔もわざとじっと見ながら」

「あらららら。大変なことになりそうな…」

「うん。いっくん次第で応接室に大波乱が起きそうな雰囲気だったわ」

つづく

「だいたいね、こんな話だったわ」

母親の慶子はコーヒーを飲みながら、職員室の様子をなつみに語って聞かせた。

「今回の君の教室での暴力、まあ私的制裁と言っておこうか。それについては君は悪いことだとは思っていないわけだね」

教頭は伊佐夫に静かに語りかけた。

「はい。思ってません」

伊佐夫がそう言った瞬間、生活指導の教師と担任の教師が我先にと伊佐夫を非難する言葉を発しようとした。しかし教頭はむしろ怒ったような顔をして二人を制した。教頭に『黙って聞きなさい』という風に首を横に振って言葉を遮られた二人は不承不承頷いて、今度はそのバツの悪さを伊佐夫を睨みつけることに転嫁した。

「では、君に聞いてみたいんだが、暴力には良い暴力と悪い暴力がある、こういうことかね。自分のとった暴力は良い暴力だと、そういうことか」

教頭は試すような言葉で伊佐夫に訊ねたが、その目はむしろ二人の教師に向けられた目よりも伊佐夫をしっかりと見ていた。

「いえ、そうは思いません。僕はあれが良いことだとも思っていません」伊佐夫は教頭に淀みなく応えた。

「ふむ」

二人の教師は理解できないといった不機嫌な顔をし、対象的に教頭は"ほう"という表情で伊佐夫を興味深そうに見た。

「僕は暴力には肉体的な暴力の他にも、精神的な暴力もあると思っています」

「ふむ。例えば今回の黒板の落書きのようなものだね」

「はい」

「しかしいきなり怪我を負わせるような制裁はまずいのではないかな」

教頭の言葉に二人の教師は我が意を得たりとばかりに頷き、憎しみの混じった侮蔑の視線を徳に向けた。

「はい。まずいと思います」

「ほう。では自分の非を認めるかね」

意外なほどあっさりとした伊佐夫の受け答えに教頭は拍子抜けした様にも見えた。二人の教師は

やっと自分たちのペースに伊佐夫が嵌まってきたことに満足した顔をした。

　しかしその直後だった。

「教頭先生は去年転校して行ったK君のことを覚えていますか？」

「K君。いじめを苦にしてというまことに不本意な形で学校を去ってしまった生徒だね。もちろん覚えているとも」

　伊佐夫はここで二人の教師に視線を向けた。二人は伊佐夫の冷徹な目の中に殺意のようなものを感じてたじろいだ。

「Kはこの二人の先生に精神的暴力で殺されかかったんですよ。そのこともご存知ですか」

　応接室は９人の沈黙で支配された。

「どういうことか教えてくれるかね」

　教頭先生は二人の教師を一瞥したあと、柔和な顔を伊佐夫に向けた。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうなな 洗脳反省文

「なんかすごい話になっちゃたのね。実際そういうことがあったの？その…先生たちが」

　コーヒーを置き、沈鬱な表情でなつみ訊いた。

「いっくんがそう言うのも、たぶんクラスのほとんどの生徒はあまり違和感なかったかもしれないわ」

「じゃあ、やっぱり…。でもいったいどんなことだったの？」

「先生がいじめを見て見ぬ振りというのもあってはいけないことだけど、もうちょっと陰湿なことやってたかな」

「先生たちが？」

「そう。いじめが起きるとね、その先生はクラス全員にいつも反省文を書かせていたのよ」

「それはありそうな…というかそれがどうして精神的にその転校した子を追い詰めることに？」

「その反省文そのものがいじめ隠しというか、もっと悪くいうと生徒を洗脳するようなことだったの」

「洗脳…」

　母親はコーヒーを飲み干し、再び応接室でのいっくんとの話を始めた。

　「教頭先生はうちのクラスの名物の反省文をご存知ですか」

　　伊佐夫は二人の教師に視線を遣ったあと、教頭に言った。二人の教師の顔に警戒する表情が浮かんだ。

　「名物…か。生活指導の先生からの報告書で生徒からの代表的な反省文というのはいつも上がってきているからそれには目を通しているよ」

　「失礼ですが実際にお読みになるのですか」

　「もちろんだとも。あのK君の場合には添付されていたものだけでなく、先生に言ってその他すべての生徒の反省文にも目を通したよ。しかし…確か君に名前のものはなかったと思う」

　　伊佐夫の質問に即答した教頭の言葉に慶子は驚いた。教頭もまた担任や生活指導の教師とぐるだと漠然と思っていたからだった。

「はい。ないはずです。ここにいる笹川慶子さんのものもなかったはずです」

「うむ。そういえば全員分はなかった。君はいろんな意味で目立つ生徒だから君の名を探してみたんだがなかったな。笹川さんのものも確かなかったよ」

　伊佐夫は「はい」と小さく頷いた。

「あの名物反省文は三つに別れてるんですよ。ひとつは生徒が書いたものをそのまま教頭先生が目にするグループ。もう一つは何度も書き直しをやらされた後のグループ。そしてもう一つが笹川さんの書いたもののように訂正させても最終的に担任の先生が気に入らなくて破棄されたり、僕のように最初から拒否して書かない、つまり存在しないグループです」

「おい、いい加減なことをいうなよ！」「お前は一体何を証拠にそんなことをいう！」

　担任と生活指導の教師の教師は顔色を変えて伊佐夫の言葉を遮ろうとした。

「静かにしなさい」教頭が二人の教師の声をぴしりと制した。

「つまり君は、ここにいる二人が自分たちの都合の良い反省文を書かせて私に読ませているということを言いたいのかね」

「そうです。K君のこともクラスで問題になるたびに名物反省文を書かされました。それをホームルームの時間にみんなの前で読まされるんです。『K君は積極性がないのでいつもクラスの雰囲気を悪くしています』とか『自分ができないにもかかわらず、自分がいじめを受けているという作り話をして同情をひこうとしていますが、あれはいけないとおもいます』とか、そんなのですね」

「それは事実ではないと…」

「そういう作文が出来上がるまで何度もやり直しをさせるんです」

「ほう…事実かね、それは」

　教頭は二人の教師に問いただそうとしたが、教師たちは教頭の視線をそらし、伊佐夫にすさまじい憎しみの目を向けた。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうはち やったのは僕です

「転校のいきさつは、いじめられたと被害妄想を感じていたK君がクラスの友達六人に怪我を負わせて、その責任をとってという事だった」

　教頭は確認するように伊佐夫に語りかけた。

「Kにそんなことはできません」

　ところが伊佐夫は教頭の目を見て言下に静かに言った。

「どういうことかね」

　応接室に異様な空気がさっと流れた。

「Kはいつも集団であの六人にいじめられていました。休み時間や体育などの教室外の授業では必ず六人が輪になってKを囲むようにしていました」

「うむ。その六人に逆に暴行をするなど無理だということかね」

「はい」

　教頭は生活指導の教師を呼び、何かを小声で指示した。程なく戻ってきた教師は手に書類を抱えていた。

「あの事件の記録をみると、K君は六人を文字通り半殺しの状態にしたようだ。しかも何か武器を使ったというのではなくて、素手で。おや…」

　教頭は老眼鏡を掛け直して、書類のある箇所に顔を近づけた。

「六人は左右の腕を折られ、十本の指もまた骨折させられていたとある。腕が六人分で十二本。指も六人分で六十本か…。確かに君がいうように素人には無理だな」

　伊佐夫を見る教頭の目が変わった。

「それに、この負傷の仕方はどこかで見たことがあるよ」

「はい」

「君がやったのかね、K君ではなくて」

「僕がやりました」

　教頭、生活指導の教師、担任、伊佐夫の両親、慶子の両親はそれぞれに無言だった。

「君は知ってたのかね」教頭は慶子に訊いた。

　大変な展開になってしまった。慶子はそう思いながら伊佐夫を見た。伊佐夫の目は「安心しろ」と慶子に語っていた。伊佐夫に何か考えがある、そう思った慶子は教頭に向き直った。

「知ってました。K君から相談を受けて伊佐夫君をいれて三人で話しました。」

「どんな相談かね」教頭の顔に緊張の色が浮かんだ。

「このままじゃあの六人と先生たちに殺される。暴力事件を起こしたということにして転校したい。力を貸してくれって言われました」

　当時のことを思い出して話をする慶子の声はわずかに震えた。

　生活指導の教師の顔は蒼白になり、担任教師はハンカチで額の汗を拭った。

つづく

大人のピアノ そのろくじゅうきゅう 仕切り直し

「つまりこういうことかね。K君は…そうした言葉を本当に使ったとしてだが…クラスのいじめと担任と生活指導の教師によるその幇助によって『殺される』と言いたくなる程追い詰められていた。そこから逃れるために自らが暴力事件を起こしその問題行動によって転校するしかないと思いつめ、それを君たちに相談した。そして君はK君に替わって六人に暴力的制裁を加えたが、それを実行したのはK君であると口裏を合わせることを六人に要求し、六人は何らかの理由、例えばもうこれ以上君が制裁を加えないなどの条件でそれを飲み込んだ。」

　教頭は話しながら言葉を組み立て、確認するように伊佐夫に語りかけた。

「その通りです」

「ふむ…。ここにいる二人の教師はそれを知っていたのかね？」

　二人は慌てて口を開こうとしたが、教頭に「君たちには聞いていない」と鋭い口調で遮られた。

「はい。知っていたと思います」

　二人の教師は教頭と視線を合わさないようにうなだれた。

「ふむ…。これは大問題になってしまった。今回のことについてあれこれ議論する前に片付けなくてはならない事が明らかになったようだ。」

　教頭は軽くため息をついた。

「いつものパターンになると思ったんです。あの六人がここにいる笹川慶子さんに陰に陽にちょっかいを出す。問題になりそうになると、そういう事実を隠蔽するために先生たちが茶番の反省文書かせて何事もなかったかのようにしてしまう」

「この二人の教師はすべてそういうことを知った上で事実を隠そうとしてきたと…？」

「先生たちはすべて知っていたと思います。そういう反省文を書かせる一方で、後で僕を呼び出して『Kのこと頼んだぞ』って耳打ちするように言ってきたりしました。時々みるに見兼ねて僕があの六人を暴力で締め上げたあとのことです。先生たちは僕の暴力もまたうまく利用しようとしていたんではないでしょうか」

　しばらく重苦しい沈黙があった。

「こうしたことを、ご両親はお子様からお聞きになったことはございますか」

　伊佐夫と慶子の両親に向かって教頭が尋ねた。慶子の両親は直ちに首を振ったが、伊佐夫の両親、特に父親はじっと伊佐夫の顔を見たあとにゆっくりと「ありません」と答えた。その様子は少なくとも父親はある程度のことを息子から聞いて知っているようにも見えた。

「本日は一人の女子生徒をからかった生徒に対して、同じクラスの男子生徒が振るった暴力関する問題を話し合うためにお集まりいただいたのですが、どうもその前に我々学校サイドでその背景の事実関係を含めて問題を整理する必要があったようです」

　渋面を二人の教師に向けたあと、教頭は二組の家庭に対して言った。

「せっかくお集まりいただいたのに恐縮なのですが、本日予定していた話し合いは後日再度話し合うということでご了承いただけますでしょうか」

　伊佐夫の両親、慶子の両親は頷いた。

　尻切れとんぼになってしまった伊佐夫の暴力事件はこうしていったんペンディングとなった。

「こんな感じだったのよ」

　話し終わると母親の慶子は冷えかかったコーヒーを飲み干した。なつみがおかわりは？と目で尋ね、母親はそれに頷きなつみがサイフォンのコーヒーを温め直す。

「どうなったの？そのあと…」なつみがコーヒーを淹れながら尋ねた。

「取り合えず、学校からまた何か連絡があったらということでいっくんとあたしの親たちは帰って行ったわ。あたしたちは…」

「お母様たちは？」

「いっくんが『サボっちゃおうぜ』って言ったから、そのまま教室に戻らずに屋上に行ったの」

「あらら、ずいぶん不良なお母様ですこと」

　なつみはわざとらしく母親をからかった。

「そうよ」

　母親は笑いながら話を続けた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅう 自分が最初についた嘘

「なあ、慶ちゃん」

「うん」

　屋上をに出ると、校舎を吹き抜ける風は意外に強かった。もっとも伊佐夫は五分刈りに近い短髪に学生服だったので、顔にかかる風を一瞬うるさそうに右手で遮っただけだった。慶子はスカートがひるがえりそうになるのを膝もとで食い止めながら、フェンスまで歩いて行く伊佐夫に従った。

「あかんな、うまくいかん」

　伊佐夫は屋上のフェンス右肘を置き、それを腕枕にするよう顎を乗せて言った。フェンスは慶子顎あたりだったので、慶子はフェンスを背にしてもたれかかり顔を伊佐夫の方に向けた。

「あかんて、なにが。あかんことだらけでどれのことかわからへんわ」

　白い歯をこぼして慶子が楽しそうに聞く。自分の家、笹川家には無縁のあかんこと、悪いことが伊佐夫周りにはごく普通にあるような気がした。しかし慶子は伊佐夫周りのそのあかんことには不思議と不快な忌み嫌うような匂いは感じなかった。

　伊佐夫がいう「あかんこと」と「悪いこと」には明確な区別があったように慶子は感じていた。「悪いこと」は伊佐夫が暴力を持ってで阻止しようとする、例えばあの六人組の陰湿ないじめのようなことだった。「あかんこと」を伊佐夫は、「しょうがないこと」といったニュアンスを込めて使っていた。

「Kのときも結局暴力では最終的に解決出来んかった。あいつはええやつやったで。転校なんかせえへんでもええような手がもしかしたらあったかもしれん」

「うん。でも…」

「せやな。慶ちゃんが俺のところにKが俺が六人組締め上げてそれ自分が引き起こした事にしてってシナリオ相談した時には、もう遅かったんや」

「うん。あかんかった」

「そう、どうにもならんかったわ。あのまま卒業まで陰湿ないじめに耐えられたかどうか、それこそこのフェンスからKが飛び降りるなんてこともありえない話やなかったと思うわ」

　慶子は自分の顎の高さのフェンスをKが乗り越えようとする姿を想像した。その想像は突拍子もない空想ではなかった。

「あの、先生がクラスのみんなを、なんていうのかな自分から自発的に書かせる反省文がいけないと思う」

「そや、あれや諸悪の根源は。悪いことやであれは。あれは洗脳と一緒や。担任に都合のいいようにK

を悪者にして、なおかつそれを教師から押し付けるんじゃなくて自分で書かせて自分の意見としてクラスで発表させる。いつの間にか教師が思う通りの空気がクラスを支配するわけや。」

「うん」

「みんな一つのことを信じ込まされて、最初についた自分の嘘を忘れてしまうんや。そしていつの間にかもともとクラスに溶け込めなかったKが悪者だったように日常生活が作られて行く」

「やだよね。そういうのって」

「そやな。裸の王様のお話や」

「裸の王様？」

「そや」

「なんで裸の王様話なん？」

「それはな…」

　伊佐夫はフェンスに乗せた腕を降ろし、慶子同じようにフェンスに背中を付けて話し始めた。

「ねえ…『裸の王様』の話ってお父様がよくあたしと武志に聞かせようとした…」

「そうよ。あなたのお父様があなたたちに話をしようとしていたこと、それと同じことをあたしは中学生の時いっくんから聞いたの、屋上で。あなたのお父様と結婚してあなたたちが生まれて、あの人がある時あなたたちに『裸の王様』話をしようとしたのには驚いたわ」

「全く偶然だったのね」

「そう。全く偶然。しいて言えば初恋のいっくんも結婚したあなたのお父様も、あたしが好きになった人だということね。」

「でも、なんでお父様があたしたちにその話をしようとした時、聞かせないようにしようとしたの？」

　なつみの問いかけは自然なものだった。確かに父親の『裸の王様』の解釈は子供が聞いても混乱しそうな深い話だった。しかし母にとってとても意味のある偶然、自分が愛した男が二人までも偶然にその話を大事にしていることをどうして自分の子供に聞かせようとしなかったのだろう。

「それはね…その後のいっくんの波乱の人生の始まりというかその秘密の核心みたいなものだったから」

「『裸の王様』話が？」

「うん。だから恐かったの、自分の子供がそういう世界に触れるのが…」

「分かったわ。今はもう聞いてもいいのね」

「うん。聞いて欲しい」

　母親はまた話を続けた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅういち ヤクザの世界と裸の王様

「『裸の王様』ってあの童話の…？」

「そう。例えばやくざの世界ってね典型的な裸の王様の世界やねん」

「あれれ、そんな悪いこと言って」

　慶子はさっきまで応接室に一緒にいた伊佐夫の父親の顔を思い浮かべた。一見柔和そうな顔をしているが戦前から続く京都の博徒の元締めだった。

「いや、なにもうちのオヤジがをけなしてるってわけでもあらへんのや。おれはむしろなんていうか、そういうのある意味尊いことかなって思ったりもする」

「尊い？」

「もちろんあのタヌキオヤジが尊いんじゃないねん。全力で命がけでその「王様は裸だ」っていう作り物の世界を維持して行こうっていう組員たちの思いがね、うまく言えへんけど」

「尊い…」慶子はうつむいて少し考えた。

「オレは生まれた時からうちの組の子らと一緒でなんもよう分からんかったけど、最近やっとうちの子らがどんな人たちなのか分かってきた感じがすんねん」

「どんな？」

「どっち向いて生きたらいいか分からへん。でも何かを信じて純粋に生きたいっていうんかな。生きるとか純粋とか中学生のオレがいうとなんや嘘くさくて自分で自分を小突きたい感じやけどな」

　そう言って伊佐夫は照れたように自分の鼻をカリカリっと指先で引っ掻いた。

「『純粋に生きたい』っていうのはなんか分かる気もする。あたしこそなんか生意気だけどさ。いっくんやいっくんのお父様の付き添いでうちに一緒に来るなんていうの、若い衆の人たちっていうんだっけ、目がそういう目をしてるもん」

「ああ」

　伊佐夫は慶子に同意してもらって嬉しそうに笑った。

「あの子らね、年上の組員をオレが子っていうのもなんやへんな話やけどみんなオヤジの『親が黒と言ったら白いもんでも黒』っていう世界を死ぬ気で守っとんねん。『王様は裸だ』って実はオヤジ自身はようわかってる。そんで組員たちもほんまは分かっとんのやで。自分たちの世界が特殊な常識で支えられてるって痛いほどよう分かっとる。暴力を傘にきてやりたい放題なんていうのはカスみたいなチンピラ愚連隊や。うちらは違う。生まれた時から、生まれて物心つく頃にはすでに取り返しのつかないほど『ああ、オレってこの普通の世間様には居場所なんてあらへんのやな』って自覚したもんが流れ着いたのがうちなんや、きっと」

　慶子はそれが痛いほど分かる気がした。分かる気がしたが軽々しく「分かる分かる」と相槌を打つ

のがはばかられてただ、無言で頷いた。

「うちのクラスの連中。あのクソ担任に洗脳反省文書かされてそれを読み上げているうちになんや自分の気持ちがだらしなく楽になって行くようなんも、ある意味担任教師学校の価値観を『裸の王様』みたいに守ろうとしてると言えるかもしれへん」

　苦虫を噛み潰したような表情で吐き捨てるように伊佐夫が言った。

「そうなの？かな…」慶子曖昧に言った。

「でも、手間味噌みたいな言い方かもしれへんけどうちの組の子らとは違うで、絶対。あんなんはたんに自分が楽したいからKを悪者にしてあとなんにもしんどいこと考えんでもええようにしてるだけやろが。だれか悪もんにしてそこで思考停止する、人間のクズやで」

「違うのはなんとなく分かるよ。でも、どこが違うんやろか」慶子はそれを強く知りたいと思った。

「自分がついた最初の嘘を忘れないかどうか、それに尽きるとオレは思っとる」

　伊佐夫も慶子にだけはわかって欲しいという表情で真剣に、慶子の瞳を直視した。吸い込まれそうな深い暗闇が伊佐夫の目の奥にあった。でもその暗闇はなぜか古い大切な思い出のように、慶子に懐かしいような胸が締め付けられるような感情を抱かせた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうに 夏の日に遠くから吹いてきた清潔な風

「うちの組の子らにはみんな、自分が気がついたら一人ぼっちやったっていう思いがどっかにあると思う」

　夏の昼前の校舎の屋上はだんだんと太陽が高く昇り、二人の影を床に映し出していた。いっくんの声は、そんな夏の日に遠くから吹いてきた清潔な風のようだった。

「みんなはぐれもの？」

　慶子はいっくんの声に自分の声を重ねた。

「ああ。でもヤクザもんやからはぐれてるというのとちょっと違うねんな」

「どう違うん？」

　いっくんは少し考える素ぶりだった。

「順番が逆やねん。人と比べて自分ははぐれとるなっていうなんや醒めたのとは違うて、ある日突然『あれ？自分だけ何や分からんけど人とちゃうんな』っていう迷子になったような感覚かな。そっちが先にある。どうしようもない寂しさみたいなもんかな」

「うーん。どんなんやろ。なんとなくわかる気もするけど」

　とっても大事なこと言おうとしてるよね…慶子は言葉を探して少しうつむいているいっくんの姿を切ない思いでさりげなく見つめた。

「あのな、もし世界中に耳を持った生き物がまったくいなかったら、世界に音というのはないってことになる。あるけど聞こえないんじゃなくて」

　いっくんが探し出した言葉は不思議な言葉だった。

「耳がない…聴こえない」

「ああ。ちょっとたとえ話が吹っ飛んでしもたかな」

「…ううん。なんとなく分かるよ。それでも音が聴こえたらどうするのかな。たとえば音楽のメロディみたいなのとか。かすかに『あれ？』今なんだか信じられないくらい心が落ち着く、震える何かが聴こえたって、そんなことがあったら…？」

「うちの組の子らはそういう音が聴こえるんや。たぶん。人には言われへんけど多分そういうふっとした音楽みたいなのが確かに聴こえてるんやと思う」

　慶子の耳には風に舞ういっくんの声が、その誰にも聴こえない音楽のように鳴った。

「聴こえたらどうすんやろ」今のあたしみたいにという言葉は言わなかった。

「きっと誰かに話すと思う」

「でも誰も聞こえない」

「だからそのうち誰にも話さなくなるさ」

「そしてどうなるの？」

「自分の錯覚だったって思うようになるんだ。多分」

　いっくんの顔が夏の日の風に吹かれてぱっと明るく輝いた。哀しい話なのにいっくんは朗らかな笑い方をした。慶子はその笑い顔の奥に二人で同じ曲を弾いたモーツァルトのピアノソナタの旋律が聴こえたと思った。

「錯覚じゃないよ」

「何が？」

「何がって、あたしにはいっくんの言葉の音楽が聴こえる」

「音楽か…オレの言ったことは」

「うん。世界中の誰にも聴こえない。みんなその音を聴くための耳はないから。でもあたしには聴こえたよ」

「そっか…それは…嬉しいな」

　いっくんは溶けるような優しい目で慶子の瞳を覗きこんだ。いっくんが自分の一番大切な心の場所に触れた感じがした。

「じゃあ、オレたちは仲間や」

「仲間？」

「そや。堅い何かで結びついた仲間やな。そういう仲間意識がうちの組の子らにもある」

「…そうなんだ」

　慶子は自分といっくんだけの世界に、急にいっくんの組の若者たちも入ってきたような気がした。

「今、少し寂しそうな顔したな」

「え？」

「だから、それが『あれ？自分だけ何や分からんけど人とちゃうんな』っていう寂しさが先やってこと」

「あ、なんとなく…分かるような…」

「慶ちゃんもきっと、自分だけがこの音聴こえてるんとちゃうやろか、他の人には聴こえへんのちゃうかっていう不安な気持ちもったこあるんと違うか」

　さっき外からやってきてそっと自分のこころを撫でた伊佐夫の声は、今度は慶子のこころ全体をさっと大きく包み込んだ。

「そうかも。でも他にも聴こえる人がいた」

「うん。それ忘れたらあかんねん。その奇跡が起きたみたいな感覚。なんやみんな聴こえるやないか、俺一人ちゃうやんか。なんやこの音を聴こえんやつ方がおかしいんちゃうか、少数派ちゃうんか、俺たちの方が正しいんちゃうか、こう思ってしもたら最初に聞こえた音楽の奇跡は木っ端微塵に消し飛んでまうわ。ここにもおるでえ、慶ちゃん。って同じ音が聴こえる人間ってぞろぞろ勝手に連れてきてもろても、なんやちゃうやろがそんなん。そんなんいらんわ」

「…分かった。そういうことかさっきのあたしの寂しさは」

「そや、それ分かってててわざと言うてみた」

「いけずやなあ、いっくんは」

　二人は笑った。

「うちの組の子らはそういうの絶対に忘れてへんで。最初に自分だけしか聴こえんかもしれんと思いつめてた長い月日、あきらめかけた時に同じ音が聴こえるらしいという自分以外の人間を発見した時のこと」

「うん。あたしも今日のこと忘れたくないよ」

「オレもや」

　二人は照れ臭かったのでお互いの顔は見ずに、フェンスから校舎の外に遠く見える嵯峨野の先の保津峡のが隠れているなだらかな山の稜線を見た。

「Kを追い込んだ連中ももしかしたら最初は寂しい連中だったのかもしれんけどな。自分だけしか聴こえないかもしれない音に不安を抱えて過ごした日もあったかもしれん」

「いっくんは優しい…」

　伊佐夫が自分の方に視線を移すのが感じられたが、慶子はそれに気がつかないふりをしていた。

「優しいなんてことあらへんわ。ただ、自分は一人ぼっちやったっていうことは忘れたらあかんなと

思うよ。いくら自分と同じ音を聴く人を見つけられてあの孤独が自分から遠ざかったとしても、忘れたことを忘れたら絶対あかん」

「忘れたことを忘れる…？」

「ああ、その時悪い意味での裸の王様の世界が完成してしまう。もともと自分の音はみんなが聴こえていたんだって開き直ってしまう」

「…その時音楽は鳴らないんだね」

「ああ。子どもの時に聴こえていた、いつかこれと同じ音が聴こえていたという人と出会えるかもしれないと思っていた気持ちは全部のうなってしまう。あの時の音楽ももう絶対に鳴らない」

「うん。そんな大人になりたくないね」

「そんなのは本当の大人じゃないさ」

　伊佐夫がそっと慶子の手を握った。

「忘れたことを忘れない…か」

「笹川の屋敷で聴いた慶ちゃんの弾くモーツァルトがそういう音やった」

「え？」

「慶ちゃんピアノは大人のピアノの音がしてた。オレだけにはその音が聴こえてた。ずっと前から。慶ちゃんに会うずっとずっと前から」

　慶子は伊佐夫の手を握り返した。

『あたしもだよ』

　声には出さなかった慶子のこころのつぶやきは旋律のように伊佐夫の耳に響いた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうさん その音を失わないために

「何だかすごい話を聞いてしまったわ」

　なつみは素直に言えば感動していた。しかし内心複雑な思いもあった。中学生の時代とはいえ母親のいっくんとのことは今もなお強烈な思い出となっている。
　果たして自分は自分の父親について母の口からこれほどのエピソードを聞いたことがあっただろうか。

「そうね。こんな話初めてね」

　母親の中には今でも未解決のままのいっくんがいる。なつみは話し終わったあとの母親のやや潤んだ瞳にそれを感じた。

「いっくんとはその後は？」

　なつみがその瞳につられるようにして問うと、慶子はかすかにその瞳の中に娘に対する感謝の念のようなものをにじませた。だからそれはやはり単なる昔のラブロマンスではない。ずっと封印されてきたその何かは、自分でない、独り言ではない形で言葉に出すことがどうしても必要なのだとなつみは思った。

「うん。その日の屋上が一番の思い出だわ。そのあとは何もない」

「え？どうして…」

　母親の告白めいた思い出話を受け入れるこころの準備をしていたなつみは、少し拍子抜けした。

「あたしたちが屋上にいる間に、教頭先生といっくんのお父様、あたしの父親との三人で話があったのよ。後から聞いたことなんだけど」

「どんな…」

「少しいやな話なんだけど、K君をいじめていた六人組の首謀者の男の子は地元の警察署の署長の長男だったの…」

「うん」

「実家の笹川の家でも政治家のお祖父様の方の付き合いがあったし、いっくんのお父様の方ではもっと実務的なというか…博徒の元締め、平たくいえばヤクザ組織のトップとしての持ちつ持たれつのお付き合いというものがあったみたい」

　母親は詳しくは語らなかったが、地元の名士である警察所長と衆議院議員、裏社会の顔役と地元警察のトップが隠微に関係があるというのはあるのかもしれないなというくらいの想像はなつみにもできた。

「そうなの…」

「ええ。教頭先生も教育委員会にも顔の効く、つまり自分の出世にも影響力のある名士とはうまくやっていきたかったってことだったのね」

「それでいったん解散した後三人だけで密談みたいなことを…」

「そう。いっくんの訴えは簡単にいうとなかったことになったわ。いっくんの妄想として片付けられた」

「そんな…」

「六人組の方でも話を面倒なことにしたというわけで、仕返しがあったわ」

「いっくんに？」

「ううん。いっくんには怖くて仕返しなんて出来ないからあたしによ」

「お母様に…？」

「ええ。今にして思えばくだらないことなんだけど、上履きが隠されたりお弁当に絵の具が塗ってあったり体操服がなくなったりね…」

　たんたんと話す母親の言葉になつみはすぐには言葉が見つからなかった。

「まさか、お母様にそんなことがあったなんて…」

　苦労知らずの典型的な旧家のお嬢さん。そんな漠然としたイメージがひっくり返るような話だった。なつみの驚いた顔に母親は穏やかな顔で軽く頷いた。

「それでいっくんは？」

　なつみがやっと言葉を継ぐと母親はふっと悲しそうな顔をした。

「もちろん黙っていなかったわ。でもいっくんの親から因果を含められていた。自分たちの稼業のために署長の息子とは仲良くやれって」

「辛い立場だね…」

「うん。その時は何も言わなかったけどね…」

「じゃあそのままずっとお母様はいじめを受けて…」

「ううん。いっくんがそんなこと許すわけはないわ」

「そうよね。じゃあ」

「そう。一週間後くらいに六人全員の左右の腕と指がまた全部折られたわ」

「じゃあ、いっくんはいっくんのお父様の言いつけに逆らって…」

「うん、そうよ。いっくんはその事件のあとあたしに言ってくれた。

『ヤクザ者が裏取引で警察所長に媚び売ったらおしまいや。組織維持して行く上でそういう取引もあるかもしれん。でもやっぱり最初に自分は一人ぼっちやったっていうことは忘れたらあかんなと思う。Kや慶ちゃんみたいな追い込み方、人を一人ぼっちに孤立させていたぶるようなやり方するやつら利用して自分たちの稼業維持するなんてことやったらあかんて。一人ぼっちだったんは自分やったはずやで。それを人を一人

ぼっちに生贄にして自分の過去忘れようなんて許されへん。忘れたことは忘れたらあかんのや、絶対に』

って言ったの」

「さっき聞いたいっくんの信念だね」

「うん。

『そんなことしたら慶ちゃんのピアノの音が聴こえんようになってまうやんか』

そう言ってた」

　母親の悲しい顔の理由は痛いほど分かった。いっくんは一番大切なものを守ろうとしたのだった。

「でもそのままでは済まなかったんでしょ、いっくん」

「ええ。もちろんよ」

「どうなっちゃったの？」

「博徒組織の後継者の自分がその親分の言いつけを公然と破った。その責任をとって指を詰めたわ」

　なつみは母親の言葉の意味を理解するのに手間取った。ばらばらの単語が音声として通り過ぎた。母親の目を見てその瞳の奥に聞き慣れない単語の意味を求めた。

　その母親の瞳にすっと涙が浮かんで頬を伝った。

「いっくんは言ったわ

『これでもう慶ちゃんとピアノを競い合うことはできんようになってもうたわ。でも慶ちゃんのピアノの音はこれでずっと聴こえるで』

」

　慶子の涙は娘のなつみに伝染した。なつみはソファを立って母親の横に座り直して母親の手をそっと握った。

「いっくんは笑って最後にもう一度付け加えたわ。夏の日に遠くから吹いてきた清潔な風みたいに…

『これで大人になっても慶ちゃんのピアノの音がずっと聴こえる』

」

　泣き崩れた母の肩を抱きながら、なつみはいっくんがその後程なくしていっくんが京都を離れ、関東の親戚にあずけられたことを母の口から聞いた。

「それがいっくんとは最後よ。その後はあたしが学校で嫌な思いをしないようにって、いっくんのお父様が全て手を回したみたい。いじめも嘘のようになくなった。今後困ったことがあれば将来に渡ってなんでも言ってくれって。そんなこともうどうでもよかった」

　母親は泣き止んだあとなつみにもたれ掛かりながら静かにそう言った。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうよん 朝子への陰謀

　なつみと母親の慶子が話をしていたその日、篠崎家はつかの間の平穏、嵐と嵐の間の小康状態といった空気が漂っていた。

　朝子が千葉の藤井組から解放され、疲れているだろうからと部屋で休んだのが昼過ぎだった。何時間か死んだようにぐっすり寝たらしい。

　目が覚めたのは、執拗に鳴り続けるインターフォンの音だった。精神的なショックもありインターフォンが鳴っていることに気がついたあとも、朝子はすぐに体を起こすことができなかった。両親はいないのか。朝子はそのことを不思議に思ったがすぐに枕元のメモを見つけた。
　メモには「３０分だけ駅前のスーパーにお父さんの車で食品の買い出しに行ってきます」という母親の冴子の文字があった。

　どうせすぐに止むだろう。そう思って布団をかぶり直したのだが、インターフォンはしばらくするとまたなり始める。五分ほどもそれが続いただろうか。朝子はやっと二階の自分の部屋を出てすぐの廊下にある内線電話でインターフォンに応答した。

「はい」

「武蔵小杉警察署刑事課の脇田と申します」若い男はそう名乗った。

「何のご用でしょうか」

「この度は大変なことに巻き込まれてしまいお疲れのことと存じます」

「はい…私に何か」朝子は相手の意図を確認しようとした。

「大変お疲れのところ恐縮ではありますが、これから少し事情聴取のようなものをさせて頂けませんでしょうか」

　刑事は慇懃に、しかし強い口調で言った。この若い刑事がもう少し穏やかな調子であったのなら朝子は普通に対応したかもしれない。しかし生硬な刑事の口調は朝子に警戒心を与えた。

　警察との関係は今回非常に微妙である。武志の逃亡の時点からすべてを警察に任せるという方法も取れたはずだった。しかしいろんな事情から警察には世話にならずに裏社会のことは裏社会の遣り方で解決するということに皆が納得し、その合意のもとに今まで話が動いている。

　ここで父親にも相談できぬまま、留守中に自分が警察と接点を持つことは、なにか取り返しのつかない事態を引き起こしそうな気がした。

「今ちょうど両親が不在でして、またあらためてお願いできますでしょうか」

　そう言って朝子がインターフォンを切ろうかという気配を伝えると、インターフォン越しに若い刑事が明らかに狼狽しているのがわかった。

「もしもし」いきなり別の年長者の声がした。

「はい。すみませんねえ、お疲れのところ恐縮です」

「はい…」

「脇田の上司の寺村といいます」年配の刑事の声は落ち着いた感じの雰囲気だった。

「はい…」

「単刀直入に言います。今ご両親がご不在なのは私共でも確認しております。実はご両親が車に乗って出かけられたのを確認し、お嬢さんが一人であることをチャンスと捉え、こうして内密にコンタクトいたしました」

「…」

　警察がある意図を持って自分に接触してきたことを知って朝子は動揺した。

「ご両親はどうやら警察とは別の組織を使って物事を進めようとされてるようですが、それは非常に問題のあるやり方です」

　寺村刑事は痛いところをやんわり突いてきた。

「詳しいことは私には分かりません」朝子はそう言って逃げようとした。

「お嬢さん、よく聞いて下さいね」

　寺村は心底朝子のことを考えていると言った説得口調で朝子に呼びかけた。

「このままの物事の進め方では、一緒に監禁されていた斉藤武志さんは無事に帰ってこれないかもしれませんよ」

　朝子は寺村の言葉に頭が真っ白になった。

「どういうことですか…」

「ですから、お嬢さんがご両親には内緒で警察に協力してくれれば、武志さんの身の安全は警察が保証します。南友会、通称南方組の石橋が仕切っているうちは警察は斉藤武志さんの生命を含む安全はいたし兼ねるということです」

　口調は穏やかだったがこれは脅迫的な有無を言わせぬ協力依頼だった。

「あたしは…どうすればいいんですか…」

「あ、今あなたのご両親の車がこちらに戻ってきますので、一旦インターフォンを切ります。ご両親にばれないように今からいう携帯電話にあなたがあとで電話をしてください。私の携帯です。お父さんは今回の件では南友会と繋がってしまっていますから必ず内密にお願いします。武志君のお姉さんなどにも決して相談しないようにして下さい。でないと彼の身の安全は保証できかねます」

　朝子は混乱する頭を何度か振り、震える手で寺村の携帯の番号をメモした。

「ではよろしく」

　寺村刑事が番号を告げるとインターフォンは性急に切られた。程なくして玄関に両親が帰宅した気配がした。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうご 愛しの武志

　朝子は混乱した頭を整理するためにもう一度ベッドに横たわって布団を浅くかぶった。そして台湾屋台で武志とおしゃべりしていた時のことをぼんやりと思い出していた。

「あたしが最後は何とかする」

　なぜ自分はあんな言葉を口にしたのだろうか。一週間後には自分の身の安全、命すら危ぶまれる武志に何か言ってあげたかった。武志があんな状況の中、自分ができる限り最大限周りの人間のことを慮り、なんとか最善の結果を作り出そうとしているのが痛いほど切ないほど分かった。今から思うと確かにあの場の雰囲気から口にしたこととはいえ、自分は武志に対して母性本能のようなものを感じていたような気がする。

　奇妙な言い方かもしれないが、優等生の子供がたんに学校で勉強ができるというだけではなくて、大人になるということにも優等生であるというのがあると思う。そういう意味で自分に期待される若者像を察知してそれをいち早く身につけることに関しても武志は優等生なのだと思った。それは年配者に対してだけではないとも思う。武志は高校時代までおそらく同年代の女の子に半端じゃなくもてたと思う。それは武志がおそらく同世代の女の子が期待する大人の男性像を察知して身につける能力が抜きん出ていたからのような気がする。

　ここ数日接していて思ったのは、武志はとにかくいわゆる「ツボ」を抑えるのがうまかった。的確に相手の考えていることを読み取って、そこに目立たない程度の自分らしさを加えて相手に切り返す。自分の両親にしても、おそらくあの石橋というヤクザや南方という親分さん、姉のなつみ先生、父親に対してもそうだった。

　でもそのクールな大人らしさは、本当の武志なのだろうか。朝子はかすかにそんな気持ちを抱いていた。

　ピアノを弾いている時の武志は完全な大人のピアノを弾いていた。それは大人びた演奏ではなくて、どこか突き抜けて大人だった。子供だった自分を遠くから大人の視線で優しく包み込むような演奏だった。かつて子供だったことを忘れない、しかし子供であることを一度は完全に忘れた、忘れることが必要だった大人の諦観のようなものが漂っていた。

　武志はその人間としての「大人びた自分」と、ピアニストとしての「大人のピアノ」を弾く自分のアンバランスさに気がついていると思う。気がついてそのことに何か息苦しさを覚えている。

　それは大人のピアノを弾く自分から見れば、大人びた自分がおそらく背伸びをした偽物のように感じられるのではないか。

　背伸びをしようと思ったことは実際には武志には一度もないと朝子は思う。なぜなら武志の器用さは背伸びなどせずにも、あっさりと大人や男友達や女の子の期待する人間として振る舞うことができてしまうからだ。

『自分はこうやって「大人のピアノ」を弾く資格があるんだろうか。たまたままぐれでそういうことが出来ているだけじゃないのか』

　武志の苦悩、武志が南方に答えを見出そうとしてヤクザ組織の中に身を置いた理由はそこにあるという気がした。千葉の藤井組で会った南方という人には多分大人のピアノを弾く十分な資格があるのだろう。

　左右の小指をさりげなく見たけど、確かに武志が言っていたようにそこにはピアノを弾くにはあってしかるべき小指がなかった。それでも武志は南方の演奏が凄まじいと言っていた。

　それは南方が自分とは違ってごく幼少の頃から、「大人のピアノ」のなんたるかを知っていたためではないだろうか。どうすれば大人びた自分が弾く大人のピアノではなくて、南方のように自然に大人のピアノを弾くことができるのか、南方はいったいどんな生き方をしてきたのか、それを武志は何とかつかもうとして一年以上も南方のそばにいたのだ。

　眠れない夜、両親の目を盗んで武志と夜家の周りを散歩した時に武志が言っていた。

　南方さんの右手の小指は今から十年ほど前組織同士の抗争の折、止むに止まれぬ事情で落とすことになったらしい。しかし左手の小指は南方さんがまだ中学の時に自分から落としたものだという。南方さんはそれについては多くを語らなかったようだった。ヤクザがらみの事情ではなくて南方さんの大切な初恋の相手のため、ということらしかった。

　武志は南方さんが中学の時に小指を落とすことになったことと、小指のない南方の弾く究極の大人のピアノに関連があると確信しているようだった。「自分に決定的に欠けている世界がそこにある」と言っていた。「それに気がつくことができなければ、僕のピアノは必ず近いうちにダメになってしまう」武志は苦しそうな顔で何度もそう言っていた。

　朝子は布団をかぶり直して藤井組にまだなお軟禁状態の武志の顔を思い浮かべた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうろく 迷いと決断

　ケータイのメモリを参照する。さっきインターフォン越しに聞いた寺村刑事の連絡先の番号が小さなディスプレイに浮かんでいる。

　このままヤクザ組織に武志のことを任せていても身の安全の保証はない、刑事たちはそう言っていた。しかしここに送ってもらうまでに石橋が言っていたように、朝子には堅気の武志がただちにヤクザの流儀でけじめをつけさせられることはないという気もしていた。外側にいる刑事よりも、石橋の事態の見方が正確なのだと思える。

　しかしなお朝子には気がかりな点があった。石橋は言っていた。

> 「例えば南方が懸念していたのは、武志が極道のケジメを取れないのならばいっそ正式に武志を組に入れた上でケジメをつけさせろ、とか…いかにも言いそうですね、あの藤井なら」

　朝子はこれを恐れた。武志がいかにも望みそうなストーリーだという気がした。決していい格好をしたがるというわけでないのはよく分かっている。しかし、武志の中ではその選択が「大人である」ことの証明のように感じられるのではないだろうか。

　武志は南方に「大人である」ことの意味を探していると思う。その武志にとって、藤井の「けじめをとって大人になれ」という言葉はおそらく甘美に響くのではないだろうか。あの藤井というヤクザの組長の暴力的だが狡猾そうな目は、武志のアキレス腱を的確に見ていると思った。
　その時に南方や石橋の描いている解決のシナリオは果たしてうまくいくのだろうか。武志が自分なりの誠意のつもりで藤井の策略に乗せられてしまう可能性は多いにありそうに思えた。

　朝子は胸が苦しくなった。

『とにかく、あの場所から強制的に武志を連れ出してしまえばそれはなくなる』

　朝子は迷いを断ち切ろうとするように声に出してつぶやいた。

　もしかしたら自分は事態の推移をぶち壊しにしようとしているのかもしれない。

　でも、それが必要なんじゃないだろうか。たとえ後から武志本人に怒られたとしても。

　朝子は寺村刑事の番号をディスプレイに出したままケータイの緑の呼び出しボタンを押した。

「はい。寺村」

　朝子はさっきの刑事の声を確かめて深呼吸した。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうなな 警察の応対

「あの…先ほどの…」

　朝子は緊張を押し殺そうとしたが声が震えてうまく話せなかった。自分はある重大な裏切りをしているのだという自覚があった。

「よかった。お電話いただけないかと思っていましたよ。ということはお父さんお母さんにも話さずにあなたの判断でこうして警察に連絡してくれたわけですね」

　意外にも寺村の声の調子はすぐに穏やかになり、またその言葉は演技ではなく本当に朝子が電話をかけてきてくれたことに安堵しているようだった。

「私の一存です」

「そうか、いやそうですか。よかった。必ずや警察が武志さんを無事に救出しますよ」

「あの、それについて申し上げたいことがあるんです」

「はい。なんでしょうか」

　朝子は車の中で石橋から聞かされた、藤井が武志を追い詰めてヤクザ組織に入れた上でけじめを取らせる可能性について寺村刑事に話をした。込み入った背景を理解するのに何度も話の途中で朝子に確認をしながらだったが、寺村は事情を正確に理解したようだった。

「そういう心配があってあなたはこうして密かに警察に連絡しようと決心されたわけですね。あなたの周りでヤクザ組織に解決を任せようとしている状況では、ひょっとして武志さんが藤井の策略にはめられることを防げないかもしれないと」

「はい。その通りです。藤井という人は武志さんの義理堅いと言いますか、真面目な性格を逆手にとって、『お前が組織に入って指を詰めるというヤクザの責任を取れば、恩人の南方は指を詰める必要がない、そうしなければ南方がお前のために指を詰めることになる』多分そんなことを言うと思うんです」

「なるほど。千葉県警との合同捜査会議でも藤井は何か企んでいるという見方が有力です。普段藤井組を担当している刑事たちはおそらくあなたの懸念に頷きそうですよ」

「…はい。どうすれば…そういう事態を避けられるでしょうか」

「大丈夫。あなたの助けがあれば我々が強制捜査で踏み込んでそのまま武志さんを救出することができます。」

「助けと言いますと…」

　朝子はしゃべりながら、もう戻れない地点に自分は来てしまったのだという胸の動悸を、汗に滑りそうな携帯電話を握りしめながら必死に抑えた。

「事情聴取の上、家宅捜索の令状をとる手続きにご協力ください。現状ですと踏みこもうにも『そんな人間はおらん』と言われたらそれまでなのですが、あなたからの被害届があれば拉致監禁事件として捜査が可能

です」

　応じれば完全に自分は、篠崎斎藤両家と南方、石橋を裏切ることになる。そして、もしかしたら武志本人も自分のことを余計なことをした裏切り者と憎むかもしれない…

　引き返すなら今だ。やっぱりできないと言って電話を切り、父親にすべてを話せばすべてうまくもとのままになるだろう。武志に嫌われることもない…

「もしもし、どうされました、朝子さん？」

　寺村は急に押し黙ってしまった朝子に焦りを感じたのか、必死に呼びかけた。

「…」

「もしもし、朝子さん、聞いてらっしゃいますか」

「…はい」

「ではこれから警察までご足労願えるということでよろしいですか」

　寺村は弱気な丁寧さのにじむ言葉ではあったがダメを押した。今度は寺村の緊張が回線を伝ってきた。

「はい。うかがいます」

　沈黙のあと、朝子は答えた。

　もう、もどれない。でもこれしかない。朝子はそう自分に言い聞かせた。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうはち 藤井組長の罠

「今頃オネエチャンは無事にお家に帰って何しとるかの」

　朝子が帰宅してから数時間、明け方の緊迫した時間は過ぎて藤井組のだだっ広い和室には、藤井、南方、武志の三人がいた。廊下には藤井の配下の者が控えており屋敷の中の空気は依然張り詰めていたが、日も高くなって空気もぬるむにつれ藤井と南方も普通に話をしはじめていた。

　あまり関係がうまくいっていないとはいえ同じ蜷川会の幹部同士、底流には通ずるものがある。

　藤井に話を振られた南方は「オネエチャン」という言い方に苦笑しながら、武志の方を向いた。

「きっと疲れて横になってると思います」武志は臆せず答えた。

「そうだな。多分一生に一度の災難で身も心もクタクタと言ったところだろう」南方が相槌を打つ。

　南方の藤井に対する多少の皮肉に、武志は静かに頷いた。

　南方の武志に対する口調も徐々に変化してきていた。自分のメンツと顔面を潰された相手ではあるが、直ちに怒りに任せて武志を葬ろうというわけではないらしい。藤井の第一に求めているのは、やはりあくまで配下の者たちに示しのつくけじめであるようだった。

　素人の武志に指を無理やり詰めるさせるのではけじめにならない。藤井がほのめかしているのは、親代わりの南方の指。もしくは石橋が想像していたようにおそらくこれが南方の最終的な魂胆に違いない、武志のヤクザ組織への加入と、加入した上でのけじめの指詰めのように感じられた。

「そもそもあの、べっぴんでおっぱいの形のいいオネエチャンとはどんな知り合いだ」

　今度は藤井が直接武志語りかける。武志が南方の目を見ると南方は「この軽口は受けた方がいい」と目で語った。藤井は自分から武志にわざわざ話しかけている。魂胆があるにせよ無下にはできない。

「今回のことで千葉の店から身を隠した時にまず、姉のところに行きました。その時に姉のピアノ教室にレッスンに来ていた生徒さんと出会って話を聞いてもらったんです。その中の一人の方が僕をとりあえず匿ってくれることになって、ご自宅にお邪魔しました。そこで出会いました」

「ほう。じゃあ、この俺の顔の傷が取り持ったご縁というわけか」

「はい」

　言葉は冗談めかしているが、藤井は自分の顔をさすりながら武志の目を獰猛な凄まじい視線で覗いた。普通の素人ではそれだけで縮み上がりそうな深い凶暴な目であったが、武志はその目をまっすぐ見据えて返事をした。

　武志のその澄んだ目は藤井の視線を少し満足気に変えたようだった。それはまるで就職活動の面接官が学生を試しているような目であった。

「なあ、南方よ」

「はい」

「お前も指詰めると言ったって、もうすでにお前さんの左右の小指はねえじゃねえかよ」

「はい」自嘲もなく、南方ははっきりと答えた。

「その指があればお前さんが弾くピアノももっと上手で俺に因縁付けられることもなかったわけだ」

「…」

　南方は藤井の腹の中を読みながらただ軽く口の端を動かした。

「俺は音楽のことなんざよく分からんが、武志も小指詰めたんじゃピアノもうまく弾けなくなっちまうよな」

　言葉の途中から藤井は武志を見た。

　武志はどう答えたら良いか検討もつかず、南方に救いを求める視線を送った。

　南方も藤井の腹の中が読み切れず、「藤井の出方を少し待て」という視線を返した。

「どうだろな、兄弟よ、さっき思いついたいい考えがあるんだが」

　藤井が盃を交わした弟分の南方に、さりげなさを装って上下の区分を付けた言葉をかける。南方の視線にかすかに警戒の色が浮かんだのを見た武志は、自分の心臓が不安で高鳴り始めるのを感じた。藤井は不気味に笑っていたが、目の奥にはさっきの獰猛な闇があった。

「この武志を藤井組で預かるというのはどうだ。武志の身柄ごと藤井に差し出すということでけじめは充分につく。その後は指を詰めさせたりなどはない。ただし俺の直属として組のために充分な働きはしてもらう」

　武志不安は的中した。

　絶体絶命である。

　これは意味指を詰めるよりも大きな詰め腹を切ることになる。南方の庇護を離れて武闘派の藤井組の舎弟として否応無く自分のこれからの人生は転回していく。藤井に命じられれば、拳銃を持って敵対する組の組長の命を狙う役目も果たさねばならなだろう。藤井の狙いは単なる腹いせなどではなく、ここにあった…。武志は絶望の色を隠そうとしたが、それは不可能だった。

　自分は世間知らずの極致であった。甘すぎた。自分の誠意と才能はどんな場合でも最悪の事態を切り抜けられる、そんな根拠のない思い込みがこの事件の中で根拠のない落ち着きを自分に与えていた。泣き叫んで許しをこうこともしなかった。泣き叫んで助けてくれと、南方にも篠崎さんにも両親にも姉にも、そして朝

子にも一度も言わなかった。

　要するに舐めていたのである。自分の浅さに屈辱的なほど根源的に打ちのめされたが遅かった。

「それもいいでしょう」

　南方の静かな声が意識の遠くで聞こえた。

　武志はそのまま気が遠くなりそうになるのを最後の気力で必死に押さえ込んだ。

つづく

大人のピアノ そのななじゅうきゅう インターネット賭博と振り込め詐欺

「武志を藤井組でどう使うおつもりで？」

　南方は淡々とした口調で藤井に尋ねた。南方が藤井の提案に乗りかかっていることが武志の頭の中を掻き回した。南方は自分の手の内から俺を手放そうとしている…。武志は座っている畳の底が抜けてそのまま自分が落ちて行くような感覚にとらわれた。

「ふむ」

　藤井はとぼけた顔を武志に向けた。求められれば理路整然と自分を語り、状況を把握している気になっている。自分の立てた見たての中で予想を立てれば、こういう人間は一見沈着冷静で的確な判断をするように見える。しかしその前提が崩れた時にこのてのタイプは弱い。ガラガラと崩れて初めて自分の土台が砂上にあったことに気がつく手合いの若造…。

「どうした武志、南方が『武志をお前なんかに渡すもんか！』とか啖呵をきって自分を守ってくれるとでも思ったか」

　武志が黙ってうなだれていると、藤井は床几についた腕を支点にやおら立ち上がり、足を崩している武志の前にやってきてそのまま胡座をかいてすわった。

「頭はいいがパニクってるお前さんに状況とやらを解説してやるとこういうこった。聞きたいか」

　武志は悲痛な顔で頷いた。

「教えて欲しかったらその崩した足きちんとたたんで正座せえ」

　藤井の平手打ちが容赦無く武志の顔面に飛ぶ。口の中を切った武志が手の甲で口の端の出血を拭った。

「すいません」精一杯の大きな声を出して武志が座り直した。

「南方はな、俺の弟分だ。この世界親や兄のいうことは子や弟は絶対に服従だ。まあ、しかしいろんな事情があってこいつとの関係はそういう杓子定規のもんじゃねえ。組織の違いや伝統から言って六四の杯だが、実質は五分と五分。一見仲は悪いがおれは南方のことを認めてるし、五分のつもりでおるわ。南方は今、俺が武志を自分の組みに入れて何をさせようとしているのか見極めようとしてる。その上で一番いい形を探ろうと、こういうわけやな。したたかさのなかに冷静に頭働かして一瞬の流れを読むことができるんだ、こいつは。さすが京都の老舗博徒の元後継だけのことはある。どっかの若いもんとはわけが違う」

　藤井はそう言って皆方を見た。南方は苦笑しながらもまんざらではない顔を返した。

「京都の老舗博徒の後継…ですか？」

　武志は藤井に聞き返し、そして南方を見た。

「藤井さん、まあ、その話は今はいいじゃないですか」

「そっか。武志は南方の出自なんかは知らんのか」

　藤井は面白そうに二人を眺めた。

「京都のことはうちの石橋にもほとんど話してませんよ」

「ほう、そっか。もっとも俺もお前から直接聞いたんじゃなくて俺のオヤジ、先代藤井組組長から聞いたんだけどな。老舗博徒の後継が中学の時親の仕切りを無視してして学校で大暴れして家で同然で関東に流れて。中坊の時の学校乱闘事件話はその背後に女の影もあってなかなかいいんだ、これが」

　南方は一瞬自嘲気味に笑ったように見えた。しかしすぐに藤井のおしゃべり封じるような強い口調で聞いた。

「それより、何企んでるんです。武志を引っこ抜こうとして…」

「うむ。あれだ。インターネット賭博と振り込め詐欺だ。あれを何とかしたいと思ってる。武志ならなんとかなるんと違うか」

「ああ、なるほど」

　南方は得心がいったという顔で頷く。

　武志は依然として話が見えなかった。ただ『京都の老舗博徒の後継』という言葉が頭の中にぼんやりと舞っていた。

続く

大人のピアノ そのはちじゅう 幽霊との戦い？

「インターネット賭博と振り込め詐欺…僕がそれをやるんですか」

　必死に話の出口を見つけようとする武志は藤井に真剣な面持ちで尋ねた。

　藤井と南方は顔を合わせて愉快そうに笑った。武志の混乱は深まるだけだった。

「いや、そういうことじゃねえよ。いくらなんでもお前みたいに切れるヤツに、そんなハンパなシノギをやらせるつもりはねえよ。なあ、南方」

「ええ、まあ…」

　南方はまた面白そうに笑った。

「お前、半グレって分かるよな」藤井が武志に語りかける。

「はい。朝青龍の引退騒動や海老蔵の暴力事件で背後で糸引いてたのが半グレですよね。もともとは関東の大きな暴走族が連合した組織だったとか」

「そうだ、いまじゃ暴力団顔負けのやりたい放題だ。あの時も裏でそれぞれに手打ち金が数千万動いてるが、半グレどもの本職はそういう脅しじゃねえ」

「そうなんですか」

「ああ。あいつらが日常金を儲けてるのがさっき言ったインターネット賭博と振り込め詐欺よ」

「はい」

「知ってたか」

「いえ、知りませんでした」

「そうか。まあ、いいだろう。今はっきり言ってヤクザは暴対法の影響でジリ貧だ。みかじめ料や借金の取り立てなんかも全て規制されているし、かと言って俺たちが半グレと同じことをやろうとしても上手く行かない。」

「それは…」

「まあ、はっきり言ってそういうのが得意じゃないというところは大きいだろう。ヤクザは暴力の駆け引きは本職だが、サラリーマンを煽ってネット賭博に引き込んだりするノウハウもないし、年寄りに猫なで声使って実の息子のように信用させて騙すとかいう手の込んだ演技派もいないしな…」

「それは…なんとなく分かります」

　武志は藤井の反応を恐れながらも相槌をうった。

「しかし最大の違いはな、あいつらが幽霊だってことよ。今ヤクザの最大の敵は他の敵対する暴力団じゃなくて半グレどもなんだが、幽霊相手の喧嘩にはヤクザは勝てねえんだ」

　藤井はまた武志に理解し難い言葉を発した。幽霊…？南方の方を見ると、南方はふんふんと頷いている。南方には半グレが幽霊だという藤井の意味するところが分かっているのだろうか。

　武志と南方の目があった。

「幽霊…。分からんか」南方が武志に言った。

「はい」

「おい、南方よ。もともとその幽霊っていう言い方はお前が俺に教えてくれたんだったよな。俺はお前の半グレ幽霊説を聞いて全部がわかったぜ。あれを武志にも話してやってくれねえか。どうも俺はお前と違ってそういう言葉の使い方がうまくねえ」

　藤井の言葉を受けて南方が頷いた。

「分かりました。じゃあ少し長くなりますが、うちの組の中国マフィアとの話と一緒にしましょうか」

「ああ、そうだな。それがいい。中国マフィアとの抗争も幽霊との戦争だったな。それも一緒にに話してくれたら分かりやすい。昼飯が少し遅くなったが寿司でも食いながら話すとしよう」

「了解しました。」

　南方は武志に足を崩せと目で合図した。

続く

大人のピアノ そのはちじゅういち 藤井城

　武志は細長い廊下を藤井と南方の後に従って通り抜けた。百畳もある座敷から昼メシを食べるための部屋に続く階段を上っている。

「迷路みたいだろ。サツがガさ入れに来た時や他の組に万が一カチコミかけられた時にわざと通りにくいようにしてある。戦国時代の城と同じだ」

　先頭を歩く藤井が一番後ろの武志に向かって前を向きながら大きな声を出す。

「はい。話には聞いたことがありますけど、本当だったんですね、ヤクザの本拠は忍者屋敷みたいだって」

「あほ。忍者屋敷じゃなくて戦国大名の城だ。この屋敷の作り方も先代の藤井組組長、つまり俺の親父が兵庫の姫路城を手本に作ってある」

「姫路城ですか」

「そうだ世界遺産の姫路城。お前行ったことがあるか」

「いえ、ありません」

「神戸あたりに遊びに行くことがあったら一度足を伸ばして見るのもいいぞ。俺が初めて行ったのはまだ小学校に上がる前だったが、自分のこの家とそっくりなんで驚いたもんだ。もちろん大きさは違う。しかし造りはそっくりだ。例えば姫路城では外門から入って行って急なカーブの上り坂を上がって内門に行くまでに、左右の道脇に白い小さな窓が空いた壁が張り巡らされている」

「はい。このお屋敷にもありました」

「そうだろ、姫路城はその小窓から弓矢で敵を狙い撃ちで打てるようになっとるんだ。それと同じでお前が見たうちの組の城も、あの小窓の内側には地下の武器弾薬庫に通じるエレベーターがある。抗争の時にかりに外門を突破してもそこから先の内門に入ることはヘリでも使わないとほぼ不可能だ」

　藤井は自慢げに言った。

「実際に使ったことはあるんですか」

　藤井と南方の大きな笑い声がした。

「あるぞ。まだ暴対法が施行される前だったがな。対立する組と銃撃戦をやらかしたことがある。死傷者四十七名。まだ服役してるうちの若いもんも沢山いる。今でも他の組や警察とはいつでも戦争ができる状態だ」

　急に生々しい話になって武志は口をつぐんだ。

　ゆるい螺旋のような細い階段を三階分ほど上がったところにある広間は、船橋の市街を抜けて一面のガラス張りから千葉港の先につながる太平洋が見渡せる眺望だった。高級ホテルの最上階のラウンジのような雰囲気は、戦国大名の城で言えば天守閣に相当するものだろう。

　大きなテーブルの上にはすでにこれまた大きな寿司桶がいくつも並んでいた。椅子もあり、今度は正座しなくてもいい。

「祝い事の時にはここに寿司職人呼んで握らせたりするんだ」

「すごいですね」

　武志は圧倒されていた。姫路城まではいかなくても、鉄筋コンクリートのこじんまりした要塞の南方組事務所とはスケールが違った。

「ああ。でも南方の実家の京都の城はもっとすごいぞ。あれは本当の城だ」

　再び京都の話になると南方は口をつぐんでいる。

「京都は帰ったりするのか」

　ソファの対面に座った南方に藤井が語りかけるが、南方は首を振った。

「中学の時以来帰ってません」

「そっか、そりゃ残念なこった」

　藤井がそういいながら、武志にも座るように手で合図した。

「失礼します」武志は腰を下ろした。

　南方は武志にテーブルに固めて置かれていた瓶ビールを指差した。武志が詮を抜き南方が藤井にビールをつぐ。

「ほんなら、南方先生にもういっぺんレクチャーしてもらおか。幽霊との抗争について」

　南方は軽く会釈をした。

つづく

大人のピアノ そのはちじゅうに 暴対法と幽霊

「先生っていうのは冗談でもやめてもらいたいんですが、それじゃ話しましょう」

　南方は藤井と武志の両方に視線をやってそう言った。

「暴力団員が今まで一番多かった時が警察庁の発表で２１万人。警察庁指揮の頂上作戦で半減してだいたい１０万人になってる。その後の暴対法の施行でさらに半分の４万人台、これが今のヤクザのおおよその人数だ」

　南方は寿司には口を付けず、藤井組の若い衆が用意したポットのお茶で喉を湿らせながら語り始めた。

「ものすごい減り方だったんですね」

「だったじゃない。現在進行形で続いてる。もっとも数ばっかり多くてもしょうがないけどな。それにしてもここ数十年で四分の一は凄まじいだろ」

「はい」

　武志のつぶやきに南方が応える。藤井は苦い顔で寿司を口に放り込んでいた。

「ディズニーランドのある浦安市の全人口が１５万人だ。それよりはるかに多かったヤクザが今ではたったの４万人。藤井さん、この城がある海神は人口どのくらいですか」

「ふん。確か約２万人かな」

「海神町よりはまだ多いが、これもあと数年すれば全国のヤクザをかき集めても千葉の一つの町より小さい集団になる」

「暴力団対策法のせいですね」

「それが大きいな。実際にうちの南方組でも本家の蜷川会でも構成員は減っているし、その大きな原因は１９９２年に施行された暴力団対策法だ」

「はい」

「しかしよ、武志」

　藤井が旺盛に寿司を平らげながら武志にしゃべりかける。

「はい」

「減りましたっていうのも、考えてみればなんか不気味じゃねえか。お上はまるでパソコンのデータを消したみたいに『暴力団はいなくなりました』って言ってるけどよ、海や山に埋めたわけでもねえし、江戸時代の所払いみてえに海外に追放したわけでもねえ」

「それは確かにそうですね」

「一体どこに行っちまったんだよ、そいつら」

「…」

　警察署や派出所の前のポスターで、暴力団排除実績というのを時々見かける。武志はなんとなく数字がすごい勢いで減っているんだなとは思っていたが、減ったと言っても警察が留置場に収容したわけではない。考えたことはなかったが、確かに不思議な気がした。

「それがよ、幽霊なんだよ。幽霊がやめた組員のところにやってきて、そいつも幽霊にしちまうんだぜ。だから浦安の人口に匹敵するような幽霊がうようよとこの日本に歩いていることになる。足のある幽霊だぜ。ぞっとするよな」

　南方が藤井にビールをつぐ。南方も藤井に強いられて寿司とビールを口にした。

「それだけじゃなんのことか分からんだろ。例えば蜷川系列の歌舞伎町に事務所にある組が去年丸ごと幽霊にされたんだ。構成員８０人ほどで蜷川直参じゃないがそこそこ名の通った組だ」

　ビールで寿司を流し込んだ南方が再び話を続ける。

「８０人が幽霊に…？」

「ことの発端はその組の中堅幹部が中国人マフィアに殺傷された、「歌舞伎町爆竹事件」というヤツだ」

「はい」

　続く

大人のピアノ そのはちじゅうさん 歌舞伎•中国人•半グレ•幽霊

「武志は歌舞伎町は行ったことあるな」

　南方が横に座っている武志に話しかける。

「はい。何度かですけど」

「朝までいたことあるか」

「あ、はい。船橋の店の先輩たちと飲んで終電がなくなって花園神社で座ってたことあります」

「オカマに襲われなかったか」

「え？いえ先輩たちと一緒でしたから」

「冗談だよ」

　南方と藤井が笑い、武志は少し赤くなった。

「武志、寿司食えよ」

　藤井が機嫌のいい顔で武志の座っているテーブルの前にに大きな寿司桶をグッと突き出す。三人前くらいありそうだが、藤井はすでに自分の桶はほとんど空にしていた。

「はい。いただきます」

「あ、おめえはお上品に箸使うんだったよな。ほら」

　テーブルに割り箸を探して目をキョロキョロさせた武志に、藤井が自分の近くにあった割り箸を差し出した。

「あ、すいません。ありがとうございます」

　武志は少し落ち着いた気持ちになって鉄火巻きを口に運んだ。

「朝までいたんなら、歌舞伎町の一番不気味な空気は知ってるわけだ」

「はい？」武志は箸を置いて聞き返した。

「お前は歌舞伎町が一番怖い時間はいつだと思う？」南方が聞く。

「怖い…。以前南方さんと知り合う前に高校の友達とフラフラ遊んだ時は、夜の街はどこか怖かったです。暗闇に飲み込まれそうで、少し気を許すと吸い込まれそうな気がしました」

「うん。それが普通だ。ガイドブックやノンフィクションや歌舞伎町を舞台にした暗黒小説やらをちょろっと読んで歌舞伎町が分かったような気になっている人間が一番危ない」

「そうだな。だいたい金にもならんトラブル起こしてみかじめ料も赤字にしてしまうのがそういう困った自称不良サラリーマンや通ぶったフリーターだ」

　南方の言葉に藤井が加える。

「はい。なんとなく分かります」

「でもお前は今は夜はそれほど怖くあるまい」

「はい。今南方さんに聞かれて思い出してみたんですけど、今は怖くないですね」

「それはお前が闇の側の世界と繋がったからだな。お前が南方組の名前を出してイキがるようなアホだとはさらさら思ってはいないが、万が一なにか事があっても俺の名前を出せば大丈夫だ、という安心感みたいのがどこかにあるだろ」

「はい…。確かにあると思います。すいません」武志は恐縮した顔をした。

「いや、お前の性格だとすいませんと言いたくなるんだろうが、それば別にいいさ」

　南方は笑ながらそう言って寿司を幾つか口に入れ、武志にも促した。

「話は戻るが、そういうお前がまだ怖い、というか新しく怖くなった時間がないか？」

「やっと分かりました。通りからも人が消えてカラオケの漏れ聞こえてくる音も無くなって、店が路上に出した生ゴミの袋に朝の白い空からカラスが降りてくるあの時間。さっき南方さんが不気味と言った時間ですけど、なんか不気味とは違った感覚があったんです」

「おう。それよ。それそれ、やっぱりおめえには分かるか」

　すっかり寿司を平らげた藤井が爪楊枝で歯をくりくりしながら武志に言った。

「はい。憑き物が落ちたように歓楽街がしんとしているのに、見えないところで誰かが活動しているような気配を感じます。昼夜逆転したシャブ中の人間や売り上げを数えている店長とかじゃなくて、その時間が正規の活動時間みたいな人たちが、昼間の住人の見えないところで透明人間みたいに整然と存在してるみたいな…」

「そうだ。それだ。それが幽霊だよ。その中には消えた蜷川会の８０人の息遣いも混じってるんだ」

「誰なんですかそれは」

「戸籍を消して顔も整形したこの世に存在しないはずの人間の息遣いさ」

「戸籍？整形？」

「ああ。戸籍は引き継いだ中国人が持っている。例えば斎藤武志っていうお前とは何の縁もゆかりも無いない人間が、お前の戸籍を持って日本の何処かで暮らしている。戸籍と顔を失ったお前は明け方の花園神社で

お前が感じた息遣いの中で幽霊のように活動をしているのさ」

　武志は話の内容をまだ理解できていなかった。しかし自分になり変わった人間が斎藤武志として存在していることを見ている自分を想像してみた。

　それを見ている自分は一体何者だろう…。すうっと自分の足元がぽっかりと底を抜けてしまったような気がした。

　その感覚は死の恐怖だった。死んだ自分がまだ生きている自分を見ている。正確には自分と認識されている赤の他人を見ている。この世界にもあの世にも自分の居場所はどこにもない。

　死の恐怖。それも極めて純度の高い死の恐怖…。

「武志、死人のような顔になってしまったぜ」

　藤井が話しかける。

「あ、はい。いえ…僕は…」

「中国人が日本人の戸籍を買ってそれを売って儲ける。生きながら幽霊となった人間はどうなると思う？」

　南方が武志に尋ねる。

「いえ…分かりません」

「半グレどもが幽霊を仕込んでインターネット賭博やオレオレ詐欺やらせるんよ」

「ええっ？」

「暴力団対策法が施行されて、警察は組員の過去はもちろん親類縁者、オンナ、ヤクザになる前の友達も全部把握して警視庁の犯罪者データベースに入れている。これがある限りは暴力団をやめても警察に監視され続ける。元ヤクザっていうのは一生消すことができない。極道のしのぎはできず、カタギにもなれない。どうするか」

　南方が厳しい表情をする。

「もうカラクリがわかったよな」

　藤井もまた怒りを顔ににじませている。

「中国マフィアと半グレがタッグを組んで、暴対法で行き場のなくなった人間を絡め取ってビジネスにするサイクルががっちり出来上がってるんだよ。なめたまねしくさりやがって。人身売買や臓器の売買なんてもんじゃないぜ、これは、借金の取り立てだって戸籍奪って顔整形させて、人を生きながら幽霊にして金にす

るなんて悪魔みたいなことはしない」

　藤井が吐き捨てるように言った。

「「歌舞伎爆竹事件」ってのはな、中国人マフィアが日本のヤクザに通りがかりにポケットの中に火をつけた爆竹を入れるっていう嫌がらせから名前がつけられたんだよ。そういう名前を捜査本部に付けた警視庁キャリアのバカどもは、裏で日本の法律を恐るべき方法で悪用した陰謀があるのを把握していない。把握していたとしても何もできない。やるのは、暴対法を盾に同じ日本人の首を絞めて自分の出世の成績を上げることだけさ」

　南方は静かに話をしているように見えたが、よく見ると怒りを抑えながらのようだった。

「爆竹を入れられた方はどうしたんです」

「そりゃもちろん喧嘩だわな。喧嘩も殴り合いでは終わらないようにわざと向こうが挑発する。ついには死人も出る」

「はい」

「きっかけを作ったのも挑発したのも中国人と日本人の半グレどもだ」

「はい」

「しかし、検挙されたのは全員ヤクザだ」

「なぜ…」

「暴力団対策法とはそういう法律なんだよ。抗争になったら組は国家に潰される。潰された組はあいつらが丸ごと引き受ける。これが８０人がこの世から消えたカラクリだ」

「…」

「中国人マフィアと半グレはその法律の盲点をビジネスモデルとして確立しやがったというわけだ」

「話はわかったか」藤井が武志を見る。

「はい」

「寿司食う前の話だがよ、おめえにインターネット賭博やオレオレ詐欺をやって欲しいというわけじゃねえんだ」

　藤井が南方の話を引き継ぐ。南方は役目が終わったという風で口を閉ざす。

「……」武志は無言で藤井の言葉を待った。

「おめえにこのうす汚ねえビジネスを潰してもらいたい。それがおめえを藤井組にスカウトする狙いだ」

　武志は自分の顔から血が引いて行くのを感じた。

続く

大人のピアノ そのはちじゅうよん 幽霊との戦い

「潰すってどうやって…」

　武志はやっとのことで口を開いた。

「うん…それがな、具体的にはまだ分からねえんだ」

　藤井はあっさりそう言った。一瞬武志の張り詰めた緊張の糸がふわりと緩んだが、苦渋に満ちた藤井の顔を見るとその糸を再び手で手繰り寄せてピンと張っておかねばならないと感じた。

　藤井は苦しそうに言葉を続けた。

「幽霊に勝つにはどうしたらいいか…。極道は良くも悪くも身分が割れてる。ワルはワルの社会の仁義ってもので犯した罪や不義理にはけじめをつけなくちゃならねえ。しかしあいつらはそのけじめってものがはなっからねえわけだ。一番最初が嘘から始まっている。自分から始まってねえわけだ。中国マフィアも日本は旅の恥のかき捨てじゃねえが他所からきてしくじったら、大陸に逃亡すればいい。半グレどもはやることは暴力団並だが対外的な仁義もへったくれもねえ。都合が悪くなりゃバックれちまって恥じるところもねえ。幽霊にされちまった暴力団員は一番わかりやすい。最初っから戸籍もなけりゃ整形して顔も失っている。」

「戦いようがない…っていことですよね」

「ああ。ヤクザ組織が解体していって減った分は幽霊になっていく。目に見えない二重底のように世界が分離して行く。あっち側のワルにはやがて警察や国家の力は及ばなくなって行くだろう。警察やこの国は暴対法を使って何かとんでもないことの後押しをしてるんじゃねえかって、そう思うわけよ」

　藤井はそこで言葉をつぐんだ。ソファから立ち上がってガラス張りの千葉海神の天守閣から街を見下ろす。

「南方さんは…」武志が南方に尋ねた。

「うん…？なんだ」

「南方さんも何か考えているんですよね」

「ああ、まあな」

「どんな事を考えてるんですか」

「俺もまだ漠然としてるんだが、幽霊に勝つには暴力じゃなくて経済力で勝つしかないと思ってるよ」

「経済力ですか…」

「ああ。結局歌舞伎町爆竹事件の連中も、しのぎさえきちんと出来てればあんなことにはならなかったはずだしな」

「はい」

「地上げの片棒とか借金の取り立てとかカタギの尻拭いで金にするんじゃなくて、自分たちが何かできないといけないだろうと思ってる」

「具体的には何かお考えがあるんですか」

「ああ」

「それは…」

「まだ言えない」

　南方は笑った。自信を秘めた笑いに見えた。

「こいつはよ、何か多分途方もないこと考えてるんだろう。俺にも秘密だときてる。まあ、いいさ。無理に聞いたとしても俺の頭じゃ理解できねえような気がするしな」

　藤井はそう言って武志ににやりとした。

「ああ、もうめんどくせえな」

　藤井は再びソファに座り直して武志顔を正面から見た。

「もういい、武志」

　武志は藤井の次の言葉を待った。

「今すぐお前にどうこうして欲しいわけじゃねえ。半分は本気で誘ってはみたが、やっぱりお前は極道には向かないだろう。このやりとりでよく分かったよ。うちの組みで預かるという話ももういい。うちの連中には南方との間で話がついたってことにする。あとの詳しいことはお前は知らなくていい」

「でも…」

「まあ、いいさ。幽霊戦うには多分いろんな方法があるんだろう。おめえもずっと南方のところにいるというわけでもないんだろう。どんな道に行ったとしても、今日俺と南方がおめえみてえな若造に熱く語っちまったことを忘れてくれなければそれでいいさ」

「それでいいんですか」

　武志は藤井と南方の両方を見た。二人は頷いた。

「頭の悪い俺はな、おめえも南方巻き込まずに具体的に一つ考えていることがあるのさ」

　藤井はそう言って武志見た。今度は南方が苦渋に満ちた顔をした。

　おめえにそれを見せてやろう。対照的に藤井の声は明るくなっていた。藤井は天守閣の角にある内線電話のところに歩いて行って受話器をあげた。

「おう、三浦か。話はついた。おめえ不満はあるかもしれねえがこれで決着だ。指詰めも腕落としもなしだ。おめえが組みの若い者に言って納めておけ。分かったな。ああ、それでいい」

　藤井が若頭の三浦に指示している声を南方と武志は黙って聞いていた。

「それとな、上の天守閣まで弾薬庫の鍵もってこい。ああ、そうだ。武志に俺が何を考えているか教えてやろうと思ってな」

　藤井高笑いが聞こえた。天守閣こだまする領主藤井の声聞きながら、南方の顔にはさらに苦悩の色が滲んだ。

続く

大人のピアノ そのはちじゅうご 弾薬庫

　数分後、三浦が武志たちも通った細い階段を登ってきた。

「おう、ご苦労さん。そういうわけで武志のことはもうええ」

　藤井は三浦から弾薬庫の重厚な鍵を受け取りながらそう言った。三浦はなおも不満そうな顔を武志に向けた。

　その時藤井がつぶやくように弱々しく「もういい。タケシという名前に俺は弱いのかもしれん」と口にした。

　武闘派の三浦の顔は一瞬複雑に歪み、そして藤井に対して悲痛ともいえる目をした。

「まあ、ええわな。そんな目で見るな。おう、お前も久しぶりに弾薬庫一緒に行こうか」

「はい」三浦は静かに頷いた。

　もう一人のタケシ…？自分の他に武志という名前をもった人間が藤井の周りにいる？武志は状況が飲み込めず南方の方を向いた。南方は苦い顔を武志によこしたがその目はやはり藤井に対して三浦が投げかけたような悲しみを含んだものだった。

「何のことか分からんだろ」

　気配を読んでいた藤井が武志に語りかけた。

「はい」

「南方の口からはちょっと言いづらいことかも知れんな。タケシっていうのは今話に出た幽霊でも何でもない。俺の一人息子の名前だ。漢字は…まあ、そんなことはどうでもいい。もう済んだことだ」

　鍵の束を受け取った藤井は鍵をじゃらつかせながら言った。

「済んだ…といいますと…」

「先月死んだ」藤井は短く感情を込めずに反応した。

「……」

「コカイン中毒でな。浦安のホテルの一室で注射器片手に死によった」

「……」

「…と警察は言っとるが、実は警察に殺されたんだ」

「え…。」

　武志はめまいを気力で抑えながら話の展開に必死でついて行こうとした。

「タケシには今から行く武器弾薬庫の責任者やらせとったんだ。まあそこに行って話の続きでも聞かせたろか」

　藤井はそう言うと立ち上がって階段を降り始めた。

　三浦と南方は事情を全て知っていると見えて沈痛な面持ちのまま一言も言葉を発せず、藤井の後に倣った。武志も立ち上がって後ろからまた階段を降りてた。

　踊り場を右に折れた時に垣間見た藤井の表情はヤクザの長の顔ではなく、息子を失った初老の父親のそれだった。

つづく

大人のピアノ そのはちじゅうろく 警察公認拳銃摘発システム

「ここだ」

　藤井が振り返って武志に笑いかけ、鍵穴に鍵をさす。横にいる三浦がコンサートホールの防音扉のような分厚いドアを開ける。入り口の照明スイッチを点灯する音がすると、目の前に広がった光景に武志は度肝を抜かれた。

　地下弾薬庫というと薄暗いカビの臭いのする背徳的な小部屋を想像していたのだが、そこは入り口の印象そのまま広さも天井の高さもコンサートホールのようだった。奥行きは五十メートルはある。左手ホールの舞台にあたる場所には刑事ドラマで見た射撃訓練場の人型の的が並んでいた。右手にはカウンターがありそこから標的を狙うのだろう。カウンターから標的までの距離は約百メートル。天井はフィットネスクラブのプールのような高さがあった。

　コンサートホールと違っているのは客席の椅子がなく、舞台に向かった傾斜はなくて地面は全てフラットでコンクリートの打ちっぱなしであることだった。藤井、三浦、南方、武志はカツーンカツーンという四人の革靴の残響が天井付近で混じり合う射撃場を対角線上に横断した。

　藤井が鍵束から別の鍵を選んでPAルームのような部屋に入ると、そこにはありとあらゆる銃器が並んでいた。やはり弾薬庫というカビ臭いイメージはなく、大きなガンショップのようだった。

　木製の棚に整然と立てかけられた数百丁のライフル銃、コート掛けに吊るされた使用されているアーミーチョッキ、巨大なテーブルに銃口を一方向に揃えてずらっと並べられたマシンガンとショットガン。
　藤井がまた別の鍵を使って開けたキャビネットには高さ５０センチ、長さ８０センチほどの木箱があり、三浦が箱を開けて見せると中にはぎっしりと拳銃が詰め込まれていた。その木箱が五列に分けて８個ほど積み上げられており、キャビネットは壁一面に１２あった。木箱一つに拳銃が５０丁あるとして、拳銃だけで二万丁…

「なあ、まるで銃器のデパートだろ。あの奥にはパトカーを一発で爆発炎上させることができる迫撃砲やロケットランチャーも数十台あるぜ。桜の大紋のヘリを落とせる移動型地対空ミサイル発射台も六基ある」

　藤井が上機嫌でそう言った。

「はい…」

　武志はようやくそれだけ口にした。

　拳銃を実際に見るのも初めてだった。しかもたったひとつの銃弾で人を死に至らしめる凶器がこれほどまでに一つの場所に充満している。それは息苦しさとともに、一生かかっても使い切れない札束や金塊、一晩で抱ききれない美女のようなある種の肉体的な快楽感を武志に与えた。

「これだけの武器が一箇所に集まってるのは日本では自衛隊の基地以外にはここだけだ。ああ、あと警視庁の押収された武器弾薬保管庫はこんな感じらしいな、桜田門の警視庁庁舎の地下にあるらしい。現職の刑事がそんなこと言ってたな」

　藤井がそう言うと一瞬三浦の顔に緊張が走った。武志も今の藤井の「刑事がそう言ってた」という言葉

引っかかりを感じた。

「三浦、いいんだ。武志にはそいつも話そうかと思ってる。俺は警察に殺された息子のタケシをこの武志に見てるのかも知れない…。それでこいつには甘いのかも知れないな」

　藤井がそう言うと、三浦はまたあの沈痛な面持ちで頷くようにして視線を床に落とした。

「警察公認なんだよ、この弾薬庫はな」

「ええ！？」武志は頭の中が真っ白になった。

「もっとも国家公安の警察組織公認というわけじゃあもちろんない」

　南方も三浦も無言だった。

「千葉県警の生活安全部銃器対策課を裏窓口として全国の現場の警察署がお得意様なんだよ」

「え…、地方の警察署が自分たちの銃をここから買ってるんですか」

「あほかお前は、そんなわけないだろが。そうじゃなくて首なし拳銃だ」

「首なし拳銃…」

　武志はその不気味な言葉に背筋に冷たいものが走る気がした。

「ああ。誰が持ってたかは分からねえが、持ち主不明のまま押収された拳銃のことをサツではそういう隠語で呼んでる」

「…はい」

「ピンとこねえか」

「はい。いえ、分かりません」

「警察官にも厳しいノルマというのがあるのは一般企業のサラリーマンと同じだ。分かるな」

「はい、なんとなく」

「出世する警官は押収する銃器の量も同僚より抜きん出てないといけないわけだ」

「あ！まさか…」

「分かったかい。警察官だって金がなくてもどうしても金が必要ならサラ金に行く。それと同じでノルマに追い詰められた銃器対策の警官はサラ金で金を借りる代わりに、ここに来るってわけだ」

「そんなことが…」

「ああ。恩を売るという貸しでトカレフを渡してやることもあるし、警察の裏金で取引、つまりお買い上げ

いただく場合もある。ひどい県警になると上司と一緒にグルになって、県警が押収した覚せい剤を代金がわりに物々交換してるところもある。みんなそれぞれ地元に持ち帰って、適当に暴力団事務所にから発見されたことにしてノルマを果たしてるってわけさ。世も末だな」

　藤井は面白そうに高笑いをした。藤井の哄笑は開け放たれた弾薬ルームを抜けホールのような射撃場の天井でこだました。

「…でもそんな警察庁全体がひっくり返るような大スキャンダルが公になったら…」

「そうさ。あいつらはだから俺たちに頭が上がらない。俺たちを利用してるつもりがいつの間にか組織ぐるみでもう後戻りできな深みにはまっているわけだ。もっとも俺たちとしては最初っからそのつもりで警察全体を嵌めたわけだけどな…。取引履歴もパソコンに全て記録されてる。銃の型番もバッチリだ。裁判沙汰になれば押収したはずの首なし拳銃と取引データにある拳銃の型番が一致というわけだな。警察が何をやってたかは自動的に白日の元にさらされる」

　藤井の言葉に三浦と南方も薄く笑った。武志は直接的な暴力とはまた別の暴力団の恐ろしさを感じて身震いした。

「大丈夫なんですか…」

　思わず口にすると、藤井が笑うのをやめた。

「大丈夫じゃねえよ。だからこの部門の最高責任者のタケシは、行き違いからサツにシャブ漬けにされて殺されたんだ」

　藤井は血走った目でテーブルに置いてあった機関銃の一つを肩にかかえてドアまで小走りに走ると、ドアを開け放ち、射撃場の人形の標的に向けて機関銃を乱射した。

　殺人の匂いのする硝煙が弾薬ルームの中にも入り込んできて武志に鼻腔をきつく刺激した。

「警察官全員皆殺しだあ！この弾薬庫の全弾をてめえらにぶち込んでやる」

　機関銃の発射音が消えた後、藤井の狂気を帯びた大音声が天井に何重にも谺した。

　残響が消えた後、今度は藤井の愉快そうな朗らかな笑い声が聞こえてきて、武志は自分の膝が音を立てて震えるのを抑えきれなかった。

つづく

大人のピアノ そのはちじゅうなな 藤井の長男の末路

「おめえも撃ってみるか、武志」

　ドア越しに藤井の声が聞こえた。

「いえ、僕は…」

「ふん。まあいいだろう」藤井はそう言ってまた弾薬ルームに入ってきた。

「息子はな、もともとカタギだったんだよ。カタギの普通の商社マンだった。俺との関係は普通の親子だった。あいつはこの稼業には子供の頃から自分から一線を引いててな、家がこういう家だっていうことは運命として諦めるけれど自分からは関わらないっていうスタンスだったんだよ」

　弾丸が空になった機関銃をテーブルに無造作に投げ出し、藤井が椅子にドスっと座って武志に話し始めた。

「それがどうして…」

「ああ、会社でも聞いてる限りじゃそこそこうまく行ってたようなんだがな。誰でも名前を知ってる総合商社だ。そこで史上最年少課長だかで頑張ってたんだがな。ある日『オヤジ、この会社はヤクザだ。いやヤクザより遥かにタチが悪い。人間のやることじゃねえ』そう言って辞表を出しやがった」

「理由は…」

「いや、結局理由は詳しくは言わなかった。あいつだって入社数年のガキってわけじゃなかった。課長になるまでにはそれなりに裏も表も使い分けてやってきたはずだし、何より生まれ育ったこの家で裏稼業のエグいやり方もチラチラ垣間見てるはずなんだ」

「はい」

「俺は言ってみたよ、冗談半分でな。じゃあうちの仕事やってみるかって」

「それでこの仕事を…」

「ああ。この警察を嵌めた銃器供給システムあいつが作り上げたのもあいつだ。それまでは必要最小限のチャカしか藤井組にはなかったんだがな。あいつが全国の都道府県警に営業かけてお得意様を開拓したってわけだ」

「営業…」

「ああ。お前も随分悪だなあって言ってみたんだが『いや、前の会社でやってたことこれに比べたらかわいいもんだよ』って笑ってたな」

「…そうなんですか」

「ああ。それでも子供の頃からこの稼業に一線引いてきたのも、あいつには何処か優しいというか、甘いというか、そういう自分があったからだと思う」

「甘い…？」

「そう。武志、おめえみたいにだ」

「……」

　藤井はどこが甘いということはそれ以上口にしなかったが、武志を苦笑混じりの柔和な目で眺めた。穏やかな表情はおそらく普段藤井が息子に注いでいた視線だったことを想像させるものだった。

「そこを百戦錬磨の警官付け込まれたんだ」

「…はい」

「エスされちまった」

「エス？」

「ああ。スパイのSだ」

　藤井は苛立ちのこもった目でテーブルの機関銃を弄んだ。

つづく

大人のピアノ そのはちじゅうはち 摘発システムの功労者

「スパイって…警察がスパイ使うんですか」

　さっき藤井が撃ち尽くした機関銃の硝煙の匂いは薄れ、膝の震えもおさまりかかってきたが、武志は今度は心臓が過剰に高鳴るのを感じた。機関銃という明確な暴力の象徴ではなく、市民の安全を守るはずの警官の裏に隠された出世欲とそれに漬け込んだもと商社マンのノウハウを投入した拳銃供給システム。さらに警察側は巻き返しを図るべく、藤井の息子をスパイとして飼いならそうとする。狂っている。

「ああ。それについちゃ蜷川会の警察対策幹部の南方が詳しいな」

　藤井はそう言って、すこし喋り疲れたと言った目で南方に目配せした。喋り疲れたこともあるのだろうが、立ち上がって室内の銃器をゆっくり点検するように眺めながら藤井は息子のことを思い出しているようにも見えた。

「武志も藤井さんに拉致されてまさかこんな話を聞く展開になろうとは思ってなかったな」

　南方は苦笑交じりにそう言った。

「はい。でも…」

「聞きたいか」

「はい」

「うむ」

　南方は頷いてタバコを取り出した。三浦が素早くライターで南方の咥えたタバコに火をつける。

「俺の生まれ育った関西の組織はまた少し違うんだが、関東のヤクザは警察とは実はとても仲がいい」

　もはや藤井や南方の話す内容に一つ一つに驚いてはいられない。武志は無言で頷いた。

「例えば拳銃発射を含めた抗争が自分の組で起きたとする。頃合いを見てこっちから警察の馴染みの刑事に電話するんだよ。『使用した拳銃と逮捕させる人間用意できましたからいつでもお越しください』ってな」

「…」

「警察の方でもピンポン鳴らして『おお来たぞ』『お待ちしてました、今回の実行犯こいつにしました』『拳銃は』『使ったのはこれです。それとあと三丁ほど色つけときました』とかな。色ってのは、使用してないけどお土産に持ってってもらう。そうするとその刑事の点数がまた上がるから刑事も喜ぶ。ひどいやつになると、機関銃も一つつけろ、とか言いやがる」

　武志は唖然としたが、三浦は自分も横でタバコを吸いながらおかしそうに笑っていた。

「『分かりました。◯◯さんにはこれからも出世していただかなくちゃいけませんから、好きなのお選びく

ださい』ってな。藤井さんに話つけて、このアジトにご案内というわけだ」

「ばれないんですか…」

「逮捕の時余罪を追及したところ…っていう虚偽公文書作成をして検事に引き渡すからそういうことはないんだ。報告書が虚偽公文書だっていうことは上司も知ってるから大丈夫」

「…」

「そんな蜜月関係だったんだがな、ここで拳銃摘発バブルが起きる」

「バブル…ですか」

「ああ。時代が平成になったばかりの頃な、長崎市長銃撃事件、中曽根康弘事務所発砲事件、金丸信副総理襲撃事件と立て続けに日本で要人を狙った拳銃発砲事件が起きた」

「聞いたことはあります」

「ああ。それまでは使った人間とセットじゃないと拳銃を押収しても評価の点数が高くなかったんだが、そうした事件以降警察庁の方針に大転換があってな。とにかく一丁でも拳銃を多く押収した警察署が表彰され、警官も上司も出世するということになった。実行犯がいらないんだから、まさにキャッシングと同じだ。ノルマで切羽詰まったり、今月は派手に行きたいとかいうときはここに来ればいい」

「それがこの藤井組の警察用密売組織を膨張させた…」

　武志にもこの過剰とも言える拳銃の山がどうして出来上がってきたのか、そのカラクリの一端が分かってきた。

「そうだ。そういう商機をものにする手腕は藤井さんところの息子さんはさすがに凄かった。あっという間に全国の警察の裏金数百億がこの地下室に流れ込むようになったんだよ」

「……」

「天才だったな藤井さんのそういうとこ」南方が三浦に話を振った。

「はい」

　三浦は懐かしそうな顔をした。ただ単にやり手の元カタギの組長の息子というだけでなく、藤井の長男がそれなりに人望のあったことをうかがわせる顔だった。

「それどうして警察に殺されるようなことに…」

　武志はここまで聞いてしまった以上、自分の知りたいことは最後まで聞いてみたいという衝動に身を任せることにした。

「全国の都道府県のそれぞれの警察組織がライバルを通り越してお互い憎み合ってるということは知ってるか？」南方が武志に聞いた。

「いえ…そうなんですか？」

「ああ。藤井さんの息子さん、俺たちは坊ちゃんということで親しみを込めて"ぼんさん"と呼んでたんだが、ぼんさんはその警察の内部抗争に巻き込まれたんだよ。ぼんさんの息子をさんネタに無理やりスパイにさせられた」

「……」

続く

大人のピアノ そのはちじゅうきゅう 神奈川県警？

「警察の陰謀…ですか」

「ああ。さっき言った要人襲撃の後いわゆる平成の刀狩りっていうのが警察庁主導で展開された。その後国松警察庁長官が銃撃されるに至って拳銃憎し！警察のメンツを守れっていうのに歯止めが効かなくなった。しかし押収できる拳銃には限りがあるし、もうひとつ何と言っても警察側には元辣腕商社マンのぼんさんの力が必要な理由があったんだ」

「ぼんさんでないとダメな理由…」

「ああ。拳銃にも当然流行り廃りがある。フィリピン製の銃が日本の裏社会を席巻したこともあるし、香港返還前には香港、台湾の銃が激増した。ソ連崩壊の後はロシアからのトカレフが大量に入ったし、飢饉が報じられるたびに北朝鮮から中国製トカレフの黒星が激増する」

「はい」

「つまり押収する銃が三十年前に流通していたような銃じゃまずいわけさ。その時々でいかにもヤクザから取り上げたっていう信憑性のある銃じゃないと足がつくし、なにより検察側から突っ込まれる恐れが大きい。警察もさすがに検察まではグルにできていない。もっとも捜査の現場と司直の現場が結託したら法治国家はその瞬間崩壊だがな。だから案外日本の治安が後進国並みに崩壊するのはこの拳銃バブルからかもしれない…」

「…それで商社マンのノウハウと強力なコネクションが必要だった…」

「その通りだ。旧ソ連の外交官や香港の政府筋とかフィリピンの貿易相とかな、そういうレベルのルートは普通の裏社会の人間じゃ手が出ねえ」

　南方はよどみなく、感情を交えず、まるでニュースの解説者にように武志に語った。

「国家権力のどす黒い思惑によってなくてはならない存在祭り上げられたぼんさんは、いつしか汚ねえ犬どもの争奪戦の対象になったってわけさ。だれもがぼんさんから大量に、安定して、無理のないでっち上げの効く銃を求めた。そして、出世競争のライバルには銃を渡さないように暗に圧力をかけてきたんだ。キャリアにとってはやがて中央に戻る前、地方の署長時代にずば抜けた成績を作っておきたい。そしてライバルは潰しておきたい。署長に気に入られようとノンキャリアの刑事どもも各都道府県警のボスの出世競争に加担する。ぼんさんを独占できたら二階級どころかそれ以上の特進の大手柄だ。そして…」

「ついにぼんさんの弱みを握った地方の刑事がいた」

「そうだ。神奈川県警の巡査がその秘密を握ったんだ。ぼんさんの息子さんが横浜の中華街で覚せい剤やって補導されたというネタを警察学校の同期のやつから聞いたらしい。確か名前は寺村とか言ったな。俺もここで会ったことがあるよ。見かけは紳士ヅラしてるが油断のならねえやろうだ」

「神奈川県の…」

「どうした、優等生のお前が神奈川県警に縁でもあるのか」

　南方がからかうように武志に言った。

「いえ…もちろん警察署には縁はありませんが…」

武志は先にここから解放された、武蔵小杉の篠崎邸で休んでいるはずの朝子のことを思い出した。

つづく

大人のピアノ そのきゅうじゅう 朝子神奈川県警に協力する

「いやあ、お嬢さんお待ちしておりました」

　武蔵小杉署の１０階だてくらいのコンクリートの建物が見え始めると、向こうからグレーのスーツをきた男が手を上げて朝子に近づいてきた。

「どうも」

「お電話差し上げました捜査一課の寺村です。この度はよくご決断くださいました。警察に任せていただければもう安心です。必ず一緒に拉致されてしまった斎藤武志さんの身柄も我々が責任を持って確保いたします」

　警察官は柔道などをやっている人間がほとんどだと朝子は漠然と思っていたが、寺村という刑事は痩せ型で長身のヒョロっとした男だった。朝子に精一杯愛想の良い仕草をしているが、一見柔和そうに見える視線の奥には相手の裏の裏まで探ろうとするような雰囲気が見え隠れした。

　案内されたのは捜査一課と書かれたプレートのある部屋の奥にある、普通の応接室のようなところだった。部屋の脇の通路を通る時に刑事たちの視線を幾つも感じた。自分が来るのを待ち続けていた様子だった。これでやっぱり決心がつかなかったという電話などしていたら、そのままでは済まなかったのではないかという気がして朝子は落ち着かない様子でソファに腰掛けた。

「改めまして、お電話致しました寺村です」

　寺村は縦折の身分証明証を朝子の前に提示して、自分の名刺を渡そうとした。名刺を渡されるとは思っていなかったので、あさこは一瞬戸惑った。

「刑事ドラマのような警察手帳の提示というのは今はないんですよ。それとこうした名刺を持っている刑事がほとんどです。所轄なんかだと特に防犯上訪問した飲み屋とかに名刺を置いて回るなんてこともしますしね」

「そうなんですか」朝子はそう言って名刺を受け取った。

「同じく捜査一課の脇田といいます」同席していた刑事も簡単に身分証明証を提示した後名刺を渡した。

「最初にお嬢さんにお電話した者です」

　脇田はそう言ってニコッと笑った。名刺の裏には「正義の味方の脇田です」と吹き出しがついた警官のイラストが書かれていた。脇田はいかにも格闘技をやってそうなガッチリした体格で、イラストの脇田に似ている警官も柔道着に黒帯を締めていた。

「そのイラスト似てるでしょ。僕が描いたんですよ。イラスト描くの趣味なもんで」

　浅黒い顔の脇田白い歯をこぼして笑った。視線の奥には寺村のような油断のならない感じはなかった。

「さてではお疲れのところご足労いただいたわけでもありますから、さっそく調書作成にご協力いただければと思います」

　話を切り出したのは寺村ではなくて、脇田の方だった。

「といっても、堅苦しく考えないでくださいね。私たちと普通にお話ししていただければ結構なんです。途中ポイントになりそうなところを私や寺村が確認の質問をさせて頂きまして、それを寺村が文章にまとめます。普通文章にまとめる方は若手が担当するんですが、お若い方ですとなんと言いますか、寺村だと緊張なさる方もいらっしゃいまして」

「はあ」

　曖昧に相槌を打ったが朝子も話す相手が脇田でホッとしているところだった。

「私が雑談みたいにおしゃべりする感じで、寺村がそれを調書にするというケースも多いんですよ。今回も一つそんな感じでお願いしますね」

　脇田のざっくばらんな話し方に朝子の緊張は徐々にほぐれていった。

「よろしくお願いします」

　朝子が応えると脇田は微笑んでチョコンと頭を下げた。

つづく

「今回篠崎さんを拉致した藤井組というのは、千葉の暴力団なんですが神奈川県警でもずっとマークしてる組織なんですよ」

　脇田はたった今婦人警官が持ってきてくれたインスタントコーヒーを朝子にも勧めながら、自分も砂糖を入れてカップをかき回した。

「そうなんですか」

「ええ。拳銃の密売を全国的にやってましてね。こういう言い方が適当だか分からないのですが、日本の密輸拳銃の総元締め、総輸入代理店みたいな存在なんです」

「元締め…ですか」

「ええ。ご存知でしたか」

「いえ、まさか」

「あっはっは。そうですよね。冗談ですよ、一般の方がそんなことを知ってるわけないんですが、まあ警察関係者の間では知らぬものはない事実なんですよ。篠崎さんが監禁されてた海神の藤井の城に日本じゅうの密輸拳銃がいったんプールされてます」

「そんな場所だったんですか…」

「ええ。ハンドガン、つまり携行できる小型拳銃だけでなく、マシンガンやらバズーカ砲まであるそうですから自衛隊の弾薬庫が市街地のど真ん中にあるようなものですね」

　そんな場所に自分は監禁されていたのか…。朝子は一睡もできないなか武志がそっと手を握って肩を抱いてくれたあの寒々とだだっ広い和室を思い出した。

「そういう話はもちろん雑談などでは出なかったですよね」

「はい…。もちろんです」

「すると、食事なども一応きちんと出たわけですか」

「はい。こう言ってはなんですが、意外だったんですけどすごく丁寧に扱ってくれたと思います」

「ほう」

　脇田は適当に笑いを交えながら三十分ほど事情聴取を行った。捜査一課フロアの角にある応接室の広いテーブルの隅の方では、寺村が顔を上げずに脇田と朝子のやり取りを書き取っていた。

　事情聴取の初めの方で脇田がちらっと言っていた武器の総元締めとしての藤井組。朝子と武志の救出を目的とした調書作成のはずだったが、脇田の話は手を替え品を替えその周辺を行ったり来たりしているように思えた。

「そうすると、拳銃の話などはまったく耳にしなかったということですか…」

「はい…。あの…」

「どうしました？」

「この事情聴取は、武志さんを救い出してくれるためのものなんですよね」

　どうも途中から顔も上げずに自分のペースでただひたすら調書を書いている寺村のことが気になって、朝子は思い切って寺村にも聞こえる声で脇田に聞いてみた。

「もちろんですとも」

　脇田は朝子安心させるあのスポーツマンらしい邪気のない笑い顔を返してよこした。

「でも、さっきから違う話が多くなってきたような気が…」

　朝子がそういうと、寺村が初めて顔を上げた。

「調書の下書きができましたので、お嬢さんに目を通していただいて、よろしければ捺印していただきたいのですが」

　結局寺村は一度も質問することなく、横で聞いていたにせよ、まるで自分の世界にこもって作文をしていたことになる。そういうものなんだろうか、という疑問が湧いたが朝子は一礼をして寺村から薄手のB５縦書きの紙に書かれた寺村筆跡の調書の下書きを受け取った。

「…なんですか、これは」

「何ですか、ってお嬢さんの供述を元にした調書ですよ」

「でも…」

　朝子は混乱してすがるような目を脇田刑事に向けた。

　脇田は調書を見ようともしなかった。そこ書かれている内容については見るまでもなく知っているという顔だった。

　二人が喋ったことを寺村が書き写したのであればその通りなのだが、寺村から受け取った文書には「私、篠崎朝子は……」から始まっていたにもかかわらず、まったく喋っていないことが書かれていたのだった。

「あの…あたし脇田さんとこんなことお話ししてませんよね」

　あさこはそう言って、脇田に寺村の持ってきた朝子が書いたことになっている調書を見せようとした。

「筆跡ですか？いいんですよ。『私、篠崎朝子は…』から始まってると思いますが、そういう代筆は認められてます。ですので左手の人差し指で捺印していただければ結構なんです」

　脇田は軽く受け答えた。

「そうじゃなくて、この私が書いたという調書内容です。これを読むと私が藤井組長と若頭の三浦という人と一緒に狭い人がやっと一人通れるような廊下を抜けて、巨大な音楽ホールのような射撃場、その奥の何万丁もピストルが隠してある秘密弾薬庫に案内されて、自慢げに藤井組長の話を聞いて、藤組長は自分でもそこにあった銃を試射して私にも無理やり撃たせようとした…そんなことがたくさん書いてあるんですよ」

　朝子は言い知れぬ不安を感じて一気に調書内容をぶちまけた。寺村は不気味な顔をして笑っている。目の奥に隠れていた狡猾で人の裏を見透かして楽しむような光が表に出てきていた。これが寺村という人間の本性なのだろうか。

「ほう、そうですか」

　脇田はそう言ってあの朝子を安心させる笑い方をしたが、実際に調書を手に取ろうとはしなかった。

「見てください」

　朝子がすがるようにして脇田に調書の下書きを渡そうとすると、脇田の顔から頼みの綱の笑顔がすっと消えた。

「おかしいですね、今私とそういう話をしたじゃないですか、自分も拳銃を撃されそうになって怖かったって」

「……」

　朝子は自分の顔から血が引いて行くのを感じた。

『二人はグルだ。あたしは何かの陰謀にはめられようとしている』

　眩暈がしそうになって深呼吸をしようとして顔を上げた。

　寺村が不気味に笑っていた。

　その横で脇田も笑っていた。

　正義の味方のあの笑顔ではなく、寺村とそっくりの笑い方だった。

つづく

大人のピアノ そのきゅうじゅうに 暗黒の舞台裏

「結局捺印してくれましたけど、朝子お嬢ちゃん泣きながら帰って行きましたね」

　脇田は朝子の捺印の入ったでっち上げの調書をヒラヒラさせながら笑った。

「まあ、しょうがねえだろう。刑事ドラマじゃまるでお茶汲みの女の子にコピーとってくれって頼むみたいに令状請求だ！とかやってるけど現実は甘くねえ」

　寺村はそう言いながらもやはり上機嫌だった。

「令状取るのって一苦労ですもんね」

「ああ。まあしかし今回は写真や証言なんかの添付書類が揃ったからすぐに出るだろう」

「そうですね。人が一人しか通れない道を通って音楽ホールのような射撃場とかバッチリですね」

　脇田は愉快そうだった。

「ああ、ばっちりだ。何せ俺が実際に何度もあそこに行ってるんだからリアリティも間違いねえよ」

　寺村も声を上げて笑った。

「ただし寺村さんが調書を書く訳にはいかない」

「そうともよ。何せ俺があそこに通ったのは、二年しかいない予定のキャリア署長の出世のため。目的は拳銃摘発の成績アップの段取りだもんな」

「世も末ですね」

「おめえが言ってどうするんだよ」

「まったくです」

　二人はしばらく肩を揺すって笑っていた。

「しかしよ、署長のあの言葉はすごかったな。あれぞまさしく悪党だぜ。所詮叩き上げの俺たちの悪事なんてたかが知れてる」

　寺村は脇田をねぎらうように肩をぽんぽんと叩いた。

「ああ、あれですね。『拳銃は目の前から消せばいい。同じようにヤクザも目の前から消せばいい。あとは野となれ山となれ』でしたっけ」

「そうそう、それだ。とにかく拳銃は日本になくても無理やり検挙用に輸入して発見したふりして消せばお手柄。ヤクザは組を解散させて存在を消しちまえばお手柄っわけだ」

「ええ。首なし拳銃上げても輸入してるやつも一緒に検挙しなきゃ意味ないのになと思ってたけど、現場の刑事はそんなことは考えなくていいってハッキリ言ってくれて頭クリアになりました」

　脇田はすっきりした表情で言った。

「そうさ。同じようにヤクザ追い込んでそいつが目の前から消えてくれりゃ、中国人とつるんでマフィア化しようがハングレとつるんでおれおれ詐欺やろうが関係ねえってわけだ」

「最近じゃ幽霊化するとかいうらしいですね」

「いいじゃねえか、幽霊が悪さしても俺たちの管轄外だ。そいつらが別のところでどんなに悪いことしようが俺たちには関係ねえよ」

「そうですね」

　寺村は冷たくなったインスタントコーヒー飲み干して満足そうに続けた。

「物事の善悪は署長たち偉いさんが決めてくれりゃいいんだ」

「その方が現場は気楽ですもんね。間違っても王様は裸だとか言っちゃいけないし疑問も持っちゃいけない」

「そうさ。へんに善悪なんて考え始めると、藤井組の坊ちゃんみたいにあれこれ悩んじゃって、覚せい剤に溺れたりするわけだ」

「あれ、そんなこと言っちゃって。ヤクザになりきれない坊ちゃんに自分のやってることの善悪に悩むようにし向けたり、補導した息子の将来メチャクチャにしてやるとかで脅したりしながら、一方で覚せい剤コンスタントに渡して短期間で中毒に追い込んだの寺村さんのくせに」

「そういやそうだったな」

「さらに藤井組の情報とかも流させてすっかりスパイにしちゃって。コカイン欲しさに父親も仲間も裏切って。それでストレスがまた溜まっちゃってまたコカイン」

「あの人もねえ…ダメだって、自分で中途半端にもの考えちゃ」

「カタギの時の商社マン時代も結局企業のコンプライアンスでアレコレ悩んじゃったらしいですね。会社の利益のためにお客さん自殺に追い込んだり。それも上司が暗に指示したり、同僚も成績上げるために平気で競ってやってたとか」

「ああ。コカイン打ちながらそんなこと言ってたな。まあ実際にかなりエグい話だったけどな。警察だけじゃなくてどこも狂ってるな」

　二人は顔を見合わせて苦笑した。

「じゃあオレ、そろそろ令状請求に裁判所行ってきますね」

「ああ、頼むよ。令状持って藤井組にガサ入れてあの組一気に潰しちまおう。拳銃キャッシングの時代はそ

ろそろ終わりだ。今はヤクザごと潰した方が成績もいいらしいからな。平成の刀狩りより暴力団対策法がトレンディだ」

「しかしすんなり落城しますかね、あの城」

「銃撃戦でも起きるかもなあ」

　寺村が人ごとのように言った。

「やですね、オレ」

「やだよぉ、俺だって。だから県警本部経由で本庁にSAT出してもらうように申請もしとくさ」

「それがいいですね。危険なドンパチは警察が誇る特殊急襲部隊に任せて、所轄の俺たちは弾の当たらないところで適当にチョロチョロしてましょうね」

「ああ、それが一番だ」

「じゃ、行ってきます」

「おう、頼むぞ」

　見送った寺村も応接室の照明のスイッチを消して部屋を出た。

　二人が出て行ってだれもいなくなった暗がりの応接室。

　朝子が座っていた椅子の前のテーブルには、二人の名刺がそのまま置かれていた。

つづく

大人のピアノ そのきゅうじゅうさん 捜査本部の影で

「今回の事件の捜査本部、少し雰囲気違いますね」

　捜査令状の手続きが無事終了し、脇田は再び署に戻って寺村と廊下でタバコを吸っていた。

　神奈川県警川崎市の武蔵小杉署四階の大会議室入口には「暴力団台湾料理店拉致被害事件捜査本部」という物々しいついたてが置かれて、招集された捜査員が頻繁に出入りし始めてにわかに慌ただしさを増していた。

「そうだな、普段は捜査本部長が神奈川県警の刑事部長で副部長がうちの武蔵小杉署署長と捜査一課長で決まりなんだがな。千葉からもお偉いさんが出張って来てる」

　寺村が相槌を打つ。

「いえ、確かに今回は事件発生がうちの管轄で踏み込む先が千葉ですから、管理する側も大所帯になってますけど、それだけじゃなくって…」

「ひな壇には座ってないが、SATとSITの部隊長も捜一の課長と一緒に作戦立案の要だからな。前の方でそうした怖い部隊の人間が数人いる。物々しい感じはそれだろ」

「はい…」

　確かに今回は刑事課の合同捜査だけでなく、人質救出のためのSIT及び、武装解除制圧を目的としたSATの役割分担もある。今回の事件では、救出までの交渉の段取りを神奈川県警のSITが担当し、その後武装解除が必要な状況に陥れば千葉県警の特殊急襲部隊SATが任務を遂行するという。

　同じ県警本部内でも刑事部に属するSITと警備に属するSATの連携に指揮官は気を使う。今回のように川上部分を神奈川県警が行い、川下部分を千葉県警が担当するというのはお互いのメンツをかけた争いがさらに事態を複雑にする部分があった。しかし事件発生場所の管轄所武蔵小杉署にこうして捜査本部が設置されている中、SATの最重要守備施設である成田国際空港を域内に抱える千葉県警は全国の県警の中でもSATのプライド意識が異様に高く、現場での主導権争いには一歩も引く構えを見せなかった。

「まあ、しかし実はそれだけじゃない。なかなか脇田も鋭いな」

「あ、やっぱり何かあるんですか」

「ああ、さっき署長に呼ばれたんだがな、今回は警察庁の上層部の方から今や警察組織のアキレス腱というか恥部とでもいうべき藤井組の拳銃摘発裏システムをこの世から消し去ってしまえ、という命令が下っているらしい」

　寺村がにやけたような、それでいて黒光りする得体の知れない闇を秘めた目で脇田を見た。

　藤井組の長男をシャブ中にして神奈川県警に有利になるような拳銃の横流しシナリオを成功させた寺村は、一介の巡査長という階級にもかかわらず署長と直に話をすることができる。寺村はその手の自分しか知り得ない情報を脇田に話すとき決まってこうした表情をした。

「そうすると、あの全ての横流し拳銃の製造番号を控えているというデータベースもろとも破壊せよってい

うことですか」

「そうだ。あんなものが裁判所で明るみに出たら日本警察は一巻のおしまいだ。だから千葉県警のSATはかりに人質の斎藤武志がすんなり無事に救出できたとしてもそのまま突入して、重火器をふんだんに使って城ごとすべて吹っ飛ばすという密命を帯びている」

「うわ、おそろし。死人がいっぱいでますね」

　脇田はまんざら冗談でもなさそうに眉をしかめた。

「ああ。できれば人質以外全員綺麗に射殺してしまえということだ」

　寺村はまたあの笑いで肩を揺すった。

「無抵抗でもですか？テレビとかで中継されたらヤバくないですか」

「そこは天下の千葉県警SATがうまくやるということだろう」

「いやあ、警察を的に回すと恐ろしいですなあ」

　他人事のように言う脇田に寺村は上機嫌に笑いかけた。

「そうさ、具体的にはこの寺村様をなめたのがいけねえんだよ」

「寺村……さま…ですか」

　冷やかしと揶揄のこもったニュアンスで脇田は苦笑してみせたが、話しているうちに気分が高揚してきた寺村はそれには気づかぬ様子で饒舌をやめることはなかった。

「ああ。こういうことにならねえように、藤井の長男にデータベースを消去するように言ってたんだがな、結局うんと言わなかった」

「まさか、あのホテルで注射器片手に風呂場で死んでたっていうのは…」

「俺がやった」

　さすがに脇田の肩を抱くようにして小声で言ったが、寺村の顔はまるで大物の俺を舐めた報いであると言わんばかりだった。警察権力とそれをバックにした個人の力を混同する悪徳刑事が大抵そうであるように、寺村はそうした混同が引き起こす常識感覚の麻痺、消滅というものにすでに無頓着になっていた。

「あれまあ」

「聞きてえか、俺がどうやって藤井のボンボンを落としていったか」

「ええ、まあ…」

　脇田は軽く受け流しながら、この危険人物と今後どこまで付き合っていいものか、そろそろきちんと考えておくべきだな、との思いを新たにした。

　寺村はそんな脇田の心中に思い至るはずもなく、全員招集がかかる前のいっときの暇に任せて、とうとう

と自分の手柄話を話し始めた。

続く

　寺村が憑かれたかのように脇田にしゃべり始めた時、藤井城でも藤井が息子の思い出を語り始めていた。

「なあ、武志」

「はい」

「俺は不思議でよ、警察の奴らが」

　武志は無言で唾を飲んで頷いた。藤井はテーブルの上に並べられている突撃ライフルを無造作に持ち上げ、スコープ越しに武志に喋りかけたている。弾丸が入っていないとはいえ、重量感のある銃器は武志に圧迫感を与えた。

「いや、警察というよりうちの息子が世話になった商社ってやつもそうなんだろう。なんで昨日まで信じてたものがひっくり返っても、そこにいる奴らは平気な顔してそれに順応できるのか」

　藤井の疑問はある意味ナイーブで、あたかも素朴な中学生か高校生の疑問のようにも聞こえたが、その感覚は口にしないだけで誰し持ち続けている疑問のようにも武志には思えた。

「息子さんのことは分かります。もちろん俺には会社勤めの経験はありませんけど、学校なんかでも昨日までボス猿だったやつが一日でスクールカーストの一番最下層に転落なんていうのはあり得る話ですから」

「スクールカーストってなんだ」

　藤井は耳慣れない言葉に興味深そうに武志に訊いた。武志は曖昧で絶対的なその上下関係が実体化した意識の鎖について藤井に説明した。

「なるほどな、警察や会社組織に場合にはそこに階級やら役職やらも絡んでよけいがんじがらめだ」

「はい。でも…」

「ヤクザ組織にはないんですか」

「うむ。ヤクザの場合にはそれこそ親が白と言ったら黒いものでも白くなる。それは堅気以上だろう。でもな、こう言っちゃなんだが、それはホントに白く見えるんだよ、親分の言ってることだったら」

　横で聞いていた三浦が我が意を得たりとばかりに、晴れやかな顔で何度か頷いた。

「そうだよな、三浦」

　それに気がついた藤井が三浦に話しかけた。

「マジックですよ。それまでのあやふやな世界がビシッと見えてくるんです。親分がこれは白だっていうと、灰色だったものが真っ白に見える。そういう時は不安も恐怖心も何もかも消し飛びます」

　三浦は藤井に返事をしながら武志にも目線を遣った。

「なあ、三浦」

「はい」

「タケシは…ああ、ややこしくていけねえな。俺の息子の方のタケシはどうだったんだろう。藤井組の仕事をやらせるようになってから、あいつは会社を辞める直前までのノイローゼみたいな表情は無くなっていったように見えた。拳銃横流しの組織を構築する仕事は犯罪かもしれねえが、悪と割り切ってやる仕事は善のふりをしてそれ以上の悪さをする警察や企業よりもマシじゃねえのかって、あいつの表情見ててそう思ったんだが」

　藤井は自分の思いをうまく言葉にすることができず、もどかしそうだった。

「ぼんさんはそこを悩んでいました。ご自分のことをマージナルマンだって言ってました」

「なんだ、それは」

「私もぼんさんに聞いて見たんです。それでぼんさんの苦しさも想像できたんですが、神奈川県警の寺村は、そこをうまく利用してぼんさんを精神的に追い詰めていったように思います」

　寺村が追い詰めていったというところに藤井は反応し、ライフルをテーブルに戻した。

「聞かせろ、そのマージナルマンってのを」

「はい」

　三浦が藤井、南方、武志の三人に順番に視線を向け、静かに話し始めた。

続く

大人のピアノ そのきゅうじゅうご 二人のタケシ

「実は私はぼんさんとはかなり親しくさせていただいてたんです」

　三浦はタバコを灰皿に押し付けて居住まいをただして話し始めた。

「おめえはうちの息子とは割と仲良かったみたいだな。ありがとよ」

　藤井が言うと三浦はとんでもないとう風に首を振った。

「うちのガキちょうどぼんさんのお子さんと同い年でしたから、子供の話なんかも良くしてましたし、両方の家族そろって一緒に海岸でバーベキューなんかもしましたよ」

「ああ、なんか写真を見たことあるな。孫の圭介がまだ小学生くらいで三浦んとこの…」

「裕司です」

「ああ、裕司と一緒に潜水服着てるやつだ」

「それは伊豆の小浦ですね。潜水服…」三浦が吹き出した。

「なんだよ、違うのか」藤井もつられて笑った。

「シュノーケリングですね」

「しゅのお…」

「まあ、潜水みたいなもんです」

「なんだこの野郎。じゃあ潜水服でいいんじゃねえか」

「そうです」

「てめえ撃つぞ」

　藤井がテーブルの上の機関銃を構えた。

　三浦が笑った。南方が笑った。武志も笑った。

　朗らかで切ない空気。破滅の前に漂う突き抜けた乾いた陽気さが地下室にこだました。武志は不思議な連帯感を感じていた。

「うちの裕司は根っからの悪なんで話は早いんですが、ぼんさんは圭介君のことでけっこう悩んでおられました」

　三浦が笑声の中、話の核心部分に手探りで近づこうとし始めたようだった。

「圭介の悩み…か」

「はい。それがそのままぼんさんの悩みでもあったようなんですが…」

「さっきのあれか、マージナルマンとかいう」

「ええ。難しい言葉で俺も生まれて初めて聞いたんですが、境界線上にいる人間、っていう意味らしいです」

「境界線か…」

「ええ。例えば俺は根っからの悪でうちのかみさんもそんな俺に惚れたわけです。生まれた子供も何の疑問も持たずに、親が極道だっていうことを受け入れてます」

「ふむ」藤井は少しうつむいた。

「圭介君の場合、カタギの親が途中から極道の世界に足を踏み入れたわけで、自分の生きて行く環境が小学校の終わりから中学くらいで根こそぎ変わったと思うんですよね」

「ああ。想像はつく。交友関係なんかも変わらざるを得ないだろう」

「ええ、そうなんですね。ぶっちゃけて言えばそれまで付き合っていた普通の子供はそいつらの親からの圧力もあって圭介君からほとんど離れて行ってしまった」

「ああ、分かる」

「遊び友達には不自由はしないんですよ。だって藤井組長の名前はしらなくても藤井組という組織はカタギの人間も耳にしたことあるというほどです。そこのトップの孫だということになれば…」

「それも想像がつくが…」

「はい。だからカタギの世界を完全に頭から捨ててしまってこっち側の世界の住人になれば楽だし、それ以上に居心地のいい思いができるんですが…」

「カタギの世界を完全に忘れるわけにもいかねえ…よな」

「はい」

「よく分かる」藤井は目を閉じた。

「その境界線上でずっと俺の息子も揺れ動いて苦労してきたんだ。親を頭から否定することもせず、だからといってこっちの世界に来ることはせず、圭介のように境界線の上でどっちの世界にも行けずしんどい思いをしてたはずだ」

　藤井が言葉を継いだ。

「結局最後に商社をやめた直接の引き金も…」

　藤井はなぜか武志の顔を見て愉快そうに笑った。

「『お前の父親がやってることに比べたら、こんなことなんでもないだろ』っと上司に酒の席で言われたらしい」

　藤井はなおも武志を見て笑っていた。武志はとまどいながらもその視線の中に何か暖かいものを感じた。

「おめえとおんなじことしたんだよ、武志」

　藤井が声を上げて笑った。

「ビール瓶でその上司の横っ面を殴り倒したんだ」

　沈黙の後、南方が愉快そうに大声で笑った。

「それ初耳でした。それで藤井の兄貴はどこか今回の件、武志に寛大だったというわけですか」

　あっけにとられた表情をした後、三浦もまた愉快そうに笑った。武志の処分が軽すぎることに対して抱いていた不満も笑いの中に消散していくかのようだった。

「実の親バカにされたくらいで上司を殴っちまうのも大馬鹿ものだし、世話になってる南方がバカにされたくらいで南方の兄貴分のこの俺をビール瓶で吹っ飛ばすというのも正気の沙汰じゃねえ」

　藤井が楽しそうに笑った。

「マージナルマンか。いい言葉を覚えた。俺も初めて気がついたぜ」

　藤井は再び武志の顔を見てそう言った。

「武志、お前もそのマージナルマンってやつなんだ。カタギとヤクザの境界線じゃねえが、お前もあっち側にもいかず、こっち側でも安住できない。どっちかにいければ楽なんだが、その楽な生き方をお前はどこかで決して自分に許そうとしてない。その危ういバランスの上に立ってどうすれば世の中全てのことが上手く行くかっていう途方もないことを真剣に考えている。ヤクザは切った張ったしてたってそういうしんどさはねえんだよ。刑務所行くことだって、こっち側の世界を何の迷いもなく生きていれば英雄的なことにもなるわけだ。しんどいのはどっちの世界でも自分が関わった人間に同じように義理を果たし、あたうかぎり誠実であるっていうことだ。戦争で英雄のように敵国の人間を殺しまくり、同時に全身全霊でその自分が殺した一人一人に罪を償うということだ。人殺しの英雄であることを決して否定せずに、同時にそのまま殺した相手にはキリストになるっていうことさ。これはもし完璧にできるとすればそいつはそれこそキリスト以上の神かもしれねえ。あいつは…息子はな…多分それをやろうとしてたんだと思うんだ…」

　武志は藤井の言葉を一言たりとも聞き漏らさぬように意識を集中していた。

続く

大人のピアノ そのきゅうじゅうろく 銃弾の使い道

「神奈川県警の寺村のやったことは、その境界線をぶっ壊してしまうことだったのかもしれません」

　三浦が過去を反芻するようにゆっくりと喋り始めた。

「どういうことだ」

「はい。いま話をしながらそう思ったんですが、寺村はまずぼんさんの息子さん、圭介の周りにウロチョロし始めたんですよ」

「ほう」藤井の目がすわった。

「中学に入って圭介は最初は藤井組のことを隠してたんですよ。そのあたりの事情は裕司から聞いて俺も知ってるんですが…」

　三浦は藤井の表情を見た。

「俺は初耳だ。続けてくれ」

「はい。どうも学校に寺村が直接行ったらしいんです」

「神奈川県警の人間が千葉県の私立中学にか？」

「ええ。あり得ない話なんですが、おそらく寺村個人の判断で純粋な嫌がらせだと思います」

「ふむ」

「要するに、広域指定暴力団系列の息子なので注意するようにってことで、定期的にやってきては有る事無い事学校に吹き込んで行ったらしいです」

「…」

　藤井は怒りを抑えた目で三浦の話を聞いていた。

「…続けましょうか」

「ああ」

「当然圭介は学校に居づらくなるわけで、そんな頃から良くない連中、って俺がいうのもおかしな話ですが、こっち側の世界の人間の中に入って行ったというか、追いやられて行ったようなんですね」

「続けろ」

「はい。次に寺村がやったのは時期的に同時平行なんですが、奥さんの人間関係に同じようにタッチしまして…」

「警察の者だがってことで、女房の交友関係を切り崩して行ったわけか」

「ええ。ずっと商社マンの奥さんでやってきた方ですから、そうとう堪えたようです。カルチャースクールの生花の講師なんかもされてたんですが、結局そこもやめるハメになったりと聞いてます。氷山の一角でしょうが…」

「成功したわけだな。結局離婚してるわけだが、そういう裏があったのか」

「…おそらく」

「圭介が千葉有数の進学校を中退して、覚せい剤で補導されたのも」

「全て寺村の思惑通りです。横浜の中華街で圭介にコカインを渡していたのはどうも、寺村が使ってるヤクザのエス、スパイらしいですから全部はめられたといっていいでしょう」

「うむ」藤井は唸るように相槌を打った。

「そうやってぼんさんの外堀を埋めていって、ぼんさんがこっち側の世界でしか生きていけなくなるようにし向けていったわけです。もちろん同じようにぼんさんの堅気時代の交友関係もしらみつぶしに警告という形で近づいては、ぼんさんの手を染めていた拳銃横流しの仕事など話していったようです」

　しばらく沈黙があった。南方も武志も一言も口を挟まなかった。

「そうやってあいつ自身にも覚せい剤をあてがって追い込んで行った後に、今度は自分達が散々キャリアの出世の道具にした拳銃横流しシステムを潰そうというわけか」

　藤井がこめかみを震わせながら吐き捨てるように言った。

「そういうことになりますね」

　南方が言い三浦が頷いた。

「もう捌けなくなるこの地下室の武器だがよ…」

　藤井が深呼吸をした後に静かに言った。

「全弾、寺村の腹の中にブチ込んでやろう」

「はい」

　三浦が深く頷いた。

続く

大人のピアノ そのきゅうじゅうなな 黒幕入場

----------同時刻神奈川県武蔵小杉署捜査本部----------

「ざっとこんな感じさ」

　寺村は脇田に対してどうやって藤井組の長男を追い込んで行ったのか、得々として語り終わった。

「なんといいますか…」

　脇田はあまりのえげつなさに戸惑い気味に言ったのだが、寺村にはそれが自分に対する賞賛のように聞こえた。

「すげえだろ。人が堕ちていくのを見る、しかも自分が仕掛けて堕としていくっていう快感はたまらねえよ」

　なおも自分に酔う寺村の目は爛々と狂気を帯びて輝いていた。

「そんなこと藤井組に知れたら寺村さん間違いなく殺されますよ」

「もうとっくに知られてるさ」

「え！どうして…」

「俺が藤井組の坊ちゃんに直接言ってやったからさ。本人は死んじまったが誰か組員に喋ってるかも知れねえな」

「直接言ったって、息子の私立中学に行ったり奥さんや自分の付き合いのあるところに有る事無い事言いに行ったことですか」

　脇田は自分の耳を疑った。もしそうなら…目の前の自分の上司は狂っているとしか思えなかった。

「ああ、そうさ。こっちは警察権力に守られてるんだ。俺には手も足も出ねえぜ。単なる一介の巡査長じゃねえんだよ、俺は。拳銃摘発裏組織と全国の警察組織の間に立つフィクサーってやつなんだ。俺のさじ加減一つでどの県警にどのくらい闇拳銃を流すか、藤井のところに話ができるのは俺しかいねえ。俺は警察の組織の中でも上が無視できないような力を持ってるんだ。その俺をヤクザごときがどうこうできるわけもねえんだよ」

　それで、わざと自分の力を誇示するために、本人に自分の暗躍を喋ったというのか…。脇田は寺村にこの瞬間完全に見切りをつけた。

「しかし、百歩譲ってそうだとしてですよ…寺村さんがそういう特殊な力を持ったのは、それもこれも藤井の坊ちゃんを追い込んだからでしょう。言ってみれば藤井あっての寺村さんなわけじゃないですか。結局坊ちゃんはホテルで偽装自殺。親分の藤井が切れたら寺村さん一巻の終わりですよ」

　なぜこんな単純な理屈に寺村は気がつかないのだろう。脇田は寺村の熱っぽい表情が空恐ろしくなってきた。

「だからよ…」

　寺村はまるでチンピラヤクザのように、脇田の肩に手を回して品のない笑い顔を浮かべた。

「だから、どさくさに紛れてこれから藤井組を壊滅しちまうんじゃねえか。お偉いさん達は拳銃密売のデータベースを破壊したい。俺は藤井組の組員が皆殺しになって欲しいというわけだ」

「そうまくいきますかね」

「SATが皆殺し作戦を上手くやってくれるのさ」

「誰の情報です」

「署長だ」

「まさか。寺村さんために？」

「いや、警察組織のためにさ。お前がなんとなく今回の捜査本部は雰囲気が違うと言ったのはそういう裏があるからだ。そういう陰謀のきな臭い硝煙のようなくすぶった匂いが今この捜査本部本部にはプンプンしてやがるのさ」

　寺村がそう言った時、捜査本部上手の出入り口から県警刑事部長、武蔵小杉署署長、合同捜査の千葉県警刑事部長、統括する関東管区警察局長が入室した。

　これから捜査方針が発表される。

　寺村が今言った警察の陰謀が狂人の妄想ではなく事実ならば、捜査方針は捜査というより特殊部隊によるヤクザ組織の制圧殲滅だ。捜査本部は警察というよりは自衛隊の作戦指揮本部となる。

　寺村が署長に向かって小さく手を挙げた。

　それは身分上あり得ない光景だったが、次の瞬間脇田はもっと驚愕の光景を見た。

　それと気づいていないものにはまったく分からないような小さい不気味な微笑を、キャリアの署長が一介の巡査長に返したのだった。

続く

大人のピアノ そのきゅうじゅうはち 藤井組の戦力

　寺村から視線を戻した東原署長が捜査本部のキャリア、管理官、責任者を紹介しはじめると、捜査本部会議室内の１００名弱の捜査員はマイクの音量が絞られるように静かになった。

　関東管区警備局長の列席も異例ながら、本部内の刑事たちの視線は右端の小柄だが目の座った身体そのものがある種の武器のような雰囲気を醸し出している男に注がれていた。

　濃紺のアサルトスーツに予備弾倉や特殊小型無線機を携行したタクティカルベストを隙なく着用している。両手はごく自然に両脇に垂らしているのだが、その鍛え上げられた太い二の腕は、一瞬の挙動の不審にもすぐに反応可能な獰猛な蛇を思わせた。

「それでは敵戦力の現況を警視庁特殊部隊SAT郡司小隊長に報告してもらいます。」

　郡司と呼ばれた小隊長は軽く一例をし、アサルトブーツでリノリウムの床を踏みながら中央に歩みを進めた。

「今回の作戦の特徴は、まず第一に敵戦闘能力の脅威がほぼ正確に把握できているということであります」

　小隊長は自己紹介を省きさっそく本題に移った。右手を軽くあげて合図すると、部下と思われる同じような雰囲気を持った屈強な男が会議室入り口の照明を落とした。

「ご覧いただいておりますように、敵戦力は短銃や長距離ライフルをふんだんに所持してるのみならず、エリアウェポンを大量に所持しています」

　暗がりの中に郡司小隊長がOHPのスライドをセットした。

==========藤井組戦力一覧==========

◇通常火器
■ リボルバー並びにオート短銃８００丁
■ 遠距離射撃用ボルトアクションライフル４０丁

◇エリアウェポン
■ グレネードランチャー付き連射可能アサルトライフル２０丁
■ フルオート射撃短機関銃６０丁
■ ショットガン１００丁
■ バズーカ砲１４基
■ 重対物狙撃銃６丁
■ ロケットランチャー８基
■ 携行型迫撃砲１２門

◇その他手榴弾、ダイナマイト多数、軍事用ヘリ２基

==========

「うわ、なんですかこれ」

　OHPを見た脇田が暗がりの中で呆れたようなため息をついた。

「おう。なんともすげえよな。おれは地下倉庫見学したことがあるから現物を見たことあるが、あらためてこうしてみると狂ってやがる」

　寺村も苦笑気味に囁いた。

「なんすか、あの重対物狙撃銃６丁って」

「ああ、あれがまたすげーんだよ。シモノフＰＴＲＳ－１９４１とかいう、ルパン三世カリオストロの城で次元大介が戦車相手にぶっ放してた特殊ライフルだ」

「げぇ。戦車なんかライフルなんかで吹っ飛ばせるんですか」

「ああ。だから機動隊の装甲車なんてイチコロさ。ロケットランチャー８基、携行型迫撃砲１２門なんてのは地対空ミサイルだから、上空からヘリで特殊部隊を降下させようとしてもヘリごと撃墜される恐れがある」

「じゃあ、どうするんですか」

「まあ、郡司ちゃんの作戦を聞いてみようぜ、軍事作戦責任者が郡司ちゃんか、おもしれえな」

　寺村はつまらない冗談を言って勝手に笑っていた。

　暗がりの中にOHPの灯りに郡司小隊長や東原署長たちのお歴々の顔が浮かんでいた。

　脇田はふと自分の身の上にも不吉なことが待ち構えているような恐怖感にとらわれ、そっと身震いした。

続く

大人のピアノ そのきゅうじゅうきゅう 警察官の鏡

「次に具体的な作戦方針に移ります」

　郡司隊長の声に合わせて室内の照明が再び点灯され、蛍光灯の青白い光線が会議室の男たちを照らしだした。どの刑事たちも、さっきまでOHPに映されていた現実離れした藤井組の武器戦力が頭から離れない様子だった。

「これだけの重火器を揃えているわけですが、この中にはショットガンや短銃のように比較的取り扱いが簡単なものもあれば、迫撃砲や軍事ヘリのように扱うための訓練が不可欠な兵器も存在します」

　捜査員から我が意を得たりというざわめきが漏れた。

　これだけの兵器を全て扱える者はは警官にもいない。しいて言えば全てではないにせよ部分的に扱えるのは全国の主だった県警に存在する特殊部隊だけということになる。

　しかしそれにしてもこれは治安を目的とした警察の装備というよりは戦争遂行の兵器であり、完全に取り扱えるのは自衛隊隊員のみではないか。脅しと恐喝のプロではあっても、所詮武器戦闘は素人集団のヤクザにこの銃器は扱えない。

　ほとんどんの捜査員がそう思った矢先だった。

「今回突入する藤井組の幹部には、元陸上自衛隊機甲科士長がいます」

　再び捜査本部がざわめいたが、今度のざわめきのトーンは暗澹たるものだった。

「え！？そうなんですか寺村さん」

　脇田がすかさず横にいる寺村に訊いた。

「ああ。そうだよ。三浦っていう藤井組のナンバーツーが陸上自衛隊出身だ」

「ええっ、まずいじゃないですか。三浦の元で組員たちが地下室使ってある程度の訓練を積んでいたら完全な戦争ですよ」

「まあ、そーだよな」寺村は人ごとのように事もなげに言い放った。

「質問があります」

　捜査本部の後ろの席から四十代の刑事が挙手をした。

「どうぞ」郡司が発言を許可する。

「千葉県警捜査一課警部補の坂下といいます。自衛隊機甲科というのは具体的にはどういう任務を遂行する部隊なのでしょうか」

「機甲科には戦車部隊と偵察部隊があり、主に戦車の火力機動力及び装甲防護力により、敵を殲滅するとともに前線の情報収集を行います」

　郡司隊長がとりあえず型通りの説明をした。

「そうしますと、銃器の扱いはもちろん対戦車ミサイルや迫撃砲などの扱いも可能だということになるでしょうか」

「彼らは先ほどのOHPにありましたエリアウェポンのプロフェッショナルです」

　会議室にざわめきは起こらず、かわりに水を打ったような不気味な静寂が部屋を支配した。

「よって今回の作戦は、警察側にも犠牲者が出ることが考えられます。近接陸戦における戦力を測る基本的な計算式は、所持している武器にそれを取り扱い可能な人員を掛け算したものとなります。極端な話、銃器だけがあっても拳銃の扱いすら不可能な一般市民を掛け算で乗じた場合、戦力計算の結果はゼロになるわけです。今回は敵陣で指揮を取る人間が一般的な警官よりも武器の取り扱い能力に優れています。そのため戦力の掛け算もかなり多めに見積もる必要があります」

　郡司隊長はここで言葉を切ったが、追加質問をするものはいなかった。

「そのため被害を最小限にするためにも躊躇なく敵重火器に対抗できる戦力を投入する必要があります」

　ここで再び会議室の照明が落とされて、暗闇の中に作戦概要のOHPシートが浮かび上がった。

==========

１
ロケットミサイルおよび迫撃砲発射による広範囲な被害を想定し、海神町藤井組から半径二キロ県内の住民に強制避難勧告（千葉県警警察官担当）

２
深夜における、低空侵攻能力を持つ戦略ヘリコプターでの上空圏域制圧。ならびに空域制圧作戦成功時に特殊作戦用輸送機によるパラシュート部隊の投入（警視庁、千葉県警、神奈川県警各SAT担当）

３
陸上からの装甲車、および人海戦術による空挺作戦支援（千葉県警、神奈川県警各警察官担当）

４
空、陸特殊部隊一斉突入（警察庁、千葉県警、神奈川県警各SIT担当）

５
人質の身柄確保（千葉県警、神奈川県警各警察官担当）

==========

　ものものしい突入作戦を目にするのが初めてである一般警察官はしんと静まり返った。

「質問よろしいでしょうか」

　先ほどの千葉県警の警部補だった。先ほどよりも顔が青ざめているのが遠目にも見て取れるほどだった。

「どうぞ」

「今回の作戦、捜査方針立案において特徴的なのは、事前に把握できている情報が極めて正確性の高いものであると推察される点です。逆に言えば、敵の物的なあるいは人的な戦力が事前情報と万が一違っていた場合、作戦の遂行に重大な齟齬が生じると推察されます」

「その通りです。先ほどの近接戦闘力測定の掛け算の結果が変わります」

「今回の情報源はここで明らかにすることは可能でしょうか」

　郡司隊長は幹部席の方に視線を投げた。

「私がお答えいたします」

　武蔵小杉署署長の東原が口を開いた。

「今回の作戦においては、第一の功労者はこの武蔵小杉署捜査一課巡査長の長年に渡る危険な潜入捜査の賜物だと言えます。巡査長はその危険な任務にもかかわらず、市民の安全と警察の威信を守るため、献身的に重大な任務を粛々とこなしてきました。まさに警察官の鏡と言って良いこの巡査長がこの捜査本部会議室にも列席しているので、ここでご紹介いたします」

　東原署長が厳粛な面持ちで寺村の方を向いた。

「え！？警察官の鏡って寺村さんのことですか？」

　裏を全て知っている脇田はこのキャリアを巻き込んだ茶番劇に寒気すら覚えた。

「寺村巡査長、一言こちらから自己紹介をしたまえ」

　手招きをされた寺村は脇田に小さく似合わないウインクをして、捜査本部の幹部が居並ぶ雛壇に進んだ。

　全国警察の英雄が足を進めるごとに割れんばかりの拍手が捜査本部を包んだ。

　関東管区警備局長、千葉県警刑事部長、神奈川県警刑事部長、特殊部隊幹部、そして東原武蔵小杉署署長は立ち上がって寺村を迎えた。

　脇田は一人呆然と拍手をすることも忘れて寺村を見つめていた。

続く

大人のピアノ その百 朝子からの電話

　警察の陰謀は意外なところから関係者の知るところとなった。

　斎藤家では客間で武志の父と南方組のナンバーツー石橋が、武志の安否を気遣いながらも和やかに談笑していた。
　武志の姉のなつみは、こうした非日常的な時間の中で飛び出した母親の幼い頃の思い出話に聞き入っていた。

　時刻は午後１１時半過ぎ。

　長かった一日が終わろうとしている。誰もがその非日常的な一日が武志の帰宅とともに集結すると考えていたその時、なつみのスマートフォンが着信した。

「あ、お母様、いっくんのお話の続きちょっとだけ待って。せっかくお母様の初恋の人の下の名前が"伊佐男"っていうところまで出てきたけど、篠崎さんのところの朝子さからよ」

　朝子と今回の件で知り合ったのはほんの数日前だが、二人は篠崎家でなんとなく話をするうち、お互いまるで姉妹のように気心が通じ合うことを確認していた。

　武志の姉と恋人。そしてその弟武志をめぐる大騒が二人の心を急速に近づけた。なつみはスマホのディスプレイに浮かんだ「篠崎朝子」という文字に顔をほころばせた。

「もしもし」

　朝子の声は自分の上ずった声を無理に抑えようとしたような息苦しさを感じさせた。

「朝子ちゃん、どうした？武志はまだだけど、こっちに来てくれた石橋さんと父との話だとそんなに心配する必要もないということだったみたいだけど…」

「テレビつけてください」

　なつみの話が耳に入っていない様子の朝子は思いつめたように短くそう言った。

「え？テレビ。何チャンネル？」

「何チャンネルでも同じのやってます。武志さんのことも出てきてます」

「武志がテレビに！？」

　電話の声になつみの母親が顔を向けた。

　スマホを片手にリモコンを探そうとすると、母親がいち早くテーブルの上にあったリモコンを見つけて電源を入れた。

==========[拉致監禁されている斎藤武志さん(２０)]==========

　いきなり武志のフルネームと年齢と一緒に武志の写真が大きくテレビ画面に映った。

「え？どういうことこれ」

　なつみはスマホを耳に当てたまま思わず叫んでしまった後、それが朝子への非難のように聞こえてしまったかと慌てた。

「あ、ごめんなさい朝子ちゃん。ちょっと動転してしまって。今の朝子ちゃんにいったんじゃないのよ」

「いえ、違います。こうなったの全部あたしのせいなんです。あたしが勝手に警察に武志さんのこと喋ってしまって、それでこんな恐ろしいことになってしまったんです」

　そこまで言い終わると、朝子は抑えていた堰が決壊したかのように大声で泣きじゃくった。

「どういうことなの、落ち着いて話して。あたしは何があっても朝子ちゃんの味方だから」

　朝子をなだめようとするばかりでなく、なつみは心底そう思った。何か自分の意図しないところでとんでもないことが引き起こされてしまい、朝子はパニック状態に陥っている。できれば今すぐ会って顔を見ながら朝子の心を鎮めながら話をしたい。

「お母様、朝子ちゃんパニック状態みたいでまだ要領を得ないんだけど、とりあえずお父様と石橋さんにこのことを…」

　言いかけてなつみは、母親もまた平常心を失い、能面のように真っ白な顔でテレビを食い入るように見つめているのに気がついた。

「お母様…？」

　テレビのテロップは事件の実行犯の顔を次々と写真入りで紹介していた。

=====[広域指定暴力団藤井組組長 藤井清蔵(６７)]=====

=====[元自衛隊員同藤井組筆頭若頭　三浦元久(３４)]=====

母親は顔面蒼白のまま画面を見ていた。

=====[広域指定暴力団 蜷川会若頭南方組組長　南方伊佐男(５３)]=====

その名前を見たとき母親の顔が引きつった。

「いっくん…」

なつみの頭が何かの核心に思い至りそうになり、しかし寸前のところでそれをつかみ損ねた。

「いっくん、って何言ってるのお母様」

なつみはそう言って再び母親が凝視しているテレビ画面を見た。

「伊佐男…？まさか」

「おいどうした」

その時、慌ただしい様子の部屋を心配した父親がドアを開けた。

斎藤氏はテレビを見てすぐに自体を把握した。

「なつみは母さんを頼む。向こうの部屋のテレビを確認しながら石橋さんと善後策を話してくる」

なつみの耳には、まだスマホ越しに朝子の絶望的に泣きじゃくる声がこだましていた。

続く

大人のピアノ その百いち 『徹夜で生テレビ』

　泣きじゃくる朝子はなつみのかける言葉に徐々に嗚咽を沈め、やがて電話を切った。

　篠崎家のリビングでは事件を中継するテレビの音量が控えめに鳴っていた。篠崎と朝子の母親冴子は自分たちの座ったソファの前で必死に状況を伝えた朝子の手を握った。

「ともかくも、最低限必要なところには連絡できたわけだ。パニックになりながらどうしても自分で電話して謝りたいといったお前のことはパパは立派だと思うよ」

　篠崎はそう言って朝子の手を握り直した。紗子も大きく何度も頷いている。

「パパとママ出かけている間に武蔵小杉署の寺村刑事からかかってきた電話は、はなっからお前をはめようとして仕組まれたものだったんだ」

　朝子は無言だった。

「ただ、素人のパパに分からないのは、なんで武志くんの救出がこんな住民の避難誘導をした上での銃撃戦の準備みたいになってるのかってことなんだが…」

　朝子は大きなため息をついた。

「あなた、そんなこと言ったって朝子だって分からないわよ。朝子の話じゃこのテレビで喋っているようなことは警察では一言も出てこなかったって言うんだから」

「そうだな、すまない朝子」

　朝子は力なく首を振った。

「そうすると全てが闇の中か。ごめんな朝子。こういう時に市井の中に埋れてるパパみたいなのには何もわからない…」

　普段自分のことを飄々と二枚目半にして笑っている篠崎も、この時ばかりは自分の窺い知れない部分で自分の娘がダシにされ、手前勝手な大きな陰謀がどこかで進行していることに忸怩たる思いだった。

　重苦しい空気を少しでも追いやろうと冴子がお茶を入れにソファを立った時に篠崎のケータイが鳴った。ディスプレイには武志の父親の名前が浮かんだ。

「もしもし…」

　五分ばかりも篠崎は携帯電話を握りしめていた。

　冴子は朝子と一緒にその様子をじっと眺めていた。

「分かったよ。斎藤さんの大学の同じゼミの仲間が警察庁の偉いさんらしい。息子が関わっているということでかなり詳しいことを聞けたらしい。聞けたらしいんだが…」

「どうしたの…」冴子が遠慮がちに篠崎の言葉の先を促した。

「ああ。これは斉藤さんと今斎藤さんのところにいる南方組の石橋さんの状況分析を加えた憶測なんだがどうやら警察の組織的な陰謀があるのかもしれない…」

　篠崎は妻と娘にその陰謀論を説明した。

「…そんなことって、この法治国家日本にあるのかしら」

「分からない。幸い千葉の藤井組とは電話は繋がるようなんで今石橋さんが状況を整理しているそうだ。」

「…じゃあ、とりあえずあたしたちはここでテレビを付けてまっているしかないのね」

「ああ。斎藤さんの話では警察庁では武志君の安全確保を第一としながらも、それ以外の人間の全員射殺というシナリオもあり得るということだった」

「オフレコね」

「いや、そうでもないらしい。いくら大学時代の友人の息子が人質だとはいえ、機密部分の捜査情報をバラすことはあり得ない。このあたりはテレビでも発表するらしい」

「世論を味方につけておくということかしら」

「おそらくそうだろう」

　そしてテレビニュースは各社篠崎が言った通り捜査本部から、人質の救出と警官隊の犠牲を厭わない射殺も辞さじの方針を伝え始めた。

「パパ。あたしのせいで人がたくさん死ぬの？」

　朝子が再び震え始めた。

「いや、そうと決まったわけじゃないと思うが…」

　篠崎はテレビをザッピングしながら懸命に頭を整理しようとしていた。

　篠崎の手が止まった。

「あ、ひとつお父さんにもできることがありそうだ」

「え？何」冴子と朝子が同時に篠崎を見た。

　篠崎が手を止めてじっと見つめる画面の中には、「徹夜で生討論」通称「徹生」というテレビ朝霧放送の人気討論番組の司会者田原慎之助が映っていた。

「田原さんに連絡をとってみよう」

「え、パパ知り合いなの？」

「ああ。電報堂にいた時に何度か仕事したことあるし、妙に気があってひところ随分六本木を飲み歩いたんだ」

「そういえばそんなこと言ってたわね」冴子が相槌をうった。

「パパの「B面人生論」の唯一の理解者がこの田原慎之助さんなんだ。二人目は武志君のお父さんというわけだ」

　喋りながら篠崎は田原のケータイをならして留守番電話にメッセージを吹き込んだ。

「連絡あるといいわね」冴子が祈るような目で篠崎を見た。

「ああ。留守番電話はこういう時は逆にこまめにチェックするものだと思う。つながれば田原さん次第で、テレビ局が握ってる最新情報や警察情報なんかがある程度想像がつくようになると思うんだ」

　三人はテレビ画面の中、この事件の状況説明をする田原慎之助の顔をじっと見つめた。

続く

大人のピアノ その百に 世界は田原慎之助を中心に？

　朝霧放送のテレビ画面では、田原慎之助がアップでカメラの正面を向いた。

「では藤井組人質救出事件については、新しい情報が入り次またお伝えいたします」

　千葉からのレポーターの臨時ニュースを挟みながらの臨時報道番組は続いていた。識者に話を振りながら司会をしていた田原慎之助はいったんスタジオから引き、女性のニュースキャスターがその他のニュースを読み始めた。

　今日はどの放送局もこの後の深夜番組をニュースを特番を挟みながら編成するはずであり、知名度のあるフリー司会者の田原もまた何らかの形でそれに関わるはずであった。テレビの画面からいったん姿を消した田原は報道局の編成部門との会議に向かうはずだ。その合間に携帯電話の留守電をチェックしてくれるのではないか、篠崎はそれを期待していた。

　予想は当たった。篠崎のケータイが着信した。ディスプレイには「田原慎之助」の文字が浮かび上がる。

「久しぶりですね。篠崎さん」

　田原の人懐っこい朴訥とした声が聞こえた。

「お久しぶりです」

「代理店辞めてから初めて電話くれたよね」

「ご無沙汰ばかりで申し訳ありません」

「いや、噂でしか聞いてないけど篠崎さん辞める時はそれなりに大変だったもんね」

「ええ、まあ。決断は即決で女房に愛想つかされましたが」

　田原の大きな笑い声がした。

「まあ、そこはまたゆっくり飲みながら話そっか。ところで…」

　忙しい身の田原は本題に入った。

　篠崎は今千葉で起きている、正確にはこれから大事件となる大捕物について、斎藤氏からさっき聞いた警察組織陰謀説交えて田原に言ってみた。そしてもし取材源として協力できるならば、娘や同じく千葉藤井組にいる南方組組長南方の懐刀の石橋と話ができるよう努力してみてもいいと伝えた。その代わりに、テレビ局でつかんでいる情報を教えられる範囲で教えてほしいと頼んでみた。

「娘さんのことは留守電で聞いたんだけど、さらに立てこもっている南方組のナンバーツーと話ができるかもしれないのか…」

　田原は興奮を隠せない様子だった。このルートは他の局が逆立ちしても手に入れられないシロモノだ。いや、放送局どころか当事者の警察側の交渉チャンネルを上回るものだと言えた。

「いや、ちょっと待って。やっぱりニュースで流すのは…」

「やっぱり…問題ありますか」

　篠崎は田原の言葉に落胆しかかった。このご時世、たとえ取材源であったとしてもテレビ局は暴力団との直接の接触を神経質なほど避けている。田原自身は暴力団対策法を問題視する人権派弁護士や学者などと一緒に暴対法の問題点を指摘したりしていたが、そのこと自体が田原のジャーナリストの見識を疑うと週刊誌で叩かれたりもしていた。

「いや、そうじゃなくてね、ニュースで流すのはもったいないかなってね。篠崎さん今日は何の日か知ってる？」

「えっと、金曜日ですよね」

　篠崎の頭に中にこの激動の一週間が浮かんだ。

「そう。月の終わりの金曜日だよ。篠崎さん…さては僕の番組みてないな」

　田原がまた上機嫌な声で電話越しに笑った。

「えっと、あ、そうか月の終わりの金曜日だから田原慎之助の『徹夜で生テレビ』でしたね」

「おそいよ篠崎」

　田原がわざと怖い声を作って言う。

「すいません」

「まあ、冗談はさておき、いつも通りAM1:25 - 4:25に放送するんだけどさ、どうせ番組欄チェックしてくれてない篠崎さんのために言うと、今回のテーマがタイミング的に神がかってて『暴力団対策法をめぐる光と闇』っていうんだ」

「お、それはまたすごいですね」

「うん。ゲストにも大物も呼べてる。元警察庁長官で衆議院議員の亀田静太郎代議士もこれるんだ」

「うわ、それまた世界は田原を中心に回ってる感じですね」

「いや、まんざら冗談じゃなくそんな気がしてきたよ。これで番組中にその南方組ナンバーツーの人や、その方経由で南方組組長の電話がスタジオとつながれば世紀の大特番、伝説の特番になるかもしれない」

　篠崎も田原の興奮が乗り移ってきた。

「まだ石橋さん、そのナンバーツーの方には何の話もしてはいないんですが…」

「なに言ってんだよ」

　これまで温厚だった田原が怒鳴り声に近い声をあげて篠崎は慌てた。

「篠崎はさんだって元天下の電報堂のプロデューサーだろ。行き違いがこじれて退職したかもしれないが、これがいったいどういう状況かわかってるよね」

「…はい」

「一生に何度もない大舞台だよ。もう未練はないかもしれないけどさ、これ仕切ったのは俺だって昔の仲間の鼻をおもいっきり明かしてやれよ」

「…」

　篠崎はなんと言っていいのか、即答ができず黙ってしまった。

「いや、勝手なこと言ってすまなかった」

　田原が声の調子を元に戻してまた穏やかに語りかけた。

「いえ、そんな」

「いや、篠崎さんのいろんな事情や気持ち、それにお嬢さんのことも考えず自分の都合でもの言ってしまったような気がする。すまん」

「いや、そんな」

　篠崎は田原の言葉で、つられて興奮しかかった自分自身を冷静に見つめ直す余裕を取り戻した。朝子や武志君その関係者全ての中に他ならぬ自分自身が当事者としているにもかかわらず、昔の血が騒ぐ状態に陥ったことを恥じた。しかし同時にまたそういう自分自身を意外にも思った。

「お互い頭冷やして三十分後にもう一回電話で話そう。おれもこの方向で企画が通せるか編成と話をしてみるし、篠崎さんも状況を整理してできそうなところをクリアにしてもらえるかな」

　田原の言葉に篠崎は頷いた。

　電話を切ると、朝子と冴子が心配そうに見つめている。

　今自分ができる最善のことは何か。

　篠崎は懸命に頭の中を整理した。

続く

　迷っていても始まらない。時間は三十分しかない。一番大切なことは何だ。

　篠崎は心配そうに見つめる妻と娘の顔をもう一度見た。

　結論はシンプルだった。

　田原の言う昔の仲間を見返す云々の気持ちはもうない。暴力団の暴力や警察の権力の是非も今はいい。田原のやっている暴力団排除の社会的風潮に潜む逆の危険性を訴えるも今は興味はない。

「朝子、パパはお前の親としてこの事件の状況と行く末を知る権利があるし、傷ついてたお前のために何かしてやりたい。それとパパは大事なお前が勝手に何かの道具にされて傷ついているのに我慢がならない。ふざけるなっていう怒りの気持ちでいっぱいだ。その思いはとても強いことを今実感してる。お前はこれ以上このことに関わって欲しくない、という気持ちもあるかもしれないが、そこのところはどうだ」

　篠崎は冷静に言葉を選び、努めて笑みを浮かべながらそう言った。

「うん…。正直怖いけど…」

「そっか、お前が嫌ならいいんだよ。パパは無理にどうこうしようというつもりはない。田原さんにはできることはありませんでしたっていうだけさ」

　篠崎はもう一度朝子に笑いかけた。

「ううん。ちがう」

　朝子も笑って首を振った。

「怖いのはこれから起きる千葉のことじゃなくてさ」

「うん？じゃあ何が怖い」

「今あたし怖がらせないように一生懸命笑ながら話してくれてるパパが怖かった」

　冴子がまた斎藤氏に見せたようなお得意の笑い方で吹き出した。

「ええー参ったな。にこやかに話したんだけど」

　篠崎も苦笑した。

「じゃ、やめとこっか」

「それも違う」

「うん？」

　朝子がじっと篠崎を見つめている。まなじりにはうっすら涙が浮かんでいるように見えた。

「あたしのこと真剣に考えてくれてありがと」

　篠崎は朝子の視線の意味がやっとわかった。

「いつもどっかおちゃらけてるパパしか見たことなかったから、一瞬怖いかなって思っただけ。でも嬉しかったよ。今までで一番」

「…そっか。こちらこそありがと」

「なんか変な父娘ね」

　冴子が楽しそうに笑った。篠崎も朝子も笑った。

「よし、そうと決まれば石橋さんに連絡を入れよう。斎藤さんは陰謀説っていうけれど、それがどこまで信憑性のあるものか分からない。憶測ではテレビは絶対に動かないからな」

　そう言って篠崎は斎藤氏にまず電話をかけ、事情を説明した上で南方組の石橋氏に電話を代わってもらった。

「パパ、真剣な顔してるね」

「そうね、あんな顔見たことないよ」

「かっこいいじゃない」

「そうだねえ、仕事の時はああいう顔してたのかな」

「そうだよ、きっと」

「そう言えばそうかもね」

「ふーん」

「いやね、照れるじゃない。ちょっと昔を思い出してたのよ」

「え！？何それ」

「昔ね、あんたのお父さんが「オレのどこに惚れたんだ」って酔って聞いてきたから「あなたのいいかげんでまじめなところよ」と言ったことを思い出したのよ。」🚪

「ふうん。いいはなしじゃない」

「ははは」

「分かったぞ」

「どんな感じだったの」二人は聞いた

「憶測じゃないらしい。藤井組では知らなことらしいんだが、上部団体の蜷川会の幹部でもある南方さんの命令で警察署の中にも全国的にスパイを放っているらしいんだ」

「ヤクザも負けてないわね」冴子が妙な感心の仕方をした。

「神奈川県警にも何人もいるらしくて、その警察官が大掛かりな陰謀が実際に動いていることを全部知らせてきたそうだ」

「じゃあ、さっきパパが言ってたような銃撃戦が…」

「ああ、その脇田という南方さんところのスパイ警官の話だとそういうことになるそうだ」

「脇田…」

「どうした、朝子」

「その話、本当のことだよ」

「なんでお前がそう言える」

「あたしに無理やり供述調書かかせた警官の一人が脇田って言ってた。多分その人だ」

　篠崎はニヤッと笑って親指を立てた。

「田原さん泣いて喜ぶな」

　時計は丁度あれから三十分を経過した頃だった。

　篠崎が電話をかけようと二つ折りのケータイを開いた瞬間呼び出し音がなり「田原慎之助」の名前がディスプレイに躍った。

続く

大人のピアノ その百よん 田原の覚悟

　篠崎からもたらされた"警察陰謀説"は田原を興奮させるに充分だった。

「分かった。お嬢さんを取り調べた脇田という刑事が南方組の放った警察スパイということなら裏は取れているも同然だ。その信憑性は百パーセントと言っていいだろう」

「はい」

　田原の興奮した声に篠崎のアドレナリンもまた静かに上昇した。

「しかし問題は、それを立証することができないということだ」

「そうですね、このことを田原さんが仮にテレビで言ったとしても警察に否定されたらおしまいです」

「その通りさ。それ以前に根も葉もない誹謗中傷であるということで警察から厳重抗議がきてて、そのままテレビ朝霧全体の取材体制に重大な影響が出る」

「はい」

「それとね、さっき番組編成担当の常務取締役も列席してこの後の特番について打ち合わせしたんだけどさ、ややこしいのが思いっきり噛んできた」

「…といいますと」

　篠崎の問いに答える代わりに田原は軽くため息をついた。

「天下り官僚さんですか」

「そ。さすが察しがいいね。他のキー局同様テレビ朝霧も定期的に警察庁から大物官僚を役員として迎え入れてるんだ。そのなにがしさんがね、今回は編成担当常務すら仕切るような形で口出ししてきてるんだよ」

「あまりそういうことはないんですよね」

「ないない。総務省からの天下りは五年に一回ある放送免許の申請に重大な影響があるけど、警察庁からからの天下りなんてテレビが仲悪い政治家対策くらいの意味しかないんだ。政治家の権力監視や不正追求なんかの時に警察、検察ラインを独自に押さえておくっていうことくらいでね」

「番組の作り方なんて口出さないんですね」

「そ。異例中の異例だよ。だから俺はそういう面からも篠崎さんの情報の確度は高いと思う」

「警察の陰謀を仮に知り得たとしてもそれに触れるような番組は絶対に作らせない、こういうわけですか」

「ああ…。そういうことだね」

「うーん」

「この法治国家日本の闇は結構深いよ、篠崎さん」

「…はい」

　篠崎は再び暗澹とした気分にとらわれた。朝霧放送の天下り役員は当然警察庁の現役キャリアからことの次第を言い含められている。警察はその組織的権力を充分に行使してマスコミを抱き込み、公正を装ったマスコミを通じて暴力団追放の大きな世論の中で自分たちのシナリオつつがなく遂行しようとしている。
　その中で傷ついた娘の朝子のために何かできることを探すなど、とうてい不可能なことに思われた。

「でもね、俺はそのまま局の上層部のシナリオに乗っかるつもりはないよ」

　しばらく沈黙があった後、田原が興奮をしまい込んだ落ち着いた声で言った。

「何かやるんですか、田原さん」

「ああ、やるさ。マスコミ生命賭けて大仕事をしてやろうと思ってる」

「何を？」

　篠崎の心臓の鼓動が再び強く胸を打とうとしていた。

「今回テレビ朝霧の特番は『田原慎之助の徹夜で生テレビ』と現地レポートの二元だてにすることで企画を通してきた。『徹生』中で動きがあり次第ニュースを流すっていう仕切りだ」

「はい」

「分かんねえかな、ニュース報道も含めて俺の番組の仕切りでやるっていうことさ」

「分かります。でも、その天下り役員の敷いたガイドラインを逸脱することは難しいわけですよね」

「ああ、基本的にはそうだよ。他局でも識者をコメンテーターとして呼んで現地のレポートと交互に番組の進行時間をもたせるだろうから似てるのは似てる」

「はい」

「しかし、他局の場合にはあらかじめ決められた台本通りに質問して、識者のコメントが台本通りに帰ってくるわけさ。この場合は事前の台本にも当然天下り野郎の意向が反映される」

「そうですよね」

「まだ分かんないの？『徹生』はさ、台本なんてあってないようなバトルでしょ」

「あ！」

　篠崎は田原の企んでいる大博打がやっと分かった。

「そんなことやって大丈夫ですか」

「おや、やっと分かったのかい」

　緊張した篠崎の声とは裏腹に、田原の声は子供のように無邪気ささえ感じさせるものだった。

「討論バトルを誘導して、警察の陰謀でこんな話がっていう爆弾を誰かが投げ込むんですね」

「ご明察。当然番組は荒れるだろう。僕もあえてそれを煽れるだけ煽るつもりだ」

　田原はなおも静かに言った。

「田原さん、その次も考えてるんですよね」

　篠崎の心臓の鼓動はアドレナリンの注入を受けて興奮を抑えるのがやっとだった。

「もちろんさ」

「実はまさにこれから警察の特殊部隊が強行突入しようとしている、
海神藤井城の藤井組組長と電話が繋がってます」

　篠崎は仰天の番組企画内容そのものよりもむしろ田原の覚悟に息を飲んだ。

　成功しても失敗してもただでは済まないだろう。失敗したら田原がこれまで築いてきたもの全てを失うのは間違いない。

　そして、マスコミトップやこの国の支配者層の本当の姿を知るものにとっては、田原の思惑の大成功もまた、田原の人生をこれまでとまったく別のものにしてしまうことは想像がつく。一時の喝采を浴びても大衆はすぐにそれを忘却するが、一旦牙を剥かれた権力は、牙を向いた相手を一生許すことはないのだ。

　成功しても失敗しても、死ぬまで田原に公安警察が張り付き、テレビでの仕事はこれまでのようには思うようにいかないことは明白だった。

「お手伝いさせて下さい」

　篠崎は厳粛な思いで田原に言った。

「ありがと。おっと、編成担当常務の呼び出しだ。また折り返し電話するね。頼みにしてるよ、篠崎さん」

田原はそれだけ言うと慌ただしく電話を切った。

電話を切った篠崎は深呼吸をした。そして妻と娘に笑いかけた。

続く

大人のピアノ その百ご 番組スタート

　千葉県船橋市海神付近一キロ圏内では騒然とした雰囲気の中住民の避難活動が続いていた。

　藤井組から半径一キロ内の住民は、千葉県警交通課生活安全課によって船橋市南部の千葉港湾岸の海上保安庁船橋分室と、西部の船橋競馬場特設テントへ順次誘導された。

　かつて関西の広域暴力団壊滅を意図した警察の対組織暴力頂上作戦では広島、神戸、大阪各都市にて住民の避難が行われたことがあったが、これほど広範囲な住民避難はかつて例のないものである。

　千葉県警の誘導に先立って、NHK及び民放各局では警察の提供した資料に基づいて藤井組の所持する常軌を逸した武器弾薬の脅威を放映していた。警察庁広報センターが藤井組で所持する武器弾薬の殺傷能力、最悪の場合の被害などにつき写真ビデオテープを含めた詳細な資料を放送各局に提供していたのである。各放送局はその資料及び警察記者クラブ発表の資料を元に、番組で手配したコメンテーターにその解説を依頼し、住民に避難の必要性を訴えていた。

　ニュースの中には随時藤井城と呼ばれる姫路城を模した要塞の映像が流れた。すでに報道各社にも現場区域への立ち入りの規制が敷かれているため、こうした映像もまた警察庁広報局が事前に用意した映像が使われていた。

　各局は藤井組の過去の抗争事件の映像や服役中の組員の人数、事件の概要などを交えて住民避難の模様を報道していた。
　合間合間には手荷物を抱えて避難路を急ぐ住民へのインタビュー映像が流れが、みな一様に藤井組のテロ活動への憤りを口にした。

　一連の各局の放送は、自発的ながらも全て警察の描いた大きなシナリオに沿ったものだったと言えた。
　こうした報道が功を奏し住民避難は大きな混乱もなく、住民感情はただ暴力団憎しの怨嗟の声のみに収斂する形となっていた。ここにも目に見えない形で警察の組織力が十全に発揮されていたと言って良い。

　金曜深夜に始まった海上保安庁船橋分室と船橋競馬場への住民避難は、翌日土曜日正午を目標に進められていた。夜明け前までに一般住民の避難をできるだけ完了し、世が明けてからお年寄りや体の不自由な住民を警察が手配した車両を使って避難誘導する二段構えの大移動だった。

海神の藤井城と住民避難先

　そんな中、日付は変わり時計の針が深夜の１：４５を指した。

「田原さんの番組始まったね、パパ」

「ああ」

　田原がどこまで自分の意向を朝霧放送局に通せたのかはまだ不明だった。

　篠崎は斉藤家の南方組石橋、さらに藤井城にいる南方、藤井とも電話で話をすることができた。藤井はテレビへの電話出演については今ひとつピンときていない様子だったが、南方、石橋はそれが事態打開の鍵になることを即座に理解し、逆に篠崎に感謝の意を伝えてきたのだった。

　打ち合わせは断続的に今も続いている。

　朝子もまた、携帯電話で武志と話をすることができた。

「田原さん言ってたように確かにそうそうたるメンバーが『徹生』に出演するようだな」

　篠崎は音楽とともに続々とスタジオに入ってくる論士の面々を眺めていた。

「この中に田原さんが、警察の陰謀疑惑の爆弾を投げ込むわけね」

　冴子がソファに座った篠崎の横で画面を食い入るように見ながら言った。

「ああ」

　CM入り直前の番組は、今日出演の論士の一覧をテロップで流した。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ 元警察庁長官衆議院議員　亀井静太郎
■ 暴力団関係の著書多数のノンフィクションライター　森田守
■ 右翼団体代表　赤石喜久蔵
■ 社会学者　宮本信三
■ 元南部流通グループ代表作家　筒美誠治
■ 元東大教授保守論客　東野晋
……

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

続く

大人のピアノ その百ろく B面つながり

「始まったね」

　朝子が篠崎の隣でリビングの大画面テレビを見ながら言った。

「ああ」

「もともとどういうお知り合いなんだっけ、田原慎之助さんとは」

　妻の冴子が三人分のコーヒーを淹れてきた。

「ああ、一般論で言うと今は昔の景気のいい頃と違ってCMにお金出すスポンサーの意向が強く反映されるんだ」

「うん。でもいきなり東芝の広報担当の人が番組作りの話はできないわよね」

「そうそう。さすが元広告代理店営業マンのの妻、飲み込みが早い。だからテレビのディレクターとか司会者と代理店の人間はほっといても接点はたくさんあるんだ」

「その中の一人というわけね」

「ああ。だからそういう絡みで仕事で何度かスポンサー交えて一緒に打ち合わせしたことがある。でも田原さんとはどっちかというと夜の飲み会の方がメインだったな」

「あなたの本業だものね」

　皮肉目かして言っているが冴子の声の調子は穏やかな落ち着いたものだった。現役時代には確かにこうした会話など夫婦の間で一度もなかった気がする。楽しげに話に相槌を打つ妻を見ながら、篠崎はこういう話をもっとしとけば家庭内もスムーズに行ったかななどと月並みなことを思ったりした。

「ははは。まあでも実は田原さんとは二人で飲んだことことの方が多いんだよ」

「へえ、それって面白い」朝子が横から話に入ってきた。

「そうそう。二人とも夜の接待とか終わって終電逃した時とかね、なんとなく連絡取り合ってお互い同じ状況だったら落ち合って静かに朝まで飲んでたとか何度もあるよ」

「行きつけのそういう店があったんだ」朝子も話を面白がっていた。

「そうそう、そういうときは決まってゴールデン街の「にらいかない」っていう店に行ってたな」

「ふうん」母と娘が篠崎の顔を覗き込みながら興味深そうに言った。

「この『徹夜で生テレビ』の企画を朝霧放送の天皇と言われた大和田さんが持ちかけた頃もたまたま二人で飲んでた。田原さんは活字じゃ絶対無理な討論番組っていうのにこだわってた」

「そうよね、よく総合雑誌とかで偉い人の対談とか鼎談が載ってても細かいニュアンスなんてわかんないもの」

　冴子の言葉に朝子も頷いた。

「そうなんだ。田原さんが言ってたのは、例えば討論してる人が興奮したり怒って大きな声あげても、あるいは虚を突かれてうろたえた口調になっても、当然ながらそれはほとんど読者には伝わらない。でもテレビの場合だったら声の大きさや激しさ、穏やかさはもちろん表情や目の動きや、ときにはテーブルを叩くとか立ち上がったりのリアクションも全部伝えることができる」

「真実味が違うよね。やっぱあたしも大学で授業受けてるのと教科書広げて予習するのじゃ頭への入り方が全然違うもん」

「まあそういうこと」

「じゃあ、この番組はそういう意味では大成功ね。だってみんな怒ったりうろたえたり机叩いたり立ち上がったりするもん」冴子が笑った。

「あたしの大学の先生も出たことあるよ。慣れないテレビでやり込められちゃって翌週から授業元気なくしてたおじいちゃん先生」

　三人は無邪気に笑った。

「でもね、田原さんの一番やりたかったのは実は、出演者の激しい討論でも論壇のタブーに触れることでもなくてもっと違うことだったんだよ」

「何？」二人が再び篠崎の顔を覗き込む。

「討論の中で、賛成反対の正しさとか正義みたいなのを超えて、ふっと一瞬、誰一人として見えていなかった世界が浮かび上がる瞬間を電波に乗せたい、っていうことだった」

「誰一人として見えていなかった世界が浮かび上がる瞬間…」

「うん。じつは田原さんは俺の『B面人生論』のいまあるのとは違う世界っていうのと同じことを考えていたんだよ」

続く

参考文献『田原総一郎の戦うテレビ論』文芸春秋
＊文中の登場人物の言葉に本書からのほとんど引用に近いものもあります。主義主張になどついてはあくま

でフィクションですので、モデルにさせていただいた方とはまったく関係ありません。

大人のピアノ その百なな 賛成派と反対派

「こんばんは、司会の田原慎之助です。昨日視聴者の皆さんもすでにご存知のように千葉県船橋市海神を震源地とした大事件が起きました。正確にはこれから大事件が起きようとしているといったところかもしれません。
　この番組では千葉と中継をつなぎながら、新しい情報が入り次第現地からレポートを流します。その間、おそらく暴力団問題に関しては日本でもっとも著名、影響力のある論客二十名の方と一緒にこの問題を掘り下げて行きます。

　今日はひとつみなさんよろしくお願いします」

　田原の声に会場の出演者は小さく会釈をした。

　出演者たちは今まさに進行中の日本中が注目しているタイムリー事件と連動した、さながら劇場の舞台上ような雰囲気に、いつもとはまた違った生々しさを肌に感じていた。

『徹夜で生テレビ』は毎回テーマに即して出演者を大まかに賛成派と反対派に分けて着席させている。

　今回は「暴力団対策法」についての賛成派が視聴者から右側に１０名、反対派が左に１０名座っていた。著名な論客もいれば名の通った市民団体の代表もいる。

　会場及び視聴者はこの賛成派と反対派がやりあう構図を高所から見物、あるいはどちらかに感情移入していつしか硬いテーマの中に我知らずのめり込んで行くのだ。

　毎回こうした決まったパターンで深夜の熱い空間が構成されるのだが、約四時間の深夜番組にはだいたい半年ほどの準備期間がある。今も同時並行で役１０本の企画が進行中である。
　その中から形になりそうなものを世論の大きな流れを捕まえて順次リリースして行くのだが、今回はもちろん藤井組のこの大事件を誰かが予想していたわけでもなく、半年前から地道に番組の準備が行われていたところに今夜のタイムリーな流れとなったわけで、そうした偶然が今夜の番組にこれまでにました異様な臨場感を与えていた。

　暴力団の存在そのものについては一般的な市民感情として手放しで肯定する人はまずいない。従って「暴力団対策法」そのものについても、市民の安全を守るためにある程度は必要であるということは反対派の出演者も理解している。

　これは別のテーマで言えば「死刑廃止論」にも似た困難であって、犯罪者が犯罪を犯したことによって何らかの処罰を受けるのには「死刑廃止論」者も反対しない。しかし、犯罪を犯したからと言って、人が人を、神ならぬ自分たちが同じ人間を極刑にする権利がそもそもあるのかどうかが問題となるのだ。

暴力団は悪である。

したがって「暴力団対策法」は悪に対してならどんな制限、どんなペナルティも課しても良い。こうなってしまうと、そこに「死刑廃止論」のようなある種の「行き過ぎ感」が出てくる。

番組スタッフの打ち合わせでは、最初の切り口をそこにフォーカスしようということになっていた。

「まずはじめに視聴者のみなさんは意外に思うかもしれませんが、「暴力団対策法」反対側の席に座ってらっしゃる社民進歩党衆議院議員の大内議員にお聞きします」

田原の振りに会場の一般参加者の目が一斉に大内寛信に向けられる。カメラも大内のやや上気した顔をアップにして全国の視聴者に映し出した。

「はじめまして。大内でございます。みなさん市民派の良識の砦である社民進歩党の代議士がこともあろうに暴力団の味方をしているのか！と驚きを感じた方もいらっしゃると思います。」

「そうですよね。いきなり違う方面からお叱りを受けるかもしれませんが、右翼や暴力団にどちらかと言えば甘いのは保守系の議員じゃないのか、そんな気もしないでもないですが」

カメラはここで同じく「暴力団対策法」反対席のちょうど大内議員の隣に座っている立憲自民党大物代議士の苦笑した顔を捉えた。

それと同時に賛成席に座っている「全国の暴力団追放を草の根から実現する市民ネットワークの会（マル暴追放ネット）」の、トレードマークの濃いオレンジ色の縁メガネをかけた四十代の女性会長の憤懣やる方ない顔もアップに捉えた。この会長は大内議員に睨みつけるような不機嫌な顔を向け、「事と次第によっては許さないぞ」と身構えているようだった。

「はい。それについてまずご説明いたします。ちょうど私の視線の目の前に「マル暴追放ネット」の福島女史が私をすごい目で睨んで座っておられますが、日本全国の視聴者の方の約半数も、いやもしかするともっと大勢の方も福島女史と同じ目でブラウン管を通じて私を見ていると思いますので、きちんとお答えいたします」

サブカメラの全てがいきなり話を振られて顔を赤くした福島女史に向けられ、左右の顔のアップ、反対派賛成派から俯瞰の映像のコマがサブリミナル効果のように素早く画面に飛び交った。

「福島女史には大内議員の発言の後お話をお聞きしたいと思いますので、それではまず大内さんお願いします」

大内は頷いた。

　番組の滑り出しは上々だ。

　裏方のスタッフたちはここでひとまず安堵し、気の早いものはこの異例中の異例の今こうして進行中の実際の事件と連動した熱気の中、過去最高視聴率も夢ではないかもしれないなどと思い始めていた。

続く

＊人名、団体名は全てフィクションです(v_v)

大人のピアノ その百はち 悪と決める者

「まず大前提のところをお話ししたいと思います。日本の刑法は先進国なら常識である【罪刑法定主義】によって…」

「あ、大内さん。いきなり話の腰を折っちゃって申し訳ないんですが、大内さんは国会議員で人権派の弁護士さんでもあるから難しい法律用語がポンポン出てきちゃうと思うんですよ。今日はそういうのひとつ、なし、でやってもらいたい」

「ああ、これは失礼しました」

　田原慎之助のいきなりのツッコミによって失笑が起こり、会場はやや和んだ空気が流れた。

「いえ、お続け下さい。その罪刑法定主義っていうのは平たく言うとどういうことなんですか」

「はい。一言で言うと、法律で定められた悪いことを実際にしたら罪になるっていうことです」

「それは当たり前だと思いますが、『暴力団対策法』はそうなってないと」

「そうなんですよ。ぶっちゃけていいますと、まだ法律違反をしていなくても暴力団だから集会場を貸すと喧嘩が起きて拳銃をぶっ放すかもしれない、だから指定暴力団には一切集会の会場を貸さない、こういう理屈になるわけです」

「なるほど、まだ喧嘩もしてないのに」

「そうなんですよ。銀行口座も今やヤクザは自由に作れないんですが、これはさすがに意地悪してるってわけじゃなくて、暴力団に口座を開かせると拳銃や覚せい剤の売買や不正送金やらマネーロンダリングやらに使われるに違いない、だから最初っから口座を作らせない、ってことなんですね」

「確かに法律違反を犯してないのに罪人のような扱いを受けてますね」

「そうなんです。これは明らかに憲法が保障する基本的人権が踏みにじられた状態で、そういうことに関して護憲派の砦である我が社民進歩党は断固として反対して行くというわけなんです」

　田原が頷いた。田原がさらに話をしようとすると、オレンジメガネの福島女史が割り込んできた。

「そんな、基本的人権なんて社会のルールを守った人間が初めて主張できる権利であって…」

「まあまあ、福島女史、ちょっとまって。ご説ごもっともなんですが、もうちょっと私に喋らせてください」

　話を遮られた福島女史は今度は羞恥ではなく怒りで顔を赤くした。カメラは画面を真っ二つに割り、左に苦笑した大内議員、右に顔を赤くして怒る福島女史を映した。

「あのね、大内さんね」

「はい」

「いまお話聞いていて一つ思ったのは、そのもしかしたら危険かもしれないっていう判断は誰がするんですか。いったんこいつは危ないっていうレッテルを貼られたら基本的人権がなくなっちゃうわけですが」

　とぼけたふりをして田原慎之助が議論の広がりための本質的なところをさりげなく突いた。

「それは国家公安委員会という言い方もできますが、あえて誤解を恐れず単純化して言うと、警察が決める、といっていいでしょう」

「ふーむ。警察がいったんこいつは危ない、と判断するとそうなっちゃう。じゃあ、警察には憲法で保障された基本的人権を反故にする力があるってことになっちゃうのかな」

「まあ、程度問題なんですが、戦前の特別高等警察の例もありますし、我が社民進歩党ではそういう危険性も鑑みた上で反対の立場をとっているということです」

「社民進歩党が暴力団対策法に反対するという理由についてはよく分かりました。要は【罪を憎んで人を憎まず】というのが基本のはずなのに、暴力団憎し！人が憎い！！ってなっちゃうのがまずいなというところですね」

「うまいことおっしゃる。まさにそういうことです」

　大内議員の芝居がかった合いの手に会場が笑の渦に包まれた。

　しかしオレンジメガネの福島女史は笑には加わらず、早く何か喋りたくてうずうずしている様子だった。

「あ、それでは大変長らくお待たせいたしました。福島先生どうぞ」

　画面中央の田原慎之助はスタートが成功したためか、余裕の表情で福島女史に話を振った。

続く

大人のピアノ その百きゅう 危険なことが起きてからでは遅い

「現実を知らない。暴対法に反対する方々はこの一言に尽きると思います」

　福島女史はさっそく本題に切り込んだ。

「暴力団の基本的人権とかそういうのの以前の問題ですね」

「ええ。反対席に暴力団を美化したノンフィクションやそのコミック版を出してる作家の人もいますけど、実際に暴力団の被害にあっている市民の実態をご存じないとしか思えません」

「といいますと、具体的にはどんなことですか」

「生放送で喋っちゃってもいいんでしょうか」

「どうぞどうぞ。それがこの番組のいいところですから」

　田原の促しに福島女史は静かに頷いた。

「私どもで支援している、ある関東郊外の私鉄の駅前商店街の反対運動なんですが、商店街にいきなり組事務所が引っ越してきたんです」

「それはその駅周辺の住民の方や商店街の店主さんは穏やかじゃありませんね」

「そうです。商店街は小学校への通学路にもなっていますからさっそく商店街の店主さんを中心に移転反対運動が起きました」

「暴力団も黙ってないですよね」

「それはもう、夜中に店のガラスが割られるし脅迫電話はかかってくるし、昼間だって反対派リーダーグループのお店には昼間からその人たちが出入りして営業妨害をするなんて序の口です」

「まだありそうですね」

「ええ。卑劣なのは子供をさらったりすれば即警察沙汰ですから、その商店街のケースではリーダーグループの奥さんが狙われました」

「どんな風に？」

「覚醒剤です」

「これはいきなり穏やかじゃありませんね」

「ええ。詳しい事情は申し上げられませんが、確かに奥様たちも脇が甘かったというところはあると思いますが、どういう風に近づいたのかは人それぞれなんですけど、リーダーの奥さんたちのほとんど全員が覚醒剤中毒にさせられました」

「これはまた卑劣な。子供を誘拐するのと違って訴えることがしづらいし、常用者になってしまったら薬を提供してくれるむしろヤクザとの結びつきをむしろ壊したくない、と思うかもしれない」

「そのあたりがヤツらの狙いだったと思いますわ。これも実話なんですけど、奥様の中には主婦買春まで斡旋されて家庭崩壊に追い込まれた人もいますし、組事務所が反対派を押し切って商店街に強制的に移転して来てから半年後には実に８割の反対派リーダーのご夫婦が離婚に至っています」

「それも全部作戦の内だと」

「そういうことです。人間の尊厳を根底から奪ってしまう覚醒剤を武器に家庭崩壊をしかけて、自分たちの事務所がそこに居座れるようにする。こんな人たちにそもそも基本的人権なんて保証してあげることが必要なんでしょうか」

　いきなり具体的な凄惨な話が飛び出し、会場のムードはいっぺんに緊迫感を増した。

　テレビはしんと静まり返った会場を映し出す。

　さっきまでにこやかにユーモアさえ漂わせながら自説を開陳していた人権派弁護士衆議院議員大内氏も毒気を抜かれた表情で神妙に頷いている。

「福島さん、非常に説得力のあるお話ありがとうございます。すると福島さんとしては、罪を憎んで人を憎まずなんていうのは生易しくて、危険なものはきちんと排除しておくべきだということですね」

「当然です。おきてからでは遅いんです。例えば不発弾はまだ爆発してなくても爆発したら大変なことになりますから、しかるべく除去しますよね。爆発してから罪刑法定主義とか言って、今回の爆発はでかいから懲役７年です、とかやっても馬鹿げてるでしょ。それとおんなじです。毒薬のサリンだってそうです。街中で作って所持してたらそれだけで罪になるでしょ。ヤクザはそれと同じなんですよ。たとえば実際に大内さんの奥様がそういうことされたら…」

「まあまあ、そこのところは今は置いといて」

　何か反論しようとした大内議員を制しながら田原慎之助が福島女史をなだめた。

「おっしゃることは大変に分かりやすく、かつ説得力のあるもにだったと私は感じます。ヤクザだから基本的人権はいらないというのも極論かもしれませんが、そもそも基本的人権の大切さを決して学習しようとせず、またそれどころか積極的にそれを踏みにじるような行為をなんとも思わないような人たちと、それでもなお一般市民は仲良くやっていかなくちゃいけないのか。福島さん、そういうことですね」

「そういうことなんです！」

　福島女史は田原慎之助のまとめに感動したような表情を浮かべた。

　会場からは拍手が沸き起こった。まずは暴力団対策法賛成派の一般席から、そして反対席からも静かにそれは起きたのだった。

　大内議員も横に並ぶ暴力団対策法反対派の面々も、この福島女史の発言と田原慎之助の仕切りには一定の評価をしたようで、穏やかな顔で頷いている。

　そこに反対派から挙手するものがいた。

「宮本先生どうぞ」

　田原慎之助に宮本先生と呼ばれた五十代そこそこの少しにやけた表情を浮かべた男の席には「社会学者宮本信三」という文字があった。女子高生の援助交際の実態や、若者たちが新興宗教に走る理由を、社会学的視点から女性の裸満載の男性誌によく寄稿している論壇のある種の名物男だ。

　カメラはその男の表情を大写しにした。

続く

大人のピアノ その百じゅう アメリカの正義イラクの正義暴力団の正義？

「今、奇しくも大内衆議院議員から警察の裁量的な行政への都度介入の危険性が指摘され、また福島女史から基本的人権を万人に認めるということの是非という問題が提起されました」

「宮本先生、もうすこし優しい言葉で」

「あ、失礼。お二人の問題提起は言ってみれば【この世の中のルールを支配するのは誰か】という問題なのです」

　大内議員はうんうんと頷いている。福島女史は、何を言い出すんだろうこの人はという顔を崩さなかった。

「要するに大内議員は警察がこの世の中の何が危険、誰が危険というルールを勝手に決めてしまう危険性がある。また福島さんの場合、すこし意地悪な言い方をすると、かよわき市民は暴力を排除して良い、市民の倫理に反する者は消えてくれ、というルールを一方的に作っている、とこういうわけですか」

「おっしゃる通りですね。ルールというものはそこで生きて行く人々の多数派によって作られる。つまり多数決の原理の勝者が敗者を支配するという性格を持ちます」

「身も蓋もない言い方かもしれないけれど、一般論としてはそういうのはあるのかもしれない。今我々は例えば国際社会においては世界の警察アメリカの価値観にある程度合わせ、納得しながら世界情勢を判断してますけど、アメリカがしょっちゅう喧嘩してる中東世界の価値観からすると、アメリカさんは何の権利があって世界のルールの司祭やってるんだと、こういうわけですね」

　カメラはここで会場の参加者を映し出した。一様に、なるほど流石に宮本は小難しいことをいうな、というお手並み拝見モードだった。

「中東を空爆するアメリカの論理というのはまさに福島さんのいう、『不発弾が爆発する前に排除せよ』というのと同じなんですね。何考えてるか分からないといっても、それはあくまでアメリカ的な価値観でしかないわけです。アメリカ的な価値観に全てを合わせなければならないとしたら、確かに中東の一部の国は悪の枢軸国ということになるでしょう。しかしこれはアメリカがこの世界のルールを作っているから成り立つ論理で、それはとりもなおさずアメリカが世界の勝者だからです。勝者が敗者を自分たちのルールで支配しようとしているだけの話で、そこに本来正義をストレートに持ち出すのはおかしいのということはそこらの小学生にもわかります」

「といいますと」

「正義は、中東の国々にもアラブの正義というものがあるからです」

「なるほど、正義と正義のぶつかり合いですね」

「そう。だから同じように『暴力団には暴力団の正義がある』と言われたら、形式上は反論できないんです。そこで危険だから、という言い方をしてしまうと、アメリカが大量破壊兵器がなかったにもかかわらず、そういう危険性があるからということでイラク戦争を遂行したことを一切非難できなくなるんです」

「なるほど。暴力団が危険だから排除せよ、というのはイラクは危険だから空爆せよというのと同じだとい

うことですか」

「そう。だから大量破壊兵器が実際にあったかどうかは問題ではなくなる。今見つからなかったではなくて、あってもおかしくないから、そういう危険性があるから空爆で殺してしまうということを福島女史は非難することはできません。福島女史はブッシュです」

　宮本のいつもの挑発的な物言いに、会場の一般参加者からヤジが飛んだりざわめきがおこったりした。

「福島さん、何かありますか」

「私はただ、そこに住んでいる住民の方の安全と小さな幸せを守るお手伝いがしたいだけです」

　福島女史は宮本の断定的な言い方への怒りと、何かに対しての情けなさの入り混じった表情で言葉を絞り出すように言った。

「アメリカもアメリカ国民や石油メジャーやアメリカの同盟国の一方的な安全と幸せを守るわけでしょ」

　反対席の別の論者たちが田原慎之助に制止する隙を与えず、デタラメなマナーで次から次へと福島女史を怒鳴りつけた。

「そうそう、だいたいあんたわやねえ」

「そういう自分がブッシュに実はなりたがってるってのをさ、自覚しなきゃ」

「その変なメガネの下にすごいルサンチマンが…」

　賛成派も福島女史を守るべく口汚い言葉で応酬し始めた。

　視聴者がチャンネルを変えようかと思う瞬間がまさにこれで、ここを乗り切れるかどうかで今回の『徹夜で生テレビ』の視聴率レースの第一関門の結果が左右される。

　スタッフ、田原慎之助は毎度恒例のことながら、いつもより時間的に少し早いこの展開に少し慌てた。

　田原慎之助の視線が議論の会場の先のディレクターに飛んだ。田原はディレクターと目線で頷き合った。

「みなさん、激論の中藤井組が立てこもる千葉で何か動きがあったようです」

　会場は一瞬で静まり返った。

　これから自衛隊並みの装備を持つ藤井組と警察とが、周辺住民を緊急避難させた上で激しい銃撃戦を起こすのだという現実に一気に引き戻された格好だ。

「それでは千葉県船橋市海神と中継が繋がっていますので、呼んでみます」

　テレビの画面は真っ暗な空の下、報道関係者のワゴンが縄張り争いのように駐車された中、避難先へと急ぐ住民を映し出していた。

　会場の暴力団対策法賛成派、反対派のパネリスト、そして会場の参加者もスタジオのミニシアターのような大画面のスクリーンに注視した。

続く

大人のピアノ その百じゅういち

「はい。現地の曽根がお伝えいたします。

　こちら船橋市の南側、藤井組から北に一キロほど離れたややこんもりした高台です。付近の住民は藤井組から近距離にある区域から順に交通各機関の協力によりシャトルバスにて、こちらとは反対側、南側海側の船橋競馬場と海上保安庁船橋分室に避難しています。

　この付近はすでに住民の避難は完全に完了し、警察の許可を受けた報道関係者のみが立ち入りを許可されています。警察の作戦開始準備が進むに連れ、徐々にこのあたりも報道関係者を含めて無人地域化する予定になっています」

「曽根さん、スタジオの田原です」

「あ、はい。聞こえます」

　３０代中盤と思われる曽根と呼ばれた記者は、田原慎之助の声を確かめるようにイヤホンを自分の耳押し当て直した。

「何か動きがあったということですが」

「はい。さきほど藤井城から拡声器を使って警察と一部マスコミに対してメッセージが発信されました」

「どういったものでしょうか」

「現在他局で放映している藤井組の武器密輸組織の責任者、この人はすでに亡くなっているのですが、藤井組組長の実の息子に関する報道は事実無根で故人の名誉を著しく傷つけるものであるとして、即刻放映中止と放送局および一警察責任者のテレビでの謝罪記者会見を要求しています」

「ええと、こちら『徹夜で生テレビ』オンエア中で他局の番組を把握できていませんが、どういった内容のものかまだご覧でない視聴者の方に説明してもらえますか」

「はい。簡単に言いますとこの亡くなった長男が商社に勤務していた頃からの人脈とノウハウをフル活用して、海外から違法に武器を調達し密売組織を作り上げた実態がドキュメンタリー形式で放映されたようです」

「それは藤井組の人間が言うような、なんといいますか事実は別として故人の名誉を著しく傷つけるようなものなのでしょうか」

「こちらの取材クルーの車内で私も一部VTRを観ましたが、もし事実と違っているというならば確かにかなり悪者にしたて上げられたと考える人がいてもおかしくないかな、という印象です」

「具体的には何かありますか」

「はい。覚せい剤中毒の狂人という言葉が何度も使われており、映像も直接藤井氏とは関係が薄いと判断できそうなやや扇情的なシーンが多数盛り込まれていると言ってもよいかと思います」

「その他局、あ、今私の手元にもその局の名前と放送の概要がペーパーで来ました。それと、スタジオの大画面にて抜粋版が流れますので少し見て見ましょう」

「はい…」

『徹夜で生テレビ』会場の全員は食い入るように画面を見た。

　確かに映像のプロが見ると、安っぽいハリウッド映画の悪の権化のようなカリカチュアライズされた映像であった。会場からはため息や失笑も一部漏れ聞こえた。
　しかし一方で一般の視聴者がこれを見た場合には、藤井組の凶悪さ狂人さ加減が強く印象に残るプロパガンダ映像としてはそこそこよくできたものであるとも言えた。

「確かに映像的には少しやりすぎかなという印象もなくはありませんが、これを放送した首都大東京放送も事実無根のいい加減な放送をするわけがありませんが…」

　他局の番組をどう扱っていいか、この時点ではまだスタンスを図り兼ねた田原は慎重に言葉を選んだ。

「はい。ご覧いただくと随所に警察庁関係者の証言が入っています。この映像全体が警察庁から首都大東京放送側に提供されたものではないかと考えられるのかもしれません」

「なるほど。そこはおいおい明らかになるとして、藤井組の要求は先ほどの通りなわけですね」

「はい。実は続きがありまして、午前2:00までに首都大東京放送と警察の謝罪記者会見がない場合、実力行使にでる、と言っています」

「その内容は」

「内容については不明です。こちらからの呼びかけには一切返答がありません」

「**2:00**ですか。あと**4**分ほどですね」

「はい」

「分かりました。曽根さん？」

「はい」

「いったんスタジオに戻してそちらの映像を会場の大画面で流しながら**2:00**を待ちたいと思います。その後またお願い致します」

「了解しました」

　田原は正面のメインカメラに向かった。

「お聞きの通り、事態はあと数分で大きく動く可能性があります。謝罪の記者会見が行われるのか、また行われなかった場合藤井組の実力行使とはいったい何を意味するのか。いったん激論を中断して**2:00**に何が起きるかを会場および視聴者のみなさんと一緒に確認したいと思います。

ここでいったん**CM**に入ります」

続く

大人のピアノ その百じゅうに

「ええ、ただいま時計の針はちょうど午前2:00を指しました」

　スタジオの大画面でスクリーンは千葉の現場、問題となっている映像を流した首都大東京放送玄関口、さらに霞が関の警察庁前からの現場中継画面を切り替えて映し出している。

　視聴者が自宅でテレビを見ている討論番組の中にもう一つの巨大テレビがあり、いわばテレビというバーチャルメディアの中にもう一つのバーチャル世界がある状態だ。

　そしてその二重化されたバーチャル世界の先で、この現実世界と繋がった重大な事件が起きようとしている。

　幾つもの層に分かれた多元的な世界が、まるで万華鏡にように日本全国に人それぞれの「現実世界」を提供しているのだった。

「あ、今動きがあったようです。首都大東京放送前の佐々木さんを呼んでみます。佐々木さん、そちらで何か動きがあったようですね」

「はい。こちらの首都大東京放送では先ほど午前二時丁度に映像を放映した責任者の取締役が記者会見し、『番組は警察提供の信頼できる情報であり、番組でも独自に裏を取った上で責任を持って放送した。謝罪に応じるつもりはない』とのメッセージを藤井組に伝えました」

「あ、こちらでもその模様が大画面で流れています。責任者は『警察庁提供』と言ったんですね」

「はい。警察では首都大東京放送に特別な便宜を図って情報を提供したということではなく、広報を通じてマスコミ各社に提供予定のものだったということですが、首都大東京放送がこれを独自ルートで事前に入手。その中身を警察庁に確認した上で放送に踏み切ったということです」

「スクープというかフライングというか微妙なところですが、そうすると警察からも何らかの発表があると思いますので、いったん警察庁に切り替えます」

「はい」

　田原慎之助は正面メインカメラに向いた。

「ええ、お聞きのように問題の映像は警察庁がマスコミ各社に準備したものをスクープの形でいち早く首都大東京放送が放映したということのようです」

「これが引き金で藤井組の『報復行動』というものが現実になった場合、首都大東京放送の責任問題ですね」

　社会学者の宮本信三が冷徹な口調で言った。

「確かに重大な問題となりそうですが…おっとここで警察庁からの映像が入っています。ご覧ください」

　大スクリーンには警察庁広報担当の記者会見の模様が映り、首都大東京放送同様謝罪の意思はなく、断固として今回の事件の早期解決を目指すとの談話が発表された。

「ううむ。こうなるといったい藤井組の言う『報復行動』というものが何を意味するのか不気味です。いきなり人質になっている斎藤武志さんをどうこうするということはあり得るんでしょうか」

　田原は暴力団対策法反対席に座る、元警察庁長官で立憲自民党衆議院議員の亀井静太郎に話を振った。

「ううむ。情報が少なすぎてはっきりしたことは申し上げられませんが、人質は一人だけですからいきなりその人質の生命を奪うようなことは考えにくいでしょう。つまり藤井組の切り札をあっさり切ってしまうということになりますから」

「それに、故人の名誉回復を訴える人間が直接関係のない人質の生命を奪うというのは筋が通らない、というかこの日本中の全てを的に回すことになるから、それはないんじゃないかな」

　暴力団関係の著書多数のノンフィクションライター森田守が言った。

「するといったい『報復行動』というのが何を意味するのか不気味ですが、千葉の曽根さん？」

「はい。千葉の曽根です」

　スクリーンがさっきの記者を映し出した。

「何かそちら動きはありますか」

「いえ、今のところ不気味な静けさが続いています」

「テレビ放送に抗議したわけですから、藤井組の内部では当然首都大東京放送と警察庁の発表を把握してるわけですよね」

「そのはずですが、状況は至って静かのままです」

「分かりました。何かあったら伝えてください」

「はい。あ！ちょっと待ってください」

「どうしましたか」

「今、藤井組住居通称藤井城に激しく閃光のようなものが見えました。それと物凄い爆発音が…」

　その記者が言葉を言い終わらないうちに、スタジオの大スクリーンで全てのことが判明した。

　凄まじ爆発音と大花火が闇夜で炸裂したような明るさの中、上空に飛んでいた警察庁のヘリコプターが炎でオレンジ色に染まり、機体が空中で四方に飛び散りながら落下して行く様が映し出された

のだった。

　衝撃的な映像とともに集音マイクが爆発音をまともに拾い、そのまま生中継で編集なしでズッドーンという地鳴りのような音となってスタジオに流れた。

　一般席からは女性の金切り声が四方八方から上がり、スクリーンの向こうのバーチャル空間での出来事にもかかわらず、我を忘れてスタジオの出口に駆け出そうとする人たちもいてスタジオは騒然となった。

「落ち着いてください」

　警備員の必死の制しでスタジオの中にいたことに改めて気がついた人たちが、自分を取り戻したその時だった。

　再び爆音とともに今度は地上の何かが爆撃されたようだった。

　先ほどの爆発音にさらに輪をかけたような凄まじい爆音と破片物、土砂のようなものが曽根記者付近のマイクとカメラを襲い、マイクはそのまま転がりカメラは横倒しになってアスファルトの映像をデタラメにアップ状態で映し出していた。

「曽根さん！大丈夫ですか、曽根さん！！」

　叫ぶように曽根を呼ぶ田原の声に曽根の返事はなかった。

　ややあってアシスタントディレクターからメモを受け取った田原が正面のカメラを向いた。

「ええ、ただいま入ってきた情報によりますと、曽根記者が取材をしていたすぐ近くの首都大東京放送の取材用ワゴン車がロケットミサイルのようなもので攻撃され、大破炎上した模様です。近くで取材していた曽根記者は爆風で吹っ飛ばされて大怪我をして現在救急車で病院に搬送中ですが、幸いにして命に別状はなさそうだということです」

　田原の声も心なしか震えていた。

「なおCMを挟みまして、状況を整理してお伝えいたします。一旦失礼いたします」

続く

大人のピアノ その百じゅうさん

　CMに入ると田原の前にスタッフが緊迫した面持ちで駆け寄ってきたが、田原は「すぐ戻る。CM明けは現地の臨時ニュースでつないで」と指示して足早に廊下に出た。

　慌ただしく廊下を走っていく局員をやり過ごして、田原は非常階段の重い金属の外扉を押した。

「もしもし田原です。もちろん見てたよね」

　携帯電話の相手はもちろん篠崎だ。

「大変なことになりましたね」

「ああ。首都大東京放送の勇み足というところだけど、結果的にこれで警察は思惑通り藤井組を武力で完全に制圧するというお墨付きを貰ったことになる」

「どうしますか」

「あれ、やるしかないよ」

「…はい」

　藤井組組長との電話ホットラインによる単独インタビューだ。

「ただね、状況が変わったから確実に問題が生じる」

「といいますと」

「僕と篠崎さんの作戦では、討論の中で『実は藤井組長と電話が繋がってます』と朝霧放送から藤井組長と電話をつなぐつもりだった」

「はい」

「ところが先にこうして大事件が起きてしまった。おそらくこの時間起きている全世帯に近い日本人が、どこかの局でこの事件の推移を息を呑みながら注視している」

「はい」

　CMの時間を気にしながら早口に要点だけ感情を交えず話す田原だったが、それでもその緊張感が耳に押し当てた携帯電話を通じて篠崎にも伝染する。

「警察は藤井さんのインタビューを流した後すぐに、犯人とのホットラインを警察に提供するように朝霧放送に言ってくるだろう」

「それはこうなってしまった以上、当然そういう流れになると思いますが」

「その時は、今度こそこの事件の裏の警察の陰謀は一切闇に葬られることになる」

「……」

　重苦しい空気が流れた。

「どうする、篠崎さん」

「田原さんの考えと同じだと思います」

「いいの？そんなこと言っちゃって。僕の考えは過激な方だよ」

「分かってます。乗りかかった船です。お付き合いしますよ」

「オッケー。じゃあ時間もないからそれで行こう。篠崎さんには予定通り仲介の段取りをやってもらう。ただし、電話を繋ぐのは朝霧放送ではなくて、謎のフィクサーXだ。手順については番組が始まる前手書きでまとめたものがある。今回先にミサイル攻撃が起きてしまったから若干作戦を変えないといけないところがあるから、それは太字で書き込み入れてそっちにファックス送るよ」

「お願いします」

「警察からはいろんなルートでXの存在を突き止めようとするだろう。最終的に篠崎さんのホットラインを寄越せという圧力がかかると思うけど、それなんとかかわして欲しい。それが篠崎さんの任務といったところだよ」

「了解です」

　篠崎は心配そうに見つめる冴子と朝子に大丈夫だよ、と口を動かして微笑んだ。

「じゃあ、ミッションその一だ」

「はい」

「CM明けに僕が喋ってる時に、わざとらしく僕のケータイ鳴らしてくれ。わざとらしく番組中に僕がそれを取る」

「はい」

「『取材情報源の秘匿』と断った上で藤井組長と電話ホットラインを繋いでくれるという人からの電話だ、と言うよ」

「わざとらしく」

「あっはっは」

　田原は爆笑した。

「その時藤井組長が電話に出れるようにまずしといてね」

「はい」

「後は警察がいずれ篠崎さんまで辿り着くまで、それをかわして欲しいということだ」

「すべて了解しました」

「じゃあ、CMと臨時ニュースが開けるから戻るよ」

「行ってらっしゃい」

　電話を切った篠崎の手は汗ばんでいた。

続く

大人のピアノ その百じゅうよん

「それでは番組を続行したします」

「暴対法を論じる趣旨と少しズレるんですがいいですか」

　オレンジメガネの福島女史の隣に座る暴力団対策法賛成派の５０歳代の男がおもむろに喋り始めた。大宅壮一賞作家、ノンフィクションライターの大御所佐伯和宏だ。

「佐伯先生どうぞ」

「先ほど宮本さんの方からイラク戦争とかブッシュとかいう言葉が出てきた直後に、今我々はこうして千葉から離れた場所でその映像を見たわけですが、この構図そのものもまさにイラク戦争に酷似してるなと私は思うんです」

　宮本に視線をやる佐伯。

　佐伯の視線を斜めに受け止める宮本。

　カメラは二人の顔を左右アップにした。

「確かにおっしゃるように、今の花火のような爆破の瞬間の映像には既視感がありますよね」

「ええ、それも確かにそうです。しかし私が言うのは何というか、もっと別のことで、例えばミサイル弾発射の原因となったのが警察庁作成の映像資料だったでしょ」

　宮本が口の端を満足げにほころばせた。

「なるほど。分かります。あの時も米国政府が情報管制を敷いた中で小出しにいろんな都合のいい情報をわざと中途半端に提供して、巧みに戦争賛成のムードを作り上げていきましたよね」

「そうそう。さっきスクリーンに流れた藤井組の長男の悪事に関してのドキュメンタリーですが、我々含めて視聴者が一体こんな騒ぎを引き起こしてる藤井組とは何者なんだ！？という情報への飢餓感の中にすうっと入り込んでくる映像ですよね」

「確かに、イラク戦争の時も繰り返し繰り返しフセイン大統領の悪逆非道な映像が流されましたね」

「ええ。そして重大なやらせもあったことがあとから山のように明らかになりました」

「大量破壊兵器なかったのが最たるものですが、他にも重油まみれの鳥の映像も実はフセインが海に流したのではなく、アメリカ軍が誤爆した工場から流れ出たものだというのもありましたね」

「それがまさに」

　宮本信三が口を挟んだ。

「宮本先生どうぞ」

「佐伯先生は暴対法から話がそれるとご謙遜なさいましたが、それがまさに暴力団対策法の目指すものなんですよ」

「…といいますと」

「あの時のアメリカ国家も日本の警察も、ある分かりやすい物語を国民に植え付けようとしてるわけです」

「フセインは悪の帝国の独裁者で、藤井組は暴力団対策法で葬り去るべき危険な結社であると」

「日本中を敵に回すことを意に介せず、今こうして途轍もない警察への報復行動が行われたわけですが、いったい真相はどうなんだろうか。メディアを通じてイラク戦争を経験した我々はそういう視点を持たなくちゃいけないのではないか、私はそんな風に思いますね」

　佐伯が自らの発言を締めくくった。

　田原慎之助は正面を向いた。

「確かにあの時は我々はマスコミは全てにおいて後手後手に回り、それこそ情報の飢餓感の中に小出しに投げ与えられる大本営発表の情報の餌に飛びついてしまったわけです。宮本先生のおっしゃるにはそうした与えられる情報を頭から信じてしまうように、権力者側の都合のいいように分かりやすい物語が提供される中で、我々はもしかすると一番見逃してはいけない真実を見逃しているのかもしれません」

　田原慎之助の内ポケットの携帯電話が鳴った。

　田原はわざとらしくそれに気がつかない様子で、演説口調で正面のメインカメラに向かって喋っていた。

「生放送中に電話なっちゃってるよ、田原さん」

　元警察庁長官衆議院議員の亀山が呆れ顔で言った。

「あああ、これは失礼」

　すぐに電源を切ろうとした田原は緊張した顔を作り、呼び出し音がなったまま会場を見渡して再び正面メインカメラに向かった。

「ただいま、この事件に関係する人物から着信がありました。このタイミングで私の携帯に直にか

かってくるということは、おそらくこの事件の重大な情報を持っていると思われます。放送中ですが、このまま受信したいと思います」

　会場はざわめいた。

　一般参加者だけでなく、パネリストも何が起きたんだという驚きの顔を田原に向けた。

　そして、実は最も緊張してこの瞬間を受け止めたのはテレビ朝霧の番組スタッフ及び、ビルの最上階の取締役を含めた内部の人間であった。

　何か重大な後戻りのできない事態が起きようとしている。

　朝霧テレビ本社ビルの空気が緊張で薄くなり、誰もが深呼吸をしようとした。

「もしもし」

　数十万のテレビの前の視聴者は息を止めた。

続く

大人のピアノ その百じゅうご

「もしもし。はい田原慎之助です」

　田原は携帯電話をハンズフリーのスピーカーに切り替え、胸元につけていたボタンマイクを外して受話器の部分に近づけた。

「名前を名乗る必要はありますか」

　スピーカーから声がした。篠崎はおそらくハンカチか何かを当てて話しているのだろう。そのため多少くぐもっているが、テレビの電話に乗った篠崎の声は視聴者が直接十分に意味判別可能なものだった。

「いえ、その必要はありません。私の個人的に信頼している情報源だということを私がここで明言しておきます。さっそく話そうとしていた内容をお聞かせてください。」

「今回の警察の性急な捜査活動の裏には大掛かりな警察不祥事を隠蔽する意図があります」

　声色を変えた篠崎の声に会場がざわめいた。

「具体的に教えていただくことは可能ですか」

「私も信頼できる筋からの伝聞なので詳しいことは分からない。ただ、銃器摘発を巡って警察の自作自演による不正操作が日常化しており、その不正を直接的に手伝っていたのが藤井組だと聞いています」

「これは重大な情報をいただきました。すると、こうして警察が藤井組を壊滅しようとしているのは、変な話ですが仲間割れのような意味合いもあるのでしょうか」

「藤井組が握っている警察内部の弱みを根こそぎもみ消してしまうために、過剰な火器を使って人員を大量投入しているのではないかという疑惑もあります」

「あなた、情報源はなんなの」

　元警察庁長官の亀山が大声で田原の手元にある携帯電話に怒鳴った。

「……」

「名前はいいとして、内容が内容だけに情報ソースが一体なんなのかはいう義務があるでしょう」

「はい」

「納得行くような情報ソースをはっきり言えますか」

「……藤井組藤井組長本人です」

　ややあって篠崎が言った。

　亀山は絶句した。

「えーと、Xさん」

「あ、はい」

「あなたの情報が確かに藤井組長からのものであるという証拠は提示できますか」

「証拠ですか…」

「そう。確証ある証言だという場合、あなたが今しゃべっていることは、事件解決に向けて非常に大きな意味を持ちます。」

　再び亀山が大きな声を出した。

「Xさん、いかがですか」

「私の方からはなんとも言えないのですが、必要であればこの電話に藤井組長自身から着信してもらうことは可能です」

　会場はどよめいた。

　そしそのどよめきは電波に乗り日本全国に中継された。

「分かりました。では一旦電話を切っていただいてその準備をしてください。番組は藤井組長の生電話を中継できる準備を再短時間で整えます」

「分かりました」

「大変なことになりました。いったんここでCM挟ませていただきます」

　慌ただしくCM入りを告げる田原慎之助の元に、局のスタッフが雪崩かかるように殺到している風景を一瞬映した後、番組はCMに移った。

続く

大人のピアノ その百じゅうろく

「おい、一体これはなんなんだ」

　武蔵小杉署の捜査本部を後にして、関東管区警察局長榊原、神奈川県警刑事部長本田、武蔵小杉署署長佐々木、合同捜査の千葉県警刑事部長吉沢は、横浜市中区海岸通の神奈川県警察庁舎ビル１９階の大会議室にいた。

　壁には近隣の主要地域、及び神奈川県警察管轄区域全域の方面配備の映像がリアルタイムで映し出されている。
また、埋め込み式のテレビチューナーが縦横に数十機埋め込まれており、地上波衛星CATV主要チャンネル放送が映し出されている。

　埋め込まれたチューナーのテレビ朝霧の『徹夜で生テレビ』を見ながら叫んだのは、関東管区警察局長榊原だった。

　その他の居並ぶ幹部も顔面が緊張で白く変容しており、武蔵小杉署所長佐々木はあり得ない光景に体を震わせていた。

「佐々木警視正、事態を説明したまえ」

　榊原は佐々木武蔵小杉署署長を面罵した。

「はっ。ただいま所轄に連絡を入れ捜査一課長に至急こちら来るよう指示しております」

「そんなことはどうでもいい。なぜ我々からのマイクを使った呼びかけに一切応答せず、電話回線も繋がらない藤井組と民間の放送局の一司会者がホットラインを繋げることができるんだと聞いているのだ」

「はっ」

　畏まって脂汗を滲ませる佐々木警視正に見切りをつけ、榊原は神奈川県警刑事部長本田と千葉県警刑事部長吉沢を睨みつけた。
　しかし厳粛な濃紺の制服に身を包んだ二人はただうなだれるばかりで、下を向いて榊原と視線を合わせようとしなかった。

　そうこうしているうちにCMが開けた。

「それでは藤井組組長独占インタビューの前に、番組で用意いたしました、警察の拳銃横流し疑惑についての要点をボードにまとめてあるのでそれをご覧ください」

　田原慎之助が数枚の数十枚のフリップを万年筆で指差しながら、事件の裏の全容核心の流れを解説し始めた。『徹夜で生テレビ』が進行中に腹心の番組スタッフが電話で篠崎及び、篠崎に紹介された斎藤邸にいる南方組ナンバーツー石橋にヒアリングしたもので、関係者でなければ知り得ないディテールが随所に盛り込まれていた。

「おいおいおい。これは殆ど我々がやっていたことの全貌に迫るものじゃないか」

榊原が腹の底からやっと絞り出すような声で呻いた。

直立不動で榊原に対していた三人も立っているのがやっとだった。

「元警察庁長官の亀山さん、ご覧になっていかがですか」

亀山もまた蒼白な顔でフリップを眺めていたが、しばらくしてやっと口を聞いた。

「ディテールから言って極めて確度の高い情報であるらしい、ということはできる。しかしにわかには信じられない、というか到底信じたくないことだ」

「仮にこれが事実だとしたならばどうでしょうか」

「日本の警察機構はおしまいだ。いったん完全に解体しなくてはならないのはもちろん、法治国家日本の信頼は国際的にも地に堕ちて信頼を回復するには途方もない年月がかかるだろう」

「ちょっといいですか」

先ほど発言した大宅壮一賞作家の佐伯が手を上げた。

「はい、どうぞ」

「この後世紀のホットラインが繋がるとのことですが、藤井組組長の証言もさることながら、ここまでの大掛かりな裏取引ですから物的証拠もあるわけですかね。いえ証言それだけでも、今の今まで我々が思っていたような、暴力団の武装を解除するという大義名分が嘘っぱちかもしれないということの確証になり得ますけども、まるっきり暴力団側の証言だけというのも…」

「おっしゃることは分かります。このフリップをご覧ください」

「モノクロ写真にかなり鮮明に顔が写っていますね」

「はい。証言資料によりますと警察側の窓口の人間が銃器を実際に藤井組幹部と取引している現場だそうです」

「隠しカメラで撮っておいたわけですか、名前は分かっているのでしょうか」

「神奈川県武蔵小杉署の寺村巡査長ということです」

会場は静まり返った。

亀山は古巣の決定的不祥事の証拠に憮然たる顔だった。

神奈川県警察本部１９階大会議室は凍りついた。

「大丈夫です。まだ方法があります」

　凍りついた会議室で、さっきまでその場にへたり込みそうになっていた武蔵小杉署署長の佐々木が息を吹き返したように口はしに笑みを浮かべた。

「何？」神奈川県警察刑事部長の本田が問いただす。

「寺村に本当の英雄、「警察官の鏡」になってもらいましょう」

　しばしの沈黙があった。

　会議室の暗がりの中、四人の悪辣な警察幹部は同時に笑い声を上げた。四人が同じ悪巧みを無言のうちに共有したようだった。

「早速手配しろ」

　関東管区警察局長榊原は佐々木警視正に命じた。

　佐々木警視正はキャリア組が滅多にしない現場警察官の警察式敬礼で三人に無言で挨拶し、そのまま会議室から消えて行った。

続く

大人のピアノ その百じゅうなな

　武蔵小杉署署長佐々木警視正は黒塗りの公用車を飛ばして武蔵小杉署にとって帰り、寺村巡査長および脇田巡査を呼んだ。

　田原慎之助の『徹夜で生テレビ』で警察が実際に裏取引をしていた動かぬ証拠を生放送されてしまったわけだが、これを寺村巡査長の囮捜査の大手柄として記者会見を開いて発表し直す。

　これが悪のキャリア四人組が一瞬にして共有したさらなる陰謀であった。

　寺村は自分がマスコミの方列の前に晒されることに恐怖し、脇田は表立ってしまうことで自分が南方組の犬（スパイ）であることが露見するのを恐れた。

　絶体絶命のピンチから一発逆転のシナリオを思いついた佐々木警視正は、二人のそうした感情には気がついていないようだったが、役者二人の腰が引けていることの危険性には思い至らぬ様子であった。

　慌ただしく記者会見のセッティングが遂行され、マスコミへの緊急記者会見開催の情報が駆け巡った。

　一方関東管区警察局長榊原の動きも早かった。

　神奈川県警刑事部長本田、千葉県警刑事部長吉沢に対し、マスコミへを巻き込んで再度都合の良いシナリオを世間に流布させる工作の援護射撃を命じたのだった。

　援護射撃の内容は他でもない。夜が明けてからの藤井組への強行突入を前倒しして藤井組長のホットラインでの生番組出演を阻止することであった。

　本田と吉沢は神奈川県警のヘリコプターにて県警本部ビルの屋上から千葉県警へと飛んだ。

「ここで新しいニュースが入ってきました」

『徹夜で生テレビ』会場で田原がスタッフからのメモを読み上げた。

「警察はこの後午前**3:00**より、神奈川県武蔵小杉署捜査本部にて緊急記者会見を行い、某テレビ局で報道された大掛かりな警察陰謀説について公式発表をする、とのことです」

　会場は再びどよめいた。

　速報性を旨とするテレビ番組ではあるが、放送の速報性ではなくテレビ番組そのものが事態を大きく動かしていることを会場の人々も番組の視聴者も実感していた。

「あと三十分ほどで記者会見が始まりますが、一連の事件の推移、いかがでしょうか**...**」

　田原がパネリストに話を振ると論士たちは百花繚乱で自説をまくし立て始めた。

　田原はあえて最小限の仕切りでその興奮の状態を電波にのせ続けた。

　神奈川県警察１９階大会議室の薄暗い中に一人残ってテレビを見ていた関東管区警察局長榊原は満足げな笑みを浮かべた。

　そして、おもむろに会議室のコーナーの内線電話の受話器を上げてオペレーターに指示し、警察庁公安部長を呼び出した。

「私だ。テレビを観ていたかね。うむ…あの中の司会者に電話をかけてきた謎の情報提供者、見つけしだい直ちにその場で拘束しろ。公安警察の名にかけて国家秩序紊乱の元凶を探し出せ」

続く

大人のピアノ その百じゅうはち

　寺村渚巡査長は午前3:00を目の前にして緊張で目がくらみそうだった。

　記者会見用に使う捜査本部の雛壇はさっきまで自分が永遠に手の届かない雲の上の存在のお歴々が座っていた場所だ。寺村が所轄の交番勤務を経て憧れの刑事になってから何度も見てきた憧れの聖域、サンクチュアリ。自分がそこ座るというだけで寺村は顔が上気してくるのを抑えることができなかった。

　部屋の空気もまた熱気に包まれ、他社を少しでも出し抜こうという総勢６０－７０名のハイエナのような目をした記者たちの視線が飛び交っている。

　自分の人生にこういう瞬間がやってくるとは思ってもみなかった。

　望んで諦めるという類のものではない。望んではいけないもの、望まないからこそ裏方で警察の暗部の裏街道を歩けた気がする。その自分が警察組織を守るための虚偽の発言を求められてのこととはいえ、こうして日の当たる場所でスポットライトを浴びようとしている。

　半信半疑の記者たちは、自分が「私こそは市民のために危険を冒して身を呈した潜入捜査官です」という発言を信じてくれるだろうか。

　今までの四十数年の人生の中で自分が人に好印象を与えたという記憶はどこを探してもなかった。

　物心着いた頃から「なんだその犯行的な目は」と父親に怒鳴られた。何も不満があったわけではない。それどころか仕事から疲れて帰ってきた父親に、「僕たちのためにご苦労様です」という思いを持って玄関に出迎えた時にもそんなことを言われることもあった。

　生まれつき少し斜視気味の右目が悪いんだろうか。一人っきりの時寺村はそっと母親の鏡台のカバーを跳ねあげて自分自身の顔を見つめるのが常だった。

　神経質そうで何か腹に一物こっそり含んでいそうな、可愛げのない男の子の顔がそこにあった。

　そんなことはないんだ。何もおかしなことは考えてない。僕は…

　何百回目か忘れた。

　鏡の前で笑ってみる。

　笑うとかえって可愛げのない顔は一層可愛げがなくなった。

　父親が「なんだその目は」と言いたくなるのも無理はないなと思った。

　涙がこぼれてきた。

　愛されたい！

　お父さんとお母さんから、近所の大人たちから、子供達から愛されたい！

　僕は…

　こんなにいい子です！

　もう一度鏡に向かって笑ってみた。

　だめだった。

　ある日いつものように鏡を向いていると、鏡に引きつった顔の母親の顔が突然浮かんだ。

「気色悪い！お母さんの化粧台であんたいったい何やってるの！」

　振り返った瞬間母親の怒鳴り声がした。

　僕がちょうど必死に笑い方の練習をしている時だった。

　母親は僕を変態少年を見るような蔑み目で見下ろした。

　あの時の頬が焼け付くような思いは、多分部屋でマスターベーションを見つかった男の子が恥じ入る気持ちの数千倍の衝撃だったように思う。

　僕は人生の全てをかけて母親に笑ってみた。

　違うんだ、母さん。僕はただ母さんに愛されたかったんだ。右の目が目立たないような笑い方の練習をしていただけなんだよ。そんな僕の気持ちをわかって。

「何よ、その不気味な目つき。ヘンタイ」

　母は憎しみさえこもった目で僕を見た。

　僕は今後一生決して笑うまいと誓った。

　高校を卒業して警察官になった。

　刑事になりたかったが、そのチャンスはなかなかやってこなかった。

　決して笑わない、少しでも笑おうとすると強烈に不気味な印象を与える俺の目は、最初に配属された横浜市の中華街の中にある交番の中で少しずつ光を取り戻した。

　街を仕切っている中国系の不良のガキどもや、それに金魚の糞よろしくくっついている日本人のはなたれ小僧どもは俺の鬱屈した内面を瞬時に見抜いた。見抜いてその秘められた危険性に畏れ、そして共感した。

　犯罪予備軍のガキが俺の最初の理解者だった。

　俺はガキを手なずけ、適当に餌を与えながらうまく付き合った。暴力団まがいの縄張り争いから暴動が起きても俺が仕切るとすぐに街の秩序は回復した。

　ガキどもから薬を取り上げ、あるときは薬を与えてやった。ヤクザとの揉め事の仲裁役も丁寧にこなした。そして一年に一回ほどガキどもの感謝の印として、敵対するチームが絡む覚せい剤の密売の現場の情報を流してもらった。

　俺の働きはやがて神奈川県警本部に伝わった。

「佐々木といいます」

　始めて間近で接する警視正という雲上人はまだ二十代後半の東大出のキャリアだった。

　いけすかない野郎だった。

「私が来月赴任する武蔵小杉署で刑事として活躍してもらえませんか」

　いけすかない警視正様は俺にそう声をかけた。

　俺は黙って微笑んだ。なぜ笑ったのかは分からない。自分の人生に訪れたチャンスに素直に喜んだというわけではなかったように思う。お前は俺の正体を知ってるのか？俺がどんなやり方で交番で実績を上げてきたのか、俺という人間が母親に鏡台の前で死刑宣告されてからどんな風に自分の心の中に闇を育ててきたのか知っているのか。

　分かるわけないよな、警視正様は…

　そんな悪魔の笑顔だったはずだ。

「そうですか。喜んでくれてるますか。ありがとう」

「！？」

　俺は一体どんな笑顔をしたと言うんだ…。

　おそらく母親に蔑まれたあの時の何倍もの醜い笑顔だったはずだ。

　警視正様は握手を求めてきた。

　演技ではなさそうだった。

　そういうことに無頓着な人間なんだろうか。

　世界の闇を知らない警視正様の笑顔を俺は信じたい、と思った。

　佐々木警視正が俺に白羽の矢を立てた理由は程なくわかった。

しかしそれはどうでもいいことだった。

警視正様の犬となって俺の人生には笑顔が戻った。

笑うことはいいことだ。

それがたとえ悪人同士の不敵な笑であったとしても、俺は自分を笑って受け入れてくれる人間の中でやっと人間になれたのだった。

俺はその場所を守りたい。

俺の望みはそれだけだ。

しかきっとこの晴れ舞台は、俺の人生の終末への引き金になるに違いない。

なぜだか分からないが、それは確かなことのように思われた。

午前3:00がきた。

寺村は捜査本部のドアを開けてひな壇に向かった。

戻れない舞台の緞帳が今上がった。

続く

大人のピアノ その百じゅうきゅう

　同じ頃、田原慎之助は朝霧テレビ最上階の編成担当取締役の役員室に呼ばれていた。

「忙しいところわざわざすみませんね」

　役員室に入ると戸田編成担当取締役は座っていた椅子を立ち上がって田原を出迎えた。

　朝霧放送の出演がほとんどの田原だが、身分はあくまでフリーのジャーナリストである。いわば局にとってはプロ野球で言うところのある程度勝星の読める外国人助っ人、視聴率がある程度読める重宝なゲストである。部下を呼びつけて何かを申し伝えるというスタンスではない。

　しかし役員室に田原慎之助を呼んだ戸田の本音は、その弱り切った顔と、応接ソファに先客として座っている平取の役員袴田の姿に現れていた。

　戸田と袴田が並んで座るソファの前に田原も不承不承腰を下ろした。

「まあ、そんな不機嫌な顔をしないでくださいよ」

　警察庁からの天下り役員の袴田がタバコに火をつけながら田原に言った。

「警察から何かありましたか」

　先手を打って田原が袴田の目をまっすぐ見て言った。

　袴田は元警察官僚らしい鋭くほの暗さを秘めた瞳の中に田原の視線を吸収した。

「正式要請じゃありませんがね」

「正式要請ではないけれど、あのホットラインの主を明かせと」

　袴田は肩をわざとらしく揺すって笑い声を出した。

「そんなこと言ったってあなたは取材源の秘匿を理由に拒否なさるでしょう」

「最高裁判例に従って法治国家日本でのすべての取材源には秘匿の権利があると解釈しています」

「まあ、そんなことはいいです。その取材源には警備局公安が動きましたので特定できるのは時間の問題です」

　公安…。動きが早い。田原は何も知らない篠崎の笑顔が浮かんだ。

「番組を中止しろなんてこともいいません。あなたは『徹夜で生テレビ』の編集権も契約書できっちり保証されたフリーのジャーナリストです。私にも戸田さんにも今すぐに解雇ということはできません」

　解雇という言葉に戸田がギョッとして袴田を一瞥したが、そんなことに一切無頓着な袴田は平然とタバコをくゆらせている。

　戸田は「すみませんね」という目で田原をそっと見た。

「このまま藤井組組長を電話で生出演させながら番組を続けるつもりですか」

　戸田が袴田に代わって田原に訊ねた。

「すでに番組中にそのように視聴者に予告してありますので今更変更はできません。どうしても変更するならば、変更に至った理由を生放送でそのまましゃべります」

　二人の役員は静かに笑った。

　袴田取締役は不気味に陰にこもり、それと対照的に戸田編成担当取締役は諦めたような苦笑をもって。

「警察に勝てると思ってるのですか」

　袴田が不敵な笑みを浮かべて田原に言った。

　田原は平取の袴田よりも本来上席の常務取締役である戸田に視線をやった。しかし、こと今回のこの件に関しては力関係は逆転しているようだった。警察組織を敵に回すという判断は局全体としては避けたいところなのは田原にもよくわかっている。袴田の思惑に積極的に加担せず、のらりくらりと適当に相槌を打っているのがせめてもの抵抗なのだろう。

「勝ち負けじゃないですよ」

「ほう。ではジャーナリスト魂とかいうものですか」

　問いただすまでもなく、その言葉に幾分かの揶揄のニュアンスが籠っていることは先刻承知だったので、田原は笑って受け流した。

「あえて言えば"Ｂ面の真実"ですかね」

「何ですかそれは」袴田は少し興味を持ったようだった。

「例えば討論の中で、賛成反対の正しさとか正義みたいなのを超えて、ふっと一瞬、誰一人として見えていなかった世界が浮かび上がる瞬間です。みんながA面しか知らなかったのが急に同じレコードの反対側の世界が見えてくる」

「ほう」

「今日本人なら誰でも知ってる曲も世に出た時にはA面の付録としておまけでついていたような曲です」

「ふむ。例えば？」

「『リンゴの歌』『スーダラ節』『ドレミの歌』『伊勢佐木町ブルース』『翼をください』『学生街の喫茶店』『港のヨーコ、ヨコハマ・ヨコスカ』『ビューティフルサンデー』『浪花節だよ人生は』『矢切の渡し』『釜山高に帰れ』…」

「ほう。有名な曲ばかりですな」

「『もしもピアノが弾けたなら』」

「おお。それは警察時代からの私のカラオケの１８番ですな。私もピアノが弾けないが思いだけがある、といった気持ちで生きてきた」

「そうですか」

　田原は袴田が意外にも話に興味を持ったことに多少の驚きを感じた。

「誰一人として見えていなかった世界が浮かび上がる瞬間…ね」

　袴田はもう一本タバコに火をつけ腕組をして目を閉じた。

「真実はいつも一つとは限らない。しかし真実は一つであるとしなければ世の秩序は保たれないのもまた真実だ。そこには大きな犠牲ももちろんある…しかしながら……」

　田原は袴田の独白をじっと聞いていた。

「もう少しお話ししたいですな」

「しかし私には番組が…」

　入室してからすでに１０分少々過ぎている。スタジオは衝撃の舞台裏のフリップボードの内容について、パネリストたちが喧々諤々の放談をしている。そろそろ田原の仕切りが必要なタイミングのはずだった。

「田原さんの強い決意は十分にわかりましたので、何もわざとらしく引き止めようというわけではないんですよ」

　袴田が不気味に笑った。

「…といいますと」

「しばらくは中継メインで討論によって"B面世界が浮かび上がる"どころじゃなくなるということです」

「どういう意味ですか…」

　役員室はしんと静まり返った。

田原が口を開こうとしたその瞬間だった。

役員室のドアが強くノックされ、女性秘書が緊張した顔で戸田に視線をよこした。

戸田はすっと立ち上がって自分のデスクの上に置いてあった部屋の大画面のプラズマテレビのリモコンのスイッチを入れた。秘書には会議中にかかわらず何か大きな動きがあれば知らせるように伝えてあったようだ。

画面からは望遠カメラで写した藤井城周辺と思われる風景が映し出され、激しい銃弾の発射音が連続して流れてきた。

「警察の藤井城への突入の前哨戦が始まったんだよ」

あっけに取られている戸田と田原に袴田が解説した。袴田は関東管区警察局長榊原から藤井組組長をテレビに出さないための警察の突入前倒しの報告をすでに極秘に受けていたのだった。

「すこしこのテレビで事態の推移を見守りましょう。先ほどの"B面世界論"は非常に興味深い。ぜひその話をしながらね」

袴田が満足そうに声をあげて笑った。

続く

大人のピアノ その百にじゅう

　藤井組長は上機嫌だった。

　武志を含めた四人は地下室を出て、国宝姫路城を模した白亜の藤井城屋上にいた。夜風が頬を撫でる中、三浦が訓練した組の若い者に迫撃砲を打たせている。

　警察からは遠距離からの威嚇射撃的な散発的な銃撃があったが、本格的なSITおよびSATの突入はまだだった。特殊警察が本領を発揮するのはあくまでも突入した後の近距離の銃撃および格闘戦であり、そのためにはまず空からの隊員のパラシュート降下が欠かせなかった。しかし近づこうとする警察のヘリは迫撃砲により命中寸前の危険に何度も晒されて容易に近づくことができない状況だった。

「しかしよ、三浦」

「はい」

「元陸上自衛隊のお前が最初に打った二発がものの見事に空中の警察庁のヘリと、地上の首都大東京放送の中継車に命中したのにも驚いたが…」

　藤井は若い組員たちが、右肩に背負った長さ二メートルほどの筒から狙いをつけて空中を旋回するヘリコプターにロケット弾を発射している様を見ながら言った。

「はい」

「素人を訓練したにしちゃ、どいつも殆どヘリに当たりそうじゃねえか」

　藤井がそう言った時、バックファイアの爆発音と爆風とともに新しい一発が空中に発射された。ミサイルは白い煙を吐きながら一直線にヘリに向かいそのままヘリを射抜いた。

　三浦が最初に撃墜した時と同じようにオレンジ色の閃光が闇に浮かび、やや遅れて標的が空中爆発する音とともにヘリは幾つかの機体にひき千切られて地上に落下していった。

「当たっちまった」

「はい」

　藤井が驚いていると三浦が苦笑して相槌を打った。

「当たるもんなんだな」

　南方も少々驚きの顔で三浦を見た。

　武志は膝の震えが止まらない。無言のままこの状況にかろうじて息をしていると言った様子だった。

「実は当たるのと当たらないのがあるんですよ。撃墜用と威嚇用と言ってもいいんですが、当たる方はアクティブホーミングなんで武志が発射しても当たります」

　三浦は藤井にそう言ってから武志の方を向いてニヤニヤ笑った。

「なんだそのアクティブホーミングってのは」

「ミサイルの中にレーダーが仕込んでありまして、そのレーダーが目標物に光線を当てて距離と方向を修正しながら勝手に飛んで行くんです。一発がかなり高価なんでうちにもそれほど数は多くないんですが、少し精度の落ちる目標物の熱を感知して追尾するパッシブホーミングミサイルと合わせて使ってます」

「なるほどなあ」

「だから若い連中には１２発パッシブホーミングを打ったら一発アクティブホーミングを使えと指示してあります。とりあえずは私の指揮がなくてもこの威嚇射撃は若い者だけで続けられます」

「いや、お前がそこまで訓練してくれてるとは思わなんだ」

　藤井はそう言って三浦の肩をねぎらうようにポンポンと叩いた。

「恐縮です」

　藤井はヘリの消えた真っ暗な夜空をしばらく無言で眺めていた。

「ところでおめえ、何で自衛隊に入ったんだ」

　三浦を振り返った藤井が人懐こそうな笑顔で訊ねた。

「話せば長いんですが…」

　あらたまった言葉に三浦も照れと戸惑いの色を浮かべた。

「ちょうどいい、その話聞かせてくれや。それとどうしてうちの組みに入ることにしたのか。そっちは聞いたことはあったが今回のことで改めて聞きたくなった。作戦会議含めて一旦地下に戻ろう」

　藤井は三浦、南方、武志の三人に言った。

「それと、篠崎さん経由のテレビ朝霧の電話生出演の件も話を詰めておきましょう」

　南方が言った。

「ああ、そうだったな。あの朝子お嬢ちゃんのパパがなんかやる気満々みたいじゃねえか。俺はなんだかめんどくせえけどそのチャンネルは大事なことになりそうだ」

「よろしくお願いします」

　南方が頭を下げた。

　さっきまで上空を数機旋回していたヘリは仲間のヘリの炎上を機に後方に後退し、再び不気味な静寂が辺りを支配していた。

続く

大人のピアノ その百にじゅういち

　硝煙の匂いの立ち込める屋上から無臭完全防音の地下室に降りてくると、三浦は壁に縦横に多数埋め込まれているモニター類にスイッチを入れた。

　数チャンネルのテレビ放送、屋上の様子とそれに主要地点の地上と空中の映像だった。

　さっきまで田原慎之助がフリップを使ってさかんに事件の裏を説明していた『徹夜で生テレビ』を含めて、テレビ各局は今しがたの二機目のヘリ撃墜の模様を興奮気味で報道していた。

「あ、三浦。おめえがいっぱい映ってるじゃねえか」

　テレビ各局は、警察のヘリが一暴力団の攻撃であっさり空中で大破撃墜されたことに一様に驚き、その理由として藤井組の豊富な資金源と確かなルートからの最新鋭の武器を推定を交えながら解説していた。
　また、武器だけがあってもそれを使いこなせる人間がいない場合にはこのような事態は起きないことは一般の視聴者にも容易に理解できる。
　各局の番組は藤井組のナンバーツーが元自衛隊機甲課陸士であることを素早く突き止め、それを三浦の顔写真入りで盛んに報道していた。

「しかしそれにしても江頭さん、元自衛隊士長が内部にいるとはいえ、こんな風に民間の家屋から発射されたミサイルが警察のヘリコプターを撃ち落とすなどということがあり得るんでしょうか」

　江頭と呼ばれた軍事評論家は、二十代の綺麗な女性アナウンサーに一九分けにした髪の毛を弄りながら粘着質の表情でうんうんと頷いた。

「ミサイル発射と言いますと一般市民の方はとてつもない職人芸だと思われる方もいらっしゃると思いますが、実はそうでもないんですよ」

「それは驚きです」

「ええ。自衛隊に入隊しますとすぐに前期研修というのがありまして、これはまあ言ってみれば試運転期間みたいなものなんですが、その後直ちに後期研修課程が始まります。この時「MOS」資格を三ヶ月で最低一つ取得します。いくつも取る隊員も大勢いますが、その中に迫撃砲の訓練も入っています」

「その「MOS」というのはこちらですね」

　女性アナウンサーがフリップカメラに向けてオープンした。

==========

「Military Occupational Spesiality」
「ミリタリー・オキュペイショナル・スペシャリティ」
■ 軍事用特技区分

□ 語学：国賓に対する通訳支援・諸外国からもたらされた出版物等の翻訳に従事

（基礎情報隊の任務）
□ 地誌：公刊情報の収集・整理等
（情報処理隊の任務）
□ 地理空間情報･測量・地図作成
（地理情報隊の任務）
□ シギント：電波情報の傍受
（情報本部通信所、方面通信情報隊等）
□ スパイ・防諜
(情報保全隊の任務)
□ ヒューミント：現地情報隊
（中央情報隊下部隊の任務)

==========

「こちらですが、これらが資格みたいなものでしょうか」

「そうですね。つまりそういうことができるようになることが二年の任期の最終目標なのではなくて、研修期間を終わって配属されるまでに取っておくべき前提みたいなものなんですよ。それぞれの資格がないと部隊に配属されてもその実務ができないことになっていて、必要に応じて舞台配属後に短期研修で取得するということも普通です」

「迫撃砲もそうなんですか」

「ええ。自衛隊では例えば手榴弾ひとつにしても、通常「アンコ」と呼ばれる決して爆発しないものを使用してて、二年の任期の中で爆発する手榴弾を手にとる隊員はほとんどいません。迫撃砲も操作方法に習熟するのに実際にミサイルを打つ必要は全くないんです」

「そうすると、扱い方を知っている人が一人いれば、誰でも迫撃砲を打てるようになるということでしょうか」

　女性アナウンサーが大げさに怖がる顔をして江頭を見る。

「そうですね。あとは実際の迫撃砲があればいい。重要なのはむしろ実弾の性能で、現代のミサイルは相手を探しながら命中させる技術が仕込まれていますから」

「そうすると、今回のような信じられない光景も起こりうるということですね」

「はい。十分あり得ます。しかしそれよりも民間人がこうした軍隊が持つような武器をどうやって入手し、しかもそれを警察当局に押収されずにこうして保持し続けていたのかということの方が驚天動地のあり得ないことだと私は思いますね」

「それについては、警察組織自らが自作自演の拳銃取り締まり件数実績向上のため、藤井組を利用していたという疑惑が上がっていますが、これについてはまた後ほどお伝えいたします」

==========

「三浦の言ってたとおりだな。それにしても自衛隊ってのも資格社会か。なんか拍子抜けする気もするな」

　藤井組長は豪快に笑って武志を見た。

　武志はなんと反応して良いやらわからず、あいまいに頷いていた。

「良くも悪くも一般社会と同じですよ。全員が国防意識に燃えてるわけじゃないですし、脱走する奴、隊では脱柵っていうんですが、そういうのも初期研修中には結構いますし、見学や体験入隊した人がみんな驚くのはセキュリティは基本セコムです」

　これには南方も笑い出した。

「国家の安全を守る自衛隊のセキュリティがセコムか。何かあったらセコムが駆けつけるのかよ」

「ええ。唯一例外は弾薬庫で、そこを守るのは自衛隊員ですが実弾は一人三発だけしか供与されていません。ここでもまず敵が発砲してから応戦せよの原則が抜かれてます」

「ふーん。なんというかいかにも戦後日本だな」

　呆れながらも藤井は面白そうに話をしていた。

「戦後日本…。そうですね」

　やや間があって三浦が口を開いた。

「どうした」

「組長はさっきなんで自衛隊を辞めたのか聞いてみたいとおっしゃってましたよね」

「ああ」

「私も組長にお話ししたくなりました」

「おう。聞こうじゃねえか」

続く

参考資料（自衛隊を描写する各回共通）
後藤一信『自衛隊裏物語』basilico
坂本明『現代の特殊部隊』文林堂

杉山隆男『自衛隊が危ない』小学館新書

大人のピアノ その百にじゅうに

「きっかけは陸自のトップである幕僚長が商業誌に発表した「太平洋戦争の真実は日本にあり」っていう文章でした」

　三浦がポツリポツリと話し始めた。

「…続けろ」

「はい。自分は難しいことはさっぱりわかりません。幕僚長が論文に書いた時にはそれこそ上の人たちは蜂の巣を突ついたようになってました。現在の日本政府の公式見解とはかなり違ってて、わかりやすく言えば戦前の公式見解ほぼ同じだったからです」

「ふーん。俺も難しいことはさっぱりわからねえが、あれか、太平洋戦争は聖戦だったってやつか」

「はい。いえ…自分は読んでもわからなかったんで頭のいい同僚に内容をかいつまんで教えてもらったんですが、要するにそういうことです」

「何だよ頼りねえなあ。じゃあ別にそんな読めもしねえ文章で自衛隊やめなくちゃならねえってのはおかしくないか」

　藤井は大きな声で笑った。

「いや、まあそうなんですけどね」三浦も頭を掻いた。

「まあいいや、それで？」

「辞めたくなったのは、幕僚長がマスコミや政府や世論に突き上げを食った時の反論だったんすよ」

「なんて言ったんだ。俺はそういうことには疎いんだが、南方知ってるか」

　話を振られた南方は思い出そうとしてるようだった。

「確か自衛隊のトップにだって言論の自由はあるんだ、とかいう反論じゃなかったっけ」

　南方が三浦に言うと、三浦は目を輝かして喜んだ。

「そう！それです。南方の兄貴もやっぱり変だと思ったでしょ」

　三浦の打ち解けた態度に南方は少々戸惑った。おそらく自分が幕僚長の言葉を覚えていたことを、自分と同じ感じ方をしたのだと理解したので、「ああ」と言っておいた。

「なんて言うか、言論の自由っていう言葉がものすごい違和感があったんですよ、俺」

　さっきまで使っていた「自分」という言葉がいつに間にか「俺」になっていたが、三浦は気がついてはいないようだった。

　しかし三浦の熱気につられて南方も今度は本当に幕僚長の弁明の記者会見の様子をテレビで見たことを思い出した。

「確か基本的人権がどうのとかも言ってたよな」

「あああ！それです、それです！それで一気に辞めたくなったんでした」

　南方は三浦が言わんとしていることが多分すべて分かった。その違和感は多分自分が幼年時代の頃から感じ続けていたあの違和感だったからだ。

続く

「なるほどな。確かに自衛隊のトップが基本的人権だの言論の自由だの言うのはなんだか違和感がなくもねえな」

　藤井はそう言って三浦と南方を見た。

「思い出しましたが、実際藤井さんのように言う人間も多かったですよ」南方が言った。

「ほう」

「ただし、恐らく全然違う意味でですが」

「どう違うんだ」

　南方は改めて当時アジアばかりでなく、欧米の諸外国のマスコミを巻き込んだ陸自幕僚長論文問題を思い出していた。

「メディアや政治家や識者と呼ばれる人間の大方の反応は、痛いところを突かれたという苦々しいものだったと記憶してます」

「まあな。数万人の陸上自衛隊のトップとはいえ憲法で保障された表現言論の自由を否定するわけにゃいくまい。個人的な歴史観を表明するのは誰にも止められねえはずだ。それをやってしまったら、自分たちの言う基本的人権ってのがいかに自分たちに都合のいい偽物の薄っぺらいルールかってことがバレちゃうもんな」

　藤井はおかしそうに笑った。

「そうですね。万人の生まれながらの権利とか言いながら本音では自分たちの決めたルールに従わない人間には認めたくないっていうのが透けて見えます」

「ああ」

「そんな中で少し面白いこと言うのもいました。そいつは言論の自由っていうのは本来何も武器を持たない丸腰の人間に、いわゆる弱者に認められた権利であって、数万の兵士に命令できる立場の人間には制限があってしかるべきだと」

「ほう」

　藤井は鋭い目を南方返してよこした。そしてしばしの沈黙の後口を開いた。

「そのジャーナリストは多分自分じゃまったく気がついてないだろうが、とてつもない危険なことを言ってるな」

「…はい。私もそう感じました」

「強者であるから弱者の武器の言論の自由は認めない。この論理でいけば、強者はいつその強者の武器を使用するのか、それはもっぱら強者の側の行使自由な権利だという論理になるはずだ」

　聞いていた武志はハッとした。武闘派のヤクザの親分としか見てなかった藤井は多分このことの本質を一瞬で見抜いてると思った。横で聞いている三浦を見ると三浦は真剣な眼差しで無言で藤井組長の次の言葉を待っていた。

「その幕僚長が『そうですか、確かにそうですね。私は確かに自衛隊員に死ねと号令できる立場にあります。いつその力を発揮するかは確かに私の手の内にあります。そんな私にあなたたちの大切な権利である基本的人権はいりません』こう言ったらどうなる」

　南方、武志、三浦の三人は息を飲んで藤井の解釈に耳を傾けた。

「この刺し違えの権利の交換で、幕僚長はシビリアンコントロールの枠の外部に出てしまって、極端な話、部下に『祖国の理想のために死ね』とクーデターを指示することができてしまう。逆に基本的人権による個人の歴史観を含めた言論の自由という餌を与えておけば、文民統制という内部に軍人を囲っておくことができるわけだ。平和ボケとしか思えない。そんな簡単なことにもそのジャーナリストは気がつかないのか…」

　南方が頷いた。

「藤井さんのおっしゃることは、昭和の時代に三島由紀夫が自衛隊員に決起を促した論理ですね。言論とは異質な「行動」というものに君たちは目覚めなくてはいけない、と市ヶ谷の駐屯地バルコニーで演説したわけですが」

「強大な行動力を認める代わりに言論の自由を制限する。そしてその逆もまたしかり。三島由紀夫が泣いて喜びそうなシナリオじゃねえか」

「はい」

　南方は我が意を得たりとばかり頷いた。

「飼い殺しとかなくちゃいけねえんだよ。ヤクザもな」

　武志は再び目を剥いて藤井を見た。飄々とした物言いの後ろに持っている、自分たちヤクザの置かれた透徹した認識の一端が武志にもうっすら見えたように思えた。

「暴対法も同じ理屈で底の浅い人間が考え出した茶番だと言える。ヤクザは強大な暴力を所有しているから、暴対法によって基本的人権を制限します。この理屈だとヤクザの持つ強大な暴力の行使をそれと気がつかずに認めたことになる。さっきもテレビで暴力団にも基本的人権があるとかぬかしてた暴力団の味方の振りした弁護士出身の国会議員のバカがいたが、その安っぽいジャーナリストと同じレベルだ」

　武志は必死に藤井の論理について行こうとしていた。

「なるほど、そういうことになりますね」

　南方が言い、三浦が感極まった顔で藤井を見た。

「飼い殺しをやめて暴力団を壊滅に追い込む。市民は暴対法を持って。そしてトチ狂った警察庁、神奈川県警、千葉県警は警察の武力を持ってというわけだ」

　南方と三浦が頷く。武志にも藤井の理屈が飲み込めた。

　ヤクザの世界では親分が白と言ったら黒いものでも白になるという。これが白いものが黒に、黒いものが白になるマジックの瞬間なのか。それは、暴力によって押し付けられたものではなく、研ぎ澄まされた生き方から出てくる行動化された言語だった。

「基本的人権なんぞいらねえよ。それと引き換えに認めてもらった強大な暴力を存分に発揮させてもらおうじゃねえか」

　藤井の高らかな哄笑が地下弾薬庫に大音声で響した。

続く

大人のピアノ その百にじゅうよん

「おやじさん」

　三浦が感極まった目で藤井を見た。

「おう。悪りいな、おめえの話さえぎっちまって」

「いえ…とんでもありません。その…組長はそうしたお考えを誰から教わったというか、どうやって身につけたのですか。自分は思いはあっても頭が良くないのでやはりこうして自分の奥深いところで言葉にならなかったものをズバッと言っていただけると興奮で体が震えます」

　三浦は背筋を伸ばして藤井に向き合った。

「自衛隊ではそういうのは教えてはくれなんだか」

　藤井は少しヤニに染まった、しかし歯並びの良い前歯が並んだ口を豪快に開いて笑った。

「少なくとも自分は自衛隊では何もつかめませんでした」

「それは多分な、この国が喧嘩に負けて起き上がるところから始めずに、地面に倒されたまま、喧嘩は良くないと小賢しくしゃべるところから始めたからだよ」

　三浦はなおも藤井の言葉を求めて熱い視線を藤井に投げかけた。

　藤井は照れることなくその視線を受け取った。

「その幕僚長はもしかすると、俺が今言ったジャーナリストのいう矛盾を分かった上で基本的人権や言論の自由を口にしたのかも知れねえぜ。俺にはなぜだかそんな気がするんだが、だとしたらその幕僚長は正真正銘の男だな」

　三浦は何かを必死に考えているようだった。

「自衛隊ってのはよ、喧嘩に負けましたっていうところから、喧嘩に負けた人間が立ち上がるってところから始めることをしなかったんじゃねえか。おめえも俺も喧嘩が仕事というか生きることそのものだから分かると思うんだが、一旦負けたらとことん負け切るところからしか自分の生きていく方向は見えねえ。そしてそこからしか心からの相手への謝罪も新しい関係もない。これはヤクザの鉄則だ。だからどれだけ血みどろの抗争をしても手打ちの後はそこから昨日の敵とも新しい関係が始まる。

　生きていくにはそこから始めるしかねえはずなんだ。それを『そもそも喧嘩は良くないです』とかいうところに話をすり替えて、自分自身が負けた人間であることを棚上げして偉そうなことを言い始める。そういう人間がそのまずっと憲法第九条をこねくり回してるように俺には見えるんだ。昔の学生運動なんてのはその最たるもんだろ」

　武志は次第に藤井が憲法第九条などと口にすることへの違和感が消えていった。三浦はなおも無言で藤井の次の言葉を一言も聞き漏らすまいとしていた。

「学の無え俺だが、終戦後吉田茂が防衛大学の卒業式で言ってた言葉を覚えてるよ。

『君たちは自衛隊在職中決して国民から感謝されたり歓迎されることなく自衛隊を終わるかもしれない。きっと非難とか誹謗ばかりの一生だと思う。ご苦労なことだと思う。しかし、自衛隊が国民から歓迎され、ちやほやされる事態とは外国から攻撃されて国家存亡のときとか、国民が困窮して国家が混乱しているときだけなのだ。言葉をかえれば、君たちが『日陰者』であるときの方が、国民や日本は幸せなのだ。耐えてもらいたい……』

　新聞記事になってたのを繰り返し読んだものだ。その幕僚長さんはよ、直接吉田茂に卒業式の祝辞を聞かされた世代じゃないと思うが、そういう思いでやってこられたんじゃねえかな。なんとなくそういう気がしたんだが」

　三浦は必死に言葉を探しているようだった。

「『負けました』っていうところからじゃなくて『けんかは良くない』っていうところから始める嘘くさい辛さを幕僚長は引き受けた上でのご発言だったんでしょうか」

「いや、分からねえがそういう感じ方もあるかな、と思ったまでよ」

　藤井は静かに笑った。

　三浦はしばらく何かを考えている様子だった。誰も何も言わなかった。考えてみればこの警察が突撃準備を進めている状況は負け戦が最初から確定している戦だ。やがては警察の特殊部隊の突入は避けられないだろう。藤井組側では命を落とす人間が何人もでるはずだ。

　そうすると、こうして静かにこういう話をしていること自体が武志には何だか別世界のことのように感じられた。

　しかし、すぐに思った。

　これが藤井さんのいう「負け切る」ことなんだろうか。

　そのことを南方さんも三浦さんも知っているのだ、と武志は思った。

　三浦が口を開いた。

「なんて言うか、日本が誇れる国<だから>日本を守れるというんじゃなくて、仮にそうじゃなかったとしても守らなくちゃいけない。それが国を守るってことなんじゃないかって俺は思います」

「ほう」

　藤井の三浦への眼差しは思春期の自分の息子に対するもののようだった。

「例えば、歴史を詳しく検証して、その結果日本の戦前からの主張が全部正しかったとする。あるいは中国が言ってることが正しかったとする、あるいは韓国が言ってることが正しかったとする。そういう検証作業は大事だと思うんですが、それはまた別の話じゃないかと思うんです。

　一番極端な話、全部日本が悪かったとする。じゃあそのとき自分たちは日本人たるをやめ、志願して中国や朝鮮の民衆を守れるのか。そうじゃない。侵略して悪かった、しかしそれでもその悪かった自分たちの先祖と子孫のために今あるこの日本という国を武力を持って中国や朝鮮から守らなければならない。

　我が子の罪は罪である。しかし親は自分の子供を守らなくてはならない。

　父親の罪は罪である。しかし自分は老いた父親を謝った当の相手から守らねばならない。

　そういうところに国防はあるんじゃないのか」

　三浦はうまく言えたかどうか自信がなかったようだ。そこで言葉を切って藤井を見た。

「それが負け切ることだと思うぜ。そこにだけ本当の誇りがある」

　藤井は三浦の不安を打ち消すように笑いかけた。

「三浦よ、俺は思うんだ。自分は日本人として生まれたからそういう考え方を持つのかもしれない。これが他所の国に生まれたらまったく別の考え方で生きていったのかもしれない。人間生まれた場所は選べねえ。親も選べねえんだ。カタギに生まれたらそういう生き方を磨いていくし、幸か不幸かヤクザの家に生まれたから多かれ少なかれ、最後にそれを否定しようともその宿命を引き受けて生きていかなくちゃいけねえんだ。

　しかし、思想ってそういうもんじゃないのか。生きるってそういうことなんじゃねえのか。逆にそういう根拠薄弱なものだからこそ尊いんじゃないのか。たまたまここが祖国だった、たまたまこの親が自分の親だった。そしてたまたまこの自分の運命が自分という存在そのものだった。その偶然そうなったことを後から知ること、知ってそれを認めること。
　そこに、自分の運命とはまったく違ってはいるが、自分と同じようにそうやって生きていかざるを得ないことに気がついた他人様が確かにいることに、もう一度そのとき気がつくんだと思う。

『暴力はいけません』ってのはよ、暴力団がそういっちゃいけねえだろ。それを信じた人間、そこにしか希望を、生き方を見つけられねえ人間にたいしての責任はどうなる。八方塞がりで戦争しかけてそしてそれに負けた国がどのつら下げて「戦争はいけません」って言えるんだよ。きっちり負け切ってもいねえくせによ。ま•し•て•や、それなしに謝罪など論外だ。

　この世の中ヤクザであることはその時点で『負け戦』だろう。しかしその負け戦を完璧に負け切ることは大切なことだと思うぜ。

　そして今がその時だ」

　藤井は静かに話し終わった。

「お話ありがとうございました」

　三浦は泣いていた。

「組長の息子さん、ぼんさんも今にして思えば同じことを俺に言ってくれたんだと思います」

「ほう。じゃあ今度はお前がその話をしてくれや」

「はい」

　火薬庫の中、静かに時間が流れた。

続く

大人のピアノ その百にじゅうご

「ぼんさん、いつもおっしゃってました。強くなるのはどっちかの世界に身を任せることだと」

　三浦が話し始めた。

「うん」

　藤井は静かに頷いた。それは自分の息子の口調を思い出しながら三浦の言葉を味わっているようだった。

「『何かから締め出されて、不安にかられて自分の周りを見渡す。敵を発見して、味方を探して躍起になって自分が正しいことを証明する。そして言葉でも暴力でもなんでもいい、自分の正しさがやっと証明されたように思った時、その時一番大切なものが無くなるんだ』こうおっしゃてました」

「大切なものが無くなる…」

「はい。『最初についた嘘が嘘だったっていうことを忘れてしまう』ともおっしゃってました」

　その言葉に反応したように、南方が三浦をじっと見つめた。

「おめえ、分かるか」視線に気がついた藤井が南方がに話を振った。

　南方はハッとして藤井に向き直った。

「…はい。実は自分もおそらくぼんさんと同じような感覚にこだわってきたような気がします」

「その右手の小指か」

　言われて初めて南方は、自分が無意識のうちに自分の欠落した小指探すように親指を動かしていたことに気がついた。

「おめえと武志はよ、これから本格的に始まる警察との戦争でどんな手を使ってでも無事にシャバに送り届けてやる」

　藤井は南方武志を見た。

「だがよ、もう充分にわかってるだろうが、俺も三浦もこの戦争を生きて終えようとは思ってねえ」

　三浦は無言で藤井を見つめ、満足そうに頷いた。

「今、冥土の土産の三浦の一番大切な話を聞かせてもらった。息子の話を聞きながらおめえの話も聞きたいんだよ」

　藤井は南方に微笑んだ。

「誰も聞いたことのねえ、お前のところナンバーツーの石橋でさえ知らないらしいお前の右手の小指。ヤクザになってから落としたんじゃなくて、中学生の時にやったっていうその話をそろそろ聞かせろよ」

　一瞬戸惑った顔をした南方だったが、藤井が悪戯小僧のような人懐こい目で自分を見ていることに気がつくと、南方自身も少年のような顔つきになった。

「分かりました。こうなってはここでお話ししないわけにはいかなくなったような気がします」

「おう、そうこなくっちゃな」藤井が三浦に笑いかけた。

「はい」三浦が破顔する。

「武志はよ、あんまり興味ねえかもしれねえが、まあ付き合ってくれ」

　藤井がそう言うと、南方は首を振った。

「いや、そんなこともないと思います」

　武志がその言葉の意味を問うように南方を見た。

「さっき、三浦が話してくれたぼんさんの『最初についた嘘が嘘だったっていうことを忘れてしまう』。柄にもなく自分が昔吐いたセリフを思い出してました」

「おう。どんなだ」

「『そんなことしたら慶ちゃんのピアノの音が聴こえんようになってまうやんか』」

　南方は武志を見た。

「俺が中学の時お前のお袋さんに言った言葉だ」

「！？」武志は虚を突かれて南方をもう一度見直した。

「笹川慶子。今は結婚して斎藤慶子さんか。お前の母親が俺の初恋の相手だ」

　沈黙を破って藤井が上機嫌で笑い出した。

「一切合切全部聞こうじゃねえか」

　藤井に合図され、三浦が長距離ライフルが収納された横のキャビネットからスコッチの瓶を運んできた。

続く

PSーーーー
本年もブログに足を御運びいただきありがとうございました。

思うとことあって、ペタ、メッセージ、最近はコメント欄も閉じて引きこもりしてますが(笑)、皆様とのそこはかとなくも得難い大切な交流があればこそ、今年も一年書いてこれたと思ってます。

来年もよろしくお願いします。

皆様、良いお年を(´▽｀)

ゆっきー（三ブログ共通ご挨拶）